

英才教育 50 周年記念

英 才 教 育 の 道 (5)

— 研究紀要第 31 号 —



聖徳学園小学校

聖徳幼稚園

英才教育 50 周年記念

英才教育の道 (5)

— 研究紀要第 31 号 —

聖徳学園小学校 聖徳幼稚園

幼稚園



遠足(井の頭公園)



プールあそび



造形あそび



知能あそび

小学校



ゲームに夢中！ 知能訓練



聖徳祭



松陰先生の墓前で

英才教育の道 (5) 目次

— 研究紀要 (第 31 号) —

創造的知能の開発と育成

校長・園長 和田 知之

英才教育の草創期を探る

元校長・園長 園田 達彦

英才教育導入時のエピソード

元校長・園長 郡司 英幸

特集・聖徳の教育

イングリッシュキャンプ2018実施報告

～キャンプに向けた取り組みと3日間の英語の実践体験～ ……………43

小学校教諭 藤石 勝巳

実践研究

- ・子どもの聞く力・想像力を育む^{すばなし}素話の実践 ……………71

幼稚園教諭 園山恵理子

- ・考える力を育てる

～拡散思考力を育て高めるためには～ ……………87

小学校知能訓練科 松尾 由香

- ・歴史の授業における場面絵の教育的効果 …………… 119

小学校教諭 田中 飛鳥

・学校 ― 保護者の協働による発表力の育成

～クラス発表会を通した知能の刺激～ 147

小学校教諭 内藤 茂

・学校で発生した怪我について

～平成26～30年度に発生した怪我を分析～ 169

養護教諭 吉村 厚子

■ 授 業 レ ポ ー ト ■

「青い目の人形・ミルドレッド物語」の授業

～歓迎した子どもたちと人形を守り抜いた人～ 181

小学校教諭 長谷川和暉

■ 英才教育50周年のあゆみ ■

英才教育50周年のあゆみ 209

児童・園児数の変遷 272

卒業時の担任一覧 274

■ 付 録 ■

平成30年度 個人実践研究テーマ一覧 275

創造的知能の開発と育成

～研究紀要発刊に当たって～

校長・園長 和田 知之

1. はじめに

私たちの聖徳学園では、1969 年（昭和 44 年）から個性の伸長と知能教育を基本にした英才教育を実践してきた。以来 50 年間「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育」を追究し、

○主体的に学ぶ態度、意欲と集中力の育成

○知能開発～創造的知識の開発と育成～

○一人ひとりの個性と能力に応じた指導～能力の限界への挑戦～
を重点にした教育活動を重ねてきた。

今までの英才教育の成果を一言で述べることは困難であるが、一例として発明協会主催の『発明くふう展』における結果から見ても成果を挙げてきた。「東京都児童生徒発明くふう展」では、毎年多くの児童の作品が入賞し、平成 30 年度は 31 回目の「学校賞」を受賞した。さらに全国展である「全日本学生児童発明くふう展」では 5 年（当時）道脇 愛羽さんが最優秀賞である恩賜記念賞を受賞した。道脇さんの恩賜記念賞は 2 度目の受賞であり、史上初のことである。また、平成 30 年度では、文部科学大臣から科学分野での児童の創意工夫の育成に顕著な貢献があったと認められ、8 回目の「創意工夫育成功労学校賞」を受賞した。「科学的な思考の育成と創造性の開発」を目的として開催されている、これらのコンクールにおいてこのような過分な評価をしていただけたことは、私たちの創造的知能の開発と育成を重視した実践活動の一つの成果と考えていいだろう。

また『全国小・中学生作文コンクール』において、多数入賞している。その中で最優秀賞である「文部科学大臣奨励賞」を昭和 53 年度 4 年生、平成 10 年度 4 年生、平成 19 年度 4 年生、平成 23 年度 2 年生と、4 度受賞している。また、東京都審査においては平成 27 年、28 年、29 年と 3 年連続東京都教育委員会賞、東京都最優秀賞を受賞した。それ以外にも漢字検定等、様々な分野において個性と能力を発揮して活躍する児童が目立つが、将来『お誓い三か条』の精神を発揮して、世界の人々の役に立てるような業績を挙げてくれることを期待している。

それでは、こうした子どもたちの創造的知能を開発し育成していくためにはどうしたらよいか、これまでの実践結果を基にしながら簡単にまとめておきたい。

2. 創造的知能の開発と育成の条件

(1) 創造的態度の育成

子どもたちの主体的に学ぶ態度、すなわち意欲と集中力の育成を重点にした実践活動を推進してきた。

というのは幼稚園や学校の環境を整えて、子どもたちに学習（遊び）したくなるような条件を設定することはできても、やらせることはできないのである。むろん形だけやらせても、本当の能力は身につかないことは言うまでもない。幼稚園では、自由遊びと選択制のカリキュラム遊びを中心にした教育活動、そして小学校で個別学習の授業形態を多くすると共に、自由研究や選択制の特別研究等児童の主体的な学習活動を重視しているのはそのためである。こうした取り組みの中から、創造性を発揮する上で重要となる、

- ① 意欲～主体的に学ぼうとする気持ち～
- ② 好奇心（探究心）
- ③ 集中力とその持続性
- ④ 精神的な粘り強さ（根気）
- ⑤ 鋭い観察力と疑問に思ったことを徹底的に追究する

⑥ 他にやり方がないか、いろいろ工夫する

態度が形成されるのである。このような態度は、創造的知能の開発と育成に必要なだけでなく、あらゆる学習活動、それに社会へ出てからの活躍の原動力となっている。

(2) 個性の伸長

創造活動では、独創性（Originality）がとても重要な要素になってくるので、個性の啓発と伸長が前提条件となる。したがって、日頃から型にはめない、自由な発想を認める環境作りが必要になってくる。

(3) 創造的知能の開発と育成

創造性も知能の一部であり、適切な刺激を与えないと発達しないことは言うまでもない。ギルフォード（Guilford, J. P.）の知能因子の分析では、創造的知能の働きは主に「拡散思考」（Divergent Production）になり、次の3つの能力に類別される。したがって、この3つの能力を幼児期から開発しておくことが大切である。私たちが幼稚園と小学校の一貫教育を実施している大きなねらいの一つもここにある。

① 流暢性（Fluency）

頭の働きがなめらかで速いことで、例えば「あ」のつく言葉を短時間のうちに流暢に思い浮かべる能力となる。

課題例としては、「タイル遊び」・「数作り」・「言葉作り」・「しりとり遊び」・「連想遊び」等がある。

② 柔軟性（Flexibility）

発想の転換とも言われるが、いわゆる頭の働きが柔軟で固定観念にとらわれず、頭の切り換えが自由にできる能力である。例えば、理科の時間に「氷が融けたら、何になる？」という教師の質問に対して、「春になります」と、わざと教師の意図することとは異なる発言をしたがる子どもも

珍しくない。教師にはこうした柔軟な発想を認めてあげる姿勢が創造力を育成していく上では大切である。

課題例としては、「マッチ棒遊び」・「なぞなぞ」・「クイズ」等がある。

③独創性 (Originality)

これは発明・発見につながる、誰も思いつかないような考えを出す能力である。

課題例としては、「モール遊び」・「基本図形遊び」・「三題ばなし」・「廃品利用」(空き缶・牛乳びん・レンガ) 等がある。

(4) 直観力 (直観的思考・ひらめき) の育成

新しいものを創り出す場合、直観力 (ひらめき) はとても重要な出発点になる。大脳生理学的には、左脳は論理的な思考力、右脳は直観力 (ひらめき) やイメージ力と言われている。だから、創造力を育成するためには、幼児期から右脳を刺激しておく必要がある。本園で年少児からリトミックを取り入れている一つのねらいもここにある。要は、左脳と右脳をバランスよく開発しておくことが大切である。

課題例としては、「ゾウとライオンの似ているところや違いを見つける」等、相違点や共通点の発見等がある。

(5) 個性と創造性を認める環境

子どもの創造的知能を開発し育成していく上で最も大切なことは、「創造の芽」を育てる環境創りとなる。一人ひとりの子どもの個性と自由な発想を認め、それを伸ばしてあげる環境を整えていくことが何よりも重要な要素となる。「出る杭は、打たれる」ような環境では、創造的知能の開発と育成は困難である。つまり、「みんな違っていい」といったお互いの個性を認め合う、環境が重要な要素となる。

むろん、どんなに個性・創造性を育てるためには、自由に伸び伸びとした環

境が大切といっても、最近よく指摘されているような、自己中心的な子どもに育てることは論外である。あくまでも基礎・基本をしっかり教えた上での個性・創造性の開発と育成が大切になることは言うまでもない。

この研究誌の内容は、昨年夏の研修会において、各教員が研究発表した内容を基にして、各自まとめたものである。日々の実践研究の一端をご理解戴ければ幸いである。ご一読戴き、皆様方のご指導とご鞭撻をお願いしたい。

英才教育の草創期を探る

元聖徳学園小学校長 元聖徳幼稚園長 園田 達彦

I. はじめに

II. 我が国における英才教育

1. 戦前における英才教育の実践例
2. 英才教育研究所の設立

III. 聖徳学園における英才教育のスタート

1. 聖徳学園の教育改革
2. 基本要綱
 - (1) 基本的な考え方（伏見プラン）
 - 英才児にも特別支援教育が必要
 - 21世紀を展望した教育
 - 学校と家庭の役割分担
 - (2) 教育方針
 - (3) 教育内容と方法の改革
 - (4) カリキュラム委員会と教員研修
 - (5) 学校と家庭が協力して英才児を育てる

IV. 英才児の特徴

- 英才児の二つのタイプ
- 英才児たちの60年後～ねばり強さが人生を決める～

V. 子どもを取り巻く環境の変化と今後の課題

1. 人間形成に係わる環境の変化
2. 社会の変化に対応できる能力の育成

I .はじめに



昭和 44 (1969) 年 7 月、世界中が注目する中でアメリカはアポロ 11 号の打ち上げに成功して、人類初の月面着陸を果たした。この歴史的な瞬間は、全世界にテレビ放映され筆者も児童たちと共に理科室のテレビの前に釘付けになったことを今でも鮮明

に覚えている。この宇宙開発に代表されるように、この半世紀余の IT 技術をはじめとした科学技術の進歩は著しく、我々を取り巻く社会環境は急速に変化してきた。近年では、人間型ロボット等の活躍で社会における人間の果たす役割に変化をもたらしてきており、学校教育にも大きな影響を及ぼしていることは周知の通りである。

聖徳学園において教育改革に取り組み、英才教育研究所の伏見猛弥所長と提携して昭和 44 (1969) 年 4 月から知能教育を基本にした英才教育を導入したのは、そうした時代の変化も大きな要因の一つであった。詳しくは後述するが、伏見所長は 21 世紀を展望して科学技術は著しく進歩し、明治以来我が国の学校教育で続けられてきた記憶力中心の教育方法では社会の変化に対応できなくなってくると主張されていた。この伏見プランに基づき、聖徳学園小学校では半世紀にわたって英才教育を実践し、独特な教育内容と方法は社会的な評価を高めてきた。それは現在文科省において進められている、大学の入試改革や学習指導要領の改訂において、知識の量よりも考える力の育成を重視する改善策にもよく現れてきている。

今般和田知之校長から、英才教育 50 周年記念誌への原稿依頼があり、英才教育に最初から関わった者の使命として、草創期の様子や出発点を後世に伝えていく義務が果たせるならと思ってまとめてみることにした。

なお、この原稿は、平成 25 (2013) 年 8 月 28 日に聖徳学園小学校、幼稚園、英才教室の合同研修合宿における講演内容を加筆修正したものである。

Ⅱ. 我が国における英才教育

1. 戦前における英才教育の実践例

聖徳における英才教育を考える上で、まず我が国における英才教育について、歴史的に確認しておかなければならない2つの実践例がある。

その一つは、大正7（1918）年に当時の京都府知事の木内重四郎氏が提唱して発足した、京都師範附属小学校（現京都教育大学附属京都小学校）の「第二教室」（1918～1943年）における実践で、25年間で559名の児童が在籍した記録が残されている。（実は、筆者が英才教育研究所において、最初に担任した幼児の中のA・S子の父親もこの第二教室出身者の一人だった。）

この第二教室は、優秀な指導者の養成等を目的として設けられ、小学校6年間の教育課程を5年間で修了して、中学校へ進学させる方法を導入するなど、一つの英才教育と考えることができるが、教育方針としては次の8項目を掲げている。

○教育方針（『英才教育』清水義弘・向坊隆編著、第一法規出版より）

- ①反復主義で確実な知識を与え、応用力をつける
- ②自学自習を旨とし個性を尊重し個別指導本位とする
- ③各科併進主義にとらわれず得意な学科を伸ばす
- ④勤労作業により知育偏重を防ぐ
- ⑤体育に重点を置き武士道精神の練磨に努める
- ⑥できる限り賞罰を用いず競争を避ける
- ⑦規律的な生活をさせ、平和にして雄大な沈毅な人間形成を目指す
- ⑧家庭との連絡を密にし、礼儀を重んじ、謙遜にして自信ある人物たらしめる

この教育方針をみると、①応用力を付ける、②個性を尊重し個別指導本位とする、③得意な学科を伸ばす、⑧家庭との連絡を密にする、この4項目は聖徳の教育と共通点が見られることは注目すべきことである。

もう一つの実践例は、太平洋戦争末期の昭和19（1944）年に優秀な科学者

の養成を目的として、当時全国に4校あった国立高等師範学校の附属小学校・中学校に設けられた「特別科学組」である。この4校とは、次の通りである。

東京高等師範学校附属国民学校・中学校（現筑波大学附属小・中・高）

東京女子高等師範学校附属国民学校・中学校（現お茶の水女子大学附属小・中・高）

広島高等師範学校附属国民学校・中学校（現広島大学附属小・中・高）

金沢高等師範学校附属国民学校（現金沢大学附属小・石川県立金沢第一中学校）



伏見猛弥 先生

これは後述する聖徳における英才教育の主宰者、伏見猛弥先生（当時、文部省国民精神文化研究所員：現国立教育政策研究所）等の発案によって、文部省の一教育機関として発足した。伏見先生の話では、この計画は大規模な構想で当初は文部省の既存の教育機関としてではなく、

東京に独立した研究機関と教育機関を開設し、全国から知能優秀児を集めて組織的な科学教育を実施する、というものだった。そこで、この構想を国会へ持ち込み、当時の民政党総務の永井柳太郎議員に懇願し、衆議院で科学教育振興の建議案を成立させてもらった。ところが、具体策は文部省が作成することになり、結局、前述の附属小学校に特別学級を併設することになったが、それも終戦と共に自然消滅してしまった。伏見先生はしばしば当時を振り返って、自分たちの構想通りに進まなかったことに対してとても残念がっていたが、優秀な子どもを集めてそれに高度の科学教育を実施したわけであるから、これも一つの英才教育と認めることができるだろう。

2. 英才教育研究所の設立

戦後我が国の教育界では、英才教育をタブー視する風潮があった。子どもは

全て平等であり、英才教育というのは頭の良い子とそうでない子を差別した差別教育につながり民主教育に反するといった誤った認識が根底にあったようである。ところが、伏見猛弥先生（当時、玉川大学教授）は英才教育に対する夢を捨てきれず、昭和 40（1965）年 9 月に飯田橋教育センターの肥田正次郎氏の協力を得て英才教育研究所を設立し、英才児の研究と知能教育の実践研究を開始した。

この当時は、学会や教育界では知能遺伝説が主流だったが、伏見先生は脳生理学（近年では、この分野に関する研究が急速に進み「脳科学」という言葉が使われるようになってきた）の研究成果を基にして、

○子どもの知能は教育の仕方によっては伸ばすことができる

○知能教育は、できるだけ早期に実施したほうが効果的である

という、強い信念で 1 歳から 12 歳児までの子どもを対象にして日本で初の知能教育を実践することにした。脳生理学的には、およそ 150 億の脳細胞にできるだけ多くの刺激を与え、脳を活性化させることにより知能を発達させるという考え方である。

脳に刺激を与えると知能は伸びることが理論的に分かってきても、どのような刺激を与えるかが大きな課題であった。英才教育研究所では、このための教材開発に大変苦労した。幸いアメリカでは、脳生理学の研究成果を受けて知能因子の分析が盛んに行われており、それを参考にして進めていくことになった。最初は、サーストン（1887-1955）の 7 つの知能因子説に基づき知能教育を開始した。7 つの知能因子とは次の通りである。

（『英才教育入門』伏見猛弥著 池田書店刊より）

空間的因子（S）

数的因子（N）

言語理解の因子（V）

語の流暢性の因子（W）

記憶の因子（M）

帰納推理の因子 (I)

知覚の速さの因子 (P)

その後ギルフォード (1897-1983) によって更に因子分析が進み、知能因子構造理論を発表したので、昭和 42 (1967) 年 4 月からはこの 90 の知能因子に基づき実践していくことになった。筆者は大学 4 年生 (昭和 42 年) から伏見先生に師事し、英才教育研究所において英才教育や知能教育の実践研究に従事してきたが、知能教育は日本では初の試みであり、教材作成から指導方法に至るまで日々手探りの状態が続いていた。

○学校における英才教育の必要性

英才教育研究所での研究が進み教育内容が充実してくると、また新たな課題も出てきた。その一つは、英才児 (高知能児) の中には、英才教育研究所における週 2 回の授業には積極的に参加するが、学校生活に満足できていない子どもたちが案外多いという実態であった。つまり、知能的に優れているために学級の平均的なレベルに合わせて進められている学校での学習内容が簡単すぎて、授業中退屈しているということである。退屈するだけならまだいいが、好奇心が旺盛で頭の働きの大変活発なだけに授業中静かに座っているということができないので、授業内容に口を出したり周囲の子どもたちにもちょっかいを出す等、授業の妨げになっている子どもの実態も見えてくるようになった。特に個性が強く創造的知能に優れた子どもにそうした傾向が目立った。中には、担任の先生からはお小言ばかりで、学校生活そのものが苦痛になっている子どもの実態が保護者から伝わってくることもしばしばあった。こうした現状を踏まえ、英才教育研究所の教員たちの間では、

- ・知能を伸ばすと共にそれにふさわしい学校教育 (環境) の必要性
- ・英才児の特徴を認めそれを伸ばしてくれる学校の必要性

に関する話題が多くなってきた。また、保護者の中からもそうした要望が寄せられるようになった。

Ⅲ．聖徳学園における英才教育のスタート

～知能教育を基本にした英才教育～

1. 聖徳学園の教育改革



1969 年当時の入学式

聖徳学園は昭和 2（1927）年に、和田
幽玄（1882-1942）によって旧制の関東
中学校として、聖徳太子の教えを建学の
精神として創立された。戦後の学制改革
を経て、昭和 25（1950）年に聖徳幼稚
園、そして翌年に関東小学校（1969 年
に英才教育導入と共に聖徳学園小学校に

校名変更）を創立すると共に学校法人聖徳学園に組織変更し、幼稚園から高等
学校までの一貫教育体制を整えた。

ところが義務教育である小・中学校の場合、公立学校が原則無償になって
いるため期待通り児童・生徒が集まらず募集には大変苦労が多かったよう
である。そこで、当時の和田玄之理事長・校長（1903-1973）は、和田知雄主事
（1936-1999）と共に学園の教育改革に乗り出し、時代のニーズに応え私学と
しての特色ある教育創りをしていくために、英才教育研究所の伏見所長（1904-
1972）と提携して、昭和 44（1969）年 4 月からまず小学校において英才教育を
導入し教育内容と方法を一新することにした。これに併せて、校名も関東小
学校から聖徳学園小学校へ改称すると共に制服も替えて、聖徳学園の教育改革を
推進していくことになった。この校名や制服の変更に關しては、それまでの卒
業生等からかなり抵抗があった。

教員も英才教育担当者は、伏見先生の方針で新たに採用されることになり、
英才教育研究所において一定の研修を実施して聖徳学園へ赴任することになっ
た。それは知識を教える教育から考えさせる教育を重視していくためで、経験が
豊富な教員の場合はとかく教える教育に偏りがちになるとの危惧からであった。

2. 基本要綱

顧問として教育内容の改革を任された伏見猛弥先生は、英才児の特性に応じた独自の教育課程を編成していくために、昭和 43（1968）年 10 月には大学教授を中心にしたカリキュラム委員会を発足させ、次のような教育要綱や「お誓い 3 か条」等を作成した。

(1) 基本的な考え方（伏見プラン）

○英才児にも特別支援教育が必要である

発達障害のある子どもにも特別支援教育を必要とするように、英才児に対しても特別支援教育が必要というのが伏見先生の持論であった。昭和 44（1969）年 4 月に英才教育がスタートすると、新聞・テレビ等のマスコミで取り上げられることが多くなり、全国から関心を集め学校参観や入学希望者からの問い合わせが相次いだ。その中には、知能的に大変優れているために現在の学校生活に適応できずに聖徳への転入学を希望していると考えられる子どももあり、定員に余裕がある限り転入試験を実施して受け入れてきた。平成 3（1991）年 3 月末までの転入生の総数は 138 名となり、それまでに在籍した児童数 595 名中 23% までになった。中には沖縄や福岡・大阪・長野県からわざわざ家族そろって転居して転入学してくる児童もいた。むろん遠隔地からの場合は、開業医等父親の仕事が転居しやすいという条件はあったにせよ、親としては我が子に合った学校を求めて並々ならぬ覚悟があったようだ。転入希望の親子と面接していると、特に個性的で創造的知能に優れた子どもに公立学校ではうまく学校生活に適應できないで困っている児童が多い実態が見えてきた。（近年では、国の教育改革も進められ公立学校でも個性重視の考え方が徹底され、こうした現象は少なくなってきた。）こうして転入学してきた児童が、聖徳の授業に生き生きとした表情で参加し学校生活を楽んでいる様子を見ると、伏見先生が常々強調していた英才児に対する特別支援教育の必要性が明瞭になってきた。

○ 21 世紀を展望した教育

現在の子ども達が社会に出て活躍する 21 世紀は、科学技術の進歩は著しく恐らくコンピューター時代を迎えるだろう。そうなるのであれば、教科書の内容を理解させそれを記憶する、記憶力中心の学校教育では、21 世紀の社会では通用しなくなる。むしろ個性的で創造的知能に優れた人間が必要になってくるので、そういう子どもを育てるためのカリキュラムを編成していきたい、ということが伏見先生の基本構想だった。(当時のカリキュラム委員会における伏見発言、『聖徳の教育』掲載。)

こうした伏見先生の構想は、前述のように宇宙時代を迎えた当時の時代的背景があったことは言うまでもない。1957 年 10 月に旧ソビエト連邦は、初の人工衛星「スプートニク 1 号」の打ち上げに成功した。宇宙開発で先を越されてしまったアメリカをはじめとする西欧先進諸国は、大きな衝撃を受け競って人工衛星の研究開発に取り組んだ。いわゆる、スプートニクショックである。その後、アメリカは 1969 年 7 月には、アポロ 11 号の打ち上げに成功し、人類初の月面着陸を果たしこの模様は全世界にテレビ中継された。これは聖徳の英才教育がスタートした年であるが、好奇心が旺盛な聖徳の子ども達を刺激し大きな夢と希望を与えたことは言うまでもない。子ども達の間から、大きくなったら「宇宙飛行士になりたい」という言葉が聞かれるようになったのはこの頃からである。

このような科学技術の進歩は、我々の教育現場にも影響を与えるのは前述した通りである。我が国でも 1971 年改訂の学習指導要領では、教育内容の現代化として小学校の算数において「集合の考え」や「確率」の内容が導入される等、理数科の内容を中心にしてかなり改訂が図られた。この集合の考えや確率の学習のように、いわゆる考える力を必要とする内容に対しては、聖徳の子ども達は大変意欲的に取り組んでくれたが、次の 1980 年の改訂では、残念ながら「ゆとりある教育」の名の下に全て削減されてしまった。ゆとりの感じ方は児童一人ひとり異なるわけで、聖徳で

は現在も引き続き学習していることは言うまでもない。

○学校と家庭の役割分担

児童募集要項にも英才小学校（聖徳学園小学校）が普通小学校と異なる点は次の通りです、と明記されていた。

- 1) 教科内容の決定のために、大学教授級の専門家によるカリキュラム委員会を作り、専門学者が授業にも参加します。
- 2) 学級（知能年齢によるグループ）担任はありますが、学科は主に専科制をとります。
- 3) 社会科は、地理、歴史、道徳と分けて学習します。
- 4) 算数の他に、数学の導入としてバイオリンの実習が正科に入ります。
- 5) 宿題は与えません。
- 6) 制服はありますが、ランドセルは用いません。
- 7) 学校給食はありません。

（昭和 45 年度「聖徳学園小学校募集要項」より抜粋）

この中の 5) から 7) についての伏見先生の持論は、子どもの教育における家庭と学校の役割分担である。学校では授業や特別活動を通しての人間教育、家庭では基本的なしつけや食事の指導をはじめ家庭教育の場とする、という考え方であった。ところがこのところ、家庭が勉強を教えることに熱心になり、逆に学校が給食指導をはじめ本来家庭教育でやるべき分野まで学校に押しつけられる傾向になってきていることに対してかなり危惧されていた。特にこうした社会の風潮に対して伏見先生は、「学校の授業で担任が間違ったことを教えてもそれほど問題にもならないが、万一学校給食で食中毒でも起こしたら大問題になるので、校長は教育内容のことよりも給食のことに神経を使っている人が多く、これは本末転倒である」と、学校給食の在り方をしばしば批判していた。平成 24（2012）年 12 月に、調布市の小学校で 5 年生の女子児童が給食で粉チーズ入りのチヂミを誤って食べて、食物アレルギーによる死亡事故が発生した。この事故は、女兒が

おかわりした際に担任がうっかりしてチーズ入りを与えてしまったことが原因だった。給食の時間に子ども達が次々におかわりを求める状況から考え、一人の学級担任で子ども全員の食物アレルギー等に関する情報を把握しておきそれに対応していくのはかなり難しいだろう。子どもの食べ物や健康状態について最もよく把握しているのは保護者であり、食事については家庭で担当することが最適だろう。学校でも不可能ではないが、担任には食事のお世話以上にもっと他にやるべき大切なことがたくさんあるからである。聖徳のように学校給食を廃止して、家庭の手作り弁当ならそうした事故はあり得ないからである。弁当持参なら配膳の時間もかからないし、その分担任は子ども達との触れ合いの時間も多く確保できる利点がある。

(2) 教育方針

- 1) 12歳までにできるだけ知能を伸ばし、知能の器を大きくする
- 2) 基本的な知識を知能のいろいろな角度から考えさせる→知能開発をめざした学習指導
～できるだけ多くの知能因子を刺激、または活用できるような教材構造にする～
- 3) 英才児の個性と能力（特徴）に応じた指導→英才児の特徴を伸ばす環境創り

(3) 教育内容と方法の改革

明治以来、長い間我が国の学校教育で進められてきた、画一的で形式的な平等主義に陥りやすい、一斉学習中心の教育方法や記憶力中心の詰め込み的な教育を改めるために次の方策が導入された。

- 1) 教える教育から育てる教育へ～知識より考える力～

○主体的な学習意欲の育成

知能を伸ばすにも、学力を高めるためにも、将来仕事で業績を高め

る上でも、あらゆる人間生活の土台となるのは意欲と集中力である。
そこで、主体的な意欲と集中力の育成を優先する。

○知能訓練

文部省（現在の文部科学省）の『学習指導要領』には、教科等には定められていない「知能訓練」（本校の「学則」に定めて、東京都の認可を得る）を独自の教育課程として導入し、本校の重要な教育目標を達成する。

○知能開発を目指した学習指導等

知能開発期の低学年では、知能訓練以外の教科においても基本的な知識を知能のいろいろな角度から考えさせるようにして、出来るだけ多くの知能因子を刺激できるような学習内容にする。むしろ教科としての、基本的な知識を十分習得させることは言うまでもない。

2) 個性の伸長と創造力の育成を重視

一人ひとりの個性を伸ばし、豊かな創造性を育成していくために、基礎基本は押さえた上で自由で伸び伸びとした学校環境を整えていくことにした。子どもたちに守らせる校則もできるだけ少なくし、「お誓い三条」の信条に基づき、自分の頭でよく考えて行動できる子どもの育成を心がけるようにした。

(4) カリキュラム委員会と教員研修

昭和 44（1969）年 4 月から聖徳学園小学校において、知能教育を基本にした英才教育を推進していくために、前述のように前年の 11 月に伏見猛弥先生（英才教育研究所長・玉川大学教授）を座長とするカリキュラム委員会が発足した。カリキュラム委員は、大学の教授を中心に 10 名程度で構成されていた。会議は伏見先生が主宰して 1975 年頃まで（伏見先生亡き後は後任の清水顧問）、カリキュラム委員と聖徳の教員が出席して毎週 1 回、代々

木の英才教育研究所において開催された。

主な審議内容は、前述の基本要綱の作成、各教科のカリキュラム編成から評価法、定期テストの内容、そして児童一人ひとりのテスト結果の分析に至るまで詳細に行われた。毎週の定例会は、木曜日の16時から19時まで開催されたが、我々聖徳の教員は15時ごろまでに子どもたちを下校させて、あわただしく代々木の英才教育研究所へ駆けつけるといった状況だった。

テスト問題や成績検討会等、特に資料の準備が多い時には資料作成が十分間に合わず、中央線の電車の片隅で数名の教員でホッチキス止めの作業を続け、会場へ駆け込むということもしばしばだった。幸い15時頃の武蔵境駅から上り方面の中央線は比較的空いており、周囲の乗客から奇異な眼で見られることもあったが、今では草創期のとても懐かしい思い出の一つになっている。

会議では、伏見先生をはじめ各委員の先生方からかなり厳しく指導されることも多く、何分にも前例のない英才教育への挑戦で、帰宅後もどの先生も明日の授業の準備に追われ深夜まで教材研究を続けられる方が多かったようだ。このカリキュラム委員会は、ある意味では貴重な教員研修の場でもあった。

(5) 学校と家庭が協力して英才児を育てる

聖徳学園における英才教育がこれまでの我が国の英才教育と異なる点は、知能教育を基本にした英才教育というスローガンにみられるように、できあがった英才児のみを集めてそれに応じた教育をするだけではなく、英才児を育てることに重点を置いたことである。しかも知能を伸ばすだけではなく、特に創造的知能の開発と育成を重視し、個性的で創造性豊かな人間形成を目標に掲げ、明治以来これまで我が国の学校教育の主流をなしてきた記憶力中心の学習内容から大幅な転換を図ったことである。

もちろんこうした聖徳独自の特色ある教育を推進し成果を上げていくためには、家庭の理解と協力は欠かせない。そのために伏見先生は、家庭との連携を大変重視し1年生の保護者に対する月2回の定例の説明会（懇談会）に

は、必ず出席して自ら教育方針等に関する説明と共に保護者とのコミュニケーションを大切にされていた。そればかりでなく、年3回学期末に行う保護者面接も全員に対して実施され保護者へ適切なアドバイスを続けられた。また入学試験の親子面接にも常に同席されていた。

そんなときの伏見先生は、常に温かい眼差しで保護者の皆さんと接し、聖徳の教育方針に関するお話と共に、子どもの教育における家庭と学校との連携の重要性から我が国の教育の諸問題に至るまで、アメリカやヨーロッパ諸国の教育制度と比較しながら自分の教育観や社会観を織り交ぜながら母親達にわかりやすく話しされていた。そうした中で、聖徳の教育目標を達成していくために、

- ・家庭ではできるだけ好きな遊びや学習に熱中させること
- ・子どもの遊びや学習には干渉しないこと
- ・勉強を無理矢理押しつけないこと
- ・目先の成績にこだわらないこと

これ等のことについては、ことある毎に繰り返し強調されていた。それでも保護者の間からは、宿題がないことや教科書をはじめ教材等は家庭へ持ち帰らないことへの不安な気持ちを訴える人も多かった。

私は補佐役として、いつも近くでお手伝いさせて頂きながら伏見先生が英才教育にかける情熱と子どもたちの健やかな成長を願い、常に親子の立場に立って我が国の教育の諸問題を考えていこうとする姿勢には感嘆するばかりであった。母親達も伏見先生のお話をとても楽しみにして出席されていた。まさに母のための教育学講座であった。

実は伏見猛弥先生は、昭和47(1972)年3月15日にNHKのスタジオにおいて「知能指数」をテーマにした座談会の録画中に心筋梗塞により急逝されたわけであるが、その3日前に聖徳の保護者向けに執筆された原稿の内容(『英才教育の道』～聖徳学園小学校における教育～1973年刊、P12～13掲載)、更に急逝された2日後から3日間、聖徳の保護者との3学期末の個人

面談を予定される等、晩年の伏見先生は、聖徳の英才教育に命をかけて情熱を注がれていたと言っても過言ではないだろう。尚、伏見先生の訃報は、当日の夕方近く学年末の評価書の記入に追われる職員室に飛び込み、筆者等は信じられないような沈痛の気持ちで渋谷のNHKへ駆けつけた。

Ⅳ．英才児の特徴

伏見教育学の原点は、科学的教育学にあり教育の出発点は子どもの世界を理解することから始まる。そのために英才教育を推進していく上で、伏見先生がまず大切にされたことは、子ども達の実態つまり英才児の特徴を捉えるをことのほか重要視されていた。そしてその結果を昭和44（1969）年11月に開催した、英才教育研究所4周年記念並びに聖徳学園小学校開設記念「英才教育公開研究発表会」において、伏見先生は次の（A）の項目について発表し教育界から広く関心を集めた。

（A）英才教育研究所における実践研究から『英才教育の道』昭和44（1969年）発行より抜粋]

- ①意欲が旺盛で好奇心が強い
- ②集中力の持続性があり、遊びや学習に発展性がある
 - ・小学校における90分制授業の導入
- ③未知な内容や難しい課題になるほど意欲・集中力を示す傾向がある→能力の限界への挑戦及び挑戦意欲がある
 - ・「これは習っていない」と発言しないのが、聖徳の子の特徴
- ④具体的なものより、抽象的、原理的なものを好む傾向
 - ・算数は、数学として代数や幾何の分野にもアプローチ
 - ・社会科は、「地理」と「歴史」に分け、地理は地図、歴史は人物伝の学習を重視する。
- ⑤答えを教えられることを嫌う
- ⑥個別学習や発見学習を重視

(B) 聖徳学園における実践研究から『研究紀要』第5号 園田達彦執筆、平成5(1993)年発行より転載]

英才教育を実践していく上で「英才児の特徴や個性をどう捉えるか」、これは我々の長年の大きな課題であった。特に英才児に関する日本での研究例は少なく、アメリカにおける研究成果を手がかりにする以外になかった。幸いアメリカでは、英才児についての研究がかなり進められておりいくつかの研究報告がなされていた。そのうちの一つ、スタンフォード大学のR.ターマン教授が1921年に全米から抽出した3歳から19歳の子ども1528名(男:857名、女:671名)の英才児(IQ135以上)を対象にして調査報告した、

- ①身体が発育がいい
- ②学校の成績がいい
- ③興味が多方面である
- ④社会適応性が高いし、情緒も安定している
- ⑤知能が高いのは、他の部分を犠牲にしているのではない

という英才児の特徴は、我々の英才児の指導や実践研究を進めていく上で大変参考になった。

我々はこれまで「英才教育の追究」を主題にして、前述の英才教育研究所における研究成果を踏まえ聖徳での実践研究を重ねてきた結果、英才児の実態、特徴や個性がかなり見えてきた。特に、聖徳学園において英才教育を実践以来、節目の25周年を迎えるに当たり2、3年前から「英才児の特徴と個性」に視点を当て、校内研究を進めてきた。むろんその場合、小学校在学中だけの様子から、その子どもの実態を判断することは十分とは言えない。そこで昭和51(1980)年に実施した、卒業生の進学先へ依頼して実施した追跡調査で得た卒業後の状況と在学中の観察記録や事例を各担任が持ち寄り、校内研修会において「英才児の個性」に視点を当て全教員であらゆる角度から分析を試みた。その結果、我々の長年の研究課題であった英才児の特徴、個性というものがかなり明確になってきた。それを整理すると次の通りであ

る。なお、この結果は『脳と心』（NHK 出版、1994 年 6 月発行）に「英才児を育てる」のテーマで紹介され各方面から関心を集めた。

[能力面]

- ①学業成績（学力）がいい
- ②問題解決が速く、学習進度が速い
- ③言葉の使用が速く、語彙が多くて正確である
- ④表現力が豊かで、文章力や絵画、音楽、演劇等の能力がある
- ⑤創造力が豊かである
- ⑥因果関係の理解が早く、推理力が強い
- ⑦一般化する能力や抽象的思考に強い
- ⑧ひらめきや直観的思考に強い
- ⑨問題の洞察力がある
- ⑩批判力が強い

[性格・行動面]

- ①意欲が旺盛で好奇心が強い
- ②興味が多方面である
- ③未知な問題や難しい問題に対する挑戦意欲がある
- ④集中力があり、その持続力がある
- ⑤最後までやり抜こうとするねばり強さがある
- ⑥自立心がある
- ⑦時と場に応じた行動がとれる →臨機応変の行動
- ⑧失敗に落胆せず、困難を克服しようとする
- ⑨個性が強く豊かである
- ⑩ユーモアがある
- ⑪イニシアティブをとる

⑫サービスへの意欲がある

等の傾向が認められる。以上の通り、英才児の特徴を能力面と性格・行動面に分けて整理してみたが、むしろこの全てが一人の子ども（英才児）に当てはまるというものではない。あくまでも我々がこれまでの授業をはじめあらゆる学校活動において、英才児の特徴として顕著に認められるものをピックアップしたものである。

英才教育を推進していく上で大切なことは、一人ひとりの子どもの能力と個性に応じた指導を充実させることである。一人ひとりの優れた能力を大切に伸ばしてあげることが我々の英才教育の基本となるからである。特に、一人ひとりの子どもの知能を最大限に伸ばすためには、各自の発達段階を的確に把握して、それに応じた教育をしていかないと成果は上がらない。一人ひとりの知能の発達段階は全て異なるわけで知能指数を伸ばすためには、理論的には暦年齢以上のスピードで知能年齢を伸ばす必要があるからである。その意味では、30人の子どもがいたら30通りの教材と指導法を要するということが基本となる。聖徳において、一人ひとりの子どもの特徴（個性や優れた能力）を的確に捉えて指導計画を立て、全ての子どもの学習活動を保障できるように学習環境を整えることを重視しているのはこのためである。

○英才児の二つのタイプ（英才教育30周年記念『英才教育の道（4）』1998年刊P4より転載）

子どもたちの活動の様子を注意深く観察していると、英才児（高知能児）にも二通りのタイプが見受けられる。一つは集中思考型で、もう一方は拡散思考型である。（〔A表〕参照）

集中思考型（論理的思考力や推理力に強い）の子どもは、低学年のうちから授業態度もよく、自分でこつこつと学習して成績もかなり優れた児童が多く見られる。趣味も百科事典を見たり、読書やピアノなど、どちらかといえば静かに落ち着いて取り組む内容のものに興味や関心を示す傾向がある。

一方、拡散思考型（創造的知能の要素が強い）の子どもは、頭の働きのとても活発で発想も豊かで、ユニークな発言が多くしばしば突拍子もないような発言をし、教師がよほど適切に対応しないと授業が脱線してしまうこともある。理科の時間に「氷が溶けると、何になるか？」という教師の質問に対して「春になります」と、わざと教師が意図していることとは異なる発言をするのも、この拡散思考型の児童に多く見られる。いわゆる、「一を聞いて十ひらめく」タイプである。頭の働きの活発なだけに特に低学年の間は、授業中の態度も一見落ち着きがないように見受けられる児童も多い。

このタイプの児童は、教科の学習よりもむしろ工作的なこと（創作活動）やゲーム（将棋やオセロ等）・生き物の生態観察・星の観察など特定の分野に大変興味を持って取り組む傾向がある。したがって、成績の方も自分の好きな教科は徹底的に学習するので優れている子が多いが、全教科総合してみるとそれほどでもない。しかし、高学年になるにつれて成績が向上してくる児童が多いのはこのタイプの一つの特徴である。学習内容が高学年になるにつれて高度になり、拡散思考の知能の働きの要する内容が多くなってくるとも一つの要因と考えられる。

[A 表] は、年齢が 35 歳以上の中から、小学校在籍中に認められた拡散思考型と集中思考型の顕著な子どもをそれぞれ 5、6 名ずつ抽出して、その当時の様子と現在の職業（年齢と職業は 2013 年 8 月現在）をまとめたものである。卒業生に対する追跡調査は、個人情報保護法の問題や本人が出身校から調査されていることへのプレッシャー等を配慮するとなかなか困難な面もあるので、進学先と職業に関してはあくまでも同窓会や年賀状などにより本人及び保護者から得た情報を基にしたものである。

対象人数も少ないのではっきりしたことは言えないが、小学校時代に集中思考型のタイプは大学教授をはじめとして研究職の職業に従事している者が多いようである。一方、拡散思考型は、研究職や国家公務員、玩具メーカー、政治家等、バラエティーに富んでいる。

○英才児たちの 60 年後～ねばり強さが人生を決める～

前述したスタンフォード大学の R・ターマン教授の研究グループは、1921 年に全米から抽出した 1528 名の知能優秀児 (IQ 135 以上) を対象にして、その後 1940 年、1950、1955、1960、1972、1977 年と追跡調査を繰り返し実施して、その後の学校生活や社会生活の様子を分析している。1977 年の調査時点では、年齢は 59～75 歳に達しており人生の状況がかなりはっきり見える年齢段階に達している。

ターマンは、1528 名の中から 60 年後、最も成功したといえる者 100 名を A グループ、最も成功しなかったといえる者 100 名を B グループとして抽出し比較したところ、そこに明確な相違点が浮かび上がってきたと指摘している。この結果は、日本でも『マザーリング』(1980 年 10 月 15 日発行) という雑誌で紹介された。それによると、

(ア) A グループの特徴 (共通点)

- ・目標に向かって働き続けるねばり強さがある
- ・自分の目標を 16 歳ころまでに自覚し、進路について迷いが無い
- ・注意深い 等

(イ) B グループの特徴 (共通点)

- ・ねばり強さがたりない
- ・進路についても不確かで、ひとまかせで選んだりする
- ・不満感が強い

このように、A グループと B グループでは、対照的な共通点が見られた。

また少年期においても、A グループは B グループよりも「忍耐力がある」、「慎重である」、「意志が強い」、「友だちを大切にする」などの共通点をあげている。

V. 子どもを取り巻く環境の変化と今後の課題

1. 人間形成に係る環境の変化

聖徳の若い先生方と話をしていると、英才教育を始めた約 40 年前の英才児の特徴と最近では変化してきているのではないかと、といった指摘を受けることがある。果たしてどうなのだろうか。まず考えられることは、子ども達を取り巻く環境の変化である。我々人間は、環境を形成していく要素になると共に、環境に影響される側面があるからである。その点、聖徳で英才教育を始めた昭和 44（1969）年当時の子どもの生活環境を振り返ってみると、

- ①パソコンや携帯電話はなかった
- ②ゲーム機類はなくて、将棋・オセロ・トランプ等、対人を要するゲーム類が中心
- ③外遊びの空間や時間、それに仲間は現在に比べて多かった
- ④お稽古事や習い事等の機関は現在に比べ少なく、自由な時間が多かった
- ⑤家庭や学校には、空調機は設置されていなかった

大雑把に見ても著しい変化ということが出来る。これだけ子どもたちを取り巻く環境が変化すると、成長途上の子どもたちが何らかの影響を受けるのは当然だろう。パソコンや携帯電話、空調機などの科学技術や情報機器の進歩で大変便利になってきたが、生活が便利になりものが豊富になってくると、工夫する態度や「我慢する」気持ち、すなわち我慢強さ（根気）が損なわれてきた子ども達が増加していることが予測される。したがって、前述した英才児の特徴の中で「集中力の持続力」や「難しい課題になるほど意欲・集中力を発揮する」等の子どもが減少してきていることは事実だろう。「我慢強さ」や「挑戦意欲」は、子どもが成長していく上で大切な資質になるので、これをどう育てていくか、今後の大きな課題となるだろう。むろん、IC 機器類等の操作や活用では、50 歳以上の人たちよりはるかに優れた面をもっていることは事実だろう。

先日の朝日新聞（2013 年 6 月 21 日付）に「変われるか、東大」の見出しで、東京大学の改革に取り組んでいる東大教養学部委員会が最近の東大生の現

状として、何項目か指摘している中に、

- 学生が均質化していて、主体性を発揮しようとししない
- 良い点数がとれる授業を優先する傾向がある
- 留学やインターンシップを避けたがる

この3点があった。東京大学には、全国からトップレベルの学生が集まり、推定であるが知能的にはIQ 140以上の英才の集団と考えられる。その学生達が主体的に取り組む態度や挑戦意欲が乏しくなっているのであるから、家庭教育を含めて根本的な対策が必要になってきているようである。だから、もし聖徳の若い先生方が指摘するように、40年前に比べて英才児の特徴に変化が見られるとするなら、その点が大きな要因と考えられる。そこで思い出すのが、「子どもを不幸にする最も簡単な方法」として、「それはいつでも何でも子どもが欲しがるものを与えることだ」、というフランスの思想家ルソーの言葉である。また、徳川家康も『江戸の子育て』（中江和恵著）によると子育てでは、幼い時から我がままな子にしないために、物事が自由にならないように配慮したそうだ。わがままな人間に育てると、「国を治めるどころか、自分の身を立てることも出来なくなる」、との考えからである。いつの時代になっても、挑戦意欲と我慢強さ（根気）はとても重要な資質になると言っても過言ではないようだ。

2. 社会の変化に対応できる能力の育成

知能にはいろいろな働きがあるが、その中でも大切な能力は変化に対応できる能力を挙げることができる。いわゆるいろいろな場面において「あの子は安心して見ておられる」という資質である。

したがって、ある程度知能を高めて意欲と集中力を身につけておいたらどのような時代になっても心配ないだろう。

更に、これだけ科学文明が発展してくると、機械にはできないこと、人間だけがもっている個性・創造性、思いやりの心がより大切な時代になってくると

考えられるので、英才教育を実践して半世紀という大きな節目を迎えるに当たり大いに自信と勇気をもって聖徳の英才教育を推進していくことが、100周年への第一歩と確信している。

事実、経済同友会の調査（2008年5月）によると、各企業における新卒者の採用選考の際、特に重視する能力のベスト5は、

第1位	熱意・意欲	77.2%
第2位	行動力・実行力	49.5%
第3位	協調性	43.4%
第4位	論理的思考力	21.7%
第5位	問題解決力	18.1%

という調査結果が出ている。（『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』中央教育審議会資料、平成21（2009）年7月30日より）

【参考文献】

- ① 『ある英才教育の発見』 稲垣真美著 講談社 1980年発行
- ② 『英才教育』 清水義弘・向坊隆編著 第一法規 1969年発行
- ③ 『英才教育入門』 伏見猛弥著 池田書店 1968年発行
- ④ 『2歳からはじめる英才教育』 伏見猛弥・清水堯・千葉晃・兼村道子・園田達彦共著 実業之日本社 1969年発行
- ⑤ 『創造と教育』 創造性研究4 日本創造学会編 共立出版 1986年発行
「英才教育と創造性」園田達彦執筆
- ⑥ 『英才教育時代』 園田達彦著 文遊社 1979年発行
- ⑦ 『英才児を育てる遊び』 園田達彦著 学陽書房 1981年発行
- ⑧ 『英才教育の道』（英才教育研究所4周年・聖徳学園英才小学校開設 記念研究発表会要項） 1969年11月20日発行
- ⑨ 『聖徳の教育』 聖徳学園幼稚園・小学校刊 2001年6月13日発行
- ⑩ 『英才教育の道』 聖徳学園小学校刊 1973年11月13日発行
- ⑪ 『英才教育の道（4）』 聖徳学園 幼稚園・小学校刊 1998年6月20日発行
- ⑫ 「教育振興基本計画」文部科学省 2013年6月閣議決定
- ⑬ 『伏見猛弥先生を偲んで』 社団法人英才教育研究所刊 1972年11月発行
- ⑭ 『脳と心』 NHK取材班著 NHK出版 1994年2月発行

- ⑮ 『英才教育のすすめ』 伏見猛弥著 講談社刊 1969 年 9 月発行
- ⑯ 『研究紀要』 第 5 号 聖徳学園 幼稚園・小学校刊 1993 年 6 月 19 日発行
- ⑰ 『マザーリング』 1980 年 10 月 15 日発行
- ⑱ 『江戸の子育て』 中江和恵著 文藝春秋 2003 年発行

英才教育導入時のエピソード

元聖徳学園小学校長 元聖徳幼稚園長 **郡司 英幸**

1. はじめに



和田校長先生より、英才教育 50 周年を迎えるにあたり、昭和 44 年（1969 年）英才教育導入時のエピソードについて書いて欲しいとの連絡がありました。私は昭和 45 年から教職に就いたので、スタート 2 年目からの報告という事になりますが、

導入期の様子を知る 1 人として、半世紀前の事柄になり、記憶が間違っている部分も多々あるかもしれませんが、多くの先輩、同僚と共に創り上げてきた英才教育の歴史の中の導入時の様子について、その当手を思い起こしながら振り返っていききたいと思います。

内容を大きく 3 つに分けて進めていこうと考えました。

1. 子ども達について
2. 教職員について
3. カリキュラム委員会について

1. 子ども達について

私が初めて聖徳学園小に足を踏み入れたのは、昭和 44 年 11 月の第 1 回英才教育公開研究発表会の日でした。教室での授業と中学・高校の体育館兼講堂で行われた研究発表（教育顧問の伏見猛弥先生の講演、児童の発表等）が公開されました。私のそれまでの経験・小学生観と違ってびっくりしたのは、「外国語」の授業と「バイオリン」の発表でした。「外国語」では、大学教授の先



生と小学生が「英語」の授業ではなく、「外国語」の授業をしていることにびっくりし、「バイオリン」の発表のうちの1曲は確か「キラキラ星」だと記憶していますが、小さな小学生が集団で演奏しているのを目にして、これまた驚きました。

私は、翌年の4月から赴任する予定になっていたのですが、こんな子ども達の教員としてやっていけるのかどうか、不安な気持ちになったものでした。

昭和44年度入学の第1期生は、21名でしたが、この人数を更に2クラスに分けてのスタートでした。また、新2～4年生の転入生によるクラスも1クラスあり、複式学級というユニークな型式での学級編成が行われていました。45年度入学の2期生も2クラス編成でしたが、両学年とも入学試験で実施した知能検査を基にクラスそのものが能力別編成になっていました。このシステムは、3期生では、入学者数が2クラス編成にするには足りなくて、学年1クラスになり、学年2クラス制が復活したのは、しばらく後の昭和54年度からでしたが、その時は均等に編成した2クラスでのスタートになりました。

私は、昭和45年の4月から勤務しはじめました。クラス担任は、2期生の1年生のクラスでした。やんちゃで活発な子が多く、毎日、その子達に負けないように元気を出して頑張っていました。授業に関する事で印象的だったのは、「数学」の教材作りです。従来、一般的に行われてきた教師主導で進めるのではなく、授業の主体はあくまでも子ども達であり、子ども達の能力を最大限に伸ばすことを考えて、教材を作りなさいと言われていました。子ども達の興味関心・能力を的確に把握し、子ども達がそれぞれの力を精一杯フル回転させて、問題解決出来るか否か、つまり能力の限界に挑戦させ得るようなレベルの教材を準備することが大切だったのです。しかもそれは少人数と言えども、興味関心・能力差のあるクラスのどの子ども達にも合うように、何種類も準備する必要がありました。また、英才教育開始から2年目ということは、実践例

が無いに等しい訳で、白紙の状態から教材作りを試行錯誤しながらスタートしている状況でした。しかも、今日の授業で子ども達の達成状況を分析してから、次の授業の教材を考えていくという感じで、本当に大変でした。そうして苦勞して作って準備していった教材を、次の日の授業であつという間にやりとげてしまう子どもがいて、その授業で子どもに提供する教材が無くなるということもよく生じました。計りしれない子ども達の能力の高さと、自分の予想の甘さを痛感し、途方にくれることもありました。そんな時は、外に出て野球をやろうと提案し、残りの時間を、身体を使つての「数学」の授業にしました。外での授業のねらいは、「打球の角度と飛距離との関係を考える」とかこじつけてやっていました。保護者の方が来校されていて、その光景をご覧になられたこともありました。皆さん大らかで抗議を受けたことは、一度もありませんでした。

授業以外の事では、下校時の武蔵境駅までの送りの時の様子が一番思い出に残っています。その当時は、駅の南口周辺は現在とは全く異なり、南口を降りると目の前は、雑草だらけの原っぱで、現在のイトーヨーカ堂の東館の前のマンションが1棟建っていたのと、原っぱの中にいまにも崩れそうな掘っ立て小屋が1軒あるだけで、本当に殺風景な場所でした。学校から駅までは寄り道をしなければ、7～8分の距離なのですが、その掘っ立て小屋が腕白な子ども達には、宝の山のように見えるのか、必ずそこでいろいろな遊びをしてから駅に行くというのが一つの流れになっていました。早く子ども達を改札口まで送り届け、学校に戻って仕事をしたいと思っても、遊びに夢中で中々動こうとしない子ども達を見ていると、強く叱ることも出来ず困っていました。

2つ目は、年度は、47年度になりますが、第2回目の林間学校についてです。3年生以上の学年が対象で、2泊3日の日程で山梨県の清里高原で実施しました。学校から現地への交通手段は、現在のように、観光バスをチャーターするというのとは異なり、JRを利用してのものでした。新宿駅で乗車し、中央本線と小海線を乗り継いで清里駅に到着。そこから重いリュックを背負っ

て、「美し森」にある宿舎まで結構長い登り坂を汗をかきかき歩いて行ったものでした。先生方も若いし、子ども達も歩くのが普通だと思っていたのか特別不満を言う子どももいなかったと記憶しています。現地での行動も「歩け歩け」中心のプログラムでしたが、弱音をはかず元気に頑張ってくれました。現在であれば、待ったが掛かるような計画でも、その当時は若気の至りで実施してしまったという感もありました。

その当時の初代校長は、現在の和田知之先生の祖父である、和田玄之先生でした。第一印象は、ちょび髭をはやされ、一見こわそうにも感じられましたが、実際は大変優しい先生で、腕白な子ども達同様の、滅茶苦茶な事をすることが多かった若い私達教員に対して包容力を持って接して下さいました。先生はその当時、聖徳学園小学校、それと並立していた関東小学校、聖徳幼稚園、国分寺聖徳幼稚園の校長、園長を兼任され、昭和46年には南多摩聖徳幼稚園の園長に就任されて大変お忙しい日々を過されていました。また、教育内容面に関しては、伏見猛弥先生が責任を持って担当するという体制になっていたこともあって、教育内容面で細かいご指導を頂いたという記憶はあまりないのですが、校舎内外の見回りをよくされていて、教室で仕事をしていると、声かけをして下さったり、電気の消し忘れがあったりすると、黙って消して下さいということがよくありました。その玄之先生は、大変残念なことに、1期生が卒業する前年の昭和48年に亡くなれましたが、その遺志は、2代目校長の和田知雄先生、現在の和田知之先生に脈々と受け継がれています。

2. 教職員について

先ずあげられるのは、職員室内の環境です。その当時の職員室は、木造2階建ての2階にあり、現在の6号館と同じ向きにありました。ご承知のように、6号館は南北に広がる形で建てられている関係で、風の通りが悪く、夏暑く、冬は陽当たりが悪く寒いという場所です。鴨長明の「方丈記」に、日本の家の建て方は、夏の過ごしやすさを優先して考えるべきだという一文があります

が、正にその通りで、寒い冬は、暖房器具を強化したり、洋服を重ね着をしたりすることで寒さをしのげても、蒸し暑い夏の日には、良い解決策は見つかりませんでした。当然クーラーはありませんし、扇風機が職員室内に1～2台あったように記憶していますが、これも風量を上げると、プリント類が飛んでしまうので、あまり暑さを軽減する役には立ちませんでした。何しろ、プリントの丸つけをしていると、右腕が汗まみれになってしまうので、子ども達が頑張ってくれたプリントが濡れてしまったり、教材を謄写版で作成する際に汗で滲んでしまって困ったことが多々ありました。そんな夏の暑い日は、冷たい飲み物が欲しくなるので、よく「あみだくじ」をして、お互いに暑さに負けずに頑張れるように一寸した遊び心を取り入れて、一息入れたものでした。お金を出すだけの人、お金は出さなくてもよいが買い出しに行く人、「あみだくじ」の結果が出ると、それはそれで盛り上がり、買い出しの人が戻ってきて皆で冷たいアイス等を食べ、又次の仕事に向かったものでした。

次は、事務用品に関してです。印刷関係では、先ほどの謄写版に始まり、油性カーボン、ワープロ、パソコンと教材を作る際の用品の発達は、素晴らしいものがあります。学期末になると、学力・能力の評価書と年に1回の知能診断書の作成があり、それを基に保護者の方と面接をするのですが、導入期の時には、コピー機という便利なものがなく、全く同じ評価書を2枚ずつ（保護者用・控え）書き、完成した2枚に割印をして面接に臨んでいたのですから、評価書作成に費やす時間は大変なものでした。特に知能評価書は、様式が現在のものとは異なり、その学期に実施した因子を、90種類表記されている知能因子表の中に○印を押して示すこと、各個人の因子指数を同心円状に書かれた場所に赤鉛筆でマーキングしていく作業もあり、担当している子どもの数×2の枚数をこなすのは、かなりの時間がかかりました。複写機も先ほどの印刷機と同様に発達の進捗は素晴らしく、世の中にコピー機が普及してくると、同一のものを2枚書かなくても目的が達成できることになり、学校にコピー機が入る前は、児童全員分の評価書を、当時教務主任をしていた私が、完成したクラス

から順に、近くの文房具屋さんに行ってコピーをしてきて、それを先生方が刷印をして完成という形になりました。現在は、学校内でのカラーコピーの時代に至っている訳で、正に隔世の感があります。

3. カリキュラム委員会について

我が国初の知能教育を基本とする“英才教育”の導入という事は、それまでの実践が何もない訳ですから、各教科の授業計画・学校行事等全てがゼロからのスタートだったのです。日々の具体的な教材、6ヶ年を見通した上での実施計画等に関して、1つ1つ計画し、実行していくことが必要だった訳です。そこで、教育内容を担当して頂いた教育顧問の伏見猛弥先生を座長とし、大学教授の先生方、現場の若い教員をメンバーとするカリキュラム委員会が組織されたのです。その会のねらいは、理論面のアドバイスを我々現場の人間が頂き実践する。子ども達の実際の反応を報告し、それに基づいて、修正したり、改善したりするのが主なものでした。直接子ども達と日々接している現場の人間にとっては、カリキュラム委員の先生方から受けるアドバイスは、教育内容を理解し、内容の充実を図っていくためには、大変貴重で有難い研修の場でした。

カリキュラム委員会は、原則として毎週木曜日の夕方、英才教育研究所があった、代々木駅前のビルで行われました。何しろ初めての実践ばかりなので、各教科の授業計画（月案）、中間・期末テストの問題、研究発表会用の授業案、成績検討会の資料等を、その会に間に合うように作成し、カリキュラム委員会の席上で、見て頂いて、指導を受けるのです。教師としての平常の業務をこなしてから、代々木の英才教育研究所に行きますので、準備の時間が足りなくて、印刷物を持って中央線に飛び乗り、電車の中でホッチキスでとめるといったことも結構ありました。ほぼ、各教科毎に担当者が決まっていた委員の先生方からは、容赦ない質問が飛び、私達若い現場の人間にとっては、辛い事も多かったのですが、その場での様々な指摘や指導を受けたことが、その後の教員生活を続けていく上での大きな財産になっていたことは間違いなく、

大変感謝しています。

今でも憶えているカリキュラム委員会でのやり取りに、次のようなものがありました。テスト問題の検討に関して、理科の問題文に、「バケツの中に水を入れて云々」という箇所があり、その当時は当然、謄写版で手書きしていたので、あるカリキュラム委員の先生が、首をひねりながら、「バケシの中に…」とはどんな事を要求しているのかとの質問があり、現場の方からは、「バケツの中に…」ですと答えたのですが、どう見ても「バケツ…」ではなく、「バケシ…」にしか見えないとの指摘がありました。現在のパソコンでの印字では考えられない問答ですが、それを聞いていて思ったのは、1字1字を大切に、子ども達が間違ふことのないように正確な字で書かないといけないということでした。また、その当時、独自のカリキュラムによる中間・期末テストだけでなく、該当学年の内容をきちんと習得できているか否かを確認するために、市販されている標準学力検査も実施していました。その結果を一覧表にして作成し、検討した際に、私が担当していた1年生のある子が、普段慣れている聖徳の定期テストではなかったもので、5段階評定の1と2のみの結果になってしまったことがあり、伏見先生から、「おもちゃの兵隊じゃないんだから、イチニ、イチニじゃ困るよな」と指摘され、私もどう返答したらよいのか、困ってしまったことがありました。その事から、一人ひとりの子どもの実態をきちんと把握し、それぞれに応じたキメ細かな指導を追求していくことの大切さを学びました。

そんな調子でカリキュラム委員会は進み、時間になると、夕食が出ました。それは、毎回決まって、英才教育研究所近くの寿司屋さんが出前を持って来る、「赤しゃりの握り寿司」でした。独身で給料も少なかったその当時の私には有難かったのですが、最後の方では、「たまには、違う夕食も食べたいな」などと、失礼な事を思ったりもしました。この夕食の時間は、座長である伏見先生が、帰宅するために、東京駅を何時何分発の電車に乗るかということで、大体決まっていました。神奈川県茅ヶ崎市に自宅があった先生ですので、会

議の延長というのはほとんどありませんでした。明治生まれの人にしては、長身であった伏見先生は、一流好みというか、良い物がお好きでした。そのような考え方が、授業料の設定にも現れて、その当時の社会情勢や、海のものとも山のものともわからない、聖徳学園小学校の授業料としては、高すぎるのではとの不安の声もある中、「そんなことは決してない、授業料に見合うような教育を提供すれば必ず、理解して頂ける」と開校前にお話しされていたと聞きました。仁丹をいつもお持ちで、時々、それを口の中に入れていらした光景を憶えています。英才教育発展のために心血を注がれていた先生は、聖徳学園小学校がスタートして3年目が終了する直前の、昭和47年3月に、残念ながら亡くなりました。

4. 最後に

「英才教育とは」、「知能教育とは」に関して、何一つ知らないところから教員生活をスタートし、図々しく定年までの40年間を聖徳学園小学校で過ごさせて頂いたことや、失敗の連続で、上司、同僚、保護者、児童に迷惑を掛け通しであったことを思い起こすと、正に汗顔の至りであります。

今後の聖徳の教育を考える時に、大事なのは、創立当初から言われ続けている、先ず子ども達の実態があって、それに合わせた教材を作成する所からスタートしようとの大前提を基に教育活動を展開していくことだと思います。一人ひとりの子どもが目を輝かせて教材に取り組むためには、子ども達の持っている能力より少し高目のレベルのものを準備し、それに向かわせ、達成できた時の喜びを味わわせることが大切で、それによって学習に対する意欲が増すと考えられるからです。そのためには、子ども達の興味関心・意欲を喚起させ得るような教材・教具が必要であり、それらの開発・実践に関して、聖徳の教育に携わった全ての先生方が日々努力を重ねてきて、現在に至っている訳です。各種プリント、テキスト等、正に多くの先生方の汗の結晶ですが、現在あるものが全て完成品ではありません。なぜなら、在籍する子ども達は、それぞれ個

性・能力が異なり、あらゆる可能性を持つ、「未来を開く戦士たち」ですから、それらの子ども達の実態は、日々変化する訳であり、教員はその変化に対応すべく日々努力していかないといけないからです。

聖徳学園小学校の何よりの特色である、「子ども達が生き生きと、楽しそうに活動する」姿が更に充実・発展することを祈念し、筆をおきたいと思います。

特集・聖徳の教育

イングリッシュキャンプ 2018 実施報告

～キャンプに向けた取り組みと3日間の英語の実践体験～

小学校教諭 藤石 勝巳

1. 初めに

聖徳学園小学校では1年生から英語の授業に取り組んでいる。簡単な挨拶から始まり、歌やゲームなどを通して英語の語彙や表現を身につけていく。3年生の終わりになると日常で使われる簡単な英語の単語や表現を理解したり、話すことができるようになってくる。

ただ教室という限られた環境の中で折角身につけた英語を実際の生活の中で使ってみる機会はなかなか持つことができない。

そこで始まったのがこの4年生を対象としたイングリッシュキャンプである。3日間、成田近くのホテルに滞在し、英語のネイティブの先生と英語の実践練習を行う。6、7人の子どもたちに1人のネイティブが担当し、まるでその子どもたちのお父さん、お母さんのようにほぼ寝ている時間を除いてずっと一緒に生活を共にする。また、3日間の中で、ホテルに滞在している航空会社のパイロットやフライトアテンダントの方を夕食に招いた食事会を実施したり、最終日には成田空港に行き、出国する外国人の方にインタビューを行うことで身につけてきた英語の実践体験を行っている。

今回そのイングリッシュキャンプの3日間の様子とその準備として行っている英語の授業の内容について報告させていただきたい。

2. 事前学習、事前準備

3日間の夏のイングリッシュキャンプで最大の成果を発揮するためにも、キャンプ前の事前学習、事前準備が大切であると考えている。そのため4年生の1学期の英語の授業（週2コマ）とクラス活動を中心にした取り組みを集中的に行っている。

1) 英語の授業での取り組み

英語の授業では主に以下の内容について練習し、定着を目指してきた。

1 学期前半

- (1) 英単語練習（1～100）
- (2) 7大陸について
- (3) 国名及び国旗の学習（17 개국）
- (4) 英語の質問 14 文
- (5) ホームステイでの英会話
- (6) 書く英文 1

1 学期後半

- (1) 英単語練習（101～200）
- (2) 英語表現 48 文
- (3) 自己紹介英文
- (4) ドリンクオーダーでの英会話
- (5) 書く英文 2
- (6) 成田でのインタビュー練習
- (7) 歌 Hokey Pokey
- (8) Invitation Card の作成



具体的な学習内容

(1) 英単語

英語の基礎力となるのはやはり語彙力である。そのためイングリッシュキャンプに向け1年生から学習してきた英単語の内、英会話に役立つものをピックアップした。同時にキャンプで必要となる生活に必要な単語、国旗の学習に必要な国名や形を表す単語などを加えた。

その語彙200をネイティブの声で録音したCDを学年全員に配布し、家庭での練習も推奨した。

200もの単語の授業での練習は、単調なものになることが予想されたが、イラスト付きの英単語をスクリーンに大きく映しながらスピーディーに練習することで、子どもたちは飽きずに楽しみながら練習することができた。

そしてこの語彙力が実際のキャンプでのネイティブの先生との会話を支える基となっていった。

(2) 7大陸

元々、5年生の1学期に学習するテーマ“The world where we live”の中で扱ってきた内容ではあるが、今回成田でのインタビューも含め、世界各国の人たちと接する機会があるため、前倒して学習することになった。

西洋諸国の捉え方の世界を7大陸に分けて、日本はどこにあり世界の国々がどこにあるのかなど位置関係を認識し、世界に目を向けさせる目的である。

(3) 国名及び国旗

日本を訪れた外国人の国別ベスト16を調べ、それに日本を加えた17か国の国旗と英語名を練習した。キャンプでは国旗のカードなどを使って様々なゲーム活動ができた。また成田空港でのインタビューの際にも大いに役立ち、子どもたちが世界を身近に感じるきっかけになった。

(4) 英語表現

2年生から Hi-Bye English の教材を使って 92 個の英会話表現を練習してきている。その中からキャンプで使いそうな表現を 42 個ピックアップした。英単語同様にこれも CD に録音し児童に渡している。

通常は 2 対の組み合わせになっているものを、ランダムに選んでいるので前後の脈絡がなく単文で練習したため、子どもたちの定着が少し難しい内容となった。

ただテスト前にはほとんどの子どもが言えるようになっていた。これもキャンプではネイティブの先生との会話の基本となり助けとなった。

(5) 英語の質問及び自己紹介英文

これはキャンプの大きな目標の 1 つである、キャンプ最終日に行われる「自己紹介発表会」に向けた活動である。

学期前半では自己紹介の内容を引き出すための質問の英文を練習した。“When is your birthday? My birthday is November 14th.”のように、質問が定着していることで、答えの部分、つまり自分の自己紹介の英文が引き出せるようにしている。

質問の英文は 14 個もあり、子どもによっては正確に覚えることができない子がいた。今回キャンプに向け、プロのイラストレーターに依頼し、その質問を表した絵を使用したため、絵を手掛かりに英語を思い出すことができ、本番の発表会でも質問の英語が大いに役にたった。またネイティブへ質問を英語でする際の基本的な表現として活用できていた。

1 学期後半では、自己紹介の文をまず日本語で書かせ、それは教師が英訳したものを子どもたちの自己紹介の原稿とした。あまり時間がなく、練習も限られてはいたが、家庭で熱心に練習する子も多く、キャンプ前には発音良くすらすらと言えるようになっている児童も珍しくなかった。

(6) 英会話

キャンプに向け、2種類のダイアログ（対話文）を練習した。学期前半では「ホームステイでの夕食の場面」の設定で、これはキャンプだけでなく、4年生から希望者が参加している「オーストラリア国際交流の旅」でも実践できるようにしている。実際キャンプ後、4年生の14名の子どもたちがオーストラリアに向け旅立っている。

学期後半の「ドリンクオーダーでの会話」のダイアログは、キャンプの2日目にホテル内にあるスポーツバーで行われるドリンクオーダーの練習である。玩具ではあるが実際にお金を使って、外国人のバーテンダーとの会話を通して、飲み物やポップコーンを購入するものである。

どちらの対話の授業での練習でも子どもたちは、楽しそうに気持ちを込めて練習することができ、聖徳の子どもたちの表現力や演技力、適応力には驚かされた。

(7) 書く英文

今年度から英語科では「書く英文」を各テーマに設定し、定期テストに出題し、子どもたちの英文を書く力を伸ばそうとしている。キャンプでは一日終了するときに英語日記を書かせている。簡単な内容を書き込ませるのだが、英文を書くことに慣れていないと、単語を書く場所であったり、単語と単語の間にスペースを空けるなどできない。そのためキャンプ前に、書くためのルールを身につけ、書くことに慣れておく必要がある。

(8) 成田でのインタビュー練習

キャンプ最終日に行われる成田でのインタビューに向けて、質問の英文を読む練習を行った。表現は多少難しいものもあり子どもたちは苦労していた。ただ本番では原稿を見ながら言うことができるので、しっかり読めるようにさせることだけにした。また一人が全部の質問をするのではなく、皆で

分担して尋ねるので、それも子どもたちには大きな負担とならずに済んだ。

(9) 歌 “Hokey Pokey”

キャンプの朝の英語体操で使用する歌の1つ “Hokey Pokey” を英語の授業でも練習した。体の部位や右左の英語を身につけられだけでなく、体を動かしながら楽しく踊れるようになっていた。

(10) Invitation Card の作成

キャンプの2日目には航空会社のクルーとの夕食会が行われる。そこでチェックインしてくるクルーに声をかける際に使われる Invitation Card (招待状) の作成を短縮授業中の英語の授業で行った。各グループにごとに2枚ずつ招待文を英語で書き、絵などをそれぞれのグループで考えて作成していた。飛行機の絵や富士山の絵などパイロットやフライトアテンダントの方が興味を持って受け取ってくれそうな招待状を上手に仕上げていた。



2) クラス活動での取り組み

キャンプに向けて、英語の授業だけでなく各クラス、クラス活動の中で準備、練習等を行うことができた。

(1) お礼の折り紙の練習と作成

キャンプで出会い、お世話になる方々に折り紙のプレゼントを用意した。クラス活動では様々な折り紙の折り方を練習し、お礼の気持ちを込めて1人3つくらいの折り紙を作成した。

キャンプでは、夕食会に参加してくれたクルーや空港でインタビューに答えてくれた外国の方、そして3日間お世話になったネイティブの先生方にプ

レゼントすることができた。

(2) サンキューカードの作成

折り紙と同様にネイティブの先生にはサンキューカードを作成した。学校では枠組みが印刷されたカードに絵や色付けしておいて、キャンプ最終日にメッセージを記入した。

(3) 食事のマナーの学習と練習

昼食時に、家庭から持参したお弁当を紙の大皿に盛り、外国での食事を想定しナイフとフォークだけで食べる練習を行った。また、スープや麺類も同様に行った。最低限のルールやマナーについて知る機会となった。緊張の中で、皆黙々とナイフとフォークで食べる姿は凛々しくも見え、良い練習となった。

3) 児童説明会

短縮授業中にクラスごとに児童対象のキャンプの説明会を行った。初めに校長先生からお話をしてもらい、そのあとしおりを見ながらキャンプでの諸注意を行った。イングリッシュキャンプのルール、日程、持ち物、ホテルや部屋でのマナー、ルールの確認など。出発直前ということもあり子どもたちも緊張しながら静かに話を聞く姿が見られた。

4) 外国人講師による特別授業

児童説明会と並行して、外国人講師（フレッド先生）による英語の特別授業を行った。1学期間子どもたちが練習してきた英語を試す場として、子どもたちは熱心に取り組み、自信とキャンプへの期待が大きく広がる場となった。子どもたちの意欲と英語力に驚いたという感想をフレッド先生からもいただくことができた。

3. イングリッシュキャンプ

1. 実施日：

平成 30 年 7 月 23 日（月）～ 25 日（水）の 3 日間

2. 対象児童：

4 年 のぞみ組（34 名）、はやて組（32 名）、計 66 名

3. 引率教員：

松浦 博和教頭、三輪 広明、田中 飛鳥、藤石 勝巳

4. 実施場所：

成田近郊ホテル

5. プログラム担当業者：

プラスワン教育（リソー教育グループ）教育旅行事業部

6. 利用交通手段（学校とホテルの往復）：

貸切バス 2 台

7. 3 日間の主な活動内容

ホテルにて

1. 英語レッスン

- 英語での自己紹介練習、成田での質問練習、世界の国々について知る活動など、様々なゲームや英語活動を含む。
- 英語での買い物練習、ホームステイでの会話練習

2. 自己紹介発表会

3. トレジャーハント（宝探しゲーム）

4. ドリンクオーダー（飲み物を英語で注文）

5. ネイティヴの先生との食事、クルーとの夕食会

6. 英語でスポーツ活動

7. 英語ゲーム大会

バスにて

1. 伝言ゲーム（往路）
2. 風船カテゴリーゲーム（往路）
3. 英数字ビンゴゲーム（復路）
4. 英語のビデオ観賞（復路）



成田空港にて

1. 外国人へのインタビュー
2. 連絡先（学校のメールアドレス）の交換

8. イングリッシュキャンプの目標

1. ネイティヴの先生とのゲームや様々な活動を通して、英語の基本的な語彙力、表現力を伸ばし、英語でコミュニケーションする楽しさを知る。
2. 英語で簡単な自己紹介ができるように練習し、自己紹介発表会での発表などを通して自己表現力を高める。
3. 英語で相手への簡単な質問ができるように練習し、クルーとの夕食会などの実践を通して、他者について知る方法を学ぶ。
4. 英語での国名や国旗などを通して世界の国々に触れ、日本以外の国や世界の人々への興味を広げる。
5. 成田空港（または成田山新勝寺）での外国人へのインタビューを通して、英語でのコミュニケーションの楽しさを知り、世界の人々との交流を図る。同時に外国人の目を通して、日本の良さを知る。
6. 英語での買い物やホームステイでの食事の場面を想定し対話練習を行い、「ドリンクオーダー」の場でためすなどして、海外でも使える実践力を身につける。
7. ホテルでの滞在を通して、海外での生活のために必要な基本的なマナー、ルールを学ぶ。（食事でのマナー、部屋の使い方など）

9. Rules of English Camp (イングリッシュキャンプでのルール)

1. Challenge your English. (英語でチャレンジ)
2. Don't speak Japanese in class. (授業での日本語禁止)
3. Speak clearly, not loudly. (大声ではなく、はっきりとした声で)
4. Make eye contact while speaking with someone. (話す時は相手の目を見て)
5. Don't forget to say, "Hello." "Please." and "Thank you."
(「こんにちは。」「お願いします。」「ありがとう。」をいつも忘れずに。)
6. Eat, sleep and learn as much as you can! (たくさん食べ、たくさん眠り、そしてたくさん学ぶ。)
7. NO RUNNING in the hotel !! (屋内はぜったい、走らない!!)
8. Keep smiling. (いつも笑顔で。)

※キャンプ中、子どもたちにこの8つのルールを意識させる。

10. 日程

1 日目 7 月 23 日 (月曜日)

8:00 教員集合

8:20 ネイティヴの先生、添乗員、派遣看護師来校

8:30 児童学校集合

校庭集合 (暑さのため、早めに来た児童はブレイルームで待たせた。)

8:35 出発式

添乗の方、看護師の方を紹介

ネイティヴの先生たちを紹介 (10 名)

松浦教頭のあいさつ

8:55 学校を出発 (貸切バス 2 台)

バスに乗車

バス内にて英語ゲーム

調布から高速道路。途中、湾岸幕張で休憩。

11:45 ホテル到着

12:00 オープニングセレモニー

ホテルの担当者のご挨拶

諸注意「キャンプを始めるにあたって」(藤石)

・ 8つのルールの確認 ・ 5分前行動など

昼食（ネイティヴの先生とグループごとに）

13:00 英語レッスン①（自己紹介練習、Activity & Games）

グループごとに各会場に移動してレッスンスタート

14:40 英語レッスン②（英語の質問練習、Activity & Games）

16:20 チェックイン

各自、入浴（シャワー）

17:30 夕食（ネイティヴの先生と一緒に。以下 NT）

18:30 英語ゲーム大会（NT の主導で）

19:40 英語で日記記入（NT と）

20:00 聖徳の教員と反省会

20:30 就寝準備（聖徳の教員が指導）

21:30 就寝（聖徳の教員、以下（ST）

による見回り）

22:00 頃 教員の反省会



2日目 7月24日（火曜日）

6:00 起床、ベッドメイキング、着替え

6:30 朝の英語体操、屋外にて英語の音楽に合わせて体を動かす。（ST）

7:00 朝食（NT と）

8:00 英語レッスン③（国旗、世界の国々など）

- 9:40 英語レッスン④（発表会準備、練習）
グループごとに（各会場にて）
- 10:50 トレジャーハント（宝探しゲーム）
- 12:00 昼食（NT と）
- 13:00 英語レッスン⑤（ドリンクオーダー、食事での英語対話練習）
グループごとに（各会場にて）
- 14:20 はやて組→クルーへの招待活動（グループごとに、フロントデスク付近で、招待状を使って）
のぞみ組→ドリンクオーダー（スーパースターズにて）
練習した英語フレーズと玩具のお金を使って、ドリンクを注文する。
- 15:10 はやて組→ドリンクオーダー
のぞみ組→クルーへの招待活動
※ただし航空会社のクルーの到着時間がわからず、実際は臨機応変に実施した。
- 16:00 スポーツ活動（全体で 屋外）
ドッジボールとペーパー競争2つに分かれて交互に実施
- 17:10 入浴（各自部屋でシャワー）
- 18:00 夕食（クルーとの交流ディナー）
グループで招待したクルーと食事
事前にクルーに質問したい内容をアンケートしておき、全体でクルーに質問に答えていただいた。
最後に全員でお礼の合唱をした。（「バリエーション号」）
- 19:30 英語で日記記入（NT と）
- 20:00 聖徳の教員と反省会
- 20:30 就寝準備（ST が指導）
- 21:30 就寝（ST による見回り）

22:00 頃 教員の反省会

3日目 7月25日(水曜日)

6:00 起床

チェックアウト準備(制服に着替える)

6:30 朝の英語体操、屋外にて英語の音楽に合わせて体を動かす。(ST)

7:00 朝食(NTと)

8:00 大きな荷物を持って集合

英語レッスン⑥(成田での質問英語練習・発表会準備)

グループごとに(各会場にて)

9:30 自己紹介発表会(のぞみ組 カトレア、はやて組 樺 にて)

一人ひとり「自己紹介」のスピーチを発表

グループのNTに全員コメント頂く。(優秀賞、特別賞の発表)

のぞみ組

11:10 昼食(NTと)

12:00 ホテルを出発(貸切バス)

12:30 成田空港着

12:40 外国の方へのインタビューグループごとに(NTと)

14:00 サンキューカード作成(STと)

(この時はネイティヴの先生は退席)

はやて組

11:10 サンキューカード作成(STと)

(この時はネイティヴの先生は退席)

12:10 昼食(NTと)

13:00 ホテルを出発(貸切バス)

13:30 成田空港着

13:40 外国の方へのインタビューグループごとに(NTと)

15:00 両クラス集合

15:15 成田を出発（貸切バス）

バスにてゲーム（ビンゴゲーム）、英語の映画鑑賞

途中、「湾岸幕張」にて休憩。

17:45 学校到着

クロージングセレモニー

松浦教頭、看護師さん挨拶

児童代表、お礼の言葉

サンキューカードをネイティヴの先生に渡す（Group リーダー）

17:55 解散

3. キャンプを振り返って

1) 集合、出発式



8:30 児童校庭集合ではあったが、7:30 くらいから子どもたちが集まり始めた。暑さ対策もあり途中からプレイルームで待機するように指示をした。大きく遅刻する児童もなく早めに出発式を行うことができた。

出発式はグループごとに列になり、ネイティヴの紹介、松浦教頭の話、看護師さん、添乗の方の紹介を行った。

2) 往路のバスにて

バスはクラスごとに分かれて2台に分乗。バス内の座席は事前に決め、グループごとにネイティヴの先生が補助席を使って、自分の担当する児童のすぐ近くに座ることができた。

バス内（はやて組）ではすぐに自己紹介やネイ



ティヴの先生を中心にトランプなどが始まった。途中からグループ10の先生がマイクを持って、カテゴリーゲーム（同じ種類の英語を列ごとに言う競争。動物や果物など）を風船を回しながら行った。その後、皆で英語の歌を一緒に歌ったりした。

3) ホテル到着、食事

ホテルの担当者の挨拶の後、藤石から食事のマナーやルールの確認。すぐにグループごとに昼食。アレルギー児童の食事については看護師と担任の先生が再度児童と確認しながら取り分けさせた。



食事はキャンプ中、計7回すべてビュッフェ式だった。学校で練習してきたように食事はすべてナイフとフォーク、スプーンで食べることにした。「いただきます。」は全体で行わず、各グループで準備できたところからネイティヴの先生の指示でスター

トした。「ご馳走さま」は諸連絡をした後、全体で行った。食事中も終始各グループの先生は子どもたちに英語で声をかけてくれていた。

4) 英語レッスン

キャンプ中、各グループに分かれて計6回の英語レッスンが行われた。

- ①自己紹介練習 ②英語の質問練習 ③国旗、世界の国々
- ④自己紹介発表会準備 ⑤ショッピング、食事での英会話練習
- ⑥成田での質問練習

1学期間英語の授業でやってきた内容を復習し、深化させることが目標だった。各項目時間を決めて予定を組んではいたが、先生によって取り扱う時間や順番は様々だった。様々な活動やゲーム、方法によって、学習内容を楽しく、

効果的に練習させていた。また指定した内容以外の活動やゲームを取り入れているグループもあった。授業が単調にならず、結果的に良かった。

英語レッスン中は日本語は基本的に禁止とした。できるだけ英語に触れさせるためである。ただ、理解の早い子の日本語のつぶやきが英語の苦手な子の理解や支えになっている部分もあった。



5) 部屋のチェックイン

ツインベッドにエクストラベッドを入れて、1部屋3名が基本の部屋割りを出発前に担任の先生にお願いした。組み合わせはできればグループのメンバー同士だが、人数などによって2グループにまたがる部屋もあった。

6) 入浴（シャワー）

チェックイン後はすぐに子どもたちに各自シャワーを浴びるように指示。トイレも含め、シャワーの使い方などは海外の生活を想定して事前学習でも説明してきていたので、ほとんどの部屋では問題なくできていた。

7) 英語ゲーム大会

クラスごとに2会場に分かれてネイティブの先生主導で実施。どちらのクラスともピクショナリー（子どもが描いた絵が何かを他の子が英語で当てるゲーム）と英語版フルーツバスケットだった。子どもたちも楽しそうに英語を一生懸命考えながら言おうとしていた。



8) 英語の日記



定型の英文の日記に自分のことを英語で書き入れていく日記だった。先生たちに書き方を聞きながら埋めていった。量も適度で一日を英語で簡単にまとめる活動となった。ネイティブの先生からも各児童にコメントをいただいた。

9) 就寝まで

就寝時間までは1時間ほど自由時間があつた。カードゲームをしたり、テレビを見たりと各部屋で過ごしていた。

10) 起床及び朝の英語体操

朝は6時に起床した。ホテルからすべての部屋にモーニングコールをしてもらった。ホームステイの生活も想定しているので、ホテルのベッドではあるが起床時にベッドメイキングをするように子どもたちに指示。ほとんどのベッドは綺麗に整えられていた。

6時半からホテルの中庭に出て、英語の歌に合わせた体操を行った。目覚めや準備の確認、朝食までの良い腹ごなしになった。初日は学校でも練習してきたHokey Pokey、2日目はHead, shouldersとSeven Stepsだった。ネイティブの先生が関わらない唯一の活動である。



11) トレジャーハント

宝探しゲーム。ホテルの広大な敷地内に隠されたトレジャー（英語の質問が



書かれた用紙)を探すゲーム。グループ対抗で行われた。ただ外は暑く、熱中症の恐れもあるので30分だけの実施となった。そのためすべてのトレジャーを見つけられるグループはなかったので少し達成感という意味で残念だった。ただ自分のグループ

のネイティヴの先生と協力しながら楽しそうに取り組めて良かった。終了後グループごとの集合写真を撮影。

12) ドリンクオーダー

ホテル内にあるスポーツバーを昼間の時間に利用し、飲みものを購入する。練習してきた英語の表現を使って、外国人のバーテンダーに飲みものやポップコーンを緊張した顔で注文していた。玩具ではあるがお金を使って購入できてほっと一息。外国の雰囲気を感じだした店内でビリヤードも初体験。ネイティヴの先生やバーテンの方もやり方を教えてくれてすっかり大人の気分だった。



13) クルーへの招待活動



チェックインしてくる航空会社のクルーをフロントの前で待ち、準備しておいた招待状を見せながら夕食に誘った。子どもたちの熱心さに多くのクルーが立ち止まり、話を聞いてくれた。

クルーの乗ったバスの到着時間がばらばらで、時間が読めず、2クラス同時に招待活動してしまったり、フロント前が

少し騒がしくなってしまうようになった。

14) スポーツ活動

聖徳の教員が音頭をとって、子どもたちとネイティヴの先生たちも自分のグループに入っていてスポーツ活動を行った。種目は「新聞競争」と「ドッジボール」でのぞみ組、はやて組で交互に、前者は三輪先生、後者は藤石の指揮のもと行われた。夕方近くということもあってそれほど暑くなく、気持ち良い汗をかくことができた。先生たちとの親睦や気分転換となった。



15) クルーとの夕食会

上記の招待活動の結果、10グループのうち9グループのところにクルーが来てくださった。

初めは普段の食事のようにグループごとに準備し食事をスタートさせた。ある班では、食事そっちのけでパイロットさんの周りに集まって、パソコンの画像を見ながらパイロットさんの話に熱心に聞き入る子どもたちだった。



途中で子どもたちに事前にアンケートしておいた「パイロットさんやフライトアテンダントさんへの質問」コーナーが全体でスタートした。「今まで行った国で一番良かったのは?」、「お給料はいくらですか?」、「UFOを見たことはありますか?」、「乗り物酔いやトイレ、食事はどうするのですか?」などなど。子どもたちの少し失礼な質問や疑問に大変真面目に答えてくださる方々で、子どもたちも真剣に聞き入っていた。自分の質問がされることが嬉しそうだった

り、特に将来パイロットになりたい子どもたち（2名）には忘れられない会になっただろう。

最後に4年生の今年のテーマ曲「バリエアンテ号（勇敢な船）」をお礼の気持ちを含めて全員で熱唱した。お礼の折り紙を渡して会は終了した。

16) 自己紹介発表会

最終日にキャンプの集大成として「自己紹介発表会」をクラスごとに分かれて行った。のぞみ組は三輪先生、はやて組は藤石の司会だった。

各グループから一人ずつ前に出て、14つの表現を含んだ英語の自己紹介文を発表。この発表会は6年生の最後に行われる「スピーチコンテスト」の前哨戦、予行練習的な位置づけである。今まで学習してきた表現とこれから学習する表現を取り入



れ、1学期間準備と練習をしてきた。キャンプでは一人ひとりネイティブの先生の指導を受けてしっかり発音練習してきた。発表は原稿を見ずに行うため、子どもたちはしっかり覚えようと練習してきた。ほとんどの子どもたちの発表にその成果が表れていた。普段から英語が得意で自信がある子だけではなく、授業やテストではなかなか結果を出せていない子どもたちが頑張った。

グループごとに最優秀賞をネイティブの先生に決めていただいたが、同時に「このキャンプで一番頑張った人、上達した人」を特別賞に選んでいただいた。そしてその特別賞の多くは上記の今まで結果が出せていなかった子どもたちだった。

受賞発表時の子どもたちの驚きと喜んだ顔はこのイングリッシュキャンプの大きな成果となった。これを自信にこれからの授業でも頑張ってくれればと願っている。

なお全員に担当のネイティブの先生からスピーチのコメントをいただくことができた。

17) 成田でのインタビュー



クラスごとに時間差をつけて、成田空港第2ターミナルで出国前の外国人へのインタビューを実施した（事前に許可申請が必要）。各グループ3組の外国の方へのインタビューを行った。様々な国の方で、ほとんどの方は快くインタビューに応じてくれた。

この3日間の活動ですっかり外国の方と話すことに抵抗感がなくなっていた子どもたちはとても積極的に声をかけていった。「日本ではどこに行きましたか？」や「好きな日本の食べ物は？」などの質問をし、「日本の何が一番好きですか？」の質問に、ほとんどの方が「人々」と答えていて、子どもたちも誇らしい気持ちになった。

18) 往路のバスと閉校式

行きと同様にバスの中では担当のネイティヴの先生の近くに座り、英語で数字ビンゴゲームなどを行った。

夕方5時半頃、学校に到着し、教頭先生の挨拶の後、各グループの先生たちから子ども一人ひとりに修了書が手渡され、3日間のイングリッシュキャンプは幕を閉じた。



4. キャンプ後のアンケート結果

キャンプ実施後に行った参加児童対象のアンケート結果が以下である。

イングリッシュキャンプ 2018 実施後の児童へのアンケート

集計結果

A ➡ とても楽しかった。とても良かった。とてもためになった。

B ➡ 楽しかった。良かった。ためになった。

C ➡ ふつう。

D ➡ あまり楽しくなかった。あまり良くなかった。

E ➡ 楽しくなかった。良くなかった。

※のぞみ、はやて組 参加者 66 名（一部無記入あり）

	A	B	C	D	E
1. バスの中のゲーム・活動	18	25	17	4	1
2. 英語レッスン	31	21	8	4	1
3. トレジャーハント	27	20	7	6	5
4. 英語ゲーム大会	48	10	4	3	1
5. 朝の英語体操	5	13	15	16	16
6. スポーツ活動	38	11	7	6	2
7. ドリンクオーダー	45	13	5	1	0
8. 英語で日記	14	23	16	7	3
9. クルーの招待活動	32	18	10	3	2
10. クルーとの夕食会	43	12	6	2	1
11. 自己紹介発表会	25	18	11	8	2
12. 成田でのインタビュー	42	12	6	5	0
13. ホテルの食事	38	19	5	1	1
14. ホテルのふんいき	44	12	6	3	0
15. ホテルの部屋	40	18	5	1	1
16. 担当のネイティヴの先生	49	10	6	1	0
17. 1 学期の英語の授業	34	16	14	2	0
18. 1 学期の準備の時間	26	22	10	5	2

19. キャンプで一番、楽しかったことは何ですか？（複数回答あり）

- スポーツ活動× 16 人
- ドリンクオーダー× 12 人
- トレジャーハント（宝探しゲーム）× 11 人
- 英語のレッスン× 8 人
- クルーの招待活動と夕食会× 7 人
- 英語ゲーム大会× 7 人
- 成田でのインタビュー× 5 人
- 食事× 3 人
- 部屋× 3 人
- テレビを見る時間× 2 人
- 夜寝ること× 2 人
- 外国の人たちと話（勉強）ができたこと× 2 人
- 自己紹介発表会
- シャワー
- バスでの活動
- 屋外での活動
- ホテルに泊まったこと
- みんなと一緒に英語を勉強したことが楽しかった
- バスからの景色

20. キャンプで一番、ためになったこと、英語の勉強になったことは？

- 英語レッスン× 19 人
- 自己紹介発表会× 10 人
- 成田でのインタビュー× 9 人
- クルーの招待活動と夕食会× 7 人
- 自己紹介練習× 5 人
- 国旗の勉強× 5 人

- ドリンクオーダー× 4 人
- 全部× 2 人
- 英語ゲーム大会× 2 人
- 朝の体操× 2 人
- 外国人の先生とのふれあい方× 2 人
- 単語数が増えた× 2 人
- 英語で日記
- 英語で話せるようになった
- テーブルマナー
- 私はオーストラリアに行くから英語がすごく勉強になって、オーストラリアでも役立った
- 外国人とコミュニケーションするためには、英語が下手でも一生懸命笑顔で話せば通じること
- ほんものの外国人と話せてよかったし、ネイティブの先生とたくさん話せてよかった

21. キャンプに参加して、英語は上達したと思いますか？

とても上達した× 19 人

上達した× 29 人

少し× 14 人

あまり× 4 人

いいえ× 0 人

22. キャンプに参加して、外国の人と話すのになれましたか？

とてもなれた× 25 人

なれた× 24 人

少し× 14 人

あまり× 2 人

いいえ× 2 人

23. 外国に行って、英語で外国の人たちとお話してみたいですか？

(この夏、外国に行った人はまた外国に行きたいですか？)

ぜひ行ってみたい× 32 人

行ってみたい× 14 人

少し× 9 人

あまり× 4 人

いいえ× 7 人

24. これからも英語の学習をがんばりたいですか？

とてもがんばりたい× 25 人

がんばりたい× 36 人

少し× 4 人

あまり× 1 人

いいえ× 0 人

25. オーストラリアの旅に参加した人は、イングリッシュキャンプで身につけたもので何が役立ちましたか？

- オーストラリアで役に立ったのはホーキーボーキーダンスです。ホストファミリーの家族と踊りました。
- オーストラリアでは食事のマナーが役に立ったり、英語の授業の英語が役に立ちました。
- たくさん会話ができた。
- イングリッシュキャンプで外国人と話していたため、オーストラリアでも恐れずに話すことができました。
- テーブルマナー。
- ホームステイ先でジェスチャーや言葉が伝わった。林間、スキーよりイングリッシュキャンプやオーストラリアの方が楽しい。
- オーストラリアの国歌を歌えた!!

その他

- イングリッシュキャンプのおかげで夏休み、外国人と（国内で）話すことができました。
- 林間学校やスキー学校よりイングリッシュキャンプの方が楽しくおもしろかったです。

5. 終わりに

イングリッシュキャンプを終えて一番感じるのは子どもたちの英語学習への意欲が大幅に向上したことであろう。子どもたちへのアンケートにもあるように「これからも英語の学習を頑張りたいですか。」の質問にほとんどの子どもたちが「頑張りたい。」と答えてくれた。イングリッシュキャンプを通して子どもたちが英語でのコミュニケーションの楽しさと必要性を肌で感じ取ってくれた結果であろう。

今後も英語の授業等を通して、子どもたちが英語力の向上と実践力をさらに伸ばしていってくれるように様々な機会や方法を模索していきたい。そして将来英語を使って世界で大いに活躍する人になることを期待している。

实 践 研 究

「子どもの聞く力・想像力を育む^{すばなし}素話の実践」

幼稚園教諭 園山恵理子

1. はじめに

日々の幼稚園生活の中で子どもたちの指導をしていると、時折「この子は、あの時しっかりと話を聞いて理解していれば、できたかもしれない。力はあるのにもったいないな。」と、思うことがある。

しかしながら不思議なことに、お帰りのお着替えの時間によくみかける場面。だらだらとお喋りをしながら、のんびりとお着替えをしていた子どもたちが、何故か「絵本」や「紙芝居」が始まった途端に、急に「待って～」と慌てだすのだ。そしてお着替えの手を止めて絵本に見入ってしまう。それほど子どもたちにとって、お話は魅力があるようだ。

そこで、今年度の年少（ほし）組の子どもたちに、従来の「紙芝居」や「絵本」の読み聞かせに加え、「素話（すばなし）」を取り入れることを試みてみた。子どもたちの聞く力、さらに子どもたちの想像力の育成に少しでも繋がればという願いからの実践である。

2. 子どものコミュニケーションスキル

子どものコミュニケーションスキルは、「見る力」「聞く力」「まねする力」「伝える力」「やりとりする力」の5つの力から構成される。その中でも、聞く力は、「物の名前を理解する力」「指示の言葉を理解する力」「文章を理解する力」の3つに分けられ、これらがバランスよく発達することが望ましいという。

文部科学省の幼稚園学習指導要領の中にも、子どもが幼児期に培うべき5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）の能力が記載されているが、その1つが「言語」であり、子どもの言葉の発達は、まず「聞く」ところから始まるとある。つまり子どもは、耳にする何気ない言葉を繰り返し聞いているうち

に、言語を獲得して、言葉も覚えて話せるようになる。そのことから、「聞く力」は子どもの生きる力を育んでいくうえでもとても重要なものだといえるだろう。

昔から子どもはお話を聞いて育ってきた。大人からお話を聞き、そしてそれを自分が受け継いで伝えるということの中で、子どもは自分を取り巻く大人や社会・自然とのつながりを得ることができた。よりよく生きるために、お話を理解して伝えていく。今も昔も「聞く力」というのは、大切な生きる力なのだ。

さて、物語を覚えて語って聞かせることを「素話」、「語り」、「ストーリーテリング」という。読み聞かせが絵本に視線をもっていくのに対し、ストーリーテリングはそのお話を一旦、語り手の中に入れて子どもたちの目を見ながら語る。子どもたちも語り手の方をみているので、子どもたちとお話をより深く共有できるという喜びがある。

3. 素話（語り聞かせ）とは

ここでは、「素話」と「読み聞かせ」の違いについて、以下まとめてみた。

○素話における語り手は、本を読むのではなく、お話をいったん自分のものにして、その人の声と言葉で語っていく。

○素話においては、教師（大人）と子どもたちとの間に絵本（紙芝居）がないので、子どもたちの反応が目を合わせて語るだけにすぐわかる。

○素話は、教師（大人）が子どもたちの反応を受けながらお話を語るので、話を膨らませたりまたは省略したり、アレンジを加えることができる。

○素話は、言葉の選び方や問の取り方に、その人独自の個性が出る。

○素話は、同じお話でも語り手によってあらすじが微妙に変化していく。

保育の現場で扱う素話は、童話や民話・昔話が一般的だが、その題材は自由に取り上げることができる。ただし、本の内容を丸暗記したものを子どもたちに話しても、その時間はあまり意味をなさない。一度物語を自分の中に落とし込み、子どもたちに何を伝えたいかをしっかりと教師自身が理解していないと

いけない。教師から語りかけられる素話は、子どもの言葉の発達においてとても重要な意味を持つ。

一般的に2歳までは、視覚的なものへの興味のほうが強く、想像力もまだ十分に育っていないということだ。言葉だけでストーリーをイメージすることができないうちは、話の流れよりも、絵と一緒に語りかけることが大切だ。しかし3歳を過ぎると、一般的に文字にも興味を示し始める。それで絵本の読み聞かせの時に、話の流れよりも、絵本の文字に注意がいつてしまい、お話にのめりこむことができないという子どもたちもいる。あえて子どもの興味関心を妨げる必要はないが、素話は絵や文字など一切関係がないので、子どもたちは自分で自由にその話を想像しながら、物語を受け止め楽しむことができる。素話の良いところとして、以下の点がまとめられる。

○素話では、道具や素材を用意する手間がないので、いつでも素話をする
ことができる。

○素話を通して教師と子どもたちは、それぞれが互いに物語の内容を想像
しながら過ごすので、双方に連帯感が生まれる。

○素話によって子どもの想像力や集中力を育む。

○素話では、絵を頼りに話を理解することができないので、子どもはその
時の自分の想像を自由にめぐらせ、物語を受けとめることができる。

○家庭での寝かしつけの場面だけでなく入浴時などでも、親子のつながり
を深めることができる。

もちろん、絵本や紙芝居を用いる読み聞かせは、本当に日々の保育においても、絶対に欠かせないものである。そこでそのメリットについても同様にまとめてみた。

○子どもの年齢によっては、絵（挿入絵）がお話のイメージをより鮮明に
なるよう後押しをしてくれる。

○絵本を通して読み手と聞き手がお話を共有することで双方に繋がりが生
まれる。

- 作者の意図するところをより正確に伝えることができる。
- 教師の得意不得意がある場合、絵（挿入絵）が話し手の技術の弱さを補ってくれる。
- 一緒に絵を見ながら色々なお話ができる。
- 子どもの想像力を育み、言語能力を高め、情緒的発達を刺激する。
- 家庭での寝かしつけの場面などで親子のコミュニケーションを図ることができる。

以上のことから、一概にどちらがいいとは言えないものだと思う。つまりそれぞれに良いところがあり、それぞれの役割割りがあるといえる。だからこそ日々の保育を進めていく中で、臨機応変に教師がそれぞれを実態に合わせて使い分けることができたなら、より子どもたちへの刺激の幅が広がるのではないだろうかと思う。

さて素話を実際に子どもたちにするにあたり、私自身もやはり上手く話したいという気持ちを当初もっていた。でもそのため、かえって無意識のうちに自分を緊張させてしまい、せっかくの素話の時間だったのに納得のいかないもの（例えば無意識のうちに早口になってしまった……とか）になってしまったこともあった。このような話し手の意気込みが、かえって子どもたちを緊張させてしまい、ゆったりとお話を聞く気持ちを奪ってしまうといった事例もあるそうだ。そういうケースを避けるための素話のポイントを調べてみると以下の点が挙げられる。

- 話（物語）の筋を覚え、内容を理解する。
- その話（物語）を通じて、子どもたちに何を伝えたいかを考える。
- 素話は自分の言葉にして話すことも大事だが、元になる本選びも肝心。
- 子どもたち全員に話しかけるつもりで、ゆっくりと話す。
- （声の強弱・大小・高低なども意識できるとよい）
- 子どもたちの集中を削がないよう、ジェスチャーは最小限にとどめる。
- 子どもたちがゆったりと落ち着いてお話を聞ける環境で行う。

○お話が時間内に収まらないときは、無理せず「この続きはまた明日」等、期待を持たせて分割してもよい。

以上のこれらのポイントを踏まえながら、まず教師自身が「お話すること」や「聞いてもらうこと」を楽しむことが一番大切なかもしれない。素話においては、絵本のように絵や文の補足がない。そのため自分でそのお話を十分に理解した上で進めていかなければならない。それは、自分の言葉で物語を表現するということだ。子どもたち自身も素話においては、教師の声色や表情、その場の雰囲気などからお話を理解しようとする。それ故、教師自身のお話の内容理解ということが、とても重要になってくる。だからこそ始めは無理せず、自分が話しやすい、自分が好きなお話を選ぶのがよい。

○自分自身が子どもたちに語りたい話（昔話・民話・オリジナル他）

○子どもたちが聞きたい（興味を持つ）と思う話

○子どもたちが共感できる話

○語る価値がある話、語った時に生きる話（喜びや希望を与える話）

○子どもたちの年齢（お話の長さ・わかりやすさなど）にあった話

（○聞き手に応じた日常生活の話（生活や食べ物、家族、友だちなど）…）

○わかりやすい言葉で話すことができる話

お話の覚え方としては、いろいろ参考文献を読んでみたところいくつかの大事にすべき点があったのでまとめた。

○選んだ題材のストーリーを繰り返し読み、話の流れ（あらすじ）を掴む。

○実際にお話を絵に（頭の中で映像化）して、具体的に登場人物を動かしてみる。～登場人物がどんな動きをするのかをイメージする。

○イメージを作る（登場人物の存在感をしっかりと感じ取り、動きを掴む）。

～イメージに沿って話す言葉に雰囲気がつかめてくる

○何度も語ることで、自分のお話にしていく。お話に慣れる。

4. ほし組の子どもたちと素話

入園後のほし組の子どもたちは、夏休みまでの4カ月間でお友だちと一緒に過ごしてきたことで、自分の思いを言葉に出したり、相手の気持ちを受け止めたりなど、個人差はあるものの周囲からたくさんの刺激を受けて一つの世界を広げられたようだ。実際に素話を始めたのは、5月の連休明け位。「お話〜♪」の歌を歌って、「これからするのは、素話です。」とその趣旨を子どもたちに説明した。みんなほか〜んとした顔で頷いていた。でもいざ始めてみると、「絵本はないの?」と声が上がった。「それが素話なんだよ。」「ふ〜ん。」そうした中でのスタートだった。

素話を始めるにあたり、子どもたちの反応を知りたかったこともあり、まずは短めで「イメージしやすい繰り返しのお話」をした。

『おやすみなさい コッコさん』や『どうすれば いいのかな』・『みんな おおあくび』・『子豚のプーちゃん』等、子どもたちの生活を題材にしたお話を用意した。でも正直なところ、自分の中で体裁を整えるためのお話だったのかもしれないという反省が残った。実際のところ、たとえ短時間で子どもたちが興味をもてる内容のわかりやすいお話だったとはいえ、なかなか話がスラスラと自分の中に入っていかなかったのだ。それでもこの試用期間を通して、子どもたちは少し長いお話でも聞く姿勢がある手ごたえを感じることができた。実際のところ、普段から読み聞かせをした後すぐに「早〜い!(もっと読んで〜)」という声が毎回のようになれるほど、ほし組の子どもたちは絵本が大好きだ。果たして素話ではこの言葉を聞くことができるだろうか。

以下、素話の実践として子どもたちに話したタイトルである。

○5月18日 「大きなカブ」

このお話は、畑にできたカブの収穫において、おじいさんが「とても一人でカブを抜くことは無理だ。お〜い、おばあさん! 手伝っておくれ。」といった具合に、お手伝いでカブを引っ張る人がどんどん増えていく面白さが見どころのお話である。「よいしょ!」「よいしょ!」と何度も出てくる掛け声

に思わず子どもたちも体を前後に揺すってお話に耳を傾けたり、思わず発声したりする子どももみられた。お話の後に「知ってた～」「知ってる～」というとても認知度の高いお話である。

○5月24日 「桃太郎」

日本昔話の中でも「桃太郎、桃太郎～。お腰につけたキビ団子。ひとつ私に下さいな。」でお馴染みの永遠のヒーロー。桃太郎が犬・雉・猿たちと鬼退治に鬼ヶ島に出向くという勧善懲悪の典型的な物語。このお話も大きなカブ同様、何度も同じ言葉のやり取りがお話の中で繰り返される。その面白さや安心感も子どもたちには心地よいらしい。

○6月4日 「狼と7匹の子ヤギ」

海外の昔話の中に狼が登場するものがたくさんあるが、このお話もその中では有名なお話の一つである。子どもたちは自分と子ヤギを重ね合わせながらお話を聞いているようで、狼とのやり取りをハラハラドキドキしながら「(ドアを) 開けちゃダメ! あ～!」といった具合で身を乗り出して溜息をつく姿が印象的だった。

○6月5日 「こぶとり爺さん」

この話は、意外と知らない子どもたちが見受けられた。鬼とお爺さんのやり取りの中で、怖いながらも誠意をもって鬼をもてなし無欲の結果こぶを取って貰えたお爺さん。それとは対照的に、自分もあわよくば不要なこぶを取って貰おうと勇んで鬼のところへ訪れたお爺さん。しかし結果は惨憺たるもの。ある子どもからは「(こぶは) 何でくつついたの～?」という不思議そうな声があがった。

○6月7日 「大根が白いわけ」

これは「人参はなぜ赤い」という題名でもお馴染みのお話。ごぼうと人参と大根が登場する。それぞれの性格でお風呂の入りが異なり、泥だらけのごぼうは水鉄砲をして遊んでおしまい。人参は熱めのお湯にじっくりと浸かって長風呂し、最後はのぼせてしまう。それとは対照的に石鹸でごしごし

とよく体を洗い、ぬるいお湯にゆっくりと浸かって真っ白になった大根。子どもたちはそんな野菜たちを思い浮かべたのか、にやにやしながら聞いていた。

○6月8日 「狼と少年」

このお話は、のどかな牧場でのとんでもない出来事を通して、嘘をつくことで大きな代償を被ることを伝えている。お話の中の少年が、何度も大人をあざ笑うように嘘をつくが、子どもたちからはその度「また嘘を言った〜!」という声が聞かれた。狼が羊たちを傷つけ少年が怯えて泣いている下りでは、子どもたちもドキドキした表情で静まり返っていたのが印象的であった。「嘘をつくのはだめだね。」と後から話している声もあった。

○6月12日 「よくばりな犬」(イソップ物語)

このお話はほとんどの子どもたちが初めて聞くようであった。おなかを空かせた犬が肉を拾うところから話が始まる。川に架かった橋の上で下を覗き込むと知らない犬が自分と同じような肉をくわえてこちらをみていた。あっちの肉の方が美味しそうだと思い、思わず「ワン」と吠えたら自分のくわえていた肉を川に落としてしまった。欲を出すところくなことにならないというお話。子どもたちには少し難しかったか。

○6月14日 「金の斧 銀の斧」(イソップ物語)

題名を伝えると「知ってる。」という子は何名か。池の中から女神様がぶくぶくと現われ、斧を池に落として途方に暮れている木こりに声をかけてくる。女神様の問いに正直に答えるのと欲深く答えるのでは、結末が全然変わってくるというお話。子どもたちの日常の行いの振り返りのきっかけとなることを少し願いながら。

○6月15日 「ウサギとカメ」(イソップ物語)

自分の力を過信して油断すると、思いもよらない結果になるというお話。子どもにもよく知られているお話だ。「負けるが勝ちだよ。」という子どもの声もお話の後に聞かれた。

○6月19日 「フクロウの染物屋さん」

森で一番のお洒落な鳥になりたいカラスが、フクロウに「誰も染めていない色を使って森の中で一番素敵に自分を染めて欲しい」とオーダーする。ところがそんな色といったら「全身黒で染める」ことしかフクロウは思いつかなかった。そしてできあがりを見たカラスはものすごく怒った。自分を真っ黒にしたフクロウを許さず、そのあとずっとフクロウを追い掛け回すようになったという由縁のお話。

○6月21日 「ネズミの相談」(イソップ物語)

このお話も子どもたちには初めてだったようだ。最近猫にやられっぱなしのネズミたち。どうにかできないものかと相談する。猫が来たらわかるように猫の首に鈴をつけるとよいとなったものの、「誰が鈴をつける?」となり、お話はおしまい。子どもたちに「この話面白かった?」と尋ねてみたが、実際のところはどうかだったか。でもお話の理解というよりも最後までお話を何となくでも聞くという習慣も大切である。いつもわかりやすい話ばかりではなく、こうしたレベルのものも子どもたちに紹介していきたい。

○6月28日 「舌きり雀」

これは日本昔話でも代表作といえるお話。最後に大きなつづらからお化けが沢山出てきて欲張り婆さんを襲う場面を子どもたちはどのように自分の映像として思い浮かべたのだろうか。

○7月1日・4日 「サルカニ合戦①・②」

これは2回に分けてお話をした。初回は登場人物のカニに想いを寄せ、カニの鉗の真似をしながら聞く子どもたちの姿がちらほら見られた。2回目は「誰がお話に出てきていたかな。」という問いかけに対して、「はち・くり・牛の糞・臼」とよく覚えていた。意地悪な猿の顛末に子どもたちは何を感じたのだろうか。

○7月6日 「おむすびころりん」

このお話も正直爺さんと欲張り爺さんという対照的な顛末を迎えるもので

ある。おむすびの転がるコミカルな様子、ネズミの餅つきの様子などリズムカルに楽しく子どもたちにお話しできた。最後によくばり爺さんが地上の家に戻れたかどうか……。心配している子どももいれば、「仕方ないよ。」という子どもたちもいた。

○7月9日 「ハーメルンの笛吹」(ドイツの昔話)

「魔法使いが子どもを連れて行っちゃったの」大人が約束を破った代償云々というより、子どもたちが連れていかれてしまったということの方が衝撃的だったようだ。ある子どもは「子どもたちを連れて行ったから、あの人は逮捕されちゃうよね」と、自分の考えを述べていた。

○7月10日 「花咲か爺さん」

「ここ掘れワンワン」正直爺さんとシロとの心温まる関係と対照的にシロに強要する意地悪爺さんの仕打ち。子どもたちの心拍がどんどんあがっていくのがその姿からじわじわと伝わってきた一話。最後に殿様の家来にお縄になる意地悪いいさん。子どもたちから安堵の溜息が漏れた。

○10月15日 「裸の王様」

2学期がスタートし、運動会という大きな行事の後、やっと時間を見つけてできたお話が「裸の王様」。素話が久しぶりだったことと、またこのお話の面白おかしさということもあってか、子どもたちはよくお話を聴こうといわんばかりに最初から最後までじっと耳を傾けていた。

○10月29日 「浦島太郎」

前回の素話だけでなく、今回もちゃんとお話に聞き入っていた子どもたち。「どうしてお爺さんになっちゃったのかな……。」「悪いことしたの?」という不思議そうな子どもたちの声が私の想像以上に聞かれたのが印象的であった。

○1月9日 「ジャックと豆の木」

3学期初めての素話も長い物語。それでも、大事な牛を豆の種と取り替える場面での「だめだよ。」と心配する子どもたちのささやき。大男がジャッ

クを追いかけてくるときに耳を抑えて顔を下げってしまう子どもたち。ドキドキしながら最後までジャックの冒険に聞き入る姿があった。

○1月30日「てぶくろ」

お爺さんが落としていった手袋に、ネズミ・カエル・ウサギ・キツネ・オオカミ・イノシシ・クマが、ぎゅうぎゅうになりながらも仲良く潜り込むお話。子どもたちはこんな夢のようなお話が大好き。

○2月1日「ブレーメンの音楽隊」

「ブレーメンの音楽隊、知ってるよ。」と、最初にタイトルコールをする
とすぐに反応を示した子どもたちがいたお話。途中で口を挟むこともなく、
お話が終わるまでみんなじっと耳を傾けてくれていた。終わりを告げると、
「え～、早いよ。」と、もっとお話して欲しいという子どもたちの声があった。

5. 考察 ～ビデオを通しての検証

今回、クラスでの素話をビデオ撮影し、後日検証する際の参考としてみた。
実際に子どもたちを目の前にして彼らの様子を私なりに感じたことをその都度
記録にとっていた。それでも改めてビデオで子どもたちの様子をみてみると、
その場では捉え切れていなかった様々な子どもたちの姿が写し出されていたこ
とがわかる。(全部で4回の実践をビデオに記録。)

「あー、この子はこんなことをしていたのか。」また、子どもたちの様子だけ
でなく、自分自身の話をしている姿を見て素話における課題や反省もいくつも
出てきた。

例えば、この回では椅子を出し子どもたちが着座しての素話の実施。床にお
山座りで聞く素話では、話に集中できない子どもたちが、ふらふらしたり、寝
転がって隣の子どもにちょっかいを出すことがあり、落ち着かない雰囲気にな
ることが多々みられた。そう考えると、この3歳児の実態としては、椅子を出
して着座しての素話の方が有効だと1学期は思った。しかしながら、夏休みを
経て、2学期になると先ほどの見解は見事に変わる。子どもたちがいつの間に

か成長をみせ、床でのお山座りでもしっかりと傾聴することができてきたからだ。そうした環境設定については、今後も臨機応変に子どもたちの様子を加味しながらより良い設定を心掛けたい。

また子どもたちの「素話」に対する関心・態度をみると、1学期は、お集り自体もなかなか歩調が合わず、ぐでぐでと寝転がってしまったり、隣の友だちにちょっかいを出してそれを受けておふざけが始まったりなど、なかなかお集り自体が落ち着かなかった。それでも、絵本や紙芝居が好きな子どもたちは、その教材に惹かれて集中してくれたりもする。しかしながら、素話は、子どもたちに示す教材そのものが無いので、「これから素話をします。」と子どもたちに説明しても、なかなか「何のこと？」と響かないことが初めのうちは見られた。でも素話の回を重ねるごとに、「素話」とはどういう時間なのかということを少しずつ子どもたちもわかってきてくれた。

今回の実践「素話」において初めからよくお話を聞くことができた子どもは18名（男児5名・女児13名）。IQの分布をみると、IQ 130以上が18名中15名であった。

また1学期末の個人面接調査用紙の記述からわかったこともまとめてみた。
質問：「お子さんは本を読みますか・読み聞かせは好きですか・選ぶときの配慮」
どのご家庭も日々の生活の中で、お子さんへの読み聞かせ等はされていた。けれども「子どもが本の読み聞かせや本を読むことを好まない（子どもが本を自分から手に取らない）」と回答されたご家庭もあった。具体的に本を選ぶときの配慮として、「絵が充実しているもの。のりもの・動物」との記載も見られた。

反対に「寝る前に必ず子どもが自分で読み聞かせの絵本を持ってくる（3名）」「書店で子どもが自分で絵本を選ぶ（2名）」「図書館で本を借りるときに、子ども自身に自分で選ばせている（3名）」。その他「子どもと一緒に朗読している」「読み聞かせ用と本人が自分で読めるように分けている」「文章が長めのもの」「ストーリー性のあるもの」・「少し上の年齢のレベルのもの」など、すべてがこのアンケートに表れてきているとは思わないが、ご家庭での配慮や

工夫が垣間見られると感じた。

そう思うと、普段からご家庭でも読書を習慣化し、自然と本に親しめるような環境を整えている家庭が多いといえるだろう。普段保護者の方々もお忙しい中、しっかりと子どもとのこうした時間を大切にしているのだと頭が下がる思いがした。

また素話の中で反応が良かったり、お話の後の振り返りの中で発言のあった子どもたち。例えば、Aちゃんは、日頃からとても元気でお集りでもよく発言する。Bくんは、よく落ち着いてお話を聞いている。歌の歌詞の覚えもよく、幼稚園で教授されることへの興味関心が旺盛である。Cちゃんは、自由あそびにおいてもイメージして言葉にすることができ、お話を聴くことも自分で読むことも大好き。Dくんは、いろいろな場面で反応がよく瞬発力があり、素話においても自分の考えや感想を述べてくれる。Eくんは、普段あまり目立たないが、いつも丁寧に物事に対応し、面白かった時は笑い転げるように笑ったり、怖いと思った時は耳を塞ぐなど、自分に正直に反応している。

1学期末の子どもたちに様子については、やはり大きな集団での読み聞かせも含めて、そうした場面の経験の有無が大きかったように思う。就園前から幼児塾や子育てサークルで母親とは異なる大人に絵本や紙芝居を読んでもらった経験があるかないかで、子どもたちの意識や場に対する姿勢・向き合い方が随分違ってくる。しかしながら、家庭でじっくりと読み聞かせを習慣として身につけている子どもは、例え大きな集団での経験がなくてもお話を聴く（読んでもらう）ということに自然に入ってくることができる。そして具体的に以下のような長所をみてとることができる。

- * 話を聞く姿勢ができています
- * 活動に対しての集中力がある
- * 普段の様子をみても感受性が強い

こうしてみると、子どもと本の関係というのはとても興味深い。

★話し手の問題

話し手については、小さい子どもたちは言葉を飲み込むのに時間がかかるので、ゆっくり話すことや間の取り方も大事である。それらが日々の実践活動の中で指導者ができていたかどうか……。実際、子どもたちと目は合わせているものの、自分がお話に夢中になってしまい、ちゃんと子どもたちの状況の変化に対応することができていたかという、ビデオをみて省察する限りまだまだという反省が残る。私自身が素話することそのものに慣れていないことを考えれば、当然といえば当然だが、実際は自分の中にそのお話そのものを落とし切れていないのではないかということにも気づかされた。「やるからにはやはり失敗したくない、うまくやりたい……」という気負いもいけないと、身に染みてわかった。実際のところ、そうした気負いが子どもたちに伝わってしまうと、押しつけがましい素話になってしまうからだ。

5. おわりに

今回の「素話」の試みにおいて、子どもたちを前にして「素話」を終えるたびに「ほっ」としている自分がいた。素話について色々と下調べをしているうちに、正直なところ「お話選び」・「練習」・「お話を自分のものにする」…など不安すら覚えたというのが正直なところである。

まずは、お話選びでの迷い。とにかく自分が好きなお話が素話においては大事なポイントとはいえ、自分が知っていると思っていたお話も「あれっ？ どうだったっけ。」と、いざとなるとお話のおさらいからのスタートだった。いかに自分が絵本頼みでいたかと思ひ知らされた。また同じお話でも色々な結末があるので、自分は一体どのバージョンで子どもたちに伝えたいのかということについても真剣に考えた。また自分が子どもたちに伝えたい話だからということだけでなく、聞き手に適切なお話であるかどうかとも考えないといけない。

いずれにせよ、少し大袈裟かもしれないが、自分がそのお話を本当に好きで、子どもたちに是非伝えたいという強い思いがないと素話は語れないという

ことが実践してみてわかった。また無理に素話の時間を設けて語っても、話し手のあいまいな気持ちというのが素話を通じて子どもたちに何となく伝わってしまう。あまり気負わずに読み聞かせ同様、普段通り「楽しいお話をするからね」というスタンスで、ゆっくりと表情も無理に作らず自分らしい表情で、素の声で語るのがよいのだろう。そして長いお話は要約してわかりやすくしても良いし、時間によっては分割してお話もできるので、いくらかでも工夫をしていく必要があると感じた。

素話には話し手の個性がでる。子どもたちに負けずに、どんどん大人も個性を出してよいと思う。また素話の魅力はやらないとわからないものだと思う。聞き手の表情やうなずき、体を前にかがめたり、後ろに沿ったりなどの聞き手の反応から、話の内容を理解しているかどうかともわかるし、聞き手の反応次第で楽しくなることは間違いないと思う。

はじめは子どもたちの集中力や聞く力を高めたいなどとも思ったが、いつの間にかそういうこともどこかへいつてしまった。そういう意味でも「素話」はコミュニケーションそのものなのかもしれない。

実践を通して、英才児といわれる知能指数の高い子どもたちの反応は、普段の絵本や紙芝居の読み聞かせとは異なる表情を返してくるのを見て取れた点でとても興味深かったといえる。物語の進展に合わせて子どもたちの表情がくると変わり、お話の想像の世界に入っていることが子どもたちの目や表情をみているとよくわかる。また反対にお話しに入れない子どもたちも実際にいることも感じられ、そんな時は自分の力不足を感じたりもした。しかしながらお話に力があることを信じて、引き続き子どもたちに聞くことの楽しさを知って欲しいと思った。また、いろいろなお話をたくさん聞くことで、聞く力を高めたり、想像力が豊かになり、本が大好きな子どもになってほしいと思う。今後も絵本や紙芝居の読み聞かせと上手く両立させながら、子どもたちの刺激となることを信じて、心を籠めて語りたい。

参考文献

「子どもたちをお話しの世界へ ～ストーリーテリングのすすめ」

アイリーン・コルウェル著 こぐま社

「ストーリーテリング入門 ～お話を学ぶ・語る・伝える」

マーガレット・リード・マクドナルド著 一声社

「ストーリーテリング その心と技」

エリン・グリーン著 こぐま社

「新・年齢別クラス運営 3歳児のクラス運営」

神長美津子・安澤智子・高村慶子・小山孝子 編著 ひかりのくに発行

「就学前教育カリキュラム 改訂版」 東京都教育委員会

「保育実践から学ぶ 環境作りと援助の方法」 柴崎正行 編著 ひかりのくに発行



考える力を育てる

～拡散思考力を育て高めるには～

知能訓練科 松尾 由香

1. はじめに

4年生の初めの授業で「知能訓練は4年生までです。」という、ほとんど児童は驚く。授業としては最後の1年になる。5～6年生では「活用時期」と呼び、教科や特別研究、委員会、クラブ活動、日常生活等でこれまでのトレーニングしたことを活かしていく。なので、4年生の知能訓練を担当するときには「考えることは楽しい」ことを残りの1年間の授業の中で一つでも多くの因子で実感してほしいという思いをもって実践している。

小学校での知能訓練が4年生までなのは、知能を伸ばすには2歳くらいから10歳くらいまでが良いとされているからである。清水驍先生によると、2歳くらいまでは「まねる」という配線がなされ、他の配線がすすみ2、3歳になると「まねる」から考えることが芽生えてくる。4歳ごろになると模倣を中心とする配線からさらに「自分で行動し、自分で考え、自分を主張し、自分で作り上げる」という配線ができる。なんにでも興味を持つようになり「やる気をおこす」時期になるそうだ（※文献1）。そして、神経細胞と神経細胞を連絡する配線がよく絡み、様々な回路のできるピークが10～12、3歳と言われているからである。

少し横道に逸れる。先日、大学時代のゼミ仲間と20数年ぶりにあった。大学卒業後から近況までを報告し合い、色々と盛り上がった。その中で、とある外資系の企業に勤めている彼女が「これからはどこの大学を出たかよりも、『大学で何をしてきたのか』が大事なのよね。」と言っていた。衝撃的な言葉だった。が、落ち着いて考えてみるとなるほどとも思えた。学校という職場に

いると、その他の社会の流れに疎くなっているのではないかと思うことがある。企業に勤めている彼女の言葉から、企業ではこんな視点で雇用しているのか、と気づかされた。日本のみならず、世界で活躍していく時に、学生時代に何に打ち込んだのか、どんな専門性を持っているかが評価の一つとされていくこともあるのだなと思った。専門性を基に企業の中でその人の力を活かせるのか。社会で活躍できるのか。研究にしても、何かの活動に参加するにしても、目標を達成するために専門性を深めるためにどのように考え、専門性を深め、高めてきたのか。

与えられた環境で、自分のやりたいことを成し遂げるためにどのように過ごしてきたのか。Inputしたたくさんの知識をどのようにoutputして活用していくのか。など。その時思ったことはやはり、「発想力」「想像力」「創造力」はこれからは特に大事なのだなということだった。「考える力」が大事だと思った。

話を元に戻す。知能訓練の授業では「発想力」「想像力」「創造力」を育てるために色々な角度からアプローチしている。どの因子もかわりがあるが、その中でもより強くアプローチしている（関連が強い）因子は「拡散思考」と言える。

ギルフォード博士の知能因子構造図によると、知能は大きく「領域」「所産」「はたらき」の3つの面があるとされている。具体的な知能因子としては、この3つの面の組み合わせ、 $4 \times 6 \times 5$ で120の知能因子が構成されている。知能訓練科では、120通りの知能因子の中から90因子の中の1因子ずつについて特化してトレーニングをしている。その中でも、拡散思考の因子は創造的知能の育成の中でも非常に近い因子だと考えている。「考える器を広げる」「考える力を養う」のに、非常に有効である。

実際に実行に移すには集中思想的に論理的に考え、最適な判断力も必要だろう。だが、そのためにはアイディアが浮かんでこない、積極的に能動的に考えようとしないと始まらない。

知能訓練科では目標を、意欲・集中力を養うことにしている。「考えることは楽しい」と思えば、また自らあれこれ考えできた時、乗り越えられた時、自信にもつながる。

拡散思考の因子は「はたらき」の因子の中の1つである。「はたらき」の因子には5つの因子がある。「認知」「記憶」「拡散思考」「集中思考」「評価」。

「拡散思考」と「集中思考」とで比べると、推理力や論理的思考力を要する集中思考の課題を好んで取り組む児童は多い。パズルや答えが1つになる思考を多く要するものだからだと思う。一方、拡散思考で分かりやすい遊びと言うとしりとり遊びがある。拡散思考ではすらすらと思いつけず、苦手意識をもつ児童も少なくない。実際、一昨年度の4年次最初の集中思考のクラス平均伸びは+8.6に対して、拡散思考のクラス平均伸びは-2.6だった。伸び悩みをどのようにしていくと高めていくことができるか。高めていくことができれば、意欲集中力にもつながるだろうし、自信にもつなげていくことになるはずだ。心掛けることは何か。

今回は、一昨年度担当した4年生の実践を振り返りながら拡散思考力を育て高めていく授業について考えていきたい。

2. 拡散思考とは

拡散思考についてまとめてみる。

拡散思考は英語では Thinking of Divergent Production という。

Divergent は直訳すると「発散する」「拡散的な」「一点から分かれ出る」など。Production は「生産」「作り出すこと」。Thinking は「思考」なので、拡散的な生産の思考、となる。

ちなみに集中思考は Thinking of coNvergent Production という。

Convergent は直訳すると「収束な」「集中的な」「一点に向かう」という意味がある。集中的（収束的）な生産の思考、となる。

そして、どちらも「Production」がついているのでただ単に「拡散的な」

「集中的な」思考だけではなく、考えを「生産する＝生み出す、作り出す」ことが求められている。

だから、拡散思考でよく、「できるだけ1つだけでなく、2つ以上（数多く）思いつきましょう。」と発問するのはこのためである。

拡散思考ではさらに次のことも要求される。

1. 流暢性 fluently
2. 柔軟性 flexivility
3. 独自性 originality

辞書によれば、流暢性は次々に思いつく。

柔軟性はその場に応じた適切な判断ができること。

独自性は他と違い、それだけに特有の性質。

独自性はなかなか難しいとしても、流暢に、柔軟に思いついていけるとよい。もし、流暢性、柔軟性も難しくても、1つでも思いつこうとする気持ちが持続していれば、今日の課題は振るわなくても別の課題では流暢に考えが湧き出てくる時が出てくる。

できれば1つだけでなく2つ以上複数思いつけるとよい。自分のやりたいものややりたいことのために今、何をすべきか、何をしようかとあれこれ思いを巡らし、アイデアが湧いてくる。意欲的に、積極的に、能動的に自分で考え、自分から行動する。

3. 拡散思考の実践

知能訓練科では「はたらき」5因子と3つの領域（図形、記号、概念）と掛け合わせて年間で30因子が目標になっている。一昨年度は、拡散思考は3つの領域と掛け合わせて年間で6因子を実施した。その中から今回はDMC、DMT、DFSの課題を振り返り、実践の中からどんな考えがあったのか、児童の反応を見ていきたい。

実施日：DMC 平成29年7月8日

DMT 平成 30 年 1 月 25 日

DFS 平成 30 年 2 月 1 日

対象クラス：4 年 B クラス組（以下“4 年 B クラス”と表記。）

1.DMC (Divergent Production of semantics classes)

実施日：平成 29 年 7 月 8 日

Semantics は「意味論」、classes は「種類」「類」「階級」などの意味がある。

DMC（概念で分類を拡散思考する）では、2 つの課題を実施した。1 つ目は、『一つのもの本来の使い方とはまた異なる使い方を考える』問題、2 つ目『一度使ったものではあるが処分してしまう前に有効な利用法を考える』課題だ。どれも、どんな仲間属するかを考え、いろいろな角度から一つのものを見つめていく。気が付いたところから違う使い方や廃品の有効活用を考え出す。

(1)「異なる使い方」

【課題】 次のものは、どんな使い方ができるでしょうか。普通の使い方とは違う使い方をいろいろと考えてみましょう。

この課題では、まず、実物を示して見せ、本来はどのように活用するものなのかを全員で確認をした。そうすることで、イメージの出発点の確認ができた。

質問で「イラストではダメなのか。」との問いには、イラストだけではだめとし、イラストは描いてもよいが、必ず説明文は添えることと、約束を追加した。

①「新聞」 ➡ 読むもの、文字で書かれたもの、最近できた出来事（ニュース）を知ることができるもの

以下、児童の解答。

- 切って犬のトイレにする
- 折り紙にする
- 水がこぼれたら新聞紙で拭く
- 何かを書くときに下に引く（下敷き）
- 丸めてボール
- 折って兜・細くしてハチマキ
- 水にぬらして粘土
- 髪を切ってティッシュ
- 小さく折って消しゴムカバー
- 新聞を丸めてゴキブリをつぶす
- 首にかけてマント
- 丸めてボール
- お腹に巻いて断熱材にする
- 洗面器に敷いて嘔吐物受けにする
- 気になることをノートに貼って言葉辞典
- 食器を包む
- 鳥のかごの中に変なところにつけないようにする
- 野球
- ホワイトボード消し
- 焼き芋を作ってくるむ
- トイレトペーパーにする
- 丸めてチャンバラをする
- 昆虫をつかまえる
- 工作するとき（輪投げを作ったり）
- レジャーシート
- 公園で座る時にそのまま床に座ると汚くなるから下に敷いて座る
- ひつじにあげる
- 布団代わりにする（新聞紙は保温効果がある）
- コート代わりに（大きく広げてかぶる）
- キャンプファイヤーとかも薪がなかった時
- 赤ちゃん包むやつ

授業前の打ち合わせ時の指導者間の予想では、あまり発想が出ないのではな
いか、と考えていた。が、実際は、思った以上に思いつくことができた。

ただ、個々の解答を見返してみたところ、うっかりどこまでが自力で考えた
もののなのかが見えない状態になってしまっていることに気づいた。発表時間を

設けて何人かに挙手して発表してもらい、皆で「考え」を共有したので、おそらくその時に書き加えられたらしい。なので、今回、拡散思考の数値が上がった児童と授業中の発想の量との比較を見ていこうとも考えていたのだが、いまひとつははっきりとした関係性は得られなかった。では、あらためて、どんなところに着目したのかももう一度見てみようと思う。

多かったのは、

- ・「何かを書くときに下に引く」「レジャーシート代わり」
- ・「布団代わり・腹巻・お包み」
- ・「折り紙にする」
- ・丸め方は少し違うが「ボール」「チャンバラの棒」「ゴキブリを叩く棒」
- ・工作の材料に使う「輪投げ」「紙粘土」
- ・水をこぼした時の吸収紙、また、ベットの糞や尿の受け紙として

「読むもの」「新聞」という以外にどんな特徴があるかと考えただろう。大きく3つの着眼点が上がってきたとみられる。ポイントは

- ①「紙」(素材)
- ②「四角い」(形状)
- ③「柔らかい」「薄い」(質感)

こちらが思っていたよりも流暢に思いつけた。複数の視点を組み合わせていくと使用している様子が浮かんでくると更に「柔らかいのに丈夫」「重ねて使うことができる」「変形が自在」「保温性もある」「クッション性もある」「丈夫なのにちぎりやすい」等、特徴を多角的に捉えていくことができた。

特にAは「新聞紙は保温効果がある」と理由も書き加えていた。

全体で、思いつけた数は平均6.2個となった。一番多く思いつけた人で12個(B)、少ない人は2個(C)だった。Cは1つの解答に対して説明に長かったりイラストを入れたりしていたので、時間が足りなくなったのが多くを書けなかった理由かもしれない。あるいは、多少苦勞している表情も見られたので、絞り出してやっと1つ書き込めたのかもしれない。

全体的に、時間内は静かで、頭を抱えている子もいたが、鉛筆の走らせる音がよく聞こえていたのを覚えている。

Bはこの後もコンスタントに5～7個は思いつけた。一方のCもこの後の課題でも各問1～2個とこの日は全体を通して量的に少な目な解答だった。

ちょっとここで思いつけた数と知能テスト拡散思考の数値の伸びとの比較を試みる。知能テストでの拡散思考の数値については、Bは前年度（3年次）に比べて+36伸びがあった。一方で、Cはとみてみると同じく前年度に比べて実は+20とかなりの伸びがみられた。

Cにとっては授業では少しの発想にとどまったが、必ずしも少ししか思いつけなかったから数値も伸びないと捉えるべきではないと考えている。実際、Cはイラストを付け足していたので、1つを示すのに時間を要した。説明だけでは伝わるかどうか不安だったのだろう。DMCでは結果的には少ししか思いつけなかったことになるが、知能テストでは他の領域、図形や記号では振るっていたとも考えられる。また、授業時には質問を受けたり助言をしてあげることもできるので、そういうことも数値には反映されにくいのかもしれない。肝心なのは、一つの因子で振るわなかったとしても、その時間を自分なりに頑張って考え続けようとしたかどうかなのかもしれない。

(2)「有効活用」～廃品の利用法～

【課題】これから見せるものを、工夫して何とか利用したいと思います。どんなことに使えるでしょうか。面白いアイデアをいろいろと出してみましょう。

この課題でも実物を見せてから実施した。本来の使い方としてはもう使用できないが、他の使い方でも有効活用できないかを考えていった。

今回、個々に選んで考える問題として「古くなったカレンダー」「壊れた傘」「針金ハンガー」「古くなった風呂敷」「数がそろっていないトランプ」の5つを用意した。児童の反応は以下の通り。

「古くなったカレンダー」	11 人
「壊れた傘」	10 人
「古くなった風呂敷」	11 人
「数がそろっていないトランプ」	3 人
「針金ハンガー」	0 人

1 つ以上選ぶようにしたので、中には複数の問題に挑戦した児童もいた。

選ばれた数でいくと、「カレンダー」や「傘」「風呂敷」はほぼ同じくらいになった。

○「古くなったカレンダー」11 人

- ・曜日や月をかえてまたカレンダーとして使う。
- ・月や日を切り取って裏に磁石をはってホワイトボードに月 / 日ではってまた使う。
- ・裏紙
- ・好きな絵を部屋に飾る
- ・13 の数までも切り取ってトランプにする
- ・にちれき算で使う
- ・コピーようにする
- ・うちわにする
- ・ばらばらに切ってメモ用紙
- ・数字をとって双六を作る
- ・紙を使ってマットにする
- ・盾を作る
- ・折って軍艦の飛行機を作る
- ・紙を 12 枚とって船を作る
- ・後ろに絵を描く
- ・折り紙にして何か折る
- ・数字だけ切り取って紙に貼りつけて新しいカレンダーを作る
- ・裏紙にする
- ・厚くしてレガース（脛あて）に
- ・メモ帳 / 旗の紙 / 障子の代わり / はしに使う / 丸めてハエを叩く / 野球のバット / 下じきにつかう
- ・カレンダーには絵がついてるやつなどがあるから、絵の所だけを切って額縁をつけて家にかざる

その日が過ぎてしまえば、古いもの、用途としては終わりになってしまふ。

ただ、もの自体はまだ使えるところもある。

21 個のアイデアがあった。

裏紙やカットしてメモ用紙等、裏面を活用する意見。

大きい紙を活かして折り紙にする。

数字や曜日に着目してみる意見もあった。数字や曜日を切り取ってマグネットを付けて使ってみたり、双六に使ってみたり。カレンダーを切ったり貼ったりはしないが、数字をそのままに、月や曜日を書き換えてカレンダーとして使う。

カレンダーには素敵な絵や写真が付いていることも多いのでそれだけを活かして飾る意見もあった。

○「壊れた傘」10 人

- ひれを切ってうちわにする
- チャンバラ
- プーメラン
- ひみつきちにつかう
- せんす
- きかいにつかう
- ここの部分（骨？）は椅子の足にする
- ここの部分（布？）は子供用のレインコート
- ここの部分（柄？）は家で停電した時にあげる
- 傘を頭にかぶれるぐらいにして、かぶる
- 傘の J（柄）の部分をつりにつかう
- 傘の穴をふさぎ水槽にする
- テントにする
- でかいコマにする
- 布やスチルを切って風呂敷にする
- 傘の中に物を入れる
- 復元する
- 日傘にする

- 枝の部分だけ残して新しい布でくつつける
- ランドセルをぬれないようにする
- 骨をハンガーにする
- 日よけの屋根
- 傘のビニールの所だけを切ってレインコートやリボンや帽子を作る
- 旗
- やり
- 毘（ザリガニ）

26 個のアイデアが集まった。

部位によって素材が違うので、大きく 3 つの素材別に着目して利用法を考えていた。分解して使用する発想が主だった。

「傘布」の部分では「うちわ」「せんす」普通の布として活用する。撥水加工してあることを利用して「レインコート」「ランドセルのカバー」「テント」等も思いつけた。ある程度の大きさがあるので「風呂敷」、デザインによっては「旗」にもできる。

「骨組み」では真ん中棒を使って「チャンバラ」「やり」「椅子の足」。親骨をつかって「骨ハンガー」「ブーメラン」等。

「柄」の部分は「釣りにつかう」「停電の時にあげる」は停電時にブレーカーを起こすのに使うということか。

3 つの部位の中で 1 つをじっくり考えている人が多かったが、D、E、F、G の 4 名は「骨組み」の使い方と「傘布」の使い方とそれぞれについて並行して考えることができた。

○「古くなった風呂敷」11人

- お弁当の包み
- 折って帽子
- 出かけるとき服を入れて持つてく
- 半分折ってもう一回折るお弁当袋
- もう一回使う
- ランチョンマット
- タオル
- 羽織物
- 雑巾
- お弁当を包むもの
- 切ってリボンにする
- 料理をするとき髪の毛が入らないように髪の毛に巻き付ける
- がらのところを切り取ってコースターにする
- カーテンにする
- 切ってハンカチにする
- スカート（短い）にする（ぬって）
- カーテン代わりにする
- テーブルクロス代わり
- カーペット代わり
- 小さく切っていっぱいハンカチを作る
- レジャーシート
- 雑巾
- タオル
- あかちゃんまくやつ
- 小屋のカーテン
- 服
- 三角巾
- あかちゃん用布団
- マット
- レジャーシート
- タオル
- マット
- ぞうきん
- 赤ちゃんまくやつ
- 服
- 三角巾
- カーテン
- 赤ちゃん用布団
- ぞうきん

アイデアとしては一番多い、39個のアイデアが集まった。

100cm×100cmの大きな風呂敷を示したのでそこからの発想になる。

布でできているという特徴に着目して、アイデアが出てきた。

最も多かったのは「タオル」や「ぞうきん」にして使うことで5人。カーテンにする人が3人、お弁当の包みにする人が2人。床に広げて「カーペット」や「レジャーシート」と敷物として使用する人。「テーブルクロス」や「コースター」と机の上に広げて使用する人。スカートにするという人もいたが、なかなか形を思い切って切ったり縫ったりするアイデアは少なかった。流暢には思いつけたが、柔軟性というところではバリエーションはもう一つだった。縫うということを日常自分ではしないので、というところか。

○「トランプ」3人

- マークだけって教室に貼る
- 山をつくる
- やまをやる（トランプタワーのことか?）

発想としてはやや振るわず。枚数はそろっていなくても、素材としてはプラスチックでできていたり、張りのある紙で作られていることがあるので、多少かけていても遊びとしては使えるね、というところか。トランプに取り組んだ人は前の3つの利用法を考えた後の2つ目のお題として取り組んだ人たちだった。なので、少し発想は緩やかになったようだ。

「古くなった風呂敷」「古くなったカレンダー」では同一の意見がいくつか見られた。「壊れた傘」では素材が3つに分けられ、活かし方も個々に少しずつ異なる。使い方が広がりやすいかもしれない。

一方で、「針金ハンガー」の利用者は今回は一人もいなかった。針金でできているので形を変えやすいのでいろいろなアイデアが出るかと期待したが、期待外れとなってしまった。活用する場所や場面が浮かびにくかったのかもしれない。

また、この課題は、自由研究にもつながる課題だと思う。ある物の不便さを感じ、どのように解決していくと良いかを考える時、多角的な視点で物を見たり、素材をどのように活用するか等、分析して方針を考えていくときに大いに活躍する因子の一つだと思う。

全体を通しては、ユニークな発想は全体的にはもう一つだったように思う。ただし、流暢には思いつくことができたと思う。また、柔軟性という点でもまずまず思いつけたと思う。

2.DMT (Divergent Production of semantics transformations)

Transformations は「変化」「変質」「転換」などの意味がある。「もとのものが変化したかたち」をいう。(※文献2)

DMT(概念で転換を拡散思考する)では、「意味上のしりとり」を実施した。この因子では発想を転換させながら考えていくことがねらいとなる。

意味上のしりとりは直線型と循環型の2通りの枠があったが、4年Bクラスでは循環型の枠(図1:次ページ①「穴」参照)1つに絞り込んだ。

また、この課題では「誰も考えつかないような発想、違った視点から捉えられること＝発想の転換」や「ありきたりではなく、意外な答え＝独創性」も求めていくのだが、4年Bクラスでは「誰も考え付かないような発想」や「意外な答え」を最初から求めるとそれだけで萎縮することも考えられたのであえて強調はしなかった。しかし、循環型は、ありきたりな発想だけではスタート地点に戻れないし、途中で視点を切り替えたり多角的な視点で言葉と向き合ったりしていかないと、スタート地点には戻れない。口頭で示すよりも視覚的に示すことで十分メッセージは伝えられていると思った。1問だけでは思うように言葉が閃かずなかなか成功しないかもしれないが、2問あればどちらかは完成するのではないかと考えた。

実際は、29人中①「穴」17人、②「世界」22人が完成、成立した。

児童の作品もいくつか載せてみたので参考にしてほしい。

①「穴」

「穴」から元に戻るまでに空欄□は17個ある。

スタートの次の言葉に着目してみた。

・暗い 5人 ・おちる 5人 ・落とし穴 3人 ・モグラ 2人 ・マンホール 2人 ・あり、しかけ、長い、まるい、のぞく、鼻、深い } 1人 - そこなし穴、どうくつ、冒険、おにぎり、地下	(図1:「穴」循環型の台紙→)
--	------------------------

「暗い」で始まって戻ってこれたのは3名。(H、I、J)

その3名の17番目の言葉はH「ちゃいろ」、I「マンホール」、J「ふかい」。

Hの解答

『穴』⇒暗い⇒夜⇒星⇒ひかる⇒でんき⇒きえる⇒おばけ⇒こわい⇒
かいぶつ⇒ライオン⇒動物⇒スカンク⇒くさい⇒トイレ⇒きたない
⇒土⇒ちゃいろ⇒『穴』

Iの解答

『穴』⇒くらい⇒夜⇒星⇒光る⇒ホテル⇒虫⇒生き物⇒いろいろ⇒色⇒
くろい⇒かみのけ⇒さらさら⇒砂⇒海⇒シャチ⇒くろい⇒
マンホール⇒『穴』

Jの解答

『穴』⇒くらい⇒宇宙⇒こうせい⇒わくせい⇒小わくせい⇒ぎんが⇒
あかるい⇒ひる⇒あったかい⇒夏⇒あつい⇒目がくらむ⇒みえない
⇒くらい⇒おちる⇒おとしあな⇒ふかい⇒『穴』

出発は同じ言葉でもHさんは途中から「消える」「おばけ」「こわい」「かいぶつ」「ライオン」と「怖い」ものに転じ、更に「ライオン」へと「生き物」

に転じていけたことでスタートへ戻ることができた。

Iは「光る」「ホタル」「虫」「生き物」「いろいろ」「色」と「生き物」へと転じ、更に「色」へと転じていくことができ、「マンホール」へとつながった。

Jは2番目の言葉で「うちゅう」とし、しばらく惑星のことでつなげていたが、これでは最後までつながらないと気づいたのか、途中から「あかるい」「ひる」「あったかい」「夏」「あつい」「目がくらむ」と「明るさ」「温度」「目がくらむ」と転じたことで「深い」につなげられた。ただ、惜しいことに「くらい」を2度使ってしまったので、完全とは言えなかった。

17番目の言葉を見ると児童が「穴」をどのように捉えているのかが見えてくる。「色」で見ていたり、「明るさ」「どんな用途」「誰の」「何の」穴、なのか、ここでもまた、色々な視点で捉えていることがわかる。

ちなみに17番目がユニークだったのはKで「ちくわぶ」。

『穴』⇒長い⇒トンネル⇒暗い⇒よる⇒つき⇒光⇒たいよう⇒あさ⇒あさごはん⇒パン⇒ごはん⇒ハンバーグ⇒肉⇒ステーキ⇒牛肉⇒たべ物⇒ちくわぶ⇒『穴』

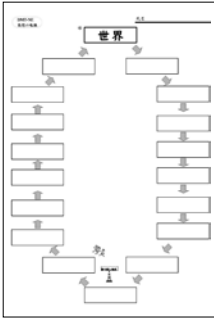
また、力のこもった作品になったのはL。

『穴』⇒おとし穴⇒いたずら⇒おこられる⇒こわい⇒先生⇒学校⇒勉強⇒つまらない⇒そうじ⇒きれ(きれい)⇒ほし⇒うちゅう⇒ひろい⇒たてもの⇒入れる⇒かいもの⇒ちか⇒『穴』

②「世界」

スタートの次の言葉に着目してみた。(循環型で実施)

・広い	9人	(図2:「世界」循環型の台紙➡)
・国	4人	
・地球	3人	
・人	2人	
・日本	2人	
・国々	2人	
・アメリカ	2人	
・人生、大きい、火星、宇宙	1人	



1 番目の言葉に「広い」を選んだ人が9人いた。そのうち成立した人は7人。

Mの解答

『世界』➡ 広い ➡ 地球 ➡ 宇宙 ➡ ブラックホール ➡ ホワイトホール ➡
いくうかん ➡ くうそう ➡ 化け物 ➡ ゾンビ ➡ 怖い ➡ 恐竜 ➡ 化石 ➡
古い ➡ 地球 ➡ 大きい ➡ ロシア ➡ 国 ➡ 『世界』

Nの解答

『世界』➡ 広い ➡ 動物園 ➡ ぞう ➡ 大きい ➡ 富士山 ➡ 青い ➡ うみ ➡ さかな ➡
さめ ➡ こわい ➡ ライオン ➡ 動物 ➡ ふさふさ ➡ うさぎ ➡ 小さい ➡ 日本
➡ 国 ➡ 『穴』

Oの解答

『世界』➡ 広い ➡ 空想の世界 ➡ 楽しい ➡ あそぶ ➡ ゲーム ➡ おもしろい ➡
おわらい ➡ 正月 ➡ おとし玉 ➡ お金 ➡ おさいせん箱 ➡ 神社 ➡ 和風 ➡
昔の日本 ➡ 江戸 ➡ 時代 ➡ 年 (世界中で新しい年を迎える) ➡ 『世界』

Pの解答

『世界』➡ 広い ➡ ディズニーランド ➡ ミッキー ➡ ミニー ➡ シェリーメイ ➡
ダッフィー ➡ ジェラトニー ➡ 画家 ➡ 絵 ➡ ひまわり ➡ 夏 ➡ およぐ ➡
ひらおよぎ ➡ うごく ➡ つかれる ➡ ねる ➡ 夢 ➡ 『世界』

Q の解答

『世界』⇒広い⇒海⇒魚⇒金魚⇒赤⇒りんご⇒皮をむく⇒みかん⇒こたつ⇒
あたたかい⇒春⇒ピンク⇒桜⇒公園⇒遊ぶ⇒ボール⇒まるい⇒『世界』

R の解答

『世界』⇒広い⇒ロシア⇒日本に近い⇒太平洋⇒うみ⇒きれい⇒お母さん
⇒おに⇒2月3日⇒おいしい豆⇒えだ豆⇒みどり⇒森⇒くらい⇒
ふんいき⇒あかるくする⇒元気な人がいる⇒『世界』

S の解答

『世界』⇒広い⇒東京ドーム⇒野球⇒バット⇒打つ⇒テニス⇒楽しい⇒
遊園地⇒メリーゴーランド⇒回る⇒バレエ⇒きれい⇒星⇒地球⇒
青い⇒海⇒人⇒『世界』

他の人と着眼点が違っていたのが T さんだった。

T の解答

『世界』⇒人生⇒生きる⇒社会⇒仕事⇒いろいろある⇒店⇒うっている⇒
もうける⇒お金⇒お金もち⇒ごうか⇒こうきゅう⇒たかい⇒
たかいビル⇒つくる⇒けんせつ⇒仕事⇒『世界』

M と N は 17 番目の言葉も「国」で一緒だった。ただ、中身の視点は別々で、M は「宇宙」へと進み、「異空間」「こわい」「古い」「大きい」ものへと転じていった。N は「動物園」をイメージし、「大きい」「青い」「小さい」ものへと転じていった。

O は空想の世界からあそぶことが楽しくなりお笑い、お正月へ転じ、時代をさかのぼってみたり、また現代へ戻ってみたりと楽しんでいる。

O は更にディズニーの世界で進んでいくが、画家に着目したことでディズニーから離れて別の空間へと移動することができたことでさらに視点が広がった。

Q は 5 番目と 12 番目に「色」に着目することで場面を転ずることができた。

Rはきれいなもので進んできたが、お母さんから「おに」をイメージしたことでがらりと様子を変えることができた。

Sはスポーツから遊園地、バレエと移動したことでエレガントなものへと視点が変わっていった。

Tは『世界』から「人生」へのつながりはまだよく理解しきれないが、人生を生きる、お金、仕事へと現実的な視点で転じていったのはユニークだと思った。

この課題では、前の「穴」に比べて、時間を越えて視点が切り替わっているものが増えているように見える。また、切り替わりに「こわい」とか「大きい」「古い」「青い」のように、そのものの状態や感覚がターニングポイントになっているようでもある。

この課題を始める時の児童の様子は、少し不安気でドキドキした様子だった。しかし、やっていくうちに、夢中になっている児童が増えてきていることが分かった。行き詰まっているときに、近くの子がお友達にアドバイスする姿もあった。だからと言って、全く同じ解答にはならなかった。

一回りして元に戻るという条件は、パズル気分で取り組めて、それが良かったのではないかと思った。やり応えはあるが、ひとマスずつ埋めていった分、成果が見えるのも、励みになっていたのだと思う。

転換力を活かせたかという点ではかなり活かせたのではないかと思った。

3.DFS (Divergent Production of figural systems)

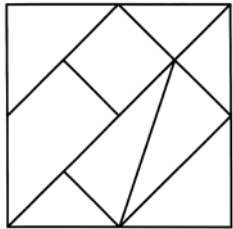
体系 (systems) とは「…3以上の単位が1もしくは2種類以上の結びつきをもった容態」をいう。(※文献3)

DFS(図形で体系を拡散思考する)では、与えられたピース(図形)を全て使って具体的な作品作りを実施した。ピースについては、正方形をいくつかの形に切ったものを用意した。セブンピースパズルをイメージすると早い。セブンピースパズルはピースを全部使って見本と同じものを完成する。DFSでは

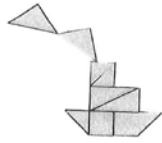
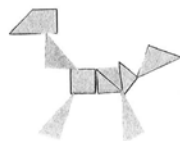
見本はなく、自分で作品を思いついていく。

課題は2つ。課題1.では具体的な物を作る。課題2.では文字を作る。

課題1.では3つのパターンがある。そのうちの1つを紹介する。

課題1. 次の形のピースを全て使って、具体的な物を作りましょう。完成したら何を作ったのかも書きましょう。	
---	---

正方形を9ピースに分割している。この中には長方形を2つにした直角三角
形と台形がある。これらの形をどのように使うかがポイントになった。

『船』 a 	『犬』 b 	『犬』 c 	『クマ』 d 
『馬』 e 	『男の人』 f 	『天秤』 g 	『ピーターパン』 h 
			『飛行機』 i 

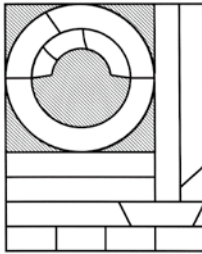
aとiは乗り物を作成。aの『船』は三角で船の煙を表現した。



b、c、d、eは動物。特にbとcは同じテーマだが顔が横向きのbに対し、cは正面と受け止められる。

平行四辺形やピースの特徴を活かし、タイトルがなくても、それとわかる作品に仕上げていけたと思う。

課題 2. については以下の通り。

2. 色画用紙を線の通りに切りましょう。切りはなした形のカードをできるだけたくさん使って文字を作りましょう。ただし、車線の部分は使わないものとします。出来るだけ不自然にならないように考えて、完成したらのりで貼りましょう。 ※貼り終わったら、残ったカードは全て捨てて、また、新しいカードを切って文字を作りましょう。	
---	---

この課題には 18 人の児童が挑戦した。

j 莉	a 三匹	k 団	b 犬
c 美しい	m もが	d ハンダ 並	n ザビュル
e 佐	o 子供	p さくら	q 九幸
r 石	f イ右あ	s 川石	g 田前
		h 島	t 岸

この課題では、先ず n が早く取り組み始めた。n はどうしても「ザ・ビ・エ・ル」を作りたいと宣言した。r は自分の名前を作り、楽しんでた。出来た作品を指導者が他の児童に紹介して見せたところ、驚きの声と好意的な空気になり、他の児童も自分の名前に挑戦したい空気が広まっていった。出来上がったところでたびたび指導者が紹介し、中にははにかみながらも皆から賞賛の声が上がると嬉しそうにしていたのを覚えている。この日は、皆が、互いの作品を認め合う空気感になったのを記憶している。



傾向としては、

①漢字（自分の名前を含む）

②「ザビエル」「パンダ」のようにお気に入りや興味関心のあるものの文字化の2つになったと思う。

①は j、k、c、d、e、p、q、r、f、s、g、h、t

殆どは漢字で挑戦した。r は名前のある漢字を形にしていた。f は兄弟の名前を作品にしていた。使用できるピースは 18 ピースなので、画数の多い児童は断念せざるを得なかったのだと思う。

②は a、b、c、m、d、n、o、p、f、g

c、o、f は 1 文字は①で考えているうちに閃いたのかなと思える。

d、n はカタカナで挑戦していた。直線が多いので表現しにくいのではと思っていたが、曲線を「ン」「レ」等のはねの部分にうまく生かしていた。

課題 1. にしても 2. にしても、時間内は何かを作っていた。何かに見立てようと、手を動かし続けることができた。

4. IQ、FQ との関連性 ～拡散思考の平均伸び率の変化～

先に、DMC の「物の利用法」等、授業中にたくさん思いつけたから必ず数値もぐんと伸びるかというところとは言い切れないことを話した。それはなぜ

か。授業はゆっくりじっくりと考えることができる。知能テストはある一定時間内に答えられないと数値には反映されにくい。

一方で、興味深いことに、4年Bクラスの全体での平均伸び率を見てみると以下の結果が出た。拡散思考と集中思考の伸びで比較していく。

4年次での知能テストの結果から（2017年7～9月ころ実施）では平均伸び率が拡散思考が+3.5、集中思考が+7.9と、圧倒的に集中思考の方が伸びが高かったが、5年次（2018年5～6月実施）からでは拡散思考が+4.5、集中思考が+3.4と拡散思考の伸びの方が上回った。拡散思考の伸びが小さかった人でも4年次では-21だったのが、5年次では-12で（前年度とは同一人物ではない）ほとんどが現状維持かそれ以上となった。

そして、先にも触れたが、4年Bクラスの実施要項を見返すと、年度初めは拡散思考が-2.6、集中思考が+8.6からのスタートだった。

	4年次初め	4年次知能テスト後	5年次知能テスト後
拡散思考の伸び	-2.6	+3.5	+4.5
集中思考の伸び	+8.6	+7.9	+3.4

この結果から見てくることは、何か。

- ・楽しく思考した。諦めないで粘り強く思考した。自信がついてきた。
- ・失敗することが怖くなくなってきた。
- ・工夫する楽しさを感じられるようになった。

まったく授業が生かされていないのではなく、小さな自信がじわじわとしみこんでいく。そして、その人にあった時期があって、ぴたっと合わさると、結果が伴ってくるのではと思う。

どの人も課題を楽しんで取り組んでいたか、自分の考えを伝えるために自分なりに工夫していったかというところでは、頑張っていたのではないかな。

5. 拡散思考力を育て、高めるためには

① 苦手意識の克服

能力別編成での A クラスは、競争心の強い児童が多い。B クラスはそれに対して穏やかで苦手意識を持ちやすく、不安に思ったりして自信の持てない児童もいる。苦手意識を減らしてやってみようとする意欲を引き出すことが大切。

② 楽しく考える環境づくり

- ・導入では「簡単!」「できそう!」「早くやりたい!」と思わせる。
- ・考えの共有。全部ではないが、いくつかの課題で発表してもらう。他の人の考えを知ること、安心感が生まれてくる。自分の考えはあっているのだ、良かったんだ、認められた感が出てくる。また、自分には思いつかなかったことに気づく。気づくことで、考えの引き出しが増える。
- ・2 つ以上考えが出た時には「こっちのほうがよりいいよね。」とか「この考えは他の子は思いついていないね。」等、良いところをほめる。認める。
- ・席の配置も環境づくりの一つ。初めは名簿順に座席を配置していた。年度の途中から、常に声がけを要する人、下位層の人、声が小さい人、一人でじっくり考えられる人と分け、机間巡視を、声がけしやすい配置にした。指導者は 2 人いるので、一人は常に声がけを要する人たちのところを中心に回り、もう一人は自信なさそうな表情だったり理解しきれていなさそうな人、自信なさそうな表情の人たちを回るように心がけていた。

③ アイディアを最初から否定しない

考えをまずは認める。その考え方に「ブレインストーミング」というものがあることを知った。大辞林ではこう述べている。

ブレインストーミング【brainstorming】

『参加者が自由に多くの意見を出しあうことによって、独創的なアイデアを引き出す集団思考法。』

(出典：三省堂 大辞林第三版について より)

アイデアを創造する方法の一つ。実施にあたっては4つのルールがある。

- 1) 他人のアイデアを批判しない。
- 2) 自由奔放なアイデアを歓迎する。
- 3) 質より量、アイデアは多いほどよい。
- 4) 他人のアイデアを活用し、発展させる。

(※出典：(出典：ナビゲート ビジネス基本用語集について

<https://kotobank.jp/word/ブレインストーミング-8418> より)

そして、ブレインストーミングがディスカッションやディベートと違う点については、

ディスカッションは意見を出し合うところは同じだがブレインストーミングでは相手の意見を批判することはしない。また、ディベートは正反対の意見を戦わせる。

(※出典：Mayonez [マヨネーズ] IT人材のためのキャリアライフスタイルマガジンより)

まずは、相手の意見を否定せずに耳を傾けることで、自分と他の人の考えが同じだったり違ったりするところに気づける。情報が不足していたことに気づけるかもしれない。そして、まずはいろいろなアイデアを出し切ることで、思いもよらなかった解決策が生まれるかもしれない。課題に即しているかどうかは伝えてあげたほうが良いだろうが、考えを発展させるには、人の考えに耳を傾け、受け入れる姿勢で臨むのもありなのだと思う。

④ 拡散思考以外の課題でも、早くできた子に問題を作らせる。

aはこのクラスの中で消化量の多い児童だった。なので、しばしば早く終わった児童には課題と同様の問題を作らせることもあった。早く終わったと

いうことは理解力もちろんだが、課題そのものが楽しくなり夢中に解いていたことが言える。楽しく取り組めた問題を今度は作る側に回らせたとこ
ろ、辞書を片手に嬉々として考えていたのを覚えている。(CMT 漢字で書
かれた当て字を言葉に読みかえる)

⑤やる気を引き出す。

やってみた結果、楽しかった、またやってみたい、という気持ちにつなげ
ていく。自信につなげていく。できたことが自信につながる。

⑥ミスを恐れない

生み出す力、考え出す力はかなりエネルギーを要する。思いつけないとき
はいら立ち、がっかりすることもある。思いつけないのは問題が悪いのだ、
とか周りがうるさいから思いつけないのだ、と他のせいだと、責任をなすり
つけたくなる。ズバリ、拡散思考では「生み出す」= 思いつく訓練をするの
だから、間違えを恐れずに取り組むことが大事である。

拡散思考のような、答えがいくつにもあたる場合、難しいのが、「間違え
たらどうしよう。」という思いである。特に3,4年生くらいになってくると、
みんなの前で間違えることを嫌う児童が増えてくる。発表してくれる人? と
聞いてもだんだんと挙手する人が決まってくる。

課題の説明を一通り終えた後、質問を受け付けると「○○はいけないです
か。」「△△はダメですか。」と質問も増えてくる。ある程度は応えるように
しているが、聞きすぎると他の人にも不安要素を広げてしまうことにもなる
ので、聞きすぎないようにしている。机間巡視中に受けた質問でみんなに伝
えたほうが良いことが出てきたら、その都度、伝えればよいこととも思っ
ている。とりわけ、Bクラスではやる気はあるが自信が持てない人が多く、考
えは浮かんできているが、迷っているうちに時間切れになることが見られる
ので、○か×かを決める前に、忘れてしまわないうちに考えたことをとりあ
えず紙に書くようにさせている。

⑦失敗も引き出しの一つになる。

6. その先を見つめて

(1) 脳活動の可視化

また、少し横道に逸れる。

今年3月、3年Aクラスで、脳活動センサー『Brain Meter』を使って、脳の血流を計る機械のデモに立ち会うことができた。『Brain Meter』は、日立製作所と東北大学の川島隆太先生が共同で開発し、脳の血流量の変化を計測できる小さな機械であるのだが（(株) NeU）、これによって脳活動の可視化、いつでもどこでも誰でも脳活動を計測することができる。具体的には『Brain Meter』はリアルタイムに脳活動を色で表現することができる。青から赤へ。赤になるほど脳活動が高くなっていることを示す。

授業は『36 コースゲーム』という、因子で言うところの「図形を見通して評価する」の課題だった。このゲームは、簡単に言うと2つのサイコロを使った双六ゲームである。スタートからゴールまでは、6×6マスの36枚の道カードがあり、サイコロを振って出た目の分、コマを進めることと同時に、2つのサイコロの目、例えば「2」と「4」ならば、「2-4」もしくは「4-2」と書かれたコースカードを他のところと道がつながるように移動させることができる、または向きを変えることができる。道を進むこととコースを変化させる、この2つを同時に見通しを立てながら考え、出来るだけ早くゴールにたどり着くことが目標になる。

このゲームをしているときに、何人かの児童が交代で『Brain Meter』を使った。興味深かったのは、ゲーム中、自分の番の時もちろん、青色から徐々に黄緑、黄色、と色が変わっていた。が、実は、自分の番の時以上に、他のお友達の番にお友達の動きに対して「あ、いいね。」とか「こっちに動かすのはどうだろう。」と活発にコミュニケーションをとり、活動に参



加している時がより一層赤に近かったということだ。自分に有利になるように思考している時も反応はあるが、他者と活発にコミュニケーションを取り活発に参加している児童ほど反応が激しく動いていることも可視化でわかることができた。お友達の考えが自分にとってどのような展開になるのか、有利なのか不利なのか、と思考を巡らせ判断している時に、活発だったと考えられる。

このアイテムは、非常に興味深かった。私たちが日ごろ「意欲、集中力を育てる」ことを目標としているが、その裏付けになるのではとも思えた。

もし、拡散思考の課題において『Brain Meter』を使ったら、どのあたりでより赤に近い色が出ていただろうか。例えば、今回実施した『DMT』では発想を切り替えていく、分岐点のあたりだったのだろうか。

『DFS』ではどんな反応になるのだろうか。作品作りの途中で、お友達の作品を紹介し、賞賛しあい、また、そこからヒントをもらい、自分の作ってみたい形や文字に挑戦する時や、どのように組み合わせたらよいかを考えている時が、赤に近い色になったのだろうか。機会があれば見てみたい。

(2) 限界への挑戦

能力別編成での A クラスと B クラスの児童の傾向については先に述べた。ただどちらのクラスにいても共通するところは、興味関心があり、好奇心旺盛なところである。好奇心旺盛な児童を毎回課題にどうやって載せていくかがいつも悩みどころである。『聖徳の教育』の中でも、「理解させたり、覚えさせたりすることは必要だが、そうした課題だけでは英才児は本気になってとりくまない。～（中略）～そして、その者には、教育内容を、その子どもの知能の限界すれすれのところで構成しなければならない。その点に英才教育の面白みと困難点がある。…（※文献4）」とある。限界に挑戦させていくのだが、時には友だちの考えからヒントをもらうことで次への引き出しが増える。聞く姿勢も同時に育てながら考える幅を広げていくことにもなる。

前述の、大学時代のゼミ仲間との会話の「これからは『大学で何をしてき

たのか』が大事なのよね。」という話からも、目の前の子供たちがこれから10年後に社会に出ていく時、日本国内だけでなくどこにいても活躍できる人に育てていくには、得意なこと、興味関心のあることから考えを深めていくことや試行錯誤をしながらも諦めずに考え続け、達成感を得ること、自信が持てるものを持っていることは大事なことなのではないかと思えてきた。

(3)「自由研究」で拡散思考力を大いに活用

夏休みの「自由研究」は拡散思考力を大いに活かせるチャンスだと思う。テーマを決めたり、どのように進めていったりするの。か。調べ研究なの、か。工作なの、か。物語なの、か。このような「企画」「計画」を立て、「手順」や「打開策」を考えていく課題は、拡散思考の「概念で見通しを拡散思考する(DMI)」にある。授業では机上での考えに終わってしまうが、「自由研究」は自分で考えたことを実際に行動に移し、実践することが出来る。

ある児童は、6年間ずっと『迷路』を作ってきた。1年目はお菓子の空き箱に段ボールで壁を作り、ビー玉を使ってスタートからゴールまで転がす形式だった。途中道幅が狭くなったりして、ビー玉がうまく通せないところもあった。2年目も立体迷路だった。今度は空き箱の底にはえんぴつ線が引いてあり、段ボールの壁も寸法を測って作ったので、ビー玉の進みもスムーズになった。3、4年生では冊子形式になり、クイズ等と一緒に迷路問題も何題が含まれていた。5年生になり、再び立体迷路を作るようになった。以前に比べ、サイズもコンパクトになりすっきりしていた。ここまでくると6年生最後の自由研究も予想を裏切らず、迷路を作ってきた。形は1辺が約10cmの立方体だった。立方体の中は上から8段の立体迷路になっていて、上からBB弾くらいの球を巡らせて穴が空いているところがその段のゴールとなる。次の段でまた球を巡らせて穴を目指す。それを繰り返していく。素材は透明のプラ板を使っていた。しっかりと設計しており、完成度も一番高かった。自分の好きなことに没頭して作っている様子がその作品からうかがうことができた。毎年少しずつ工夫し、スキルアップしていった。また、虫

の研究をしていた児童はそのことが大学選びにまでつながったとも聞いた。

人にはたくさんの神経回路がつながっているのだが、実際には人は脳の神経細胞の半分程度しか使っていないらしい。しかし最近、これまで使っていなかった予備脳を活性化させることで、衰えていた認知機能を補い認知症の再発防止に役立つことがわかってきた。例えば、やったことのないことに挑戦することが良いそうだ。

前述の『迷路』の児童は6年間同じテーマで通したが、毎年自ら改善点を見つけて改良を繰り返して一つのことを極めていった。拡散思考の課題に取り組むにしても少しの挑戦意欲とエネルギーがあれば楽しくなるだろう。また、Brain Meterでも黄色から赤へと活発な反応を示すのではないかと思う。

(4) 考える力を育てる～意欲、集中力を育てる

意欲、集中力を育てるということは、常に新しいことに興味関心を持ち、チャレンジ精神を持つことにつながっていく。好奇心旺盛であることはいいつまでも心身ともに元気でいられる。

お誓い三か条の第1条は

「われわれは 未来をひらく戦士となり 新しい世界を 開拓します」とある。

「未来をひらく戦士」とは「…これまでに到着した学習の限界につねに挑戦し、宇宙時代にふさわしい新発見の創造力…」を持ち、「(…英才児のもつ)無限の能力を個性に応じて伸長させるのを目的とする」ため、「未来をひらく」戦士と呼ばれる(※文献5)。戦士の「士」には「欧州中世の騎士、近代のゼントルマン(紳士)、中国の士夫階級、日本の武士という意味がこもっている。選ばれた品格の持ち主という意味で、…(※文献6)」とある。

「新しい世界を開拓する」ためには知能訓練科の視点から考えるときに、繰り返しになるが、拡散思考は大事なかぎであり、外せない因子と言える。もちろん、論理的思考の集中思考や判断力を要する評価力もなくはないが、新しい考えを生み出す拡散思考力はその中でも重要だと思う。

「未来をひらく戦士」たちが卒業後、新しい学び舎でまた社会で、どの世界で、どの分野で活躍し、それぞれの新しい世界を個々の無限の能力と品格を持って開拓していくのが楽しみである。

《引用文献》

- ※ 1：『知能は伸びる』 p.26 ～ 27
- ※ 2：『知能教育指導の手引き』 p.6
- ※ 3：『知能教育指導の手引き』 p.5
- ※ 4：『聖徳の教育 2018』 p.229
- ※ 5：『聖徳の教育 2018』 p.231 ～ 232
- ※ 6：『聖徳の教育 2018』 p.232

《参考文献》

- ・『知能は伸びる』 清水驍 / 著 学陽書房 1993 年 2 月 25 日初版発行 1997 年 4 月 20 日 3 刷発行
- ・『知能教育指導の手引き』 昭和 60 年 9 月 1 日発行 社団法人英才教育研究所
- ・『知能教育要領 ―聖徳学園における知能教育―』 平成 28 年 4 月 1 日 発行 聖徳学園知能教育研究室／編集 学校法人聖徳学園（発行所）
- ・『聖徳の教育 2018』 平成 30 年 5 月 31 日 第 12 版発行 聖徳学園幼稚園・小学校（発行所）

《インターネット検索より》

- ・三省堂 大辞林第三版出典
- ・ナビゲート ビジネス基本用語集について
<https://kotobank.jp/word/プレーンストーミング-8418> より
- ・Mayonez [マヨネーズ] IT 人材のためのキャリアライフスタイルマガジンより

《その他》

- ・ゲンキの時間 2018 年 8 月 20 日放送分より
- ・外資系企業が求める人材 <https://okane-blog.com/> より
- ・<https://randstad.co.jp>
- ・NeU 株式会社 HP <https://neu-brains.co.jp/service/equipments/xb-01/> より

歴史の授業における場面絵の教育的効果

小学校教諭 田中 飛鳥

1. はじめに

学生時代の私は、歴史の授業をむかえる度に「学ぶ意味」について思い悩んでいた。というのも、ただ年号や名称を覚えるだけの授業という印象が強く、すぐに忘れてしまうこの暗記が、将来何の為になるのか分からずにいたからだ。もちろん、内容があってこそその暗記だったが、当時の私は試験前に暗記をすれば点数に結びつく教科ととらえていた。苦手ではないが好きでもない。歴史学習に対してのこの思いは、本校の歴史教育にふれることを通して変わっていく。

本校の歴史教育は3年生から始まる。3・4年生で行なう「昔話」の学習では、物語を聞き、それを絵にすることで歴史的想像力を育んでいく。理科の観察記録や美術の模写とは違い、何もヒントがない中で「過去の時代」を絵にしなければならぬ。だから、どういう風に描いたら良いのかという戸惑いは当然の事ながら生じてくる。「どういう建物?」、「当時の人はどんな服を着ていたの?」、「何を食べていたの?」この学習では、こうした子ども達の素直な疑問が鍵となる。実際に見ることができない過去のものを、疑問からヒントを得て、現実にあるものと比較しながら絵にする。本研究は、本校独自の歴史教育「昔話学習」を通して育まれる児童の歴史的想像力について、昨年度担当した4年生の実践をもとに探ることを目的としている。本研究の成果を今後の指導に活かしていきたい。

今回の研究内容は、校内で行われた「夏期研修」において発表したものであり、それを「研究紀要」用に加筆、修正したものである。

2. 本校の歴史教育について

本校の歴史教育は、昔話学習から始まり、人物伝学習、通史学習へと児童の発達段階に合わせてカリキュラムが設定されている。昔話学習は3年次（年10回）と4年次の1学期に行なう学習であり、歴史的概念を育みながら歴史的想像力を高めることが学習の目的とされている。

そもそも『昔話学習』の導入は、私達が幼少時代に聞いてきた「むか～しむかし、あるところに……」から始まるあの昔話が原点にある。幼少時代に祖母や祖父、両親から聞いてきた『桃太郎』や『浦島太郎』などの昔話は、大人になった現在も語ることができる。歴史科はこれを理想とした。知識を暗記で得ていく教育ではなく、お話を昔話のように自身で語る中で歴史的な概念を獲得していく。昔話学習で行う「場面絵の活動」は、その一つひとつの概念がより具体的なものとして想像され、歴史的想像力を高められる最も適した手段として導入されたというわけである。

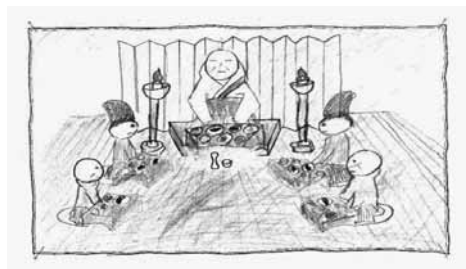
昔話学習を通して育んだ歴史的想像力や、場面を想像しながらお話を聴いたり、教師の語りから当時の人の思いや考えを汲み取ったりという学習に対する姿勢面がその後の人物伝、通史学習に活かされていくのである。

3. 歴史的概念について

歴史的概念は、過去の物事や出来事の意味内容を理解した時に身につく。一つひとつの言葉の意味もそうだが、それを基にその時代について考えられるようになることも歴史的概念の獲得だと考えている。例えば、4年生の一学期に行なう平家物語には『鹿ヶ谷』というお話がある。俊寛僧都という僧の山荘に、源氏や僧、貴族、法皇が集まり、平氏を倒す計画を密かに企てている話だが、場面絵にする中では、瓶子（とっくり）やお膳といったものも出てくる。つまり、食事をしながら話し合いをしているのである。ある貴族が法皇の瓶子を足に引っ掛けて倒してしまい、緊張が走る中で「やや、平氏（瓶子と平氏をかけて）が倒れましたなあ。」と笑いをとる。これがお話のオチ。この場面を

絵にする。子ども達は、この時点で既に「燭台」や平安時代の「床板」という歴史的概念を獲得している。この授業では、身分による服装の違い、座る席や場所の違い、食卓や食事内容等を新たに学習する。座る場所は、現在でもある上座と下座だが、昨年度は知らない児童が多くこちらも新たな概念として獲得された。

このように、場面を絵にする中で、様々な形で平安時代を捉える。その一つひとつの理解が歴史的概念の獲得となり、時代を捉える力につながっていく。また、歴史的概念の育みこそが、歴史的想像力を高めていくことにつながる。



『鹿ヶ谷』(Aくん作)

4. 昔話学習の授業展開について (4年次『平家物語』をもとに)

(1) 平家物語とは

平家物語とは、平安時代後期に繰り広げられた平家一族の興亡が主に描かれているお話。貴族中心だった世の中を、武士が活躍する世の中にしていった平家であるが、最後は同じ武士である源氏に滅ぼされてしまう。このお話の冒頭には、「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰のことわりをあらわす」という4行が書かれている。「祇園精舎の鐘の響きは、全てのつくられたものはずっと同じではなく変わっていくことを教えている。釈迦がいなくなる時に枯れたという沙羅双樹の花の色は、勢いがある何でもできる、非常に優れているというものも必ず滅びるということを教えている。」と示している。つまり、冒頭において平家の一生について語っているの

だ。授業では、この有名な4行についてもふれ、世の中の道理や平安時代後期の世について学んでいく。

(2) 授業の進め方

物語の内容と時代の流れを捉えるといった観点で、平家物語の中でも【殿上の闇討ち、鹿ヶ谷、富士川の水鳥、倶利伽羅落とし、ひよどり越え、扇の的、壇ノ浦の戦い（計7）】の話を中心に上げている。授業は二回で一つの物語を進める。一時間目は教師の語りを聴きメモをする。二時間目は前時に聴いたお話の世界を絵にする活動（場面絵）である。絵に関しては、歴史的概念の獲得と歴史的想像力の育成のため毎授業評価をして返却をする。子ども達はこの評価を次の授業の最初に見る。絵を描く時の視点や描き方、平安時代を捉えるものが描かれている絵に関しては全体で共有し、新たな物語が始まるという流れである。場面絵の活動では、絵の上手い下手に重きを置いてはいない。場面の見方や平安時代を細かく表現できているかという事が歴史的想像力を育むうえでは重要になってくる。

7つのお話が終わると、今まで物語ごとに場面絵にしてきたものを、一枚の紙に連続的に描く“絵巻物”の活動に入る。日常の「場面絵を描いては、歴史的想像力を高める」授業の繰り返しが、絵巻物の制作で集大成となる。一枚の紙に場面を区切らずに描いていく中で、歴史学習に必要な時間の連続性を意識させる。また、鉛筆ではなく墨を使って筆で描くことによって、日本の文化・伝統を理解することになっている。



(3) 昨年度の4年生の様子

昨年度は、担任クラスの歴史を担当させてもらった。子ども達の様子としては、物語の読み聞かせを大変好むクラスである。国語教材や本、平家物語等の読み聞かせをしてきたが、頭の中に場面をイメージしながら聞いているため、一つひとつのリアクションがとても良い。

また、全体的に学習意欲が高く、興味をもって授業にのぞむ児童が多い。その積極的な姿勢は「発言」という形に限らず、じっくり考えながら学習を進める姿も含んでいる。本学習においては、場面絵を、時間をかけて丁寧に仕上げていく姿が多く見られた。その時代への様々な疑問や興味を取り入れて何度も描き直した結果であると見ている。「この時代の電気は燭台ですか。」と問う児童の声から、次の場面では当たり前のように燭台を描いたり、今と昔を比べる中で洋服や帽子の違いを表現したり。その丁寧な取り組みと物語を聴いていく中で育んだ細やかな想像力の成果が、場面絵の変化として現れてきた。

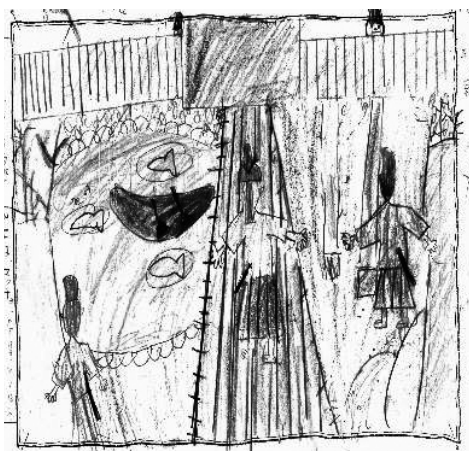
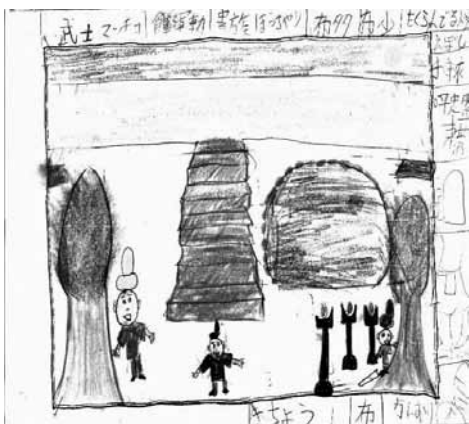
場面絵の活動では、子ども達の絵を振り返り“多様な視点”について全体で共有をする機会があった。養われた想像の世界では視点によって絵の描き方が変わるという話だが、その話以降一人ひとりの個性が視点の工夫として見られるようになってきた。歴史的想像力の育成を図るために、漫画のような絵ではなく、実際に写真で写したように絵を描くことを伝えてきた中で、視点への意識はひとつの成長点であった。

5. 昔話学習の実践からとらえる「歴史的概念」

昨年度取り上げた内容を、物語の流れに沿って紹介すると共に、授業中の様子や場面絵、期末試験を通して育まれたとされるクラス全体の“歴史的概念”についてふれていく。

イ) 殿上の闇討ち

Bくん、Cさんによる場面絵



内容：平安時代は貴族中心の世の中である。その貴族にも上中下と位があるが、上級貴族の中の中でもたった数人しかなれない“殿上人”という役職に武士である平忠盛（清盛の父）が選ばれる。殿上人とは、唯一天皇に会える人のことをいうが、当時の武士は、百姓上がりで身分がとても低い。そんな身分であるから、貴族からは妬まれる対象となってしまう。忠盛が宮中の廊下を歩いていると、その物陰には貴族たちが潜んでいる。しかし、優雅に過ごす貴族とは違い、元々百姓である武士だからこその体格である。大きな忠盛が歩けば、貴族たちは少し怯み、怖気づく。集団で忠盛を狙ったが、忠盛は宮中には持参してはならない刀を出し、全員を追っ払ってしまう。その後、刀を持ってきたことを天皇に知られるが、その刀は木刀に銀箔を塗った物。つまりは、おもちゃであったと知り、「木刀であれば何も言えぬ。そして、家来がいたというが、主人の身を案じようとしてきたとのこと。あっぱれだ。」と逆に天皇から褒められる話。

絵にする場面：平忠盛が若者たちに闇討ちされそうになる場面

声掛け：① 漫画ではなく、写真のように描こう。

- ② 羅城門のような建物（今昔物語より）、吹きさらしの廊下
- ③ 平安時代の床の板目、柱の礎石、欄干、
- ④ 庭には竜頭船、大きな池（描いている児童がいた）
- ⑤ 冠、束帯「偉い人ほど布が多い」
- ⑥ 燭台（児童から発言）

絵の特徴：① 集合写真のような絵

- ② 児童から「燭台」という単語が出てきたが、室内とは言わなかったため、たくさん描かれた。
→石灯籠（廊下）、燭台・燈台（室内）
- ③ レットカーペット？が描かれた（偉い人が通る道という理解か？）

歴史的概念：※○に関しては、試験や復習で養われたことが確認できた。

△については、この時点では十分とは言えないもの。

○平安時代 = 貴族中心の世の中 ←説明

○殿上人の理解から「武士」という概念 ←説明・物語

○宮中に刀は禁止という概念 ← 物語

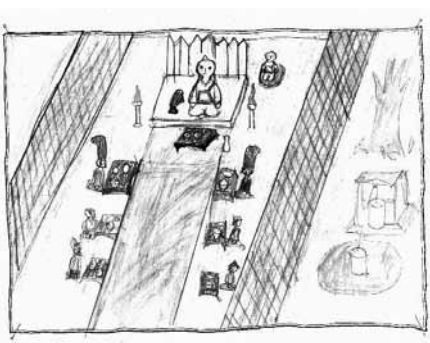
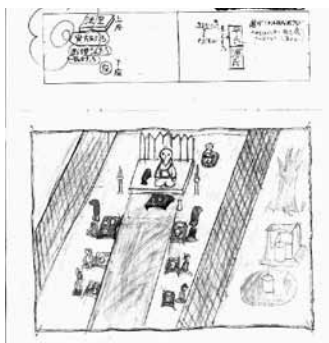
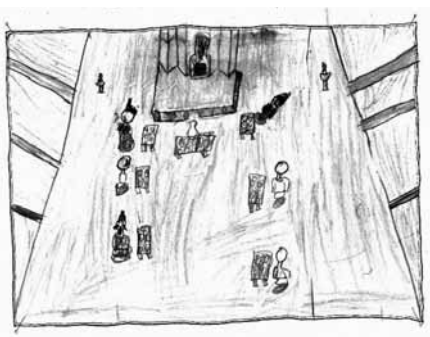
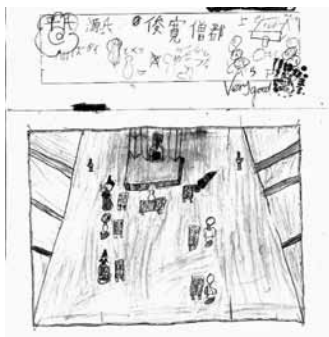
○貴族と武士の体格や生活の違い ←説明

△平安時代の建物

△平安時代の床の板目

△燭台

口) 鹿ヶ谷 Dくん、Eくんによる場面絵



内容：平忠盛の後を継いだのが清盛である。彼こそは平家一族興亡の中心人物。保元の乱や平治の乱では、源氏を次々と攻め滅ぼし、自身の位を上げ、太政大臣・従一位という臣下として最高の位を獲得した。清盛の息子や一族もそれぞれ重要な官位につき、平家の領地は日本全国の半分にもおよんだ。わがまま勝手な政治を繰り広げたが、藤原氏の悠長でぜいたくな摂関政治から、質素でてきぱきとした武家政治へと変わる糸口を切り拓いたのである。ただ、戦で負けた源氏や平家の政治を好まない庶民、僧、貴族がいるのも確かだ。そんな中、とある僧の山荘に、源氏や僧、貴族、法皇が密かに集まった。平氏をどのようにして倒すかという計画を企てる会である。食事をしながらの密談であったが、討論が激しくなった末、藤原成親が法皇の瓶子を足に引っ掛けて倒してしまうのであった。法皇の瓶子を倒すなどあってはならないことで、場に緊張が走る中、当の本人は「やや、平氏（瓶子と平氏をかけて）が倒れましたなあ。」と発する。この言葉により、場の空気が変わるという話。

絵にする場面：俊寛僧都の山荘で謀が行なわれている場面

声掛け：① 漫画のような絵ではなく、写真のように描こう。

- ② 床板、燭台（復習）
- ③ 法皇は畳、他はい草
- ④ 上座と下座（数名しか知らなかった）
- ⑤ 法皇、僧、貴族、武士の頭の違い
- ⑥ それぞれの服装の違い（僧：資料、貴族：狩衣、武士：直垂）
- ⑦ 瓶子、お膳（子どもから質問）、食事（資料）
- ⑧ 屏風、几帳、簾

絵の特徴：① 人物の向きが自然になってきた

- ② 板目、燭台、おぜん
- ③ 庭に井戸を描く児童が数名

④ 武士に笠を描く児童が数名→この時代は主に老女使用

⑤ 再びレッドカーペット？

歴史的 개념：△板目 ←前回の復習

○燭台 ←前回の復習

○身分による違い（坊主か烏帽子か侍烏帽子か）←説明

○法皇は畳に座る ←説明

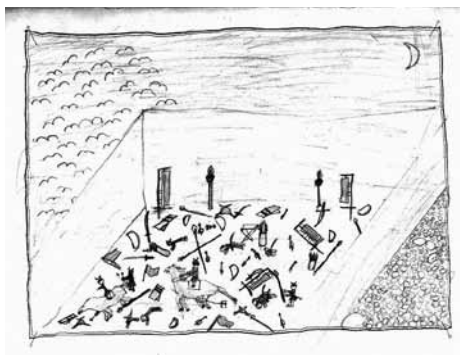
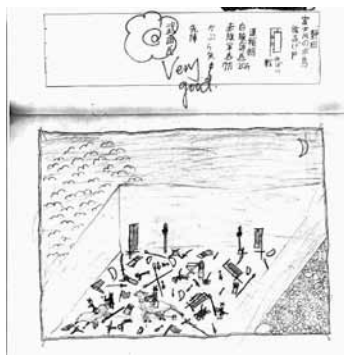
○上座と下座 ←説明（ある児童がエレベーターでの上座と下座について説明してくれた）

○食事内容について（白米やチーズがある）←児童のつぶやき

※「板目」に関しては前回の復習もあり、理解は深まってきた。上座と下座は今でもあるという事に一番反応が大きかった。

ハ) 富士川の水鳥（授業参観） F くん、G くんによる場面絵

※ 本学習に入って初の戦場面である。世界観が想像しやすいように言葉や物について丁寧に説明し、読み進めた。





内容：前の戦で見逃してやった源頼朝が、平家に対する兵をあげたとの連絡が清盛のもとに入った。戦の経験があまりない若い者たちは、簡単なことのように捉えているが、東国の事情をよく知る老武者たちは簡単ではないことを心得ている。迎え撃つ平家軍はつごう七万騎。福原を出て、京都から東海道を東に進み、静岡へと進む。するとそこへ、急ぎ足で西の方へ行く下男ふうの男が現れる。平家軍はスパイかと思い、捕らえて尋問をするが、その男は都の恋人のもとへ送る恋文を持っていた。授業ではこの場面を実演しながら進めた。その男に源氏の軍勢を尋ねると、“二十万騎”というまさかの答えが返ってきた。更に関東には化け物が住んでいるという噂も（坂東武者のこと）流れてきた。これらの情報に怖気づいてしまう平家軍。一方源氏とはいうと、富士川の対岸につき明日の戦に備えていた。戦では先陣をきった一族が一番多くの褒美をもらえるということで、武田氏が夜中に川を渡ってしまおうと考えていた。重い鎧を身につけながら静かに歩く武田軍だが、砂利道に躓いてしまう。その合図で、川沿いにいた数万の水鳥が一斉に飛びたってしまう。平家軍は、これを源氏の夜討ちだと勘違いし、寝起き眼で急いでその場から立ち去るのであった。

絵にする場面：水鳥が飛び立ち、それに驚いて逃げる平家の人々

声掛け：① 旗揚げについて説明し“のぼり”についてふれる。（導入）

② 富士川＝静岡県（導入）

③ 戦で一番褒美がもらえるのは誰か考えさせた。

④ 兜＝ヘルメットを基に、守る部分を考えさせる。

⑤ 鎧＝剣道の胴着を基に、守る部分を考えさせる。

⑥ 重さについても。

⑦ 鎗矢

⑧ 弓、矢、盾

絵の特徴：① 視点の違いが大きく出た（正面、斜め上、横等）

② 細かく描こうという姿勢があった

③ 大将が座る“椅子”や“灯り”を描く子が数名

④ のぼりと吹き流しの旗

⑤ 武器が沢山落ちている

⑥ 逃げていく平家たちの乱れた姿

⑦ 鎧、兜、馬、武器

歴史的 개념：△鎧、兜 ←説明

○先陣という概念←物語

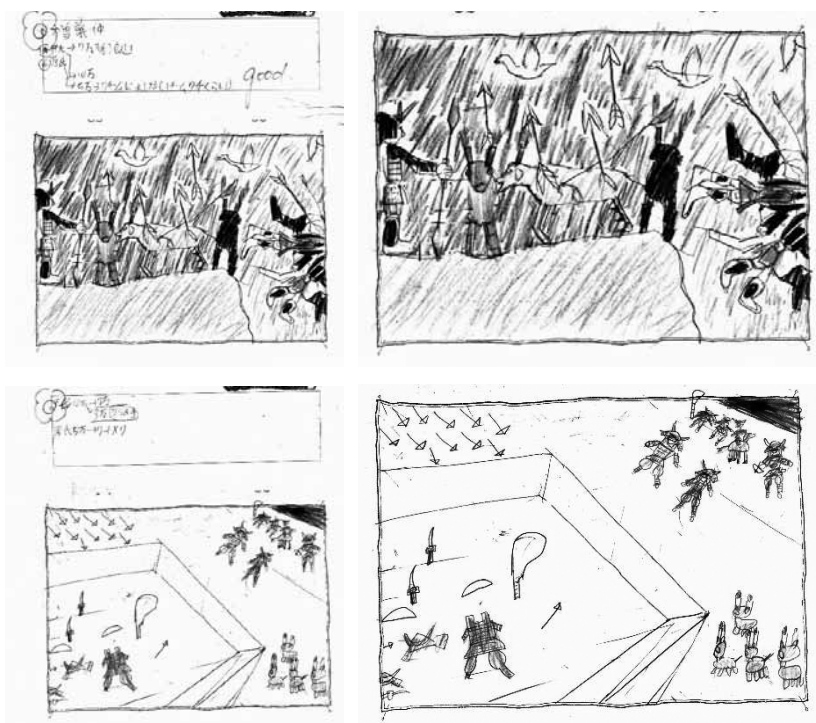
○のぼり（赤旗＝平氏、白旗＝源氏）←説明

△鎗矢

○鎧は重い

※子ども達が絵にした鎧兜は、守られる面が少なく、概念の習得という点ではまだまだのよう。ただ、鎧は重いという事に関しては習得できた。また、お話の復習では必ず「武田氏」という言葉が出てきていたので、先陣についての概念も得られたということになる。

二) 倶利伽羅落とし H くん、I くんによる場面絵



内容: 清盛の死を乗り越え、ついに源氏に対する兵をあげる平氏軍。東国にいる頼朝が最終的な狙いだが、まずは北国の木曾義仲を討つことになった。つごう十万騎を二手にわけ、大将ひきいる七万騎は砺波山へ。三万騎は搦め手となる志保の山へ向かう。当時、木曾義仲は越後の国にいたが、この知らせを聞き、五万騎を引き連れて越中と加賀の国境で迎え撃つことにした。義仲は五万の軍を更に七手にわけ、それぞれの位置につかせた。これは義仲がいつも行なう戦略である。そして、義仲は次の行動に出る。「人数の多い平家軍は広い平野に出て戦おうとする。そこで、源氏の白旗をさっとばかりにさしあげ、人数が多そうに見える。すると、平野に出て戦うよりも後ろからくる

心配がないこの山でしばらく休憩をしようと考えたであろう。」と考え行動する。面白いことに、平家軍はこの義仲の読み通りの行動をとるのである。義仲は第一の作戦が上手くいったことを喜びながら仲間が横手や搦め手にまわるのを待つ。夜が更けてきた頃、ついに太鼓やほら貝の音が聞こえ始めた。何が起きているのか分からない平氏軍。と同時に、ときの声が響く。逃げる間もなくして、後方からは矢がおびただしく飛んでくる。それでも応戦する平家軍の前方からは、ものすごい地響きと共に何か無数の光るものがまっしぐらにかけてくる。気づいた時には遅く、たいまつを角につけた牛が数を揃えてかけてくる。前からは牛、後ろからは矢、片方の側面は山。逃げ道はもう一つの側面である。助かろうと全力で逃げる平氏だが、そこは俱利伽羅谷といわれる切り立った深い谷であった。

絵にする場面：源氏にはさまれ谷へ逃げている様子

声掛け：① 牛の角にたいまつをつける理由を考えさせた

- ② 方向、搦め手を確認
- ③ 剣と刀の違いについて
- ④ 視点について声掛け（描かれるもの、描かれないもの）
- ⑤ 鎧、兜の復習

絵の特徴：① 鎧、兜、武器が「中世ヨーロッパ」風の表し方になった児童が数名いた←映画やゲーム、漫画など影響は多数。

- ② 方向が難しかったよう（馬、人、山、谷）
- ③ 牛と馬に苦勞する子どもがいる
- ④ 視点の違いがでてきた

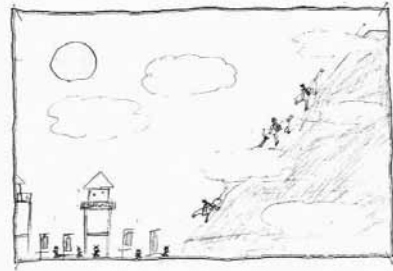
歴史的な概念：△搦め手 ←説明

- 牛の角にたいまつをつける理由 ←物語、説明
- 鎬矢 ←復習
- 剣と刀の違い←説明

△鎧、兜 ←復習

※「搦め手」という言葉は、この内容以降、頻繁に使われる。出る度に復習し、“後ろからまわる”という言葉はあったが、試験での正答率はあまり良くなかった。

ホ) ひよどり越え J くん、K くんによる場面絵



内容：源頼朝と木曾義仲が同士討ちをしている間に、平家は勢いをもりかえし、四国の屋島から摂津の福原へ帰り、そこに堅固な城を築いていた。福原は前に海をひかえ、後ろには険しい山を背負い、東西に長く伸びた町である。東は生田の森、西は一の谷に城門をかまえ、高やぐらを建てて、平家はここに十万の大軍を集めた。この城が敵に囲まれても、沖に浮かべてある軍船によって、食料や兵器はいくらでも輸入ができる。源氏は海軍がないので、それを追いかけることができないというわけだ。源氏は、大手の大將軍の方に五万騎、九郎義経率いる搦め手に一万騎。義経は一万騎をさらに二手にわけ、三千騎の兵を連れて一の谷のひよどり越えに向かう。切り立った絶壁を一気に落とし、敵の不意をつこうと考えたのである。だが、兵たちは「とても無事に落とせるわけがない。うちの大將は勇ましすぎて、家来が苦勞する」と口々に言いあっている。義経はこの山の案内者を探してくるように家来に命じ、案内者に連れられてひよどり越えの上に到着した。

切り立った崖の下には平家の仮屋いくつか見え、赤旗が浜風にひるがえっている。しばらくは上から下の戦いの様子を眺めていたが、勝ちを決めるには自分達しかいないことを理解した。するとその時、鹿が三匹現れて急な坂を見事に下って行ったのだった。これを見た義経は、「馬を十頭ほど落としてみよ。」と家来に命じ、その通りにすると三頭ほど上手く坂を下りきったのである。そして、「鹿も四つ足。馬も四つ足。同じ四つ足だ。できないことはない。」と言って、大将自らが下りていく。家来も後に続く。

坂は二段に分かれていて、初めの二百メートルは小石まじりの砂。坂の途中には平らな所があり、さらに下五十メートルは大岩石で苔が生えている。先に行く者の鎧兜が後陣の者の馬の鼻にふれるほどの距離。この危険を乗り越えて、見事到着した一行はときの声をあげて攻めにかかる。搦め手を攻められた平家軍は、我さきへと船に乗り込んだ。

絵にする場面：九郎義経ひきいる三千騎が命懸けで断崖をおりる様子

声掛け：① やぐらについて絵と共に説明（導入）

- ② 平家軍が船を持ったことを確認
- ③ 断崖の角度をスキーマのオリンピックコースと説明
- ④ 長刀、太刀の説明
- ⑤ 鎧、兜の確認

絵の特徴：① 視点の違いについての理解が深まった

- ② 馬を想い、担いで下りる人を描く子も
- ③ 後ろの人から見た絵を描く子も
- ④ 鎧、兜が上手になってきた

歴史的 개념：○鎧、兜

△やぐら

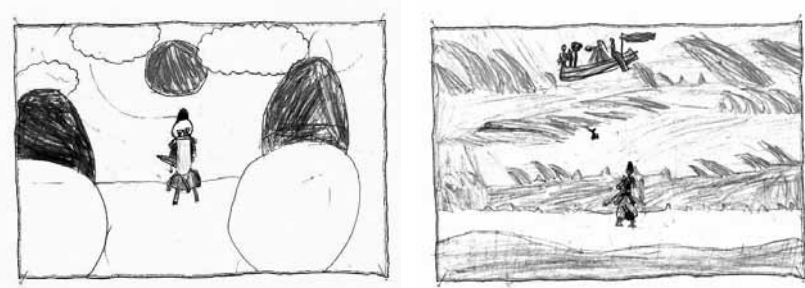
△搦め手

△九郎義経の勇ましき

○断崖という概念、断崖の下り方

※「断崖」においては初め（200m）と後（50m）では、環境の違いがあった。物語中には「どっちも滑りやすいじゃん!」との反応が見られ、断崖という概念をもって想像できていることが分かった。また、鎧、兜の変化も見られた。

へ) 扇の的（「劇」導入） Lくん、Mくんによる場面絵



本学習は3時間分を取って行なった。読み聞かせが終わった後に、梶取、老武者、女性、那須与一と源氏（残った子ども達）役を選び、劇にしてイメージをつかませた。今までの学習では、自分の視点で描けたが、描く視点を特定することで、歴史的想像力を更に高めようという考えのもと、実践した。

内容：戦いは一時休戦し、源平両軍とも負傷者の治療や戦死者の死骸の後片付けをしている。陸の源氏からも、沖の平家の舟からも細い数条の煙がゆるやかに立ち上がる。夕食の支度をしているようだ。そんな中、沖の方から小舟が一艘、陸をめがけてこぎよせてきた。陸から八十メートルほどの所までくると舟は横向きになった。乗っているのは三人。ひとり老武者。ひとり梶取り。もう一人は若く美しい女性。戦場で女性を見ることはめずらしいので、源氏の兵たちは皆女性に注目だ。舟の真ん中には一本のさおが立ててあり、その先端には開いた

扇がはさんである。かの美しい女性は、その扇の下に立って、別の扇でこちらをしきりに招いている。「あの扇を弓で射よというのか。」源氏から選ばれたのは、小兵だが弓上手と言われている那須与一崇高。「失敗すれば死」という命すらも危ぶまれる重大な任務に断る姿もあったが、大将の言うことであり辞退できず挑むことになってしまふ。もの凄い緊張感の中、神に祈りを捧げながら挑んだ結果は、見事に成功。味方も敵の老武者も喜ぶ中、「あの老武者も射てしまえ。」という心無い声のとび、老武者は倒れてしまう。怒った平家は数そうの舟をだし上陸しようとする。戦いが再開した中で、源氏の大将である義経は自分の弓を落としてしまう。それに気づいた家来たちは、一斉に大将のもとへと急ぐが、当の本人は身の危険よりも弓探しをしている。源平両軍とも義経に向かう。命からがら義経は弓を取ることができたが、家来が後で聞くと、「叔父のように強弓だったら問題ないが、私の弓を拾ったものが見たら笑われて後世の恥だ。名が惜しかったのだ。」と答えた。

絵にする場面：那須与一を源氏から見た場面

声掛け：① 平氏と源氏の体形の違いについてふれる（導入）

② 自分が見た絵を描こうと伝える（席替え：陸）

③ 舟について説明

④ 扇について説明

⑤ 今と昔の比較で、扇⇔エアコン（扇風機、団扇）を考えさせた

⑥ 休戦中なので兜ではなく、侍烏帽子

絵の特徴：① 特定の視点という事で難しそうであった。

→見える物の違いが描けず。

② 後ろ姿はイメージがないようで、髪の毛の部分に肌色で塗る子がとても多かった。

③ それぞれの席で見た違いについては、ふれられた。

歴史的概念：△この時代の舟

○扇

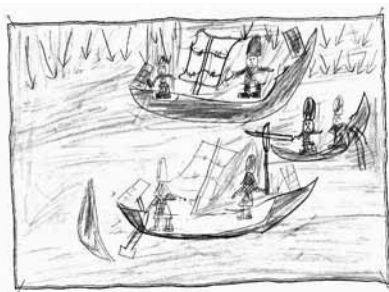
△義経の性格「命<名を惜しむ」←武士の思いでもある

○軍船を持っているのは平氏

△簰（えびら）

※義経についてふれることで、武士の思い（命よりも名を惜しむ）について知ることができたという感じである。「簰」に関しては、“矢を入れておく筒のようなもの”と子どもが訳してくれたが、搦め手と同様に試験での正答率は悪かった。

ト) 壇ノ浦の戦い（公開研究発表会） Nくん、Oくんによる場面絵



列ごとに源・平の視点を決め、その視点に立って描くことを前もって伝えた。「地理的」にも想像できるよう、事前に地図帳で扇の的からの平氏の動きを捉えた。地図帳の活動は楽しそうであった。

内容：源平両軍の戦いを締めくくる最後の合戦である。平家は屋島を落ちて、瀬戸内海を西へのがれたが、九州には源氏の兵がいるため上陸するところがない。そこで、関門海峡の入り口にある彦島を根拠地としておおかたは舟での生活となった。九郎義経は、その間にできるだけ多くの軍船を集め、兵たちに海戦の訓練をさせていた。義経は今度こそ平家に勝つぞという勢いをもって準備を万全に整え、七百余艘の

軍船をひきいて彦島をめざした。平家は五百余そうの軍船をひきいて、関門海峡の壇ノ浦で迎え撃つことにした。朝6時、源平両軍の矢合わせが始まった。平家の作戦としては、大きな唐船に雑兵を乗せ、小舟に総大将以下一門が乗ることにした。唐船はいつもなら総大将が使うものであるが、今回はこれを作戦とし、相手が乗り込んだ唐船を小舟で取り囲み、挟み撃ちにするという計画であった。また、関門海峡は潮の流れがはやく午前中は西から東へ流れる。これは、平家は流れる潮に乗れるが、源氏はそれにさからって進まなくてはならないという事になる。午後は反対になるので、そうなる前に決着をつけてしまおうと考えた。大将の声掛けで皆の士気が高まる中、一人だけ怪しい男がいた。その男の息子は源氏側についており、平知盛は怪しいと見ていたが、大将は特に何もせず解放してやる。源平両軍は4キロほどの距離に近づいた。舟の戦いはやはり平氏に有利な状況が続く。苦戦をしいられる源氏だったが、突然、義経の舟の上空に白旗がひらひらと舞いあがった。それをみた大將軍義経は、戦をやめ、「神があらわれた。皆！神が現れたぞ。」と言い兜をぬいで拝むのであった。家来たちもそれに続く。これにより、士気の高まった家来たちは負けじと応戦。ついに、正午まで持ちこたえたのである。もう平氏に勝ち目はないと見限ったあの怪しい男が行動にでる。自分を仲間にしてもらうために平氏の作戦を源氏にばらしたのである。そして、その頃から潮の流れが変わり、源氏が勝利を収める結果となった。

絵にする場面：源・平両軍から見た壇ノ浦の戦いを描こう

声掛け：① 源・平どちらかの決まった視点で描くこと

② 関門海峡、彦島について説明

③ 舟、唐船について説明（前時、導入にて）

④ 鎧、兜、長刀、太刀、吹き流しの旗について復習

⑤ 自身の命の終わらせ方から、「名を惜しむ」ことについて

絵の特徴：① 鎧、兜は最初の頃と比べて上手になった

② それぞれの視点で、様々な戦い場面が見られた

(アップ、ワイド、陸の戦い、義経が拝む場面、源氏が苦しい様子等)

③ 唐船と小舟の違いを上手く表現した

④ 兜ではなく、烏帽子を描く児童も

⑤ 集合写真ではない点に成長を感じる

歴史的概念：○関門海峡は日本で3位に入るくらい潮の流れが速い

○潮の流れが午前と午後では変わること

○平氏が屋島（香川）から彦島（山口）に移動した

○平氏がとった海で自害する方法、自分で命を絶つこと

○平家滅亡

△舟に一つのマスト

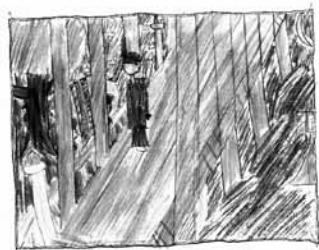
△唐船

※これまで登場してきた平家一族がついに滅されてしまったという事実は子ども達の中では一番大きく印象づいた概念である。地図での活動は、子ども達の想像をより膨らませる活動になり、関門海峡という概念や、そこに至るまでの平氏の移動歴についても理解が深まった。また、「富士川の水鳥」で初めて獲得された鎧の重さの概念であるが、自害の際にその重さが利用されたと分かり、子ども達の反応が大きくでた場面となった。

6. 場面絵の変化から見る“歴史的概念”（児童の変化を見る）

これまで全体を通して育まれた歴史的概念について探ってきた。ここでは、二人の児童の場面絵を取り上げ、その変化を見る中で、歴史的概念の習得について考えていきたいと思う。

(1) Pさんの場面絵の変化

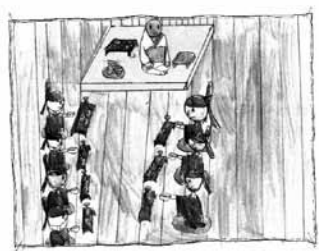


『殿上の闇討ち』

普段から丁寧な取り組みを見せるPさん。初回の場面絵の活動においても、服装や建物などについて質問し、納得のいく絵に仕上げた。

支柱、欄干、灯り、池、闇討ちの様子等細かく描けている。

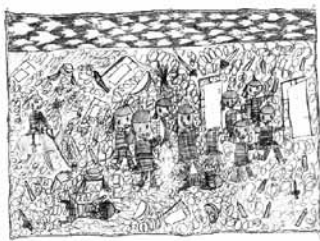
【獲得概念】：建物、殿上人、燭台



『鹿ヶ谷』

法皇以外の人々が皆同じ服装になっている。本来ならば、頭や服装の違いについては概念として獲得しなければならぬいが……。畳、い草、屏風、お膳、とっくり等の様子は描けている。

【獲得概念】：床板、畳(?)



『富士川の水鳥』

初の戦場面だが、鎧・兜共によく描けている。のぼり、武器、水鳥や人の様子等細かく絵にできている。

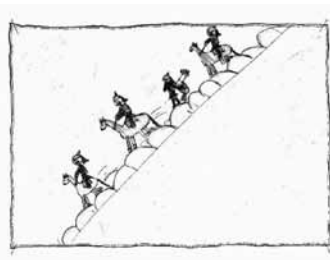
【獲得概念】：のぼり、鎧、鎗矢？、先陣、鎧の重さ



『倶利伽羅落とし』

鎧、兜については前回の絵を見ながら描いていた。牛、矢、谷。方向通りに描けている。山側からみた絵。

【獲得概念】：牛に松明をつける理由、搦め手？、剣と刀の違い、兜



『ひよどり越え』

残り50メートルの断崖を下りている絵。岩や苔の様子がきちんと描かれている。また、馬と馬との距離感、馬を担ぐ人なども描かれている。

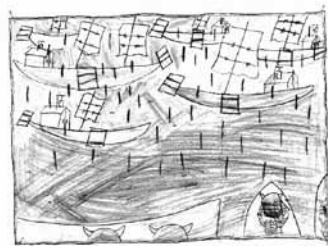
【獲得概念】：断崖、断崖の下り方



『扇の的』

那須与一を見る源氏のさらに後ろから見た絵。席的にも視点は合っている。友達の絵も参考にしていたが、籠を持っている点や、えぼし、馬の脚が海に入っている点などとてもよく描けている。

【獲得概念】：籠、烏帽子と兜

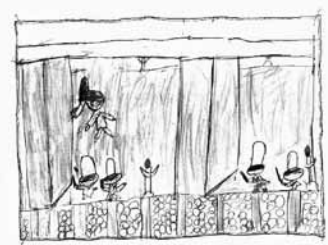


『壇ノ浦の戦い』

彼女は源氏担当の視点である。自分が船から見ている絵として描いた。矢が飛び交う様子や、舟の細かい所までも描けている。正面を向いた人や旗があると尚よい。

【獲得概念】 舟

(1) I くんの場合絵の変化



『殿上の闇討ち』

学習への意欲が高く、歴史学習も楽しんで受ける一方で、場面絵の活動には少し自信が無かった児童であった。初めの頃は「これでいいですか。」とよく聞いていた。人が柱に隠れている様子や砂利、柱、烏帽子と冠等良く描けているが、

服装は今時である。

【獲得概念】：殿上人、燭台



『鹿ヶ谷』

床板に変化が見られる。燭台、お膳、畳、い草、屏風、人の頭の違い等細かく描けている。絵を描く難しさを感じている。視点はどこなんだろうと……。

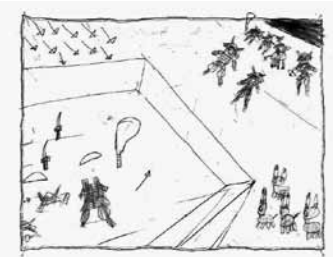
【獲得概念】：床板、身分による違い、畳？



『富士川の水鳥』

全員が横を向いている。水鳥に驚き、逃げている場面。慌てている様子を、鎧、兜、のぼり、刀を置いていくことで表している。足元、兜はもう少し。

【獲得概念】：鎧、のぼり、先陣、鎗矢？



『倶利伽羅落とし』

視点の成長を感じた絵である。今までになかった奥行きがでてきた。谷、矢、牛、山の方向を上手く描けた。場面を斜め上から見ている。富士川同様に、焦って逃げる様子を武器や人の様子で表した。

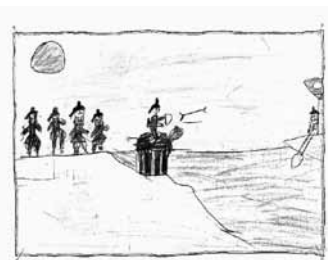
【獲得概念】：陣をはる、牛に松明、長刀、搦め手？



『ひよどり越え』

“岩に苔”最後の断崖を下りる場面を描いた。馬の後ろ脚や、距離感、斜め上から見える景色等細かく描けている。

【獲得概念】：兜、断崖



『扇の的』

席的には、那須与一を横か見ている。真横ではないので、舟（扇）や仲間の様子等も描ける。視点通りである。

さらに、より細かく描ける様になってきた点も成長。

【獲得概念】：扇、舟、簀、烏 帽子と兜



『壇ノ浦の戦い』

平氏の目線である。舟にのる一員として戦いの様子が描けている。舟の様子や矢がおびただしく飛び交う様子等がとても良い。さらに、波の様子も描けている。

【獲得概念】：舟、関門海峡、

7. まとめとして

二人の場面絵の変化を見てきたが、場面絵から獲得された概念を読み取るには限界があった。試験や内容ごとの感想等、個人がどれくらい獲得できたかを正確に表すには資料不足だと感じた。これは今後の研究に向けての反省である。

個々の場面絵の変化を見ていく中で感じたことが二つある。一つは、今年度は七つの内容を取り上げたが、その一つひとつにおいて獲得する概念は出てくるが、それはきっかけであって、その後の物語やお話の中で何度も何度も繰り返し出されることによって、その概念は確実なものになっていく。例えば、『富士川の水鳥』で初めて取り上げた“兜”は、そこだけでの説明では、ただ知ったことに過ぎず、概念の獲得にまでは至っていない。それは絵からも読み取れた。本来“守る”という目的であるはずが、絵にすると、耳や後頭部には鉄は描かれず、ただの被り物状態になっている。そんな兜が『壇ノ浦の戦い』では、守るという目的が達成された被り物になっていた。つまり、歴史的概念は、印象が強く残れば一度で獲得が可能だが、そうではない細かい部分としては繰り返し取り扱うことが重要である。

二つ目は、今年度の昔話学習で重視した“視点”について。授業では、『ひよどり越え』までは個人の自由な視点で描かせた。ただ、映像をより具体的に想像する力を育成するためには、視点によってうつる物の違いについて把握することが第一だと考え、『富士川の水鳥』から全体で絵の違い（＝視点の違い）や、それによってうつる物について具体的にふれていった。I君の絵は、視点の成長を最も感じる事ができた絵である。彼は『俱利伽羅落とし』からコツを掴んだようで「これでいいですか。」と聞きに来る回数が減っていった。

『扇の的』、『壇ノ浦の戦い』では、視点を特定して場面絵を描かせた。想像した世界を自由に描けたこれまでとは違い、いきなり難易度が上がったようだった。ただ、昔話学習が重視している「歴史的想像力の育成」に関して言えば、新たな見方が加わったことによって、更に広がりをもって物語を聴けるようになったと言える。本学習で培われた歴史的想像力は、今後の学習の基盤となる。それは、昨年度初めて受け持った五年生での授業で実感している。一学期に行なった人物伝の学習（吉田松陰、井伊直弼）では、4年生で育んできた【興味・関心】と【歴史的想像力】を大いに発揮してくれた。彼らが今後どのように取り組んでいくのかも非常に楽しみである。

本校の昔話学習によって育まれる歴史的概念について探ってきたが、暗記学習では重視されず得ることができない概念を獲得できることが分かった。そして、その概念こそが昔話を語る手掛かりとなり、更にはそれを基に時代や人物、社会を考えることにつながっている。本校の歴史学習を経た卒業生は、「歴史」をどのようにとらえ、取り組んでいるのだろうか。自身の教員としての経験年数を積み、いずれは研究の主題にしたいと思う。

【参考文献・引用資料】

- 『聖徳の特色ある授業』
- 場面絵・絵巻物の協力（現 5、6 年児童）

学校－保護者の協働による発表力の育成

～クラス発表会を通した知能の刺激～

小学校教諭 内藤 茂

I はじめに

「個性を尊重し、未来ある創造性を育てる」というキャッチフレーズは、今やどの教育現場でも枕詞として掲げられている。その中身や実態が千差万別であることは今さら言うまでもない。問題は大切に育まれた「個性」を、自分の将来に…社会に…どう生かすかという教育を並行して行われなければならない。

今までは子ども達の成長過程の中で、コミュニケーションが大切だとされてきた。「コミュニケーション力」が大切であることは同感であるものの、これからは、そこから一歩踏み込んで、プレゼンテーションのスキルを含めた発表力の指導環境が重要になってくると思う。すなわち、子ども自らが情報発信できる事が「創造性の発揮」につながってくると考えている。

「学級（学年）活動」というカテゴリーの実践報告では、必ずと言っていいほど「練習の時間はどう確保するのか?」「学級活動のために授業をつぶしたら本来の教科学習に支障をきたす」といった批判が付きまどってきた。

さらに、「そもそも学級活動は知能教育とは関係のないもので、児童、保護者へのサービスイベントでしかない。」とまで本校では言われてきた。

しかし「聖徳独自の教育」の成果をどういう形で子ども自身や保護者達に示していくかという方法論の問題であると考えている。つまり、教科学習を含めた「子どもの学習意欲」(モチベーション)を高め、表面上は一般的な学級発表会でも、知能を高める要素がどれだけ多く盛り込んでいるかが活動の本質である。

また、この10年で、大学入試制度の動向が大きく変わりつつある中で、学校にはデータもノウハウもないために、対策が取れずに進学を選択肢を狭めている現状もある。その意味でも小学生からの「発表力」の育成はさまざまな場面で心がけ、試行していかなければならないと思っている。

ここでは、2011年より低学年を中心に実践した学習発表会や親子交流会を例に、聖徳独自の学習を生かす発表力の育成、そして教員—子ども—親の連携ある環境づくりについて実践をまとめていきたい。

Ⅱ 振り返ると目から鱗…

【保護者の感想、意見から】

- 聖徳は学校へ来る機会が多く親としてはとてもありがたいが、学校行事や授業参観と異なり、常に子どもの新しい一面を発見できたことが何よりもうれしい。
 - クラスのほかの子ども達もどう成長しているのかがよくわかる。集団の中で一緒に成長する我が子を見て、我が子なりに個性や存在感をはっきりしていることがわかり、安心した。
 - 一年生の時は、学校での活動については主人は関心がなかった。親子交流会をきっかけに私よりも子どもとの話題が豊富になった。父親の出席率が全校で最も多いというのは、他の家庭も同じような様子であるのかと思う。親同士も子育てで交流し切磋琢磨するようになった。
 - 2年生の時の学級通信を「保存用」と「テキスト用」の2冊の冊子にして、3年生になっても時々親としての初心に戻れるようにしている。
 - 聖徳に3人兄妹を通わせたが、このクラス（3人目）で初めて、授業以外での「聖徳らしさ」「私立学校らしさ」を実感した。
- ⇒この意見は、大変ありがたい感想であると同時に、自分は上の子2人も担任を持っていることから「今まではどうしてやらなかったのか？」という痛烈な問いかけにも聞こえた。これは「目から鱗」であり、単なる

実践報告にとどめておくべきではない、と思った所以である。

Ⅲ そもそも腰の重かった自分があった

- クラスでの発表活動 → ① 日常の発表活動
- ② 毎月行うお誕生会（10回×2年）
- ③ 学期末「まとめの会」（学習発表会）3回×2
- ④ 親子交流会 2回（希望者）

【発表会の実施経過】

平成22年度（1年 しらさぎ組）

4月 入学式（5月よりお誕生会の開始）

7月 第1回しらさぎの会開催（学級通信一歩いっば No21）

（保護者の参加、24組 31名）

※そもそもは担任の相方が「お楽しみ会でスイカ割りをやりたい」ということから始まる。

※会の名称は、そのねらい位置づけに関わる。名称について議論。「七夕集会」「学習発表会」も候補であったが、結局、「しらさぎの会（まとめの会）」となる。

12月 第2回しらさぎの会（通信 No44）

3月 東日本大震災のため第3回しらさぎの会は中止

1年生最後のお誕生会…位置づけ（通信 No55）

平成23年度（2年 しらさぎ組）

5月 第3回しらさぎの会代替実施（平日開催）（通信 No107、109）

6月 親、職員の中から被災地ボランティアの志願がでる。熟慮の上、一緒に参加。その直後、親子でボランティアに参加したいという強い要望が出る。(福島県新地町ボランティアセンターで受け入れ)

4月 お誕生会、日々の発表は引き続き実施

7月 第4回・学習発表会「しらさぎ会」(名称変更)を開催

※職員朝礼で「お楽しみ会」と言われたので訂正を申し出る

※さすがに1学期に2回の実施は厳しかったが、子ども達にも親たちにも開催の意味が発展していくことをわかってもらいたかった。

講堂の予約ができずに教室で実施。クーラー全開でも室内温度42度までヒートアップした。

9月 担任相方の「クラスでBBQをやりたい。河原でスイカ割りをやりたい」の言葉を保護者が聞きつけ、世話役が中心となって親子交流BBQを実施。担任と保護者の共同提案で…という条件で承諾。

しかし、台風の影響があり2度の場所変更の末、小金井公園で実施した。子どもは2名不参加、親子で78名が参加。

※この後、世話役の中で「このような事まで世話役がやるべきではない」という批判がおきる。(それから一年が経ち、今度はその時に批判をしていた親たちが呼びかけBBQを行うようだ)

聖徳祭は、学習発表会の延長でという方針から、グループに分け「劇の展覧会」とする。

内藤自身は聖徳祭で歴史の特別研究の発表があり、最後の指導は相方の先生に任せるしかなかった。しかし、一つのクラスで10を超える劇の脚本を書いたのはもちろん初めてである。

11月 第2回 親子交流会 (親子ウォークラリー in 武蔵野自然公園)

→ 親子で78名が参加 ※保護者の感想に注目

12月 第5回 第5回しらさぎ会（幼稚園ホール使用）

さまざまな発表活動や、試合、コンクールへの参加意欲の向上

クラスの重大ニュースでの子どもの意識変化

今回で5回目を迎えた『しらさぎの会』。平日開催にも関わらず、たくさんのお母様、お父様にご参観頂き、誠にありがとうございました。改めて、両担任より心から感謝申し上げます。



2学期のまとめとしての学習発表会「しらさぎの会」では、お父さんお母さんに見てもらう為に頑張るというのはもちろんですが、今回はそこに、「自分たちがやりたいって決めたんだから最後まで頑張るんだ!」という姿勢が練習の段階から見られました。本番でもその気持ちが強く出ていたなと思いました。

リズムけん玉（ダンス）や劇は、あの短い練習期間であそこまで出来るのは本当に素晴らしかったです。個人発表もそれぞれの子どもの色がしっかり出ていました。中でも外郎売り（早口言葉）は今回一番輝いていたんじゃないかなと思いました。内藤先生もボクもなかなか見てあげられず、正直大丈夫かなと不安がありました。メンバーも特別声が大きい子が揃っているわけじゃないし…子供達だけでちゃんと練習出来たのかな？なんて心配をしつつ、いざ本番を見てみると…すごい…カッコいい…

とても堂々としていました。子どもの成長ってホントすごいです!!

3月 第6回しらさぎ会ファイナル（前半は学年で実施）

※保護者の感想、意識の変化に注目

前半はあさぎり組といっしょにゲームに興じて、楽しく過ごすことができました。後半、子ども達の発表を見ながら、「大きくなったな」と思う反面、こんな風に顔を揃えるのは最後かと思うと寂しさも…

娘が出演した劇では見入ってしまい、写真を撮るのを忘れてしまいました。ヨーヨー、コマ、けん玉の最後までやり抜こうとする姿に感動。

会は濃密な内容で、とても有意義な発表交流会でした。

クラスみんなが揃うのがきびしい中、あれだけの内容で一人一人の個性を楽しませていただきました。これでクラス替えだと思うと、惜しくて惜しくてさみしくなります。しかし、これからも一人一人の子ども達の成長を我が子と一緒に見守ろうと思います。

…劇は短期間で仕上げたとは思えない程の出来栄でした。昔あそびは難しい技ばかりでしたが、みなさん真剣に取り組んでガンバレー！ と心から応援していました。

普段は「早く成長してもらいたい」と願うことが多いですが、この日の子ども達の姿を見ると、「みんな、このまま、かわいいままで居てほしい」と心中複雑です。

ファイナル…本当にすばらしかったです。

まず合奏。先生がいなくても出だしから音がきれいにそろっていて、ていねいで力強く、これまでのクラスのまとまりを感じました。歌もとても感動しました。

学年親子交流会も、一学年の親子が集まって、あんな大人数で盛り上がるのはサイコーですね！（㊦学年の親子がそろって交流会をやったのは初めての試みです）子ども達の発表は毎回生き生きしていますが、今回はファイナルだけあって、舞台の上のせいかもしれませんが、子ども達がとても立派に大きく見えました。子ども達、みんな成長しましたね。

…「ファイナル」だけあって今までで一番良かったです。

まずは、合同で始まった合奏。2年生で木琴や鉄琴などできることがとてもすごい!その後の親子競技も意外に真剣になってしまって、子ども以上に楽しんでいたかも。(笑)

そして「誕生日ありがとう」の合唱、とても感動しました。私は娘を出産してから自分の誕生日になると、母親に対しては「産んでくれてありがとう」、娘に対しては「産まれてくれてありがとう」という気持ちを大切に、感謝しています。私の母は私を産むとき難産だったそうですが、こんどは私の出産のときは母以上の難産を経験し、出産の辛さと喜びを同時に経験しました。

そんなことを思い出しながら子ども達の歌を聞いていたら、突然、目がしらが熱くなってしまうました。

…もうクラス替えですが、子ども達には残りの時間を大切にしてほしいと思います。

少ない練習時間と聞いておりましたが、見事な出来でびっくりしました。舞台の上でも皆堂々としていて、子ども達の成長に感動しました。娘は劇を終え「緊張した〜!」と言っておりましたが、ぜんぜんそんな感じナシです(笑)

誰一人欠席することなく全員参加できて本当に良かったです。保護者の方も大勢来て(㊤全員参加!),お父さま方も多数出席され嬉しかったです! しらさぎ、最高!です

…しらさぎっ子を二年間見続けて、(他の子と)わが子と比較してしまい、落ち込んでしまった事も正直たくさんあります…。しかし今では、同い年に生まれて上手に育てられているお子さんを見て刺激と感動をたくさんいただきました。そしてわが子のニコニコした顔と胸を張る姿に、親子共々成長させていただいた二年間だったと思います。

…正直言って、去年は子どものお楽しみ会程度にしか思っていませんでしたが、子どもの意欲や成長が目に見えてわかり、立派な発表会です。私が生徒の頃あった発表会やお楽しみ会とは別のもので、これも一人一人の個性を大切にする聖徳の教育なんだとやっとわかりました。

今まで以上の厳しい練習期間で、あれだけの完成度、盛り上がりというのは普段の活動の賜物ですね。

「楽しく伸びる」そのものだということがわかりました。

また、世話役のみなさんの心配りと気配りが随所に見られ、本当に感激しました。プレゼントも一生の宝物です。こんなまとまりのあるクラスになったのも、皆さんの協力と先生方のゆるぎない信念によるものだと思います。

ファイナルというのにふさわしいすばらしい会だったと思います。実は、今回は「合同」ということであまり期待せずにいました。しらさぎの会は形が出来上がっていましたから、このような会は規模が大きくなると質が下がってしまうことがあるからです。ところが、始まってみるととてもいい出来上がりでした。

合奏と親子競技は、とてもいい組み合わせでした。楽しく過ごせただけではなく、子どもとの一体感、そしてクラスの壁を取り除くものであったと感じます。

…親子競技の際、私の足が滑りそうになってつないでいた手に力が入ると、そこからゆっくり走ってくれたN君の優しさと成長がしました。

後半の舞台の上での演技について、先生の登場率が今までより下がっていましたね。今までは先生に動かされている感がありましたが、今回は自主的に取り組み、見せる演技を意識していたように感じました。

Ⅲ それぞれの会のねらい、趣旨について

○学習発表会

【子どもの発表意欲を生かし、学校行事や授業参観ではできない発表を行う】

1. 子ども自身が自分のやりたい領域で表現を工夫することにより、学習意欲を高めていく。(英才児の自己向上性)

※素読、劇、音楽、ダンス、手品、数学ゲーム、百人一首、漫才…

※とりわけ第5回しらさぎ会の「早口言葉の群読」では、普段から手をあげない子、声が小さい子ばかりがあつまったが、その発表の完成度や終わった時の達成感は、保護者の中で涙をぬぐう方もいた。

2. 周囲の子どもとの協調性や周囲からの刺激で意欲が高まる。

※小学校がコンクールや対外試合に参加するのとは共通の効果が期待できる。

逆に「やらされている」「賞を取って当たり前」では、教育効果はない。

3. 「日常の学習や発表活動の延長」であることを認識することで「楽しく学べば、よく身につく」という原理を子ども自身が気づく
4. 保護者が自分の子どもの成長だけではなく、他の子の個性や力を認めることによって「相対的な基準」ではなく自分の子が伸びる「きっかけや時期」について考えるようになる。

5. 自由研究が個別の「創意工夫」ならば、学習発表会は集団のなかでの「創意工夫」を促す。定例化の中で「次は何をやるか」考える。

○親子交流会

【集団の中での我が子の様子を見る。クラスの我が子以外との交流を行う。】

1. 学習発表会が「学習成果」「成長の変化」を見出すのが目的であるのに対して、親子交流会は「コミュニケーション」を狙いとする。
2. 核家族の中で「母－子」「父－子」のコミュニケーションはあるが、兄弟も含めての家族で共有できる話題は学校活動の中では少ない。親子交流会を通じて、家族でおしゃべりをする（活動について、友達について…）という機会となった。
3. 親から見て、クラスのほかの子どもとコミュニケーションをとり、理解することができる。また、保護者同士の懇談の場でもある。

※ウォークラリーでは、子どもがグループで道探しをするので、父親を中心に、自分の子どもがいないグループに入ってもらった。

Ⅳ 知能教育としての実際の活動

1. 劇、創作ダンス

かつて聖徳祭では隔年で児童を行っていた。それは、「クラス全員が大きな声で正しくセリフを言いましょう」といったお遊戯会レベルのものではなく、高学年ともなれば観ている保護者、教員が涙を流すほどの名演もあった。（6年あおば、こだま組『おこんじょうるり』の上演）

現在の聖徳祭は、文化祭としてではなく音楽祭に変貌している。劇指導の教育効果を伝承するため、クラス、学年、特別研究で続けてきた。

劇の最大の教育効果は「舞台の上で他人になりきって自己アピールをする」ことだ。これは、知能訓練として、

行動 [考える材料] で 転換 [どのような情報] を 拡散思考を行う [働き]

という知能訓練である。

さらに言うならば、「言葉に思いを乗せる」ことは、あらゆる学習の基本になると言える。「言葉」ではなく行動に特化させると、創作ダンスとなる。

2. 漢文、古典の群読

平成5年の英才教育公開研究発表会では、従来の児童合唱ではなく素読の枕草子と太平記・巻二の群読を行った。事前の職員会議では「そんなものの発表したらめちゃくちゃになる」と猛反対もあったが、和太鼓のリズムの下、合唱の引けを取らぬ熱演だった。毎時間の国語の時間に素読を行っている本校だからこそできる発表である。ちなみに本校の児童は太平記が大好きで、バスの中で歌う曲がなくなると太平記を群読するほどである。

大きな声を出し意味が分からないので、記憶の因子を刺激すると思われがちだが、自分の声が自分の耳に入って脳を刺激する「聴覚」の因子である。

聴覚 [考える材料] で 体系 (全体のイメージ) を 集中思考する [働き]

近年、脳科学の成果から、知能中枢を司る前頭前野を活性化させるには音読がもっとも適している、と言われている。まさに、我が意を得たりの科学的根拠だ。高学年でいうと「詩のボクシング」も知能教育になり得るだろう。

平成26年度2年はやて組では、毎回の発表会で「素読群読」のスペシャリストが誕生し、太平記の漢文に節をつけて読み始めたのをきっかけに、自分からYoutubeを研究し、「川中島」の詩吟を朗々と演じた子どももいる。

Ⅳ 大学入試の動向を見据えて

～教員も親も馴染みのない AO 入試～

AO 入試は、もともとアメリカで生まれた入試方法で、本来は選考の権限を持つ「アドミSSIONズ・オフィス」という機関が行う、経費削減と効率性を目的とした入試といわれている。AO とは〈Admissions Office〉の頭文字を取ったもの。

AO 入試は自己推薦などに似た入試形態で、学力では測れない個性豊かな人材を求めることを目的としていて、学力よりも目的意識や熱意・意欲を重視している。選考方法は「書類審査＋面接」が最も多く、オープンキャンパスで事前面談を行ったり、セミナー受講、レポート作成、研究発表などを合わせて実施する場合があります。出願・選考方法、合格発表時期は大学によってさまざまである。選考では面接や面談が重視されます。また、模擬授業、グループ・ディスカッションといった独自の選考が行われるなど、選考方法に従来の推薦入試にはない創意工夫がなされている。

(ノレッジ・ステーション www.gakkou.com より抜粋)

※ 1991 年慶應義塾大学 SFC (湘南藤沢) が始め、本校卒業生の A 君は中学 AO 入試の 1 期生である。五輪で活躍した水泳の立石選手やフィギアスケートペアの坂本選手は現役の慶應 SFC だが、スポーツ推薦ではなく AO 入試の成績も公表されている。

※ほとんどの進学校が AO 入試の対策ノウハウを持たないために指導ができず、進路相談でも AO 受験は勧めない。現状では一部の塾、予備校の独占市場となっている。

※ AO 入試の形式で、スポーツ推薦や優先入学を行っている大学が多くあらわれ、AO 受験の低学力化が問題視された。立教、青学では AO 枠を減らし、TOEIC などの実用得点を重視する新たな制度を設けている。

AO 入試が増えてきたからといって、それにむけて「発表力をつけよ」と主

張るわけではないが、ペーパーで測る教科学習だけが学力ではないという事を前提にしなければ、「可能性を育む」ことにつながらない。

実際に東京の進学校ですら AO 入試に策を持たないのは、一年程度の指導では「発表力」は身につかないという実態を示していることに他ならない。

もちろん、ここで要求されるのは、発表のやり方ではなく、その中身であり、いつでも自分を生かす道を探すことのできる意識づけの指導である。

V クラス（学年）活動としての限界と課題

「しらさぎ会（発表会）は、子どもにとっても親にとってもとても貴重な学
ぶ機会でした。クラス替えがあり担任の先生が変わっても、ぜひ続けていた
だきたいと思います。また、聖徳祭などの学校行事の中にも将来的には『子ども
の創意工夫をいかす発表』を取り入れていただけたらと願う次第です」

（平成 23 年度 学校アンケートより・複数意見）

各担任にはそれぞれの方針があり、「指導の継続、一貫性」が課題である。

担任が変われば、同じように実施することは難しい。しかし、そもそもこう
いった活動に腰の重かった自分が、若き教師や保護者たちの熱意に動かされて
いったように教員は保護者とともに子育てに参画しているのである。担任がど
ういう方針の持ち主であれ、こういった活動の教育的意義をすでに知っている
保護者が、その面で教員を育てていくという融通がきくのも小さな本校ならで
はのものではないかと思う。

「練習時間の確保」はいまだに課題ではあるが、一年生であっても短縮授業
の一週間、朝 7:30～8:15 の練習で劇もダンスも習得できる。そもそも英才
児は興味を持ったものに我を忘れるし、目標を持てば「どうすれば達成でき
るか」を自ら考えることができる。だからこそ、知能教育なのであり教育効果が
期待できるのである。

思えば、担任を持ったら学級通信を発行するのは今や当たり前になっている

が、そのような申し合わせや内規はない。30年前は定期的に通信を発行する教員の方が少なかった。「一貫性」とは実績と歴史の中で定着すると考えている。

本校は知能教育を軸とする日本で唯一の学校である。それは、知能訓練や教科だけで行うのではなく、子ども自身が「発表の喜び」を知り、自分たちの文化を創っていくプロローグになっていく。

しょう・と〜く

平成25年度
2年 あずさ組
学級通信 No. 15
平成25年7月20日(土)

～あずさ子たちの歩み～

2年生あずさの会・七夕スペシャル



○写真左上より

素読研読
マジックショー
劇『たなばたの由来』
親子合唱『ピリプ』

※「あやとりショー」の画像や動画
があったらご提供ください。

ぼくは、特の会を楽しみにしていました。さいしょにぼくがとりくんだのは、アメリカ50州おぼえ歌です。そして、げきにもできました。げきはセリフが多くてたいへんでしたが、うけるやくだったのでおもしろかったです。ほんばんはちよつとつばいしてしまいました。友だちの発表は「そどく」がかっこよかったです。お家のかんそうは歌もげきもよかったね、といわれてうれしかったです。

きょうは、あずさの会です。自分でえらんだのは「そどく」。先生からは「先生になったつもりでどうと」といわれました。さいしょにぼくが「天は…」というので、ドキドキしました。はっぴょうのとき、ぼくもみんなもさくさくドキドキしました。でも、カンペキです。友だちのはっぴょうでは、げきを見てかんだうしました。お母さんから「すこやかだったよ。」といわれ、ぼくもすこやかだったです。

…発表会ではぼくは「あやとりショー」をやります。あやとりでしよーをやるというのが、さいしょはわかりませんでした。…練習はプレイルームでやりましたが、歩き方がとてもむずかしかったです。当日、ぼくはちよつときんちようしました。きんちようから、つり橋をつくらから、くるりまわのをわすれてしまったし、歩き方もかっこよかったかふあんでした。でも、それ以外はうまくいったと思います。

友だちの発表でマジックがありました。いろいろなマジックがあつて、みんなせいこうしてすごかったです。家にかえたら母から「おもしろかったよ。」といわれうれしかったです。

ぼくは、げきで「牛かい」になりました。れんしゅうのときは先生がきびしかったです。でも、ほんばんがおわたらきもちがスッキリしました。見ていて一番楽しかったのは「あやとりショー」です。…後略

あずさの会では、ぼくは「そどく」のはっぴょうをしました。そどくはみんなよめるけど、そどくどくぼんを見ないでよむためにいっしょうけんめいれんしゅうしました。ほんばんはきんちようしたけど、「やったぞ」という気持ちです。

ほかの人ののはっぴょうを見ました。アメリカ50しゅうの歌、みんなが後半に手をとったきもちが良かったです。マジックはキャンディーがうきあがりすごかったです。「あやとりショー」もかなりうまかったです。げきはれんしゅうがそくでとまったりしたけど、さいごはとめました。(発表会)のさいごは「ピリプ」をうたいました。

わたしは「げき」をやりました。

れんしゅうでは、うまくできていたのに、ほんばんでは前にお母さんたちがたくさんいたので、きんちようしてまちがえてしまいました。そのときは、とてもはざっかかったです。

みんなの発表を見て「あやとりショー」や岡本くんのピアノのソロがとてもはくりよくありました。

れんしゅうでは何回もしっぱいしちゃったけど、あやとりショーのほんばんは、とてもうまくできました。

あやとりショーで16だんタワーのーばんをやりました。ーばん上はつま先立ちをしなくてどかなかったけれど、くずれなくてよかったなと思います。…げきでは、西玉母がカメラ「ハハハ」といったら、おりひめ達がタイミングよくうけたのでおもしろかったです。お母さんは「すごかったね」といってくれました。

あずさの会ではマジックをしました。…ぼくは、50円玉の上の方へマジックをするのですこいれんしゅうをしました。ほんばんでもうまかったのうれしかったです。…ーばんすごかったのはげきです。牛の木下くんのセリフがおもしろかったです。

ぼくはそどくのチームです。しょうとくば「雨ニモマケズ」で自分のことば「きらわれもせず」がこころにのこりました。れんしゅうのときからきんちようしました。

きんちようというのは、はっぴょうのーばんさいしよでまちがえたらどうしよう、とおもったのと、友だちのはっぴょうがどれもかっこよかったから、じぶんはだめかもしれないとおもったのです。でも、家でママにほめられて、とてもうれしかったです。

ぼくは、げきをやりました。げきは一年生のころからやっています。りおちゃんは学校で来れないと聞いていましたが、走ってきてげきには何とか来にきました。

げきでは、セリフを一つ、友だちにいわれてあせてしまいました。お母さんのげきのかんそうは「声がとおってよかったよ」とほめてくれました。友だちの発表はマジックがよかったな、とおもいます。

子ども達の生き生きとした顔を観覧になっていただけたでしょうか? 3日の練習ですが、子ども達が目標を持ち、完成のためにできることに全力で向かった結果です。

聖徳の子ども達は「楽しい」と感じた時に、普段刺激している知能が最大限発揮されます。そして、その子らしさが発揮されます。子供ですら学習も遊びも友だち関係もうまくいってなければあのような表情はできません。また、友だちの発表も評価できるようになったことは大きな成長だと思います。(内)

皆、短い期間であれだけの物に仕上げた。なんてポテンシャルの高い子なんだかと思いました。自分が小学校の頃だったら恐らく内藤先生に怒られて逃げ出していたと思います。皆に拍手です! (谷)

しょう・と〜く

平成25年度
2年 あずさ組
学級通信 No. 31
平成25年12月25日(金)

～あずさっ子たちの歩み～

2013あずさ組 重大ニュース

- 第1位 朝ドッチ始まり、盛り上がる
第2位 谷口先生との出会い
第3位 川上先生とお別れ
第4位メジロのピーちゃん 第5位運動会紅組勝利！
第6位1君五目並べ大会優勝
第7位1君、Mさん、Iさん作文コンクール入賞
そして東嶋さん、全国審査入選
第8位みんなで心あわせた聖徳祭
第9位わんぱく相撲、F君、Tさんアベックで準優勝
第10位小金井公園校外授業 親子交流会（バーベキュー）

やっぱり、2年あずさ組を象徴したのは朝ドッチでしょう。クラス、学年を越えた広がりとなり、「朝一番の元気者はあずさ組」と全校に示してくれました。MVPは君。自分の事だけでなく友だちの事に眼が向くのがすばらしい。ちなみに内藤個人のBest5は第1位生まれ初めての駅伝参加2位冬の札幌合宿 3位約束守って朝ドッチ 4位作文コンクール連続入賞 5位温泉文化の研究（マイブーム）… デス。谷口先生の第1位は、もちろん聖徳への赴任、あずさ組との出会いだと思います。みなさんは、いかがでしょうか？

あずさの会 たくさんの声あけがとうございました！



練習期間3日間とは思えないできばえて驚きました。本当に子どもの集中力はすごいです。我が子は人前で発表するのが苦手な子ですが、ずっと劇に出続けて自信がついてきたようです。次は暗算対決にもチャレンジしてほしいと思います。

どの子も皆、堂々と自信を持って見えました。ほんの一年前、あの舞台上で入学式の写真を撮っていた姿が重なり、本当に成長が実感できました。

クラス全員での劇も、ぜひ見てみたいです。

最後の子どもの歌が良かったです。群談では、休んだ子の助け合って最後までやったことが良かったと思います。「けん玉ショー」と劇団あずさの劇も、見せ方を含めて楽しめました。

くっついて家庭では見ることのできない、子どもの姿を見られたことが何よりも嬉しかったです。我が子は「劇が面白かったので今度出てみたい」と話しておりました。「人を笑わせたい」というのを聞いたのは初めてのことです。いろいろな刺激を受けながら成長しているんだなあ、とあらためて感じた一日でした。

※まだまだたくさんのご意見をいただきましたが、みなさんの声は活動の評価としてまとめて職員の中で反映させたいと思います。

しょう・と〜く

平成25年度
2年 あずさ組
学級通信 No. 42
平成25年3月17日(月)

～あずさっ子たちの歩み～

春近し、ハナに感じる季節かな

だんだんと 春に近づく あたたかさ
今日の朝、学校に行くときコートを着ませんでした。なぜなら、今日はあたたかくなるとニュースでやっていたからです。だんだん春に近づいてるな…とかんじました。

学習のまとめ 期末テスト！！

二年間 先生！ どうもありがとう
今日で、二年生としての学習のじゅぎょうでした。しかも、林谷先生のじゅぎょうもいよいよです。私は、(えっ、かないよー(T_T))、もっと林谷先生のじゅぎょうを受けたいよー！と心の中でさけんでいました。とても悲しいですが、二年間ありがとうございました。

きょう、ゲーム工作でオリジナルゲームを作りました。ゲーム・工作では、(クラスを二つに) ゲームのはんと工作のはんにわかれます。きょうでやっとかんせいしました。ちょっとむずかしかったけれど、たのしかったです。きょうで、ぼくはゲームの時間がおわりです。

聖徳初期の頃から音楽を教えられた林谷先生がご勇退なされます。音楽係の 発声で「ありがとうございました！」という礼に、さすがに涙が光ったとおっしゃっていました。

あずさの会 ファイナルプログラム

第一部(講堂) 13:15～14:15

オープニング ピアノ演奏
群談劇『論語』 グループ発表
リズムなわとび『choo choo train』グループ発表
劇『どろぼう学校』(かこさとし原作) グループ発表

第二部(教室) 14:30～

(おやつタイムのあと)
ゆーた&かいと 歌
ザ・マジック
お絵かき歌
だじゅれショー
親子レクリエーション(校庭でドッジボール)雨天中止
ピアノ発表 (ブレイクルーム)
パイオリン発表
全体合唱・フィナーレ

※かなり盛り沢山であり、果たしてやりきれぬのか？という問題がありますが、ファイナルということで子ども達はやる気まんまんです。準備、後片付け、移動とご協力よろしくお願いします。

☆連絡とお願い☆

○月曜日には、短期訓練、地理 が最終授業となりました。
○あずさの会終了後、懇談会や終業式の日で構いませんが美術の作品(彫塑)・ゲーム工作の作品(ティッシュ箱・風)をお持ち帰りください。

しょうとく

平成25年度
2年 あずさ組
学級運営 No. 43
平成26年3月22日(土)

～あずさ子たちの歩み～

あずさの会ファイナル



原田さん(お母さん)の感想。
「ファイナルというだけあって、今までの中で一番、自主的に取り組んで楽しそうに見えました。」
そのまますばりでした。

親子ドッジは、子ども達のたつて願っていたが、こんなに盛り上がるとは思いませんでした。

我が子に当てられんやになる人、ころんで泥だらけになる人、すぐ雰囲気良かったです。

定期的に親子ドッジをやってみればよかった。(笑)



達成感

あずさ組最後の懇談会で、保護者の皆さまが「クラスの友だちからたくさん刺激を受けて、我が子が成長した」という感想をうかがい、心から「してやった!」・・・本当に嬉しかったです。

小学校の頃から「良い友」「良い先生」「良い学習環境」に恵まれ、今の教員としての自分があります。詳細は、藤井輝明著『運命の扉』をお読みください。小学校時代の教育の原点はここにあります。今になっても「楽しい」と思うのは、小学生で大半の教員が「初志を成し遂げている...」という環境の中で育ってきた自分が、教員になってめざした学級経営は「人と人」です。

人には個性や好き嫌いがあから、個人としての評価はいろいろあって仕方ないかな、と感じるところですが、とにかく、「集団の中の良い刺激」ということを軸にした一年でした。それをわかってくれる方がいたという達成感が大きいクラスでした。ありがとうございました!

自分の教育者としての師の一人にK先生という方がいます。校長退職後、千代田区の教育委員長もなさった方です。そのK先生から教わったこと...「学級がうまくいったかどうかは、子供自身が後で振り返って『このクラスでよかった!』と思える子がとりでも多いことだよ。」

その意味でも手応えがあったかな、と自己満足に浸っています。

クラス替えについて

いろいろご心配なさるの、よくわかります。しかし考えてみれば、学年で65人しかない小さな集団です。学年を1クラスと見ればポジティブに考えられるのではないのでしょうか? 実際には、子ども達は6年生にもなる、クラスの垣根は関係なくあります。これからもクラスの壁など意識されませんように。

日記(生活ノート)について

低学年ですが、その形式や内容はまさに十人十色で、個別の気持ちや受け止め方を把握したり、クラスの雰囲気をもとめていくのに大変助かりました。

元々は、担任と一人ひとりの交換日記のようなコミュニケーションツールであったわけですが、それが家庭学習の習慣につながったり、東崎さんのような素晴らしい作品につながり、というように予想した以上の大きな効果がありました。

日記を見るか見ないかは、各担任の判断によるものですが、毎日の振り返りが習慣化している子については、是非つづけて、新しい担任にお願いしてみてください。もし、子どものモチベーションが続かないようであれば、内藤にご相談ください。

朝ドッジの会について

一応クラスで取り組んでいたことであり、ドッジボールの会自体はリセットしますが、「朝、校庭で元気に活動する」とことは子ども達の学校生活の基本ですから、ぜひ続けてください。

私も、マイナス1時間目の校庭の担当は、変わらないと思います。たぶん... (笑) ちなみに、一学期通算の平均遅刻回数全校トップで低く、朝のHRで、着替えが終わらないざりぎりの子はほとんどいなかったことが、あずさ組の誇りです。

学校と家庭で..

もう、早生まれかどうかでなく、内部か外部か、などということに気をつける方はいないと思います。すでに誰が見ても聖徳の3年生としてふさわしい姿です。担任やクラスがどういう組み合わせであっても、学校の中での子ども、家庭の下で子ども達に何ができるか? ということを一緒に考えてください。

もちろん、お仕事やご家庭の事情によって時間的な制約はあるでしょうが、「協働」の姿勢は学校にとっても大切なことです。

ごあいさつ

1年間しょうとくをご愛読ありがとうございました。発行が遅れる・下校時刻が間違っているなど至らぬ点が多々あり、申し訳ありませんでした。このしょうとく、普段の子ども達の様子が少しでも伝わりましたでしょうか? 諸連絡など、解りやすかったですでしょうか? もしもよとでも皆さまのお役に立てたのであれば嬉しく思います。

懇談会でもお話しさせて頂きましたが、今年度1年間あずさ組の担任をやれて幸せでした。初任ということに甘えてはいけません。至らぬ点、ご心配おかけした点いっぱいあったかと思いますが、あちこちでわからない点が出た時、内藤先生はもちろんですが、あずさ組の子ども達、保護者の皆さまに助けられて何とか過ごせて参りました。

あずさ組の子ども達は「皆、素直でいい子!」とあずさ組の担任になって1週間たった時のしょうとく第4号に書きましたが、今ではそれに加えて「しっかし」「本音に強い」「力の強い」「先生の言いたいことがよくわかる」などなど、色々な形容詞を思いつきます。1年目でとても良いクラスに恵まれました。来年度からは、もしクラス担任じゃなかったとしても、どれかの教科でまた出会うかも知れません。またその時はよろしくお願ひします。

今までありがとうございました。(谷口 優)

親子交流会についての連絡

- ・お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ご家族の方で参加ください。
- ・お茶やジュース、デザートは役員の方で用意します。
- ・保険料(弟、妹分)は参加費に含まれています。
- ・保険申請(氏名、生年月日)がまだの方は、至急谷口まで

疾風花壇

平成28年度
2年 はやて組
学級通信 No. 7
平成28年5月28日(木)

はやてかだん

～はやてっ子たちの遊び～

親子で成功を喜び (はやての会2)



平日にもかかわらずたくさんのお客さまの御参観ありがとうございます。いかがでしたか、あの完成度…。どの発表も低学年として最高レベルのものでした。次回からはさらに金全体が盛り上がるよう工夫していきたいと思っています。

今日は学校でははやての会がふっかつ。(ぼくはげきの発表だけ) ダンスの発表がキレッキレでかっこよかったです。げきでは今日が一番めったえんぎができました。げきしたいでは、(校長) がんばったけれど、ほかのみんなもがんばりました。群読も声はきはきしててよかったです。

今日はまたにまっつたはやての会だ。(中略) げきは、7時40分からふたたびいけいだったから、いつもより30分早く起きた。でもネクタイが見つからなくて、なんとか集合にまにあった。2回目のはやての会だからきんちゃんをはしてけれど、力はだせた。うまくいったと思う。(中略) はやての会がおわったつかれとねむげがどつとおしよせてきた。この日記をかいたのめたいへんだ。でも、つぎもげきのしゅやをやりた

今日ははやての会がありました。(中略) みんなきんちゃんしていました。少ししづいしたところもあります。でも、今までが一番よくできたと思います。今までれんしゅうしてきたせいかはつきりでした。れんしゅうが大事なんだととてもよくわかりました。お父さんが家でれんしゅうしていたときより本番は動きが大きくてかっこよかった。今回はダンスリーダーとして歌田せんせいのでついでや、みんなに教えることができて、2年生になってこの日はぼくが光った一番いい日でした。

今日ははやての会でした。けん玉ダンスでうまくいかふあんでした。前、なんでもチャンピオンでたまを落としましたからです。(中略) ぼくは群読でセリフのじゅんばんをわすれてしまいました。そうしたら くんが小さな声でおしえてくれました。ぜんぶ通ってよかったです。はやて

の会のはんぶんいじょうぼくはきんちゃんしていたとおもいます。

今日、はやての会をやりました。こじん発表のトップバッターはぼくたちです。げきで くんが「くんのまねだ」というセリフをきいて、みんなげらげらわらっていました。つぎのはやての会はなにをやるかな。

はやての会、とても楽しく過ごさせてくださいました。子どもが家で毎日のように練習していて、本番を楽しみにしていました。はやての子ともみんながお互いに応援したりかばいあったりしながら楽しんでやっています。これも、とてもいいクラスだな、と思いました。

台本をいただいたときからとても楽しみにしておりました。一年生の時にいきいきと、また堂々としていました。そしてひとりひとりの個性が光る会だったと思います。

子どもが毎日自宅でも一生懸命練習しており、良い経験になったと思います。仕事を抜け出しなんとか応援にいくことができました。

我が家にとっても念願のはやての会に親子共々参加することができました。(中略) 朝、子どもは何のうたが いもなく「ないちはかならずく。今日はうーさんもきて復活! はやての会なんだ。おし、のぞみ組の人たちにもそう招待状だよ」と笑顔だったのです。はやての子、ないちん、うーさん。そして桂田先生、はやて一丸となつての想いがこもった会になったことは言うまでもありませんが、個性あふれるはやてパワーに感動しました。幼い時から知っている子も多く、その子たちの成長の大ききさ、着実に聖徳っ子に育っている姿を強く

感じました。今度は「わんぱく相撲」ですね。はやてパワーが楽しみです。

はやての会ではダンス・劇・群読、どれも一生懸命に練習した成果がでていて、とても感動しました。それぞれの個性をみることでできる会だったの四月に立ちあうことができて本当に嬉しく思っています。特に個人発表では大人がぼくを干渉しないのに自分たちであれだけ作り上げたことに驚きました。

はやての会をやり切った子どもたちはゴールデンウィークを楽しみにしています。また学校で楽しい話をたくさん聞きたいです。

第GW学校は7連休

いよいよ明日からGWです。ご家族でいかが過ごされるのでしょうか。昔の話で申し訳ありませんが、私が子どもの頃は3連休以上というのは一年に1、2回しかありませんでした。父は銀行員、当時はめずらしい長期家族旅行のために家族旅行は夏休み、年に一度の2泊3日だけでした。(ですがかえって貴重な思い出でこの歳になってもどこへ旅行したか思い出されます) 小学校5年生の時、父が仕事で失敗し東京の本社から各川岳の麓の保養所の管理人に異動することになりました。私は母、兄と別れ父と暮らすこととなり、群読の全校生徒34人の分校に転校することになりました。その当時は子どもながらに大変ショックで、今の世だったら引きこもりになっていたかも知れません。東京の生活とは何から何まで違いますが、結局、父は一年で本社に戻ることで、家族も元の生活に戻ることもできました。しかし、以来私の心の居場所はこのとき決定づけられ、今だ東京の生活がなじみません。(笑) その後5年間、GWになると父と2人で各川岳の保養所を訪れました。その父は5年前、94歳で往生しました。GWは自分にとって思いの深い連休でもあります。

疾風花壇

平成28年度
2年 はやて 組
学級通信 No. 11
平成28年5月27日(金)

はやてかだん ～はやてっ子たちの歩み～

頭の中にBGMが流れた・・・(わんぱく相撲)



朝、クラス全員で出発です。歴史がある電車が走っていた跡をぬけて玉川上水にそって小金井公園にきました。公園につくとまずグライダーを飛ばします。ゴムにひっかかってしまひなかなかとびまわりましたが、ゴムをおもいきりひっぱったら速くまでとびました。うれしかったです。つぎにクラス対抗ですもう大会をおうえんしました。大将の君がハッキョイでかわってまけてしまいましたが、団体戦は勝ちました。

午後は大きなシャボン玉をつくりました。液につけてクレーンと回すと大きなシャボン玉ができます。シャボン玉の手の付けにも成功できてうれしかったです。その後、ふしぎな森に入りヘビイチゴを見つけた。最初に見つけたのは「です」。一個一個袋に入れて、手いっばいにヘビイチゴをつまめました。楽しかったです。あつという間に帰る時間になりました。行きと違って東小金井までの歩きでしたが、最後のほうは足音がいなくなりまじ。すごかつたけれど、一日中遊べて本当に楽しかったです

郊外探検で小金井公園まで歩きました。わたしは公園についてたことに思いました。「つかれたー、足が曲がっちゃうよ」公園につくまでは、おなががすくし、かかとはいたいし、足はばくはつしうだし、たいへんでした。にもつをいいて、ゲーム工作の時間につくグライダーをあそびました。わたしのグライダーはさいしよはよくとんだけど、つばさがとれてしまいました。そして、やっとおべんとうの時間です。前日に作ったクッキーをみんなにこぼりたくて、いそいでおべんとうをたべました。さいしよに玲子ちゃんにあげました。あき先生にもあげたら、「おしい」といってくれてうれしかったです。

たくさん歩いてとてもつかれたけど、みんなにクッキーがおいしくもらってうれしかったです。

がんばって歩きました。2年生、災害時の備忘録も兼ねた、小金井公園までの往復7km。遊ぶ時間やおやつ交換の時間が待ち遠しくて途中休憩なしで歩き続けました。おしやべりに夢中になって電信柱にぶつかった子(笑)以外は問題なくいつもの何倍もの密度で活動しました。巨大シャボン玉づくりのときの子ども達の驚きの顔は、アップにしていってもいいと思います。あれだけ活動して「アスレチックもやりたかった・・・」子どもは楽しいことに貪欲です。

疾風花壇

平成28年度
2年 はやて 組
学級通信 No. 13
平成28年6月10日(金)

はやてかだん ～はやてっ子たちの歩み～

天国の幽玄先生へ 幽玄先生を母と会

ぼくは熱中していることがいっぱいあります。すもうとかオセロがとくに好きです。すもうでは一生けん命いこしても勝てないことがあって、そんなときは悲しくなります。幽玄先生はお父さんとお母さんいなくなつてすごさびしかったと思います。それでも勉強にがんばったんですね。ぼくにはお父さんもお母さんもおじいちゃんもおばあちゃんもぼくを応援してくれました。だから、うまくいかないとついてもう少しがんばります。幽玄先生に負けたくないががんばります。

わいわいがやが親子交流会



今日は親子交流会です。さいしよにウォークラリーをやりました。みんなでジャンケンをしてリーダーをきめました。ぼくが勝つてリーダーになれたのでうれしかったです。ぼくは地図をおしえるのかり、れんたろう君がクイズを教えるのかりでた。古い家を見つけたとき、ほかに古い家がないか、みんなで見ました。やっとうとゴールについて足がつくれたけどのしかったです。

ウォークラリーでは、リーダーを決めましたが、それだけでは不十分なので地図を見てせどうする係と、それぞれメンバーとぶんとんしてやっとうとでまようことはありませんでした。と中で町のふんいきが変わってきたので「ほんとうにもどれるか不安になりました。午後はドッジビーをしました。みんなもあがりまじ。ぼくはにげまわっていたママを当てました。

ウォークラリーでは子供連と一緒に歩きました。名前もわからなくなつたお子さんと触れ合いお話をすることができて、とても楽しかったです。地図を見ながら意見が飛び交い、ぶつかりながらもゴールに向かって進み、学校生活の一見を見せていただきました。いろいろな体験ができました。

初めてのウォークラリー。「地図を見ながら歩いて、クイズに答えて、なんかかっこよかった」とは子ども達の感想です。フリスビードッジはやる気満々のはやての子たちと触れ合うことができて楽しかったです。親もリフレッシュしました。

親子交流会、楽しく参加させて頂きました。自分の子ども以外と散歩することが新鮮でとても楽しかったです。みんないい子でした。交流会ありがとうございました。(ご両親参加) 子どもたちと歩くラリーは楽しく発見も沢山あり思い出になりました。○「ウォークラリー優勝したよ」「ぼくリーダーで優勝できたよ」と本心にうれしそうでした。自宅ですつと賞状をながめています

疾風花壇

平成28年度
2年 はやて 組
学級通信 No. 18
平成28年7月20日(水)

はやてかたん ～はやてっ子たちの歩み～

第3回ははやての会成功!!



今日ははやての会のほんばんでした。さいしょのシーンで、きんちょうしすぎてさいしょのセリフができませんでした。しんこきゅうしたらやっとセリフが出てきました。げきがすむとみんながんばっていて、少しずつきんちょうがなくなってきました。まくがしまつて、れんしゅうどおりにできたなあと思います。

今日は、はやての会です。群読がとてもよい声でした。国語の時間に太平記が読めなかった友だちがりにばに読んでいてすごいな、と思いました。げきでは結婚したふたりの地球人が天上界にもどされたのだな、と感心しました。そして、ぼくの踊るダンスです。みじかい練習でも、みんなで本番をのりきました。成功かな。

今日ははやての会でした。はじめての群読だったので、手に力が入って汗がにじんできました。はじめは緊張しましたが、先生のたいこの音でやる気がかわりました。

はやての会はおもしろくてたのしい。でもきんちょうします。みんながはげましてくれてほんとうにうれしかったです。みんなもうまくて、群読の人たちの声はすごかったです。ダンスのおどりもすごかったです。まくがきやくちにしっぱいしたけど、立ち直ってさいごまでがんばりました。すごいとおもいました。はやての会はさいごまでたのしいです。

3回目を迎えたはやての会ですが、どのパートもだんだんとレベルが高くなり、いよいよ幼稚園や他学年への公開も子どもたちの視野に入ってきたように思います。一週間の朝だけの練習ですが、朝ドッチを我慢しても、不満も言わずに全員が自主的に取り組むことができました。そして、2年生でも友達に対する評価が多く、一学期の成長を物語っています。保護者の皆様のご感想、そして準備の手伝い、ありがとうございました。

疾風花壇

平成28年度
2年 はやて 組
学級通信 No. 34
平成28年12月16日(土)

はやてかたん ～はやてっ子たちの歩み～

一人ひとりが主人公は…(第4回はやての会)



はやての会 ドッコイショーと あせをかく

今日はお待ちかねのはやての会でした。いつもはそうでもないのに知のうくんれんの授業が長く感じました。げきでわらって、きんちょうを熱にかえました。「ドッコイショー」とおどって、おどりとともにどっこいしょと汗をかきました。

はやての会で、ぼくはげきをやりました。げきに挑戦するのははじめてです。本番でちゃんとセリフがえられるかどうか心配でした。でも一生けんめいやって成功のまくでした。個人発表の松尾君たちや今井君たちがすごかったです。

ぼくは群読をやりました。みんなの前でやる本番では、もうドキドキしました。でも始まってしまうと、ふしぎなことにドキドキがへりました。練習より本番の方がよくできたのでうれしかったです。こんどはダンスに挑戦したいです。

ぼくはげきの剣士をやりました。今回のはやての会は、今年一番の思い出になりました。みんなすごくがんばって、すごくびっくりしてしりもちをついてしまいました。とてもたのしかったです。

まじにまじははやての会です。しかし、ちゃんが休んでしまいました。だいやくは急にれいこちゃんがやることになりました。～ちゃんはまだセリフを覚えていなかったで「これはまずい」と思いました。(本番の直前に、が練習を見てくれました) さて本番が始まっても、ぶたいうらでれい子ちゃんが心配していたので、セリフをいっしょに読みました。本番はうまくいきました。楽しくできました。今回うまくいったのは、自分の立つ位置や動きを自分で考えられたことです。

次もげきをやりたいです。

○保護者の方からの感想○

回を重ねることによる演目も、どの子ども個が引き立ち、全体のクオリティが上がっている、はやての子たちの底力とそれを信じてやり通す先生方に改めて感謝と感動の「会」でした。

一年生時の第一回目ははやての会では緊張感オーラたっぷりだった子ども達の顔が今回は緊張しつつも「やってやるぞ！」という勢いと各々が主役となり、その子ども達一人一人が手を取り合っ
て楽しんでいる表情が印象的でした。「WAになっておどろろ」を自然に合唱している姿に子ども達の素晴らしい成長を感じました。子どもは「はやての仲間とできて良かったよ！」と初めははつきりと言いました。「はやての会」を今後も続けていければいいなあ…と感動した一日でした。

今回は初めての挑戦をしてみたいと思い劇に手をあげたようです。練習では中々大声が出せなかったり動きもわからず少し悩んでいたようですが「劇にしてみよう」と言っておりました。帰宅後もサントラの帽子をかぶりゴキブリダンスを楽しく踊って
おります。どの分野もセットも衣装も本格的で一週間しかない練習時間の中これだけ完成度により限りではもったいない気がします。帰りに色々なお子さんが「次はダンスをしたい」「劇をしたい」と話していたのが印象的でした。やる気満々なはやての子達ですね。

群読は大きな声で姿勢も良くとても良かったです。劇も音が協力して作り上げている様子が伝わってきました。ダンスも皆力いっぱい元気に踊っているのははやてのパワーを感じることができました。今回も成長している子ども達の姿が見え、とても素敵な時間を過ごすことができました。

子ども達の成長とても感動しました。ビデオで何回も見直し家族で楽しみました。一人一人がキラキラ輝いていたのは言うまでもありませんが先生方のサポート本当に感謝がさります。

◎平日の午後にもかかわらずたくさんのご参観があり、子ども達も練習の成果を存分に出すことができました。ありがとうございました。2学期は作文コンクールや、ゲーム大会の優勝といった個人の活躍が多かったです。一方、はやての会では「一人ひとりが主人公となり全員が輝く」ということをめざしています。聖徳祭とは違って「自分が遊び学ぶ」わけですから、誰かが休んだらチームとしてフォローしなければなりません。その典型が「君の生活ノート」にかかっています。実際、テスト後のたった10日間であんな大人になった子がいます。それは、見ている大人（保護者も教員も）が共通して感じていることではないでしょうか？発表することだけが目的ではなく、自分なりに目標をもって取り組み、自分なりの工夫があり、なによりも楽しく学べたからでしょう。はやての子たちを見て、子育て卒業生が改めて確信を持ったこと…「子どもの可能性は未知数です」3学期の成長と活躍に期待。

◎運動会、聖徳祭、マラソン大会、ゲーム大会と行事尽くしの中で学期末の「はやての会」でした。ソーラン節では、他の先生方から「4年生で教えた時もかなり大変だったから2年生では厳しいのでは。」という声もありました。私は、はやての子たちなら必ず素晴らしいものになると信じ、そのままの型で指導しました。限られた練習の中、子ども達は期待を裏切ることなく精一杯力を発揮してくれました。会の合間合間で騒がしくなることもありました。発表が始まると食いつくように仲間の発表を見る子ども達をみて、刺激し合う姿に胸が打たれました。一人一人の絆がさらに深まった2学期だったと感じています。

疾風花壇

平成28年度
2年 はやて組
学級通信 No. 38
平成29年1月27日(金)

はやてかだん ～はやてっ子たちの歩み～

一人ひとりの思いを込める

こしは目標や願いを込めて二字熟語を選ばせました。毛筆の巧拙ではなく、「その子らしさ」をご覧ください。



今日は書初め大会がありました。僕が書く字は「知恵」です。一週間くらい前から練習をしていました。だから今回は自信があります。そしてじっさいに書いてみると、書き終わったときとても満足感がありました。賞はとれるかな？

準優勝、3位表彰おめでとう！ 努力はうらぎらない！

今日は百人一首大会の決勝戦が行われました。あいては去年3位になったくろしお4です。さいしよはよとつと差をつけられました。あいてが取るのがはやいので、ちよとこわくなってしまいました。どんどん取られて「このままでは負け」と思いました。そこで、ぼくたちは強気でいこうと集中しました。だけど、3年生は上の句5文字でとってきます。追いつけど、11枚差で負けました。来年は優勝をねらいたいと思います。

…自分ていうのもなんだけど、まさかぼく達のチームが決勝戦に進むとは思いませんでした。こうなったらどうしても勝ちたかった。でも、序盤であんなに差がつけられたことを考えると、よくみんなが粘ったなあと思います。ありがとう。応援してくれたみんなありがとうございました。

決勝戦終了後、うなだれる3人に、優勝した3年生が肩をだいて「君たち強かったよ。来年こそは優勝だな」と言っていた姿がとてもすばしかったです。

疾風花壇

平成28年度
2年 はやて 組
学校通信 No. 43
平成29年3月10日(金)

はやてかだん ～はやてっ子たちのまみ～

すいへったドッジボールコート



昨日は初めて子供達がドッジボールに取り組む姿を見て、本当に驚きました。子供の投げるボールの勢い、ボールを受け取る力強い姿、どれも私の想像をはるかに超えていました。2年生でもこんなにレベルの高いドッジボールができるんですね。帰宅後、子供に「いつもあんなに強いボールを投げたり取ったりしているの？」と聞いたら、「今日はお母さん達がたくさん見ていたから、いつも以上にがんばった。」と言っていました。この一年間、毎朝ドッジボールが楽しみに学校へ行く我が子でしたが、昨日の姿を見て成長を実感することができました。

ちょっと雨が降ると、すぐにコートの中に水たまりができます。はやての会の日もそうでした。よく見ると、ドッジボールコートのセンターラインが山型に盛り上がっているのです。つまり、1年間毎日子ども達が活動した結果、コートの中だけ砂がなくなり、土が踏み固められ、ついにはコートが壊れて凹んでしまったのです。朝ドッジは、今の5年生もやっていたと思いますが、こんなことは初めてのことです。このコートに立つと、まさに子ども達の成長が実感できます。

はやての会ファイナル…！！

のぞみ・はやての会、どの演目もすばらしく、拍手をしている時「アンコール」と言いそうになりました。これまで毎学期、はやての会の練習にやる気をもって取り組めたのも先生方のご指導のお陰です。ありがとうございました。



第5回ははやての会は大成功で幕を閉じました。ラストのソーラン節は2学期ははやての会で見たいのぞみ組と一緒に踊りたいということで合同で発表することになりました。短い期間でしたが、はやての子が率先してのぞみにダンスを教える姿は頼もしいものでした。本番では迫力あるダンスを披露し、元気な2学年にとっても合っていると感じました。同時に両クラスが一瞬になってもきつと良いクラスになると安心しました。(晶)



大好きなドッジボール！
副番で参戦！！

心の中はちょっと悔しいけど 堂々と表彰台



「発表会があるのは内藤先生が担任の時だけって本当？」というのを子どもに聞かれました。はやての会も一年生の時は教師主導で形を作りました。しかし、もはや「大人にやらされている」と見る人は誰もいないでしょう。形は定型でも内容は子ども達によってつくりあげられた文化です。「お楽しみ会」「なんでもチャレンジコン」。さらにはこの学校通信だって昔は全クラスやっていたわけではありません。子どもの文化、良い活動は形が変わってもぜひ引き継いでいってほしいと願っています。

3月1日に祖母が亡くなりその期間お休みをいただいていた。身近な人の死は自分にとって初めてのことで想像以上の出来事でした。大好きだったおばあちゃんにもう会えないという現実が暫く受け入れられませんでした。この気持ちを伝えたいと思い、学校で子どもの話を話してくる子がいまして、祖母が一生懸命生きていたことを思い出して、自分もがんばろうと思いました。

◎21日(水)懇談会では、ぜひ最後に「チームはやて」を振り返って一言(1分程)いただければと思います。

宇宙へGO!

平成30年度
1年 つばさ組
学級通信 No. 36
平成31年2月8日(金)

～平成最後のつばさ子たちの歩み～ 天まであがれ!!



工作の時間作った風を、クラスの時間に上げました。風もあり、遠く通った青空で絶好の風日和です。風系をまくのにもちょっと手間取ったものの、写真のように見事に上がりました。自分で作ったものを実際に動かす…、これはすばらしい学習です。2年生では紙の和風をつくり出すので、ぜひ、こちらも試みましょう。



今日は、学校で親子交流会がありました。(中略)・教室のホワイトボードに「親子交流会いよいよスタート!!」と書きました。始めの言葉はこのりゅうとくんです。次はいよいよお待ちかねの親子百人一首大会です。先生が「一年生のエースチームのとうじょうです。」と言われてみんなからはくしゅをもらいました。……せっせんでちましたが、ぼくは自己記録の16枚をたっせいしました。そのあとの豆まきの豆もおもしろかったです。ああ、楽しかった。またやりたい! まめまきはババもおにぎりだったので、ババめがけていっぱいまめをなげました。

宇宙へGO!

平成30年度
1年 つばさ組
学級通信 No. 41
平成31年3月18日(月)

～平成最後のつばさ子たちの歩み～ きました～!!つばさの会



先日はお忙しいなか、子どもたちのまとめの発表会に見に来てくださり、ありがとうございました。平日にも関わらず多くの方がいらして、子どもたちの頑張ってきた姿を見ることができ、嬉しい限りです。

ダンス・劇の2つに分かれて発表をしましたが、お互いお互いの良さや頑張りを認め合っている姿が印象的でした。4月には自分のことで精いっぱい子どもたちがほのかの子を見て何か刺激を受けるほどに成長し、そのスピードはすばまじいですね。

はじめてのつばさの会、たのしかった。
私はげきにしたい。あんまりはげしい音楽はにがてだから。げきはないとうせんせいがおしえてくれた。きびしいけれど楽しかった。げきでは、としぼーがしゅやくで、私はそのお母さんのやくだ。
ほんばんでは、ないとう先生はみえないところへいってしまっただけ。でも、みんなはえがおいっぱいできた。わらいがあふれた。この日が人生でいちばんたのしかった。
このつばさは、お母さん見てください。

ぼくはダンスをえらびました。ダンスのほうがおもしろいとおもったけど、げきをみたらこっちもおもしろいとおもいました。友だちのはっぴょうはいいところがいっぱいでした。ダンスはれんしゅうでうまくいかなかったこともうまくいったなとおもいます。げきはとてもおもしろかったです。みんながかんちがいしたり、ずっこけたりして、会がもりあがりました。

あなたたちは永遠に6年生です



卒業生を送る会
1年生は入学式以来6年生には特にお世話になったので思いが強いです。つばさ組は得意の『雨ニモマケズ』の群読です。両クラス、マイクなしですばらしい呼びかけでした。

学校で発生した怪我について

～平成 26 ～ 30 年度に発生した怪我を分析～

養護教諭 吉村 厚子

1. はじめに

平成 28 年度は学校での大きな怪我が多かった。そのため、平成 26 年度から平成 30 年度にかけて学校で発生した大きな怪我（病院を受診した）の内容を分析し、今後の怪我発生の減少を目指すことを目的とした研究である。

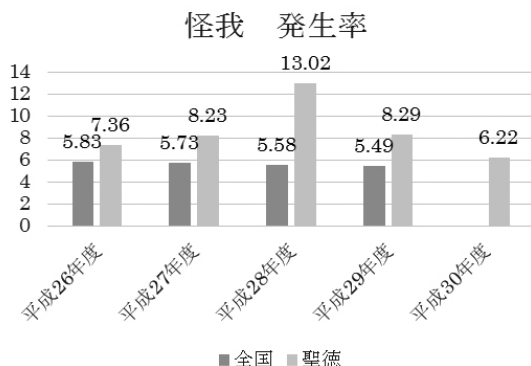
本校の児童は日本スポーツ振興センター（以下、センター）に加入している。センターには全国の学校の多くが加入しており、怪我の発生件数などが集約されている。そのセンターのデータと本校を比較した結果、本校の発生率は毎年全国平均よりも高いことがわかった。

このデータは、病院受診に至った怪我の件数であって、保健室または家庭での処置のみで病院受診まで至らなかった怪我は含まれていない。

また、この研究は平成 29 年度の個人実践研究に加筆修正したものである。

2. 本校の怪我の発生状況

2-1. 聖徳学園小学校と全国小学校の怪我発生率の比較



本校の怪我発生率は、全国小学校と比較すると毎年高い。特に、平成28年度の発生率は非常に高かった。

(日本スポーツ振興センター「災害共済給付状況」平成26～29年度より)

2-2. 怪我の種類について



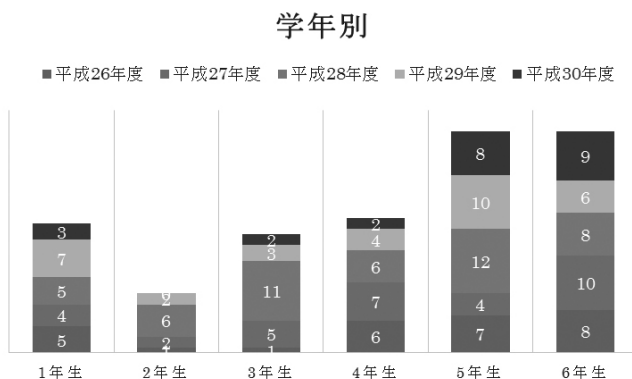
「骨折・脱臼」「打撲」の怪我が多い。骨折や打撲は、校庭や講堂での遊びや、遊びや体育の授業など、体を大きく動かす際に発生している。

裂傷や挫創に関しては、室内で怪我をすることが多いことが分かった。それは、校内での過ごし方に問題があると考えられる。

気になる点として、転倒した際に手をつくことができず、顔面を打ち付け歯を折ってしまうという怪我や、ボールを取り損ねて手の指を骨折するケースが多くなった。

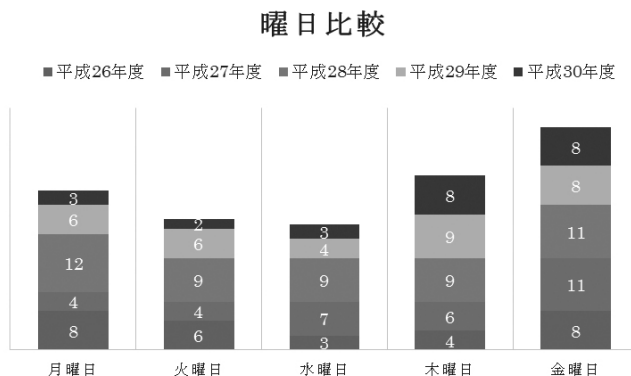
また、走っていて方向を変えたら股関節に痛みが出て走れなくなり検査の結果、剥離骨折であったなど、自分では防ぎようがない怪我也発生するようになった。

2-3. 怪我の学年別



学年が上がるにつれて怪我が大きくなる傾向ある。日常の保健室での処置では、低学年を中心に擦り傷や軽度打撲が多く、全体的には低学年の方が来室者は多い。高学年になるにつれて小さな怪我は減っていくが、動きが活発になるため、骨折などの大きな怪我が増えていく傾向にある。また、1年生にも怪我が多い原因としては、経験不足から危険回避できず怪我につながってしまったと考えられる。

2-4. 怪我発生の曜日比較

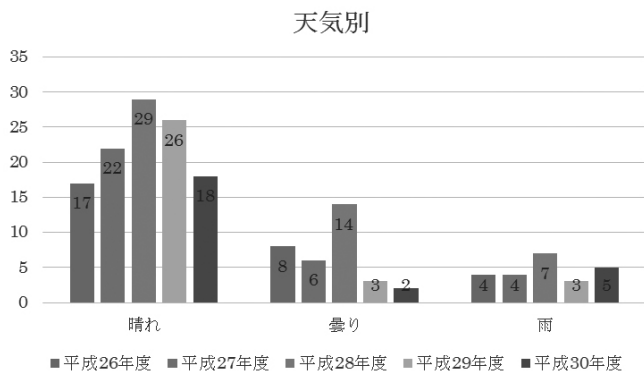


大きな怪我は週の後半に多いことがわかる。日常から木曜日・金曜日は怪我、体調不良に関わらず、保健室への来室が多い。

特に、養護教諭としての経験から「木曜日」には注意が必要であると感じている。月曜日から金曜日の一週間の児童の調子を観察していると、木曜日はちょうど「疲れ」「集中力・注意力の低下」がみられてくるデットポイントである。そのため、ここ十数年は保護者に向けて、「木曜日に一番疲れが出やすく大きな怪我や、体調不良による早退が増える傾向があるため、前日の水曜日は睡眠時間を確保してほしい」との話をしている。また、教員に向けても「木曜日は要注意で、更に天気は「雨」だと怪我の発生が増える傾向がある」ということを、その都度伝え注意喚起をしている。

また月曜日も比較的、怪我が多い。月曜日は休み明けで、気持ちの面で後ろ向きになってしまい、そのような点から怪我につながっている。

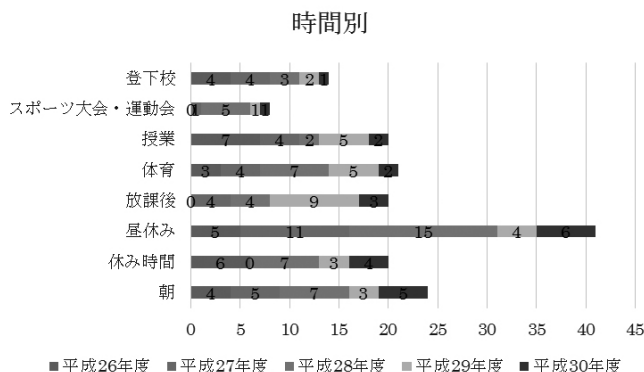
2-5. 天気



データ上では「晴れ」の日の怪我が一番多い。それは元気に校庭で遊んでいる際の怪我であり、ある程度は「元気な証拠」という点で仕方のないことかもしれない。

しかし、「雨」の日の怪我には防ぐことができるものが多い。特徴としては、雨の日は室内で過ごすことになるため、教室や廊下での動きがいつも以上に大きくなる傾向がある。例えば、教室内で追いかけてつっこをして転倒し机やロッカーにぶつけて裂傷の怪我をしてしまうことがみられる。「雨」の日は、児童の校内での過ごし方に問題があることが多いため、改善する点が浮かび上がった。

2-6. 時間



怪我が多いのは「昼休み」「朝」「休み時間」など、児童が自由に遊べて気が緩んでいる時間帯に多い。逆に怪我が多くなりそうな体育の授業や運動会、スポーツ大会など体育的行事の際は児童が緊張感をもって取り組んでいるせい、怪我は少ない傾向にある。

3. 小学生の事故

3-1. 特徴

大人は、自分の身に危険が及ぶかもしれないと予測し、また経験から危険回避することができる。しかし、子どもはその点は違い、純粹に「やってみたいからやる」といった興味の方が強く、やってしまう。そして、怪我をして初めて「危険だった」と認識する。また、友達が怪我をしたところを見て、気を付けようと自分に置き換える能力も、低学年のうちは難しいようだ。しかし、学年が上がるにつれて経験も増え、認識できるようになっていく。

3-2. 事故を未然に防ぐ

事故が起こりやすい場面とは

子どもは、大人に比べて急に走ったりすることが多く、しかも周りをよく見ていないため、怪我が起こりやすい場面や状況というものがある。

- * 児童が解放されたとき（授業のあと）
- * 児童が興奮状態にあるとき（休み時間、お楽しみ会）
- * 教師の目が届かないとき（休み時間、朝・放課後など）
- * 狭いところに児童が集中したとき（教室の出入り口など）
- * 急いでいるとき（教室の移動など）
- * 予定が変更されたとき（急な予定変更で、計画が不十分なとき）

防げる怪我とは

怪我を防ぐためには、危険を予測しなくてはならない。予測できない危険は、回避できない。怪我が起きやすいのは、子どもの気持ちが開放されたときや興奮気味の状態のことが多い。

教員は、子どもの行動から考えられる危険を予測して、その危険に対する手立てを考える必要がある。子ども達に指導すると同時に、怪我が発生した場合の対応も教員間で把握し、最小限にとどめるようにする必要がある。

怪我を最小限に防ぐ

児童の遊びに伴う怪我を防ごうと思えば防ぐことは可能であるものもあるが、そのためには児童の成長に大切な遊びを大きく制限しなければならず、現実的でない。あらゆる場面を想定し、どんなに危険を予測しても「想定外＝事故」は存在する。怪我を完全に防ぐことはできなくても、被害を最小限にすることはできる。学校の安全管理で大切なことは、事故を未然に防ぐ、または最小限の被害にするためには、次のことが必要である。

- * 学校全体を見回してどんな危険があるか想定することが、危機管理の

第一歩。

* 危険に対する正しい判断力・知識・行動力を身につける。

* 「まあいいか」の心の緩みが怪我を招く。常に緊張感を持つことが大切。

(『3-2. 事故を未然に防ぐ』：日本スポーツ振興センター「学校における事故防止の留意点」参考)

4. 事例やデータから学ぶ

4-1. ハインリッヒの法則

ハインリッヒの法則とは、「1 件の大きな事故・災害の裏には、29 件の軽微な事故・災害が、そして 300 件のヒヤリハットがある」とされている。

* 「1：29：300 の法則」とも言われる。

労働現場や医療現場などの事故防止のために使われる法則で、学校事故にも当てはまることが言える。重大な事故ほど「複数の原因が重なって」発生するため、重大事故の防止には、事故の発生が予測されたヒヤリハットの段階で対処しておく必要がある。

ヒヤリハットとは：事故には至らなかったもののヒヤリとした、ハッとした事例のこと。

4-2. 事例から学ぶ

聖徳では、怪我や事故が発生したら「事故報告書」を提出することになっている。怪我が起きた現場にいた教員が書き、校長・両教頭・生活指導主任・養護・担任がチェックする。大きな怪我に関しては、職員朝礼で担任より全体に報告されるもある。

この事故報告書の怪我は、ハインリッヒの法則でいうところの、29 件の軽微な事故から上の事故に当てはまる。

しかし、怪我を少なくするには、怪我そのものの報告も必要であるが、その下の「ヒヤリハット」事例も報告する必要がある。ヒヤリハットの時点で報告

することで、他の教員も気づくことができ重大な怪我を防いでいこうという意識や行動につながるので、「ヒヤリハット」の怪我を個別報告に終わらせないことが重要であると気が付いた。

ヒヤリハットの事例は膨大な数になる。その一つ一つを講じるのは難しいと思われるが、個別事例の報告で終わらせるのではなく、多くのヒヤリハットを引き起こしている2、3個の原因を分析し、それを取り除き、潜在的な事故や重大な怪我に発展するリスク原因を減らすことが必要である。

学校での怪我に常に接していると、怪我（事故）に慣れてしまうとことがある。「また、怪我が発生した。この前も他の子が同じような怪我をした。」という会話をすることがある。これは、怪我の前例が生かされていないことがいえる。怪我や事故を振り返ることで本来、次の発生を防がなくてはならないが、怪我が日常化することで感覚が麻痺してしまい、教員も子どもも危機管理能力が低下しているということがいえるのではないだろうか。過去の事例から学ぶことは大切である。

4-3. データを分析する

本校では、大きな怪我が発生する率が高いのは、「木曜日」×「雨」という条件の日である。この条件が重なると室内で、骨折や裂傷などが起こる可能性が高いので注意が必要である。

原因としては、「走っていた」など、やってはいけないことをしているの怪我が発生する。児童自身が「このような動きをしたら、怪我をする」ということを予測できていない怪我をする日である。そのため、教員としては、このような日は「このような怪我をすることが多くなる日だから、注意するように」と先に伝えておく必要がある。怪我をする児童は、頭で危険な状況を分かっている、それが自分のこととして捉えられていないように感じる。そこを補うのは、教員が何度も繰り返し伝えることと、児童自身の経験値をあげることである。

5. おわりに

怪我の事例は多くなればなるほど、教員は児童がどのような時に怪我をするのか予測できるようになる。教員が「もしかしたら、ここで怪我をするかもしれない」と危機意識をもつこと、児童にとって予測は難しいため、事例を挙げて「このような日は、このような怪我が増える」と繰り返し注意喚起することが大切である。

もし、怪我が発生してしまったら、なぜ起きたのか、どうすれば防げたのかということを明らかにして、教員間で共有し、怪我を減らしていくことにつながる。

また、万が一起きてしまったら組織的に対応ができるよう、備えをしておく必要もある。

教員も児童も怪我に対して意識を高め、「児童が自分で危険に気づき、自分で身を守る力」の育成を目指していきたい。

参考文献：

日本スポーツ振興センター「学校生活にいける事故防止の留意点」P91、P96～97
ハインリッヒの法則 <http://www.infraexpert.com/info/network7.html>

授業レポート

「青い目の人形」の授業

— 歓迎した子どもたちと人形を隠した人 —

小学校歴史科 長谷川和暉

1. はじめに

2年前、2年あさま組の担任をしていた時のことである。夏休み期間には、広島・長崎に原爆が落とされた日、そして終戦を迎えた日がやってくる。夏休みが目前に控えた7月のある日。子どもたちに初めて「青い目の人形」の話をした。一人でもその話に刺激を受け、戦争について考えたり、調べたりする機会をもってもらえたらというささやかな願いからである。「青い目の人形」のストーリーは、2にあらすじを掲載したが、戦争の悲惨さ、壮絶な歴史を思わずにはいられない。2年生の子どもたちはどの子もその悲劇に、よく耳を傾けていた。それから一月が経ち、9月の自由研究展において、一人の児童が「青い目の人形・ミルドレッド」を調べ、人形を訪ね、苦手だった作文を丁寧に仕上げ、持ってきた。この時点で私としては感動ものだったのだが、中身を読んで驚いた。今に残る「青い目の人形」の裏に、人形を隠し、守り、今に伝えた人の姿を見て取っていたからである。悲惨な戦争の裏側に、正義を貫き抵抗した人物がいた。この歴史を子どもたちと考えたいと心底思った。ここに示すのは、私の「青い目の人形」の見方と実際に授業参観を通して実践した授業の記録である。

2. 「青い目の人形」とは何か

「青い目の人形」は昭和2（1927）年^(※1)、アメリカから贈られた12739体の人形の通称である。日露戦争以降、溝が深まりつつあった日米関係。追い打ちをかけるように、ジョンソン＝リード法（通称：排日移民法）が制定され、

日本人を含む外国人のアメリカ移住が制限されることとなった。そのような時代背景において、日米の友好を願い、「日米友好は子どもたちから」を合言葉に、アメリカのシドニー・ギュリック博士が考案、実行した人形交流による親善運動である。日本側ではギュリック博士の動きに呼応し、実業家の渋沢栄一らを中心に答礼人形として、日本の伝統的な市松人形約 300 体をアメリカに贈った。海を渡ってやってきた「青い目の人形」は全国各地の幼稚園、小学校に届けられた。そこでは、学校や園を挙げて大々的に歓迎式が開かれた。中には、運動会の開会式に子どもたちとともに参加し、先頭で歩く子どもの胸に抱かれながら入場した人形もあった。



歓迎会の様子

しかし、昭和 16 (1941) 年 12 月 8 日。日本海軍によるハワイ・真珠湾の総攻撃が起こり、日米両国は戦争状態となった。戦局が悪化するにつれて、国内における反米感情を煽る報道や世論が過熱した。「敵性語」として、英語などの外国語の使用が制限され、生活の中から外国を想起するものが奪われていった。ついには「青い目の人形」を「敵国人形」として処分する動きが起こり始めた。毎日新聞昭和 18 (1943) 年 2 月 19 日付けの記事には、「青い眼をした人形 憎い敵だ許さんぞ 童心にきくその処分」「仮面の親善使」などの、ものしい見出しが躍った。そこでは、青森県のとある国民学校 5 年生以上の児童を対象に行われたアンケート結果が掲載されていた。その記事による結果は次の通りである。

• 破壊 (89 人)

• 焼いてしまえ (133 人)



毎日新聞記事

• 送り返せ (44 人)

• 海へ捨てよ (33 人)

• 白旗を肩にかけて飾っておく (5 人)

• 敵のスパイだと思って気をつけよ (1 人)

• 目のつく所に置いて毎日いじめる (31 人)

この報道に限らず各地で「青い目の人形」の処分を呼びかける運動が行われた。当初 12739 体が贈られたにもかかわらず、今に伝わっている人形が 300 体ほどしか残っていない事実からも、戦時下におけるこれらの人形たちの境遇がうかがえる。

3. 柏崎小学校に贈られた「ミルドレッド」の行方

新潟県柏崎市は日本海に面した海の気持ちのよい町である。ここに 8 万 5 千人が暮らしている。この小さな町にある「痴娯の家 (ちごのや)」を訪れた。館長の岩下正雄さんの祖父・庄司さんが収集した全国津々浦々の郷土玩具が所狭しと並んでいる。青い目の人形「ミルドレッド」と「ナオミ」はその中にあった。



ミルドレッドとナオミ

昭和 2 年、日米友好を願い日本に贈られた「青い目の人形」たち。柏崎にも、柏崎幼稚園と柏崎小学校にそれぞれ「ナオミ」と「ミルドレッド」が届けられた。柏崎小学校では「ミルドレッド」の歓迎式が行われ、その後は校長室に置かれることとなった。子どもたちは「ミルドレッド」に会いに、頻繁に校長室を訪れていたという。しかし、日本とアメリカが戦争に突入してまもなく、全国で人形狩りが始まった。敵国となったアメリカから贈られた「青い目の人形」を処分しようというのだった。柏崎小学校の当時校長であった角張信隆 (かくはりのぶたか)さんは、憲兵から「ミルドレッド」を守ろうと考えた

が、なかなか良い術が見つからなかった。そんな時に、趣味として郷土玩具収集を続けていた岩下庄司さんも、柏崎小学校に贈られた「ミルドレッド」への対応が気がかりであった。小学校を訪れた庄司さんに、角張校長は「青い目の人形をかくまってほしい」と訴えた。しかしながら「敵国人形」と見なされていた人形を隠し守り通すことは憲兵に目をつけられかねない行為であった。そして、角張さん自身も人形を譲り渡すことは危険であった。それでも、二人は「ミルドレッド」の処分を避けるために決断した。角張校長は、敵国人形で



岩下庄司さん

ある「ミルドレッド」を「捕虜」として、庄司さんに引き渡し、庄司さんの郷土玩具の詰まった蔵に「幽閉」することとなった。もちろん、二人の心の中では「ミルドレッド」を憲兵の目から隠し、庄司さんが大切に蔵の中で守り抜こうということであった。

戦争が終わりこの夏で74年が経つ。柏崎にある「痴娼の家」には二体の人形が今なお残されている。アメリカからパスポートを携えてやってきた二体が、90歳を越えているとは思えない。それほど保存状態がよく綺麗な姿でいられるのは、庄司さんと角張校長の必死の努力があったからに他ならない。柏崎では毎年、小学生たちがここを訪れ「ミルドレッド」「ナオミ」に対面している。

4. 学習指導の実際

これは令和元（2019）年5月11日（土）に行った、6年くろしお組歴史授業における実践記録である。

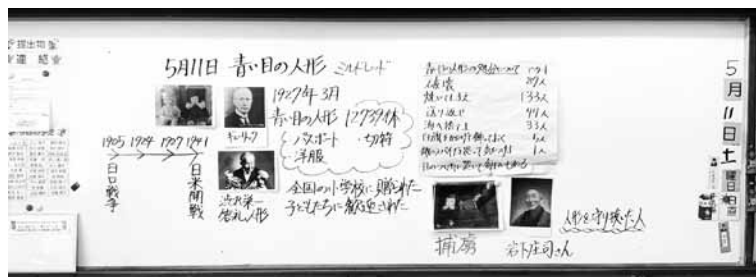
（1）本時のねらい

「青い目の人形」の歴史的事実を知り、新聞報道について資料をもとに考えたり、正義を貫いて人形を守り後世に伝えた人物の働きに気付いたりすることを通して、戦時下における国民生活についての理解を深める。また、その後の

修学旅行や家庭での自主学習における「太平洋戦争」に対する関心・追究心のきっかけ作りとする。

(2) 授業の実際

巻末に授業の逐語記録を掲載する。



2019年5月11日(土) 6年くろしお組授業の板書

(3) 子どもの振り返り

私は授業の最後に毎回、「振り返り（その日の学習を通して思ったこと・考えたこと）」を書かせている。今回の授業において、子どもたちが書いた「振り返り」を以下に掲載する。

シドニー・ギューリックは約1万2000体も日本へ送ったのでものすごく大金だな～と思った。全国の小学校で燃やすことになってしまったとき、本当の人の気持ちはどうだったのか。岩下庄司さんが守り抜かなかっただろうか？と考えると岩下さんはいい判断したと思った。(Oくん)

人形は大変なおもいで生きのびた。岩下庄司さんは人形を守った人。校長先生と岩下さんは自分の命がかかっているのに助けるなんてすごい。(Kくん)

シドニー・ギューリック博士は青い目の人形という欧米風の人形を作ることで日本と友好な関係を築こうということは、この先に良い関係が築けると思って

いたのだと思う。でもギューリック博士はその人形が日本で大切にみつかわれ
ても日本と戦争が起こることはわかっていたのではないだろうか。関係が悪化
しそうな時に送っても意味はないのではないかということ。(P くん)

ミルドレッドは、はじめは子どもたちに気に入られていたのに、きらわれ
て、焼いてしまえ、と言われたときは、人形だけ悲しかったと思います。人
形をいじめるのはひどいと思います。私はしたくないです。(C さん)

青い目の人形は人形から見ると、どんどん人形が焼かれたりしてこわいと思
ったが、岩下庄司さんという味方はいて安心したなと思っていたと思う。
(F くん)

岩下庄司さんがいたおかげで、今戦争によって、どれだけひどい事をしてい
たかや、そんな中でも、心の優しい人がいたということがとても素晴らしいと思
う。また、どれだけ大切にしていた人形でも、戦争が始まったとたんにあつ
かいが変わるのはひどいと思った。(I さん)

なんで、こうゆう戦争は悪く言うのに、戦国時代のときの戦争はよくいう
のか自分にはよくわからない。それおもうに、ただひがみだと思う。
(M くん)

日米開戦になってアメリカから送られた青い目の人形を焼いたり破かいする
なかで岩下さんはミルドレッドという人形をかくし人形を守りぬいたというこ
とはすごいことだと思った。(E くん)

シドニー・ギューリック博士は、日米の平和を考え、12739 体もつくった
のに戦争のせいで、12405 体失ってしまったのが、かわいそう。岩下さんと

校長先生は、とてもゆうきあり、人形をあいして、子供を大切におもった人だと思った。 (Rさん)

はじめはギュリック博士がしたこと、意味があったのかなと思った。しなくても戦争は起こったし、戦争が起きれば人形を処分する人も出た。人形にとっても子供にとってもむしろかわいそうなんじゃないかなと思った。でも、人形に罪がないことを分かっていた人もいた。だから少しでも意味はあったと思う。 (Sさん)

青い目の人形はもともとは友好のために送られたのに、逆の立場になってしまった為、とてもかわいそうだった。また、岩下庄司さんの人形を守り抜いた心がすごいと思った。 (Tくん)

5.2年生の「青い目の人形」の捉え

2年生男児の自由研究作品「ミルドレッドをさがして」(波線部は筆者による)より、青い目の人形をどう捉えていたのかをここに抜粋し、考えてみたい。

研究してわかったこと

お母さんの小学校にやってきた青い目の人形「ミルドレッド」とお友だち「ナオミ」は他のやく13000体のお人形と一しょにアメリカから日本の子供たちに日米友好のあかしとして送られたゆうじょうの人形の中の2体でした。2人が日本にやってきた1927年から今年で90年。ぼくが見たミルドレッドとナオミは90年もたっているようにはみえないくらいとてもキレイにたいせつにほかんされていました。そして、この2人のほかにもやく330体もの青い目の人形たちがいまもたいせつにされていることがわかりました。お人形たちはとうじあっかしていた日本とアメリカのかんけいを子供同士の友好かんけいからはじめようと、かんとう大しんさい後の日本の子供たちのためにおくら

れたゆうじょうのお人形でした。その後、そのお人形をうけとった子供たちが大人になったころの1941年、日本はアメリカとせんそうをはじめます。そのためにてき国の人形としてかなしいうんめいをたどったお人形もたくさんいたのに、その中でもやさしい心の人たちによって今でものこっている青い目のお人形がたくさんいて、その1体1体にそれぞれのものの語があり、そのお人形を通してぼくたちはこくさいこうりゅうのたいせつさや、平わのたいせつさをたくさんまなぶことができるのがとてもすごいことだとおもいました。また、どのように「青い眼のお人形^{*2}」はこのお人形たちのためにつくられたり、このお人形たちのことをうたったうただとおもっていましたが、ほんとうはぎゃくで、このうたが先にできて、このうたがアメリカでもあいされたうたであったため、このうたがきっかけとなり青い目のお人形たちをおくろうということになったのだとしました。このうたにでてくるセルロイドのお人形はおそらく「キューピー人形」のことだろうということで、ほんとうに送られたお人形はセルロイドではなくアメリカンコンポジションといわれるだき人形で、ドイツせいなどのビスクドールもふくまれていたそうです。

研究のかんそう

今回はミルドレッドを中しんにしらべてみましたが、ほかのお人形たちもきかいがあったら見にいってたくさんおはなしをきいてみたいとおもいました。それぞれのお人形にまつわるいろいろなしをとおして、へいわについてかんがえたいとおもいました。

ぼくにはお人形をおくったアメリカとおくられた日本のりょうほうの国せきがあります。アメリカのパスポートも日本のパスポートもあります。おとうさんの生まれたところは日本がはじめてこうげきをしたしんじゅわんのあるハワイです。そして日本からハワイにわたったおとうさんのおじいさんはげんしばくだんのとうかされたひろしまのしゅっしんです。お母さんの生まれた柏ざきはげんしばくだんのおとされるこうほちのひとつであったにいがたけんにあり、

げんしばくだんがとうかされるまえのよこうれんしゅう（しょういだん）でこうげきをうけ、たいへんなひがいをうけたながおかは、いつもしんかんせんをおりるおとなりの町です。今、ホノルルとながおかは姉妹としになり、まいとしホノルルのジャパン・フェスティバルでははなびでゆうめいなながおかからはなびがはこびこまれ、ホノルルのよぞらでながおかのはなびを見ることができるとお母さんは言っていました。今のぼくにはこのふたつの国がとおいむかし、こどもたちが人形をいじめてしまうほどのにくしみをもってたたかっていたなんてしんじられません。いつまでもへいわなせかいがつづきますように、ゆうじょうの人形がおしえてくれたたくさんのやさしい心をしんじてこれからも一生けんめい勉強しょうして、少しでもいいせかいがつくれるようにしたいと思いました。1体のかわいい青い目の人形さんからこんなにもたくさんの広いせかいをしり、ペンきょうをすることができて、とてもびっくりしています。

（ヤマダ淳之介「ミルドレッドをさがして」

平成30年度校内自由研究展出品作品）

この子書いているように、多くの人形たちは「かなしい運命」をたどった。一方で「ミルドレッド」のように人に愛され守られた人形もあった。対照的な事実であるが、両面からまさに「国際交流」「平和」の大切さを学び取ることができる。戦争学習は戦地の惨状を学ぶことだけではなく、こうした国民生活の中に、そして純粋な子どもたちの心の中からも考えることができるのである。

日米両国に深く縁のあるこの子だからこそ、感じることもあつただろう。「こどもたち」までもが人形に「にくしみをもって」戦争状態にあつたこと。これは今では想像にたやすいことではない。裏を返せば、ひとたび交戦状態に入ってしまうと、決して戦争とは関係のない、むしろ友好を願っていた人形に対して憎悪の渦が広がってしまうのである。子どもたちの心にさえ、影をひそませてしまうのである。人形という子どもたちにとって身近な存在である「もの」だからこそ、より引きつけて平和を、そして戦争について考えることがで

きたのではないだろうか。

最後に、この子が自由研究を通して苦手な作文に本腰を入れて取り組み、こうした立派な作品を仕上げてきたことに大きな成長を感じた。書けるようになったこの子にはいつも、「ミルドレッドが君を書ける子にしてくれたんだね」と声をかけていた。これは誇張でもなければ、空想でもない。わずか90年の間に今では想像できない社会情勢や戦争の歴史を、「2人」の人形が教えてくれたのである。このことは、人形がこの子を後押しし、自らを成長させる一つの要因になったのだと私は思っている。

6. おわりに

青い目の人形がたどった運命は壮絶である。まるで太平洋戦争における国民生活を象徴しているかのようである。しかしながら「ミルドレッド」と「ナオミ」はそうではない。角張信隆校長と岩下庄司さんの二人が守り抜いたことで今に大切に語り継がれ、愛され続けている。これらの事実が授業を通して、子どもたちの中にどのように響き、何を思うだろうか。これからも「青い目の人形・ミルドレッド」の物語を通して、戦争について考え、歴史というものを子どもたちと深めていけたらと思っている。



痴娯の家にて、岩下正雄館長と

〈参考文献〉

- ・「青い目の人形と近代日本 ― 洪沢栄一と L. ギューリックの夢の行方 ―」
是澤博昭（2010）世織書房

〈引用資料〉

- ・「歓迎式の写真」 <http://www.suginamiyoutien.jp/doll.htm>
- ・「青い目の人形 童心にきくその処分」毎日新聞記事（昭和 18 年 2 月 19 日付より）
- ・「岩下庄司さん肖像」 <http://www.colle-vill.com/chigo/outline.html>

〈資料館〉

- ・痴娯の家 〒 949-3661 新潟県柏崎市青海川 181
- ・洪沢史料館 〒 114-0024 東京都北区西ヶ原 2-16-1
- ・埼玉平和資料館 〒 355-0065 埼玉県東松山市岩殿 241-113

令和元年5月11日(土) 6年くろしお組歴史授業 逐語記録

() つぶやき < > 動作や反応の様子 C: 児童 CC: 複数の児童 T: 教師
授業が始める前、前時に取り上げた「藤原道長の長女・彰子」について、父は彰子の気持ちを含んでいたのか、彰子は幸せだったのか、を子どもたちとやり取りしていた。

日直: 起立。気をつけ。これから歴史の授業を始めます。お願いします。

T: お願いします

< T: ぬいぐるみ(ほくたん ※3)を持って >

T: なんで先生が「ほくたん」を持ってきているでしょう。予想がある人。

Nくん: 北斗の拳のことを語りたい。

Mくん: ほくたんの気持ちを汲まないで、持ってきている(T: それはそうだ。たぶんほくたんは来たくなかった)

Wくん: 今日の授業にほくたんを出そうと思ったから(それはどうしてだと思う?) 持ってきたから。

(Uくん: だからそれをなんで持ってきたのか、だって)

Dくん: ほくと組の宣伝のため(T: 先生はもうほくと組じゃないんですよ)

Jくん: 自己紹介の時にそれが必要だったから(T: 先生、自己紹介したって意味ないじゃん。もうみんな知ってるじゃん)

T: 正解は、緊張して・・・< CC: 笑う > 嘘だよ、嘘。ほくたんは世界中の人から愛されているんです。(CC: え?) (Kくん: 愛してません) やめて。ほくたんは、これはいわゆる、何ですか?

Mくん: マスコット。(C: ゆるキャラ) (C: 星)

T: 星じゃないぞ、当たり前だ。(Uくん: 綿の詰まったもの) < CC: 笑う >

T: それ言うんだったら、クッションとかいうよな。でもクッションじゃないんだ、顔ついてるんだから。

Mくん: 布(T: え、ちがうわ)

T: こうゆうのを何かと言うと、ぬいぐるみ、とか人形とか言います。(Nくん: あ、先生人形の写真持ってきてる) 今日は、人形の授業をするので、一応ほくたんの気持ちを汲むことはなく、連れてきてしまいました。ちょっとかわいそうなんで、裏に置いておきます。

T: あ、ちょっとね、新しいお札3人、1人でも言える人。

Mくん：渋沢栄一

Qさん：北里柴三郎

Nくん：与謝野晶子（T：それはちがうな）

Xさん：津田梅子

T：今の3人の中でやったことと言える人。この3人の中で。

Uくん：北里柴三郎は、北里研究所をだっけ（T：なんの研究所だっけ？）細菌。（Oくん：チフス）

Wくん：日本銀行をつくった人

Dくん：日本に資本主義をすすめた人

T：じゃあここで整理します。渋沢栄一は、銀行、資本主義。津田梅子出てないじゃん。

Bくん：津田塾大学（T：津田塾大学。津田英学塾の前に？）

Uくん：最年少で外国に行った。

T：えっと、お札になるポイントは何でしたっけ。一点。

（C：外国との・・・）T：外国との？（C：貿易）（C：関係）

T：外国との交流、功績がある人でしょ。津田梅子は、留学。そして、北里柴三郎は破傷風の研究をして世界中の病で苦しんでいる人を救った。渋沢栄一は？

Mくん：日本銀行で（T：日本じゃん）お金をガッポガッポ・・・（T：日本じゃん）お金ガッポガッポで

<CC：笑う>T：それ言いたいただけじゃん

Wくん：貿易のためのお金を出していた（T：それはあるね）

T：国際的に何か、活躍したこと知っている人？

<CC：・・・>

T：いないでしょ。いないと思ったんですよ。先生いないと思ったので（Nくん：先生、それやめてください。）あ、ごめん。（Kくん：だったら何で聞いたんですか）知らないと思ったから。<CC：笑う>はい、今日のテーマは<白板に「5月11日 青い目の人形」と板書する>

Nくん：え、夜の人形ってちょっとやばいでしょ。

Kくん：おれ無理だ。こわい。

Mくん：なんだ。かわいいじゃん

T：青い目の人形聞いたことある人？（CC：何人か手を挙げる）その話を今日はちょっと、やります。

こわい話、かもしれないです（C：先生、こわい話無理です）

T：これですく「青い目の人形」の写真を見せる> (C：だめだ、こりゃあ)

T：だめなやつではないけどね (C：いやいやいや) (C：こわ～)

Kくん：夜さ、歩いてたらさ、それがいたら結構・・・

T：青い目の人形は、アメリカ人の、シドニー・ギューリック博士という人が、日本とアメリカの関係がすごく悪くなったので、日米の平和と友好のために、日本に人形を贈ることに決めました。

(Uくん：え、こんな怖い人形を) つまり、いつのことでしょう？日本とアメリカの関係が悪くなって・・・

Nくん：1939とか(1939、イメージある?) 日中戦争とか

T：日本とアメリカは戦争を始めて、いない？いる？(C：いない) まだ始めてない頃じゃないか。同じ人、まだ日米は開戦していない頃じゃないかなって人？いや違う人

Wくん：GHQが来た時(T：つまり、それはどんな頃?) 戦後。

T：戦後じゃないかなって人(Uくん：もう終わってね) 見当がつかない人？

(Kくん：戦争が始まる直前)

T：明治38年、日本はロシアとの戦いに、陸軍と海軍で、まあ陸軍は大きな損害を出して、海軍は大勝利をして、でも結果的に、その日露戦争は、日本が一応、アメリカの助けもあって、戦勝国になりました。そうした時に、日本が狙っていたのは、中国の東北部の満州とか、朝鮮半島だったんです。でもそこを狙っていたのは、日本だけじゃなくて。ロシアもそうだし、だからロシアと戦ったんです。もう一つあったんです(C：アメリカ) アメリカだったんです(Nくん：あんな遠いの)に日本が戦争に勝ったために、アメリカとの関係が一気に悪くなりました。

<T：白板に年表図を書く>

T：1905年。日本がロシアに勝ちました。(Uくん：日露戦争) 露、ちょっと難しいんで、カタカナにしておきます(Kくん：え、何か変な感じがします) いい。いい。

(Kくん：にくち戦争じゃん)

T：1905年のあと、日本とアメリカの関係が悪くなったために、アメリカの国内で、日本人の移住者をちょっと、制限しましょう。ついには、1924年。大正12年・・・大正13年。ついに、カリフォルニアから、日本人が追い出されました。日本人は、排除されました。(C：え、殺されたの?) 殺されてはいません。もうここには住んじやいけませんよって。そういう風にして、日本とアメリカの関係はかなり悪くなりました。そこで出てきたのが、シドニー・ギューリック博士。1927年、昭和2年のことです。日米関係がこのまま悪くなるとは、まずい。ので、ギューリック博士は、平和をつくる

には大人になってからでは、遅い。日本とアメリカの関係をよくするためには、まず、
（Uくん：子どもに人形を贈ろう）子どもたちから。子どもたちに人形を贈って、子ども同士の交流をスタートさせて、そこから、関係を深めましょう。（C：それ日本人全員のところに・・・）ギューリック博士が、青い目の人形を日本に贈ることに決めました。その数、12739体。（Uくん：それって自分で払ったんですか）そうです。

（Mくん：それ、人形が贈られて、贈られたら、呪われるんじゃないですか？）

<T：白板に「1927年3月 青い目の人形 12739体と書く」>

T：なんでギューリック博士、3月に贈ってきたのでしょうか？

Bくん：新学期が始まる

T：今ね、一人だけぼそっと言いました。一人はね、わかってます。3月は、なぜ3月に

Sさん：ひな祭り（T：ひな祭りがあって）

Mくん：人形ってさ、男よりどっちかって言うと女じゃないですか。（T：はい。はい？）

ひな祭りあるじゃないですか。ひな祭りってあの、人形を身代わりにするじゃないですか。

T：え、ごめん。そういう行事なの？<CC：笑う>昔のひな祭りって、あの自分の呪いとかをこの人形に全部がっとなって、でボキッとやって、川に捨てるのが元々の・・・

T：なんだ、その川に流すってのは何となくわかるんだけど、そのボキッはどうか？

<CC：笑う>

Rさんは、どうして？

Rさん：子どもの日？（C：それは5月）

T：でもさ、ひな祭りってのはさ、ある意味、子どもの日でしょ。3月に合わせた理由は、ギューリック博士が日本に留学していた時に、子どもたちが人形をかざるのは、3月だって知ってたんだ。12739体が横浜港にやってきます。（C：夜に？）（Kくん：それなら来てほしくない）

T：青い目の人形を、君たちは・・・本当に友好のためにやってきたんだよ。旅行する時に必要なものがあります。（Nくん：旅行？）アメリカからやってくる時に、必要なものがあります。

Uくん：パスポート

T：パスポートがあります。青い目の人形は全部、一人一人、一体一体、パスポートを持っています。

名前。（C：アンジュリー）（Jくん：キャサリン）<CC：笑う>名前つけろって言っ

てないんだ。名前と、何？（C：生年月日）生年月日。みんな同じ。（C：住所）住所。住所というか、生まれた場所。なにになに州とか。すべて英語で書いてあります。あとは人形の特徴。目の色。全部ブルーって書いてあります。あとは、髪の色。ブラウンもあれば（Jくん：赤）レッドはわからない（Uくん：白）金髪はあるかもしれない。そして、鼻の形。だいたいね、スモールとか書いてあります。たぶん、ビッグはないと思います。＜CC：笑う＞一人一人がパスポートを持って。そして、旅行をする時にパスポート必要だけど、もう一個必要でしょ。（CC：えーと）（Mくん：お金）お金は必要だけど。お金じゃないでしょ。

Kくん：着替え。

T：どうしてそう思った？

Kくん：え、汚くなるから。

T：ちょっといい。このKくんの感覚が必要だよ。人形って、ずーっとおんなじ格好、君たち、同じ服着てないでしょ。（Mくん：いや・・・）（CC：ええ）はい。人形も2、3着、ちゃんと洋服をつけてくれました。あと必要なものは？

Mくん：歯ブラシ（T：はい。歯ブラシ、本当はほしいよな）

T：君たち、じゃあここから、旅行に行きます。今からアメリカの、ニューヨークに行きます。パスポート必要。あと何？（C：ケータイ）（C：スマホ）いやいや。これなかったら無理ってやつあるじゃん。（C：マネー）（C：おれ言った）マネーじゃあない。食べ物はどうなんだけど（Rさん：カメラ）カメラないとだめ？

Mくん：飛行機のチケットじゃないですか。

T：そうです（C：あー）しかも、片道です（CC：え？）片道の切符だけをつけてやって来ます。

（Kくん：かわいそう。絶対帰れないじゃん）

＜T：白板に「パスポート 切符 洋服」と書く＞

Nくん：え、飛行機で来るの？横浜港だから、船じゃないの？

T：船の切符。

T：さあ、ここで授業の最初に確認した、あの人が出てきます（C：ほくたん）ちがうよ。（C：津田梅子）なんでここでほくたん出てくるんだよ。渋沢栄一が何に関わったのか。

＜渋沢栄一の写真を見せる＞

T：この人持ってるの、何でしょう？

（CC：青い目の人形）（Mくん：青い目の人形と日本人形）

T：何したと思います？（C：解剖だ）この人は、学者じゃないです。

Jくん：遊んだ！

T：遊んだ？<CC：笑う>（C：子どもと一緒に遊んだ）この時ね、この人90歳くらいなんですよ。（C：日本風に変えた）

T：日本風・・・青い目の人形を？<CC：笑う>

Mくん：あれじゃないですか。なんか、ねじとか取り出して・・・

T：それさ、鉄砲の話でしょ。※4 <CC：笑う>

C：売ってお金にした（T：ちがいます）

Wくん：日本銀行にきた人に一個ずつあげた。

T：え、君たちは贈り物もらったら、どうしますか？（C：あげる）<CC：笑う>

T：待て待て（Nくん：マスコットキャラクターにする）ちゃんと答えられる人ね。

T：Oくん、君さ、贈り物もらったらどうする？

（Kくん：使う）T：当たり前だけどさ。（Oくん：Kに以下同文）

Aくん：別のものを贈り返す。

T：そうだよ。プレゼントに対して、まず感謝とか、お返しするでしょ？渋沢さんがしたのは、人形の交流。平和のために、日本の人形を贈り返す。まあ規模はね、アメリカに比べたら少ないよ。何百です。何百の単位ですけど。渋沢栄一がやったのは、人形を返します。

<T：白板に「ギューリック 渋沢栄一 答礼人形」と書く>

T：「答礼」ってわかる？漢字でわかるよね。お礼をする。答える。贈り物に対して、答える。（Mくん：日本人形じゃないですか？）T：日本人形です。伝統の。

T：はい。では人形が来ました。12739体もあったら、全国に配れるでしょ。全国の幼稚園・小学校に配ります。この辺でいうと、成蹊小学校に贈られました。聖徳はまだ、関東中学だったので。関東中学も、始まりだから。まだ開校していないんでね。成蹊には来てました。全国に贈られた人形たちは、どうなったのか。こうなったんですね。

<「歓迎会の記念写真」の写真を見せる>

（Nくん：あ、学校の一員）

Nくん：学校の人になった。（C：生徒か）（C：動かない人）（C：飾りものになった）

T：ほかの言い方は？

Dくん：入学した（Uくん：どういうこと？人形が入学？）

T：今のところ、おなんじだね。<T：写真をかかげて>これ、どういうこと？

(C:よく見えないです) T:見えない。真ん中になんて書いてあるでしょう?誰か、漢字博士いない?

Pくん:歓迎の「迎」はわかった。

T:おお。「歓迎」。こういうの、なんて言うの?(Uくん:祝賀会)

T:そう。「会」でしょ。「歓迎会」。人形たちは、全国の幼稚園・小学校で、歓迎会が開かれて、みんなにお迎えされたんです。つまり、子どもたちはどういう気持ちだった?

(Uくん:うれしい) T:うれしかったし、どうなりたかったの?(Jくん:見たかった) 見たかったし、何したい?(C:さわりたい)(C:お守りにしたい) さわりたいでしょ。ごめん。一度、もう一回来てもらっていい?あ、あんまり。<教卓の裏からぬいぐるみを取り出す>(Kくん:だから先生はさわりたいだったんだ) これ、ほくたんですね、こんな色ではなかったんです。もうちょっとはじめはですね、黄金に輝いていたんです(C:うそだー)<CC:笑う>ほんとほんと。本当だよ。それがね、いつの間にか、なんか触られすぎたりとか、噛まれたりとか<CC:笑う>ほんとほんと。本当だよ。かんだ、いるんだよ。あと、ここに穴開いてるのはなぜかってね。いろんなことがあって、こういうちょっと悲しい色になってしまったんです。

<T:ぬいぐるみを戻す>

T:子どもたちは、人形きたら触りたいでしょ。本当に歓迎していたから、毎日、置かれている例えば校長室とかそういう所に通うんです。校長先生こわいでしょ?(Kくん:絶対行かない) この時代の校長先生、だいたい、超恐いです。戦前ですから。ほとんど子どもが校長室行くことなんて、ない時代に、人形に会いたいのために、行っちゃうんだ。みんな(C:あーばかだ)

T:ばかではないよ。(Kくん:で、怒られるんでしょ?) 怒られないよ。(CC:え?) 人形のためだったら、校長先生も優しくなるでしょ。

<T:白板に「全国の小学校に贈られた 子どもたちに歓迎された」と書く>

T:Bくん(Bくん:はい?) 君の想像で、この後1927年のあと、どうなっていく? Bくん:満州事変とか、日中戦争とか、大東亜戦争とかが起きて(T:戦争が起きて)え?

T:戦争が起きました?<Bくん:うなずく>このあとの話、だいたい想像がつく人? Wくん:日本が満州に行って、線路を爆発させて、勝手に中国のせいにして、日中戦争が始まって、太平洋戦争が始まって、日本が負けて・・・

(T:それ、戦争の歴史ね)

Mくん:リットン調査団を送られて、日本はもうふざけんじゃねえってなって、でアメ

リカとの外交がおかしくなって、で戦争になるはいいいけど、負けて、なので、外国と仲が悪くなる。で、青い目の人形は、焼かれると思うんですよね（Ｔ：なんで？）え、アメリカふざけんじゃねえって。

Ｔ：え、意味わかる人＜Ｃ：数人手を挙げる＞意味わかんない人。

＜Ｃ：数人手を挙げる＞

Ｔ：焼かれる・・・まあちょっといきましよう。

＜白板の年表に「１９４１年 日米開戦」を書き加える＞

Ｔ：昭和１６年、１２月８日。日本時間だと、朝の３時。現地のハワイは朝の７時半（Ｍくん：じゃあ朝食食べてるな）日本の海軍は（Ｃ：真珠湾攻撃だ）アメリカのハワイの真珠湾に攻撃をしました。そこから日本とアメリカは戦争状態に入ります。日本の国内では、アメリカを想像させる、イギリスを想像させる、ソ連を想像させるものは、すべて、なくしたい。っていう風になります。たとえば、鉛筆の芯は「Ｂ」とか言うでしょ。「ＨＢ」とか言うでしょ。これはアメリカを想像するので、変えましよう（安生：あ、野球でも）ＨＢとかは、「硬」。硬いです。Ｂは「中庸」、真ん中です。そういうようにして、名前を決めたりとか。まあ、一番ひどいのは、野球ですね。「ベースボール」は、（Ｊくん：あ、ストライクはよしだ）ストライクは、よし。ボール球は、だめ！よし、だめ。（Ｃ：ホームランは？）ホームランは、本塁打。えーついにですね、（Ｕくん：遊撃手）巨人に、あの巨人ファンいますか？＜Ｃ：３人が手を挙げる＞

（Ｃ：あ、Ｏだ）巨人の伝説の選手だれよ。（Ｃ：沢村栄治）沢村栄治は、戦地で手りゅう弾をバーンと投げて、肩つぶれちゃったんだよね。で、伝説の選手って？

Ｏくん：長嶋。

Ｔ：長嶋？まだ・・・戦前の話だよ。戦前の伝説の選手がいます。名前はですね、ソ連から亡命してきた大投手。ヴィクトル・スタルヒンと言います。歴史特研の人はですね、今年スタルヒンのお墓、行きます。

Ｂくん：え、お墓どこにあるんですか？（Ｕくん：多磨霊園）

Ｔ：多磨霊園にあります（Ｎくん：え、まだ行ってないよ）はい、去年は隠してました。えースタルヒンは、「スタルヒン」という名前が、外国を想像しますね？なので、名前を変えます（Ｃ：え？）

「スタルヒン」改め、「須田博」＜ＣＣ：笑う＞これ、ひどい話ですよ。「須田博」ほんとに。ほんとだよ。

Ｎくん：え、じゃあ「ビハリ・ボース」はどうなるんですか？

Ｔ：「ビハリ・ボース」なんかも、わかんない。「ぼうず」とかになるんじゃない。

<CC：笑う>そんなわけないな。で、たとえば楽器とかも、「サックス」とかは例えば、「金属性先曲がり音響出し機」とか。<CC：笑う>だれが、言うと思う？そんなふざけた名前になるんですよ、すべて。今、いろんな街歩けば、英語とかアルファベット、たくさんあると思うんだけど、ああいうのすべて、変えたんですよ。そういうのを想像しないために。そういうような時代になってきた時に、さあ、青い目の人形。Mくんは。Mくん：焼かれる。

T：焼かれるんじゃないか。

Dくん：戦地に落として、嫌がらせをする。

Wくん：全部焼かれた。

T：悲惨な運命になるんじゃないかって思う人？<C：クラスの半数ほど手を挙げる>

T：いや、ちがうんじゃないかって人？<C：Lくん・Pくんだけ手を挙げる>あれ？

T：じゃあね、えーっと、新聞があります。これね、毎回君たちに紹介するのは「毎日新聞」ですね。なぜか。毎日新聞はスクープが早いんですね。(Mくん：毎日だから) ね、毎日出してるから？それ、面白いね<CC：笑う>

T：毎日新聞、昭和18年2月19日。青い眼をした人形、憎い敵だ許さんぞ。仮面の親善使。本当は親善使じゃなくて、それはただの仮面だった、と。童心にきく、その処分。童心というのは(C：子ども) 子どもの心にきく、その処分。青森県のある小学校の、小学校じゃないな、この時代は・・・小学校じゃなくて？(C：初等科)(C：学童) 少国民というから、国民学校。国民学校5年生に、毎日新聞がアンケートを取りました。その結果がここに、あります。

<T：アンケート結果の模造紙を巻いた状態で白板に貼る>

T：ちょっと、これは最高級の資料なんで。ちょろっとずつ出します。とか言って、ばあっといっちゃったらまずいな。(Uくん：最高級って、先生が作ったんじゃない) (Kくん：それ先生が書いたやつじゃないですか) <CC：笑う>いいじゃん。

(Nくん：先生、字きたないから)

T：これ、一応(Nくん：先生うまいね、やっぱり) これ、ああ、ありがとう。<CC：笑う>最初ですね、89人「破壊」(C：あ～)(Uくん：何人中ですか?) 笑うのはどうということ？

<模造紙を順番に開いていく。「焼いてしまえ」133人 「送り返せ」44人 「海へ捨てよ」33人 「白旗をかがけて飾っておく」5人 「敵のスパイと思って気をつけよ」1人>

(Kくん：悪いのしかないじゃん)(Mくん：いや、送り返せはまだいい)

T：白旗ってどういうこと？（C：降参）降参で～す、アメリカ。っていう風にしとけと。

<最後の1項目を折り返し、隠す>

（Nくん：このままだとさ、Mの予想が当たるじゃん）

T：この最後が、まだ一個あります。残りですね、もう1項目あって、毎日新聞の中にも、この順番で書いてあるんですよ。昭和18年、2月19日。その時代はもう日本、負け戦になっていて、ガダルカナル島で、補給の船がもう届かなくなって、ほとんどの兵士が食べ物なくて死んでしまうっていうような、かなり悲惨な戦局になっていましたが、日本国内ではこういうアンケート結果が出ました。最後の1項目は、31人が答えた。はい、どんなことでしょう？

Dくん：お菓子をつめて送る

Nくん：その、ガラパゴス島？（Uくん：ガラパゴス諸島）（T：それはさ、世界遺産でしょ？ガダルカナル島）そのガダルカナル島に送る。

Mくん：地下室にぜんぶ閉じ込める。（T：え、それどういう意味？）え、だから、監禁して、祭壇に飾っておくっていう。（T：つまり、ということなの？）え、見えないようにする。（T：それは、なんで？）もう、アメリカ嫌いだから。

T：嫌いだから、監禁すると。全然ちがう人。

Eくん：中身を抜いて・・・・・・にする。

T：31人、このあととも悲惨なことが書いてあると思う人。

<C：5人ほど手を挙げる>じゃあ、ちがうと思う人。

<C：クラスの半数以上が手を挙げる>じゃあ、言える人。想像でいいです。

Qさん：うーん、なんか大事にしておく。

T：近いなって人。<C：Rさん・Sさんのみ手を挙げる>いや悲惨じゃない？って人。

（C：先ほどより増え10人ほど）実はね、今日こー一番山場なんです。お母様、お父様方、ちょっと手を挙げてもらってもいいですか。残り31人が答えている項目があって、それは「悲惨なことが書いてある」か、それとも「大切にしまうとか、大切に・・・何だっけ？（Gさん：とっておくとか）とっておく、ような内容」か。じゃあ「悲惨なことが書いてあるんじゃないかな」という思われる方。<保護者：手を挙げる人皆無>いや、大切に、っていう風な・・・<保護者：全員挙手する>（C：えええええ）

<CC：笑う>

T：今、みんなと、お母さんお父さんが対立しています。

Nくん：だってさ、先生がさ、隠してるのはだいたいさ<保護者：笑う>その反対のこ

としかないじゃん。＜CC：笑う＞

T：え、じゃあ君はどういう答えだと思うの？

Nくん：だから、大切にしまっておく。

T：え、何。先生のこと気付いてるの？だんだん＜CC：笑う＞隠すってことはだいだい（Kくん：ありえるよね！）

＜T：「歓迎会の記念写真」を持って＞

T：この人形を抱えている、（C：かかえてるの？）かかえてないか。かかえてるよね、この子。

＜T：記念写真の真ん中の子どもを指さす＞

T：人形を抱えているこの子は、この年＜T：1927をさす＞から14年たってますから、もう子どもではないんだけど、もしこの子がこのアンケートに答えるとしたら、何答える？（CC：大切にする）大切にする、だよ。大切にする以外、思いつきます？

Mくん：例えば、その子が軍人になって、で・・・

T：ちょっとやめよう。（C：あ、預かる）

T：預かる。（CC：ああ）

T：この子がもしいたら、なんて答えるかな、ってのあるよね。えー実を言うと、これも関係ないんですけど、人形をもらって、大切にした子どもたち。14年後は、例えばこの時、10歳だとしたら、24歳です。男の子は、アメリカから来た人形を歓迎した14年後は、そのアメリカと戦っているんです。これ、意味わかる？・・・ね。

T：まあ気になるよね。31人が答えたのは、＜T：最後の項目を開きながら＞

（Kくん：え、それはないでしょ）（Bくん：いじめる・・・）＜CC：笑う＞

（Mくん：ほら、悲惨だよ）

T：まだ君たちは、先生のことわかってないね＜CC：笑う＞

T：最後の項目は、31人が、「目のつく所に置いて、毎日いじめる」と書いたんです。

（Nくん：それさ、ストレス発散じゃないですか）この事実はさ、みんなどう思う？

（C：わざと書いたんじゃない・・・）（C：まあまあ）（Mくん：頭いいと思いますよ）

T：この子たちは、戦争によってそんなに心が変わったのかな？

Bくん：国に威圧をかけられて、（C：やらせ、やらせ）（C：ああ）（C：非国民になっちゃう）処分することしか書けない。

T：国の圧力で。

Wくん：これを書いて、目のつく所に置いて、毎日遊ぶってことなんじゃ。

T：本心は？（C：遊びたい）目のつく所に置いて、毎日？（C：遊ぶ）

遊ぶって意味で、書いてる。じゃあ、なんで「遊ぶ」って書かないの？

（Lくん：そう書かないと、非国民だと思われるから）

Wくん：書いてないから、本当は家に持って帰って、本当は遊びたいけど、一番近いのを選んだ。

T：これね、記述式なの。つまり、「破壊」「壊す」に近い意味合いで書いているのは、全部「破壊」なの。つまり、子どもが「大切にしよう」って書けば、ここに1が書いてあるはずなの。書いてないわけでしょ。（C：言えなかったんじゃない）言えなかった・・・。

Mくん：新聞記者が、書いてあったけど、なんか国の人に、罰せられたくないから、

（C：ああ）新聞記者の人が・・・だから（C：あ、消したんだ）

T：そう？

Mくん：それか（T：それか、はい）先生に、書くじゃん。やられてく西尾：叩かれるまねをする＞書き直される。

T：ああ、そういうこともあったんじゃないか。（Kくん：最悪じゃん）まあ若干、不自然な感じもするけどね。えー実際に、こういうアンケートがあって、全国でいろんな処分がありました。今、日本中に残っている青い目の人形の数、（Bくん：だけど、あそこに貼ってある）最初、12739体いて、今全国にですね、334。（Bくん：あ、そろ目じゃない）（C：一体）そっちじゃない＜CC：笑う＞334、つまりどういうことがあったか。

Nくん：だいたい、破壊とか。

T：だいたいが処分された。誰が処分したの？（C：国）（C：先生）

T：国だけが、処分したのかな？（Kくん：先生）

T：先生が処分した。（C：子どもたち）子どもたちが処分した。

Wくん：毎日新聞社の社員。（T：新聞社、そんなにいろんなところ行くの？）

T：子どもたち、処分したんじゃないかな、って思う人。＜C：クラスの半数弱が手を挙げる＞じゃあ、ちがうと思う人。＜C：誰も手を挙げない＞そうだねえ。戦争っていろんな面があるからね。もしかしたら、実際にアメリカと戦ってお父さんが帰ってこない子がいたとしたら（Mくん：ふざけんなって感じ）ね、かもしれないし。あとはもう、お国のためってずっと言われてたから、捨てるのが当たり前になってたかもしれないし。いや、子どもの気持ちはそれこそ汲み取らずに、大人が捨てたかもしれないし。そういうアンケートがありました。でも、334体が、残っているわけだよ。そこの不思議をちょっと、（C：ヒストリーミステリー）これが、ヒストリーミステリーだよ。

(Nくん：名前変えてくれない)(Bくん：ちょっとださい) いいんだよ。

<「ミルドレッドが引き出しに入っている写真」を白板に貼る>

T：えーこれは何の、何を表しているでしょう？(C：え、隠してる)(C：よく見えない) 語れる人。

Wくん：日本兵が死んで血が混じって・・・(C：え、これ戸棚開けたんじゃない)

T：戸棚を開けてるって、どういうこと？(C：しまったものを) しまったものを出している。ということはつまり？(C：隠された)(Nくん：発見) 発見されたっていうのの絵じゃないか。ああって人。<C：数人手を挙げる> ちょっとちがうのある人。

Rさん：隠してるんじゃないの。(T：それはつまり、どういうこと?) その人形を取っておきたいという気持ちが強くて、隠してる。

T：取っておきたい気持ちが強くて、隠してるっての、ああっていう人。

<C：数人手を挙げる> じゃあ、ほかのある人。

Mくん：いや、見つけてですよ。取るじゃないですか。1941年の時だったら、燃やしてると思うんですよ。っていうか、破壊してる。で、それ以降だとしたら、例えば昭和70・・・(T：昭和に70ないぞ)<CC：笑う>(T：1900?) 1970年代に見つかったとしたら、まあ人形は保管されていたのでしょ。めずらしいものだって言っ。発見か破壊かどっちかです。

T：なるほどね。発見だと思う人。<C：10人ほど手を挙げる> いや、隠した。

<C：クラスの半数ほど手を挙げる> どっかわかんないって人。<C：数人挙手>

T：これはですね、NHKが作った紙芝居です。新潟支部。この人形、明らかに下手でしょ、写真が。撮ってるのが下手でしょ。これは先生のアイフォンで撮ってます(C：え?) なんて、構図も何もなく、光とかも反射とかがつつりしてる写真です。この人形は、名前がついていて(Jくん：キャサリン) キャサリン好きだねえ。

<CC：笑う> 名前がミルドレッドと言います。この子<紙芝居に描かれた人形を指しながら>はミルドレッド。これは<青い目の人形の写真を指して>先生が去年撮った、ミルドレッド。(C：え、先生持ってたの) めちゃくちゃ綺麗だよ。(C：え、先生持ってるの) も・・・無理無理。<CC：笑う> 新潟に行ったんです。日本海目の前にした。それはいいや、時間無くなっちゃう。ミルドレッドは、残っていて、御年92でしょ。この人形の感じが92とは、思えません。これを、誰がこういうことをしたかと。

(Mくん：ああ、戸棚に入れて) 戸棚に隠した人が、いました。その人がですね、この人なんです。<T：「岩下庄司さんの写真」を貼る> この人のことを知っている人は、全国にほとんどいません。というか、歴史に名は残っていません。この人の名前はですね、

岩下さんです。(Rさん：岩下何さんですか) 岩下庄司さんと言いますくT：白板に「岩下庄司さん」と書く>岩下庄司さんは、もう亡くなっていて、孫の方がまだ生きていらっしゃって、もう70歳を越えていて。全国で人形を集める、趣味で集める人だったんです。この人。ところが、その中、戦争前から人形を集めていたら、青い目の人形が日本に来ていることは知っていてね、だけど戦争が始まって、青い目の人形がどんどん処分されていく。それに対して岩下さんは、心を痛めたんです。人形を愛する人だったから。なので、新潟には柏崎小学校ってのがありまして、柏崎ってのは今は、原発の町なんだけど、人口8万人で、8万人って結構な人数だけど、そこに原発があるんだよね。その柏崎の小学校。ミルドレッドが贈られた小学校の校長先生に、ぜひ、人形を譲ってほしい。さあ、校長先生なんて言ったでしょう。(CC：だめ) はい、OK.<C：Dくんだけ手を挙げる>だめ。<C：ほとんどが手を挙げる>はい、なんででしょう。だめです。Qさん：人形をもともと焼くっていうか、処分するって、国からも言われているはずだから、処分しないってバレたら、自分がなんか罰せられるっていうか。

T：罰せられるんじゃないか。

Bくん：絶対罰せられる。

Mくん：お国のためにならない(T：ならないから?) 捨てる。燃やす。

T：校長先生、断りました。それは、できません。じゃあなんが残ってる?

Mくん：盗んだ(T：そこまでしたらすごいねえ)

Wくん：一体か二体だけ、譲ってもらう。

Bくん：マネーで買った。

Qさん：処分しようとしたところを、奪って盗んだみたいなの。

T：校長先生さっき話したでしょ。歓迎会の時は、怖い人だったはずの校長先生は、子どもたちが来たら普通に見せるでしょ。この校長先生はですね、角張信隆さんと言うんだけど、その校長先生は一度は断ったんだけど、譲ることにします。だけどそのまま譲った場合、岩下さんと校長先生はバレたら、とんでもない罰がきます。(C：射殺) 非国民ですから。ね。なので工夫しました。岩下さんと校長先生がしたこと。ミルドレッドは、この扱いにします。<T：白板に「捕虜」と書く>(CC：捕虜) アメリカ軍のスパイ、捕虜として岩下さんの蔵に隠します。そこで牢屋に入れて、岩下さんが管理します。意味わかる? 捕虜という風にして、心のうちでは? どうしたかったの。

(C：大切に・・・)(Mくん：べたべたしたかった)(Kくん：触りたかった)

大切に守りたかったわけでしょ。捕虜にして、隠しました。そして、実際に戦争が終わって、70年経って、いや74年経って。今、柏崎にミルドレッドは大切に残っている

んです。(Mくん：え、先生。じゃあミルドレッドは一体しかないってことですか。一体しか岩下さんは持ってないってことですか) まあ実を言うとね、ミルドレッドと、ナオミ(CC：ええ、ナオミ?) <CC：笑う>ミルドレッドとナオミは、どちらも岩下さんが捕虜として預かって、結局そのまま戦争のあと、ずっと生き抜いて、今に至っています。(Nくん：え、今90?) 92歳です(Bくん：なんでアメリカなのに、ナオミってつけたんですか?) いや、アメリカ人にもナオミっているでしょ。えーすごい、時間調整ばっちりでしょ。はい、本当は5分前に終わってたんだけど、今日はかなりながーく、やりました。青い目の人形。ちょうど修学旅行に行くでしょ、今度。(C：はい) きっと戦争のこと勉強すると思うんだけど、人形から見ると、こういう戦争もあります。悲惨な戦争もあります。でも裏には、こんな人もいます。この人さ、<T：岩下庄司さんの写真をさして>振り返りすごい書いてほしいんだけど、一言で言うと、どんな人。(C：やさしい)(Mくん：オタクな人) 説明って言うのは、やさしいとかじゃなくて、何とかをした人。(C：人形を守った人)(Kくん：人形を愛した人)

しくん：守り抜いた人

T：いいよね。人形を守り抜いた人。岩下庄司さん。インターネットでミルドレッドと調べると、必ず岩下さんが出てきます。今も博物館に、ちっちゃい人形の博物館に、残っています。

<チャイムが鳴る>

T：じゃあ振り返り書いてください。青い目の人形を学んで、思ったこと、考えたこと。

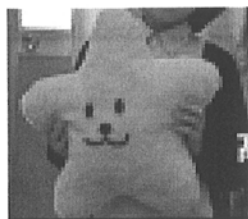
<CC：静かにノートに振り返りを書く。 9：50～9：53>

※1 昭和2(1927)年は聖徳学園の前身である関東中学校が開校した年である。

※2 「青い眼の人形」は1921年に発表された日本の童謡。野口雨情が作詞を手がけ、広く子どもたちに歌われた。

※3 ほくたん・・・平成30年度3年ほくと組のマスコットキャラクター。筆者が前年その学級担任であったため、「人形」をもって授業に臨んだ。

※4 鉄砲の話・・・大型連休前に「種子島」の学習を行った際に、鉄筒の生産ができて「ねじ」を作り出すことができなかった話をしたことから、この発言につながった。



英才教育 50 年のあゆみ

英才教育 50 年のあゆみ

- 昭和 2 年 4 月 和田幽玄先生により関東中学校設立（聖徳学園の母体）
- 昭和 22 年 4 月 学制改革実施により新制関東中学校認可される。
- 昭和 25 年 4 月 聖徳幼稚園開園、和田玄之園長就任。入園児数 41 名
- 昭和 26 年 2 月 財団法人関東中学校から学校法人聖徳学園へ組織変更
- 4 月 関東小学校開校、和田玄之校長就任。入学者数 4 名
- 昭和 43 年 7 月 社団法人英才教育研究所との提携の協議始まる。
- 10 月 昭和 44 年度から小学校に英才教育を導入することを決定
校名を「関東小学校」から「聖徳学園小学校」へ改称し、知能教育を基本にした英才教育を実施することを、聖徳学園の和田玄之理事長と英才教育研究所の伏見猛弥所長が合意。
- 10 月 カリキュラム委員会設置
英才児の特性に応じた独自の教育課程を作成するために、伏見猛弥先生（英才教育研究所所長・玉川大学教授）を座長とするカリキュラム委員会が設置される。
カリキュラム委員会を毎週木曜日に、英才教育研究所において開催することを決定。
[当初のカリキュラム委員会の構成]
伏見 猛弥（英才教育研究所所長・玉川大学教授）
和田 知雄（聖徳学園）
入江孝一郎（日本移動教室協会理事）
上原 輝男（玉川大学助教授）
小林 健三（玉川大学教授）
西谷 幸彦（日本国土開発協会）
野村 正七（横浜国立大学教授）

八並 勝正（東京教育大学講師）

清水 驍（英才教育研究所指導部長）

園田 達彦（英才教育研究所指導員）

11 月 第 1 回入学者募集要項を発表

募集要項は下記の通り

—— 第 1 回入学者募集要項 ——

**聖徳学園小学校英才学級入学者
募 集 要 領**

- | | |
|----------|---|
| 1. 募集人員 | 男女 20 名 |
| 1. 入学条件 | 新学年度学齢に達したもので、特に英才教育を希望し、それに必要な知能を有するもの。 |
| 1. 考查内容 | 希望者には下記の考查を行います。
(a) 知能テスト（SB テストの外に英研テストも行います。）
(b) 身体検査
(c) 保護者面接（できる限り両親） |
| 1. 応募手続 | 所定の入学願書に必要事項を明記し、11 月 15 日から昭和 44 年 1 月末日までの間、毎日午前 9 時から午後 4 時まで、考查料 3,000 円を添えて、小学校事務室に提出してください。（但し日曜、祭日は除く） |
| 1. 考 査 日 | 申込順に考查の期日をお知らせします。 |
| 1. 合格発表 | 考查後 3 日以内に封書をもって通知します。 |
| 1. 諸 経 費 | 入学金 70,000
PTA 入会金 1,000
授業料 月 額 5,000
特別教育費 7,000) 計 12,000
その他 PTA 会費・学級費等若干を要します。 |

英才
教育 聖 徳 学 園 小 学 校

東京都武蔵野市境南 2 丁目 11-8

電話 0422(43) 5121 (代) ~ 3

国電中央線武蔵境駅南口（徒歩約 3 分）

11 月 戦後、小学校における英才教育は初めての試みで世間の注目を集め、さっそく読売新聞と東京新聞に本校の英才教育に関する記事が掲載される。

12 月 英才教育研究所 3 周年記念協議会を聖徳学園において開催。
英才教育研究所のこれまでの成果と聖徳学園小学校における英才教育の理念と方針を発表。
そして、その内容が朝日新聞に掲載される。

12 月 第 1 回入学テスト実施

昭和 44 年 3 月 制服決定

教育内容の改革に併せ、これまでの紺色の制服から緑色の制服と制帽、校内着の学習衣を制定する。

3 月 第 1 期生の入学者説明会を学士会館において開催

3 月 聖徳学園小学校における教育の基本要項をまとめる。
英才教育の理念と方針をもとに、人間のもつ能力を伸ばす立場と社会の要請という観点から、本校の教育内容とその指導方法がまとめられる。その主なものは、次の通り。

- ① 教育目標は、一人ひとりの子どもの個性啓発と創造的知能の開発と育成とする。
- ② 学習内容は知能開発を基本にして、できるだけ多くの知能因子を刺激したり、活用できるような教材構造にする。
- ③ 暦年齢による学級編成ではなく、知能年齢による無学年方式の学級編成とする。
- ④ 教科担任制を実施する。
- ⑤ 社会科は、地理と歴史に分けて指導する。
- ⑥ 国語に素読を取り入れる。
- ⑦ 学校教育と家庭教育の役割分担を明確にするために、宿題は出さない、また学校給食も実施しない。

昭和 44 年 4 月 校名を聖徳学園小学校に改称し、英才教育第 1 回入学式举行
 入学者 29 名（5 歳児 =1 名、1 年生 =19 名、2 年生 =3 名、3
 年生 =4 名、4 年生 =2 名）で 3 学級編成、次の指導陣でス
 タートした。

昭和 44 年度 聖徳学園小学校英才教育指導組織

学校長 和田 玄之

顧問 伏見 猛弥

カリキュラム作成委員

伏見 猛弥（玉川大学教授・英才教育研究所長）

小林 健三（玉川大学教授）

野村 正七（横浜国立大学教授）

上原 輝男（玉川大学助教授）

西谷 幸彦（日本国土開発協会）

八並 勝正（東京教育大学講師）

関 忠夫（東京国立博物館企画室長）

清水 驍（英才教育研究所指導部長）

長沢 正治（玉川大学教授）

宮田 民雄（東海大学講師）

授業指導 上原 輝男（国語）

八並 勝正（理科・数学）

清水 驍（社会）

西谷 幸彦（理科・数学）

長沢 正治（バイオリン）

宮田 民雄（外国語）

主 事 和田 知雄

担任

くろしお組 園田 達彦（知能訓練・数学・体育・美術）

やくも組 松村実葉枝（国語・美術）

みどり組 清水 宜明（理科・地理・歴史・美術）

専 科

美術 若杉不死身

音楽 重松美恵子

4 月 カリキュラム委員会開催

顧問の伏見猛弥先生を座長にして、前記のカリキュラム委員と現場の教員で毎週木曜日の 5 時半から英才教育研究所において、カリキュラム委員会を開催することにした。

この委員会では、教育課程の作成から学習内容や方法、期末テスト問題等、具体的な内容まで詳細に検討され、夜の 10 時過ぎまで続けられることがあった。

5 月 NHK テレビ「スタジオ 102」で本校の教育方針や授業風景が放映された。

この他、知能教育を基本にした英才教育は日本では初めての試み、ということでマスコミからも注目され、この 1 年間に TBS、NET、フジテレビ等でも紹介される。

5 月 毎週 1 回父母説明会を開催することを決定

斬新な教育方針や学習内容に対する父母の期待や不安も多く、定期的に毎週父母説明会を開催することにした。この説明会には、毎回顧問の伏見猛弥先生も出席され、教育方針や内容について講話された。

5 月 第 1 回スポーツ大会実施

国分寺グラウンドにおいて、野球・ドッジボール等のスポーツ大会を行う。

6 月 期末テストと標準学力検査を実施することを決定

学習成果をできるだけ明確にするために、小学校 1 年生から期末・中間テストの定期考査を実施すること。また独自の教育課程と学習内容ではあっても、文部省の『学習指導要領』の内容は習熟させる必要があることから、学期末に標準学力検査も実施することにした。

7 月 学期末の評価書（通知書）及び評価方法を決定

カリキュラム委員会において、学期末の評価書（通知書）及び評価方法を次の通り決定。

学校での学習成果を客観的に、かつ一人ひとりの成長の状況を保護者に連絡して、家庭教育の参考にして載くために、

- ① 評価書は毎学期発行し、客観的に数値化できるものは数値化して、期末テストの結果は「得点」・「クラスの平均点」・「席次」を記入する。そして、数値化できない面は、文章で記入する。
- ② 評価書は、学期末に保護者の個人面談を実施して渡すようにする。個人面談は、クラス担任・教科担任・教育顧問が実施する。
- ③ 個性・長所を認めるという観点から、期末テストで優秀な成績（得点 90% 以上）の児童は、教科別に表彰状を授与する。

7 月 夏休みにくろしお組（3、4 年生）国分寺合宿所で 2 泊 3 日の合宿。テント生活と水泳訓練を中心に実施。

8 月 朝霞テックにて野外教室実施

9 月 学習内容や学校での生活の様子を家庭に連絡するために、学校通信『月刊聖徳』を毎月発行することを決定。

10 月 第 1 回体育大会を幼稚園と合同で実施

10 月 『お誓い 3 か条』設定

本校の英才教育がめざす教育信条について、カリキュラム委員会において検討され、小林健三先生の草案で『お誓い 3 か条』を設定する。

10 月 数学科研究部において、英才児に応じた教材構造の分析と指導方法についてまとめる。

11 月 第 1 回英才教育公開研究発表会を開催（11 月 20 日）
（内容は 241 ページの通り）

昭和44年10月30日

各教育委員会
各幼稚園長
各小学校長

殿

聖徳学園小学校長 和田玄之
英才教育研究所長 伏見猛弥

英才小学校研究発表会の御案内

秋分の般は々御清祥のこととお喜び申し上げます。
御承知かと存じますが、わたくしどもは本年四月より聖徳学園に英才小学校を設けました。何分日本での最初の試みでもありますが、これまでは教育課程の作成その他の忙に没され、英才小学校設立の趣旨、その具体的内容等に関し、教育界のみなさまに御披露申し上げる機会を得ませんでした。

今般漸く一応の落着きを見ましたので、第一回研究発表会を開催して、わたくしどもの研究の一端を御報告申し上げたいと存じます。
わたくしどもの英才教育研究所は、本年九月で満四年を経過しました。英才小学校の設立は、そうしたわたくしどもがさうしたわたくしどもがさうやかな研究をふまえたものでありまして、御多忙中恐縮と存じますが、御出席の上御批判頂きたいと存じます。

記

日 時 昭和44年11月20日(木) 午前10時より午後4時まで
場 所 聖徳学園小学校 東京都武蔵野市境南2丁目11ノ8
電話 0422-47-3839

国電中央線武蔵野駅南口徒歩3分

参加資料費 700円(中食弁当代を含みます・当日受付)



9:30 10:00 11:00 12:00 1:00 2:00 3:30 4:00

受付	授業公開	各研究発表会	中食	特別発表会	講演	質疑応答
----	------	--------	----	-------	----	------

日程

1. 授業公開 10:00~11:00
国語科(みどり) 授業者 松村実業技
算数科(やくも) " 園田達彦
知能訓練(くろしお) " 清水 聡
2. 各研究発表会 11:00~12:00
国語科 司会 松村実業技
算数科 発表者 玉川大学教授 上原輝男
知能訓練 発表者 早稲田大学教授 園田達彦
英才教育研究所 発表者 英才教育研究所 岩崎 清 水
3. 特別発表会 1:00~2:00
バイオリン合奏(英才学級全員) 指導 玉川大学教授 長 沢 正 治
外国語レクリエーション 指導 東海大学講師 宮 田 民 雄
4. 講 演 2:00~3:30
「学校における英才教育」 英才教育研究所々長 伏 見 猛 弥
5. 質疑応答
6. 閉会の辞 聖徳学園小学校々長 和田玄之

追記 会場の都合もございまして、御出席は兼書で11月10日まで、社団法人 英才教育研究所(渋谷区代々木1ノ38ノ2 ミヤタビル304号)宛お知らせください。

- 12 月 カリキュラム委員会において、能力別編成の実践結果や知能と学力との相関についての分析結果を検討する。
- また、創造性と知能の関係やレディネスと基本的知識の転移についての実践研究成果をまとめる。
- 昭和 45 年 3 月 カリキュラム委員会において、今年度の実践結果を踏まえて来年度の教育課程の作成を始める。また、英才児に応じた、学習内容や授業構造、転移する基本的知識についての研究も深める。
- 4 月 第 2 回入学式入学生 41 名
- 4 月 お誓い三か条を『素読読本』のなかに編集
- 4 月 12 歳までにできるだけ知能を伸ばす、それに基本的な知識を知能のいろいろな角度から考えさせる、という本校の教育方針に基づいた、各教科の実践研究を進める。
- 5 月 校内研究会において、授業過程における拡散思考と集中思考の設定や児童の思考過程の深め方を中心に授業研究を行う。
- 6 月 カリキュラム委員会において、各教科の基本的知識の精選や英才児に応じた学力の育て方についての研究を深める。
- 7 月 サマーランドにおいて水泳訓練を実施
- 7 月 学士会館において、英才教育研究所と聖徳学園小学校との合同研修会を開催する。主に、英才児に応じた教材研究と授業研究についての研修を深める。
- 7 月 『英研式知能検査』の開発を、英才教育研究所と聖徳学園小学校の合同で開始。
- 11 月 第 2 回英才教育公開研究発表会を開催（11 月 10 日）
主題＝学校における英才教育(2)
- 12 月 カリキュラム委員会において、国語科カリキュラムとその指導法について再検討。

- 昭和 46 年 4 月 第 3 回入学式入学者 25 名
- 4 月 入学考査で英研式知能検査を初めて実施したため、校内研究会において知能構造と学力の分析、知能と学力との相関についての研究に取り組む。
- 7 月 第 1 回林間学校を赤倉高原において、3、4 年生対象にして実施。(2 泊 3 日)
- 7 月 学士会館において、英才教育研究所と聖徳学園小学校の合同研修会を開催する。主に知能教育の教材や指導方法についての研究を深める。
- 9 月 福島県相馬市指導主事他学校参観 (10 名)
- 10 月 父母の会として「聖英会」が発足
- 10 月 第 1 回マラソン大会実施
- 11 月 第 3 回英才教育公開研究発表会開催
主題 = 学校における英才教育(3)
公開授業 = 国語・数学・理科・知能訓練
研究発表 = 「知能と学力の接点」
英才教育研究所 清水 驍先生
講演 = 「学校における英才教育の問題点」
英才教育研究所長 伏見猛弥先生
- 12 月 英才教育 3 年の経過を踏まえ、各教科の教育課程の再検討を行う。
- 12 月 千葉県勝浦市立小・中学校長会学校参観 (22 名)
- 昭和 47 年 1 月 カリキュラム委員会において、英才児に応じた生活指導について検討。
- 3 月 カリキュラム委員会や校内研究会において、英研式知能検査結果の授業への生かし方についての研究を進める。
- 3 月 伏見猛弥先生逝去 (3 月 15 日)

NHK のスタジオで「知能について」のテレビ録画中にお
亡くなりになる。

3 月 故伏見猛弥先生の英才教育研究所葬が青山斎場において行わ
れる。(3 月 17 日)

3 月 第 1 回卒業式卒業生 2 名(昭和 44 年に 4 年生転入者)

4 月 教育顧問に英才教育研究所長代行・清水驍先生就任

4 月 児童の発達段階に応じた指導を徹底するために、知能訓練・
国語・数学において能力別クラス編成を実施。

6 月 英才児の発達段階に応じた生活指導の目標を設定

6 月 数学科において校内実力テストを実施し、知能と学力との相
関を分析する。

7 月 英才児に応じた学習指導、知能開発(活用)を目指した学習
指導の教材開発に積極的に取り組み、まず数学研究部におい
て、テキスト「数学Ⅰ-1」を編集し発行。

7 月 第 2 回林間学校を 3 年生以上を対象にして、清里高原におい
て実施。(3 泊 4 日)

8 月 数学研究部、テキスト「数学Ⅰ-2」を編集・発行

9 月 カリキュラム委員会において、学習内容の定着という観点か
ら、反復練習や個別指導についての検討を進める。

11 月 第 4 回英才教育公開研究発表会開催
主題 = 小学校における知能教育

11 月 保谷市教頭会学校参観(11 名)

12 月 国語研究部、テキスト「漢字Ⅰ」を編集・発行

昭和 48 年 1 月 国語科において校内実力テストを実施し、知能と学力との相
関を分析。

2 月 数学研究部、テキスト「数学Ⅱ-1」を編集・発行

3 月 数学研究部、テキスト「数学Ⅲ-1」を編集・発行

- 4 月 本校の教育目標である、個性の伸長・創造性の育成を充実させるために高学年に「特別研究」の時間を設定する。
- 5 月 和田玄之校長逝去（5 月 14 日）
- 6 月 故和田玄之校長学園葬（6 月 3 日）
- 6 月 国語研究部、テキスト「漢字Ⅱ」を編集・発行
- 7 月 志賀高原において林間学校を実施（3 泊 4 日）
- 9 月 数学研究部、テキスト「数学Ⅳ -1」を編集・発行
- 11 月 第 5 回英才教育公開研究発表会開催
 主題＝知能と学力
 [主な内容]
 公開授業＝知能訓練・国語・数学・理科・地理
 研究発表＝「知能と学力」 園田達彦教諭
 「本校における漢字指導」 小林五郎教諭
 講演＝「本校における教育」 清水 驍顧問
- 11 月 『英才教育の道』（聖徳学園小学校の教育）編集・発行
- 11 月 国語研究部、テキスト「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」編集・発行
- 11 月 千葉県安房郡校長会学校参観（30 名）
- 昭和 49 年 1 月 国語研究部、テキスト「文法Ⅰ」・「文法Ⅱ」、「短歌・俳句集」を編集・発行
- 3 月 第 3 回卒業式 卒業生 3 名
- 4 月 校長に和田知雄主事、主事に園田達彦教務主任が就任
- 7 月 福島県磐梯高原にて林間学校を開催（3 泊 4 日）
- 7 月 国語研究部、「国語ドリル六 -Ⅰ」を編集・発行
- 7 月 歴史研究部、テキスト「日本通史」を編集・発行
- 9 月 盛岡市立河北小学校教職員一行学校参観
- 9 月 第 1 回夏休み自由研究展開催
 本校の教育目標である、個性の伸長と創造的知能の開発と育

成を目的にして、毎年開催することにする。そして、最高賞として「伏見賞」を授与することにする。

9 月 国語研究部、「国語ドリル六－Ⅱ」を編集・発行

10 月 第 6 回英才教育公開研究発表会開催

主題＝英才教育の追究－6 年間の実践と問題点－

研究主題は、今後「英才教育の追究」を目指していくことに、カリキュラム委員会で決定する。

[主な内容]

公開授業＝国語・数学・理科・地理・歴史・音楽・体育
研究発表

「教材に対する児童の取り組み方」 郡司英幸教務主任

「歴史教育の方法と実践」 大竹良造教諭

「思考の教材をどのように扱うか」 草野修三教諭

「空気の重さを中心にして」 成田幸夫教諭

昭和 50 年 3 月 第 4 回卒業式 第 1 期生 7 名卒業

3 月 第 1 回研修合宿開催（箱根・対岳荘にて、2 泊 3 日）

第 1 期生の卒業を機会に、6 か年間の実践を振り返り、本校の教育目標や内容・方法について、全教職員で再検討し今後の方向性を探るために研修合宿を実施する。

[主な内容]

(1) 講演

①「私学の現状と本校の将来の展望」 校長 和田知雄

②「聖徳の教育方針」 顧問 清水 驍

(2) ディスカッション（6 年間を振り返って）

① 本校の教育方針について

② 指導法（専科制・能力別指導・評価法）について

③ 生活指導（学級経営）について

(3) 各教科の教育方針（カリキュラム委員の先生より）

- ① 歴史教育について 小林健三先生
- ② 国語教育について 上原輝男先生
- ③ バイオリン教育について 長沢正治先生

(4) 昭和 50 年度の各教科の年間計画と研究目標の検討

以上の内容を中心にして、カリキュラム委員の先生方も交えて、聖徳が目指す英才教育の方向、知能観等、深夜まで議論が続き、お互いに共通理解を深めることができ実り多い研修合宿となった。そこで、今後もこうした研修合宿を春・夏の年 2 回継続していくことになった。

4 月 数学研究部において、個別学習を更に充実させるために「数学基本課題」を作成。

5 月 第 1 回修学旅行実施（九州方面 6 泊 7 日）

参加者児童 20 名・引率者 4 名

小学校 6 年間の総まとめの学習として位置付け、当時小学生としては異例の 6 泊 7 日間の日程で実施することにした。主な見学先は、地理と歴史の発展学習に中心をおき、

- ① 西洋文化の入口である 長崎
- ② 日本三名城の一つである 熊本城
- ③ 世界有数のカルデラ火山 阿蘇山
- ④ 神話のふるさと 高千穂

の 4 つをポイントにした。

往復とも特急寝台車を利用した、九州までの長旅であったが子どもたちにとっては、とても心に残る充実した修学旅行となり、一部修正を加えながら④を徐き現在まで続いている。

7 月 車山高原で林間学校開催（3 泊 4 日）

7 月 園田主事、ソ連・ヨーロッパへ教育視察へ派遣（26 日間）

- 8 月 第 2 回研修合宿実施（湯河原の敷島館）2 泊 3 日
講師に大嶋三男先生（学芸大学名誉教授）をお招きして、授業研究についての研修を深める。
- 9 月 国語研究部で、英才児の感情発達の調査研究をまとめる。
- 10 月 教育相談室を開設し、幼児と小学生を対象にした知能診断を実施。
- 10 月 第 7 回英才教育公開研究発表会開催
主題＝英才教育の追究－知能と学力－
[主な内容]
公開授業＝知能訓練・国語・数学・理科・地理・歴史
バイオリン・音楽・体育
研究発表＝「知能と学力との接点」 園田達彦主事
講演＝「現代学校と英才教育」
学芸大学名誉教授 大嶋三男先生

- 昭和 51 年 2 月 第 1 回聖徳学園中学校入学テスト実施
- 3 月 第 5 回聖徳学園小学校卒業式卒業生 25 名
- 4 月 中学校の校名を関東中学校から聖徳学園中学校に改称し、小・中学校一貫の英才教育を開始。
これに伴い、知能開発期（1～4 年生までは、各教科の基礎学力を高めると同時に、多くの知能因子を刺激できる教材構造にして、徹底した知能開発を行う）と知能活用期（4 年～9 年生までは、知能を十分活用できる教材構造にし、更に学習の幅を広げ深める）の発達段階に応じた教育課程を編成し、一貫教育の充実を目指すことにした。
- 4 月 第 1 回聖徳学園中学校入学式入学生 4 名
- 4 月 2 人担任制を実施（知能訓練・国語・数学）
- 4 月 歴史科研究部において、「歴史科学習ノート」を作成

- 5 月 修学旅行（6 年生、九州・萩方面）5 泊 6 日
- 5 月 歴史科研究部において、知能因子別に見た知能の発達過程と
歴史科三段階の目標との関連を中心にして、聖徳の歴史科の
授業展開の基本型をまとめる。
- 7 月 志賀高原において林間学校を実施（3 泊 4 日）
- 7 月 郡司教諭、社会科研修のためヨーロッパへ派遣（22 日間）
- 8 月 第 4 回研修合宿実施（湯河原・敷島館）2 泊 3 日
昨年夏に引き続き、講師に大嶋三男先生（東京学芸大学名誉
教授）をお招きして、授業研究について研修を深める。
- 10 月 第 8 回英才教育公開研究発表会開催
主題＝英才教育の追究－高知能児に応じた学習指導－
[主な内容]
公開授業＝知能訓練・国語・数学・理科・歴史
研究発表＝「知能と行動」 小林五郎校務主任
講 演＝「日本教育の課題」
国立教育研究所所長 平塚益徳先生
- 11 月 台東区小学校教職員学校参観（25 名）
- 昭和 52 年 1 月 第 1 回スキー学校実施（霧ヶ峰）4 年生以上 3 泊 4 日
- 1 月 英才教室を開設、幼児のための知能教育を開始
- 3 月 第 5 回研修合宿実施（葉山・相洋閣）2 泊 3 日
和田校長から、聖徳学園における幼稚園から高等学校までの
一貫教育の基本構想が提案される。
- 4 月 第 2 回聖徳学園中学校入学式 入学生 6 名
- 4 月 「ゲーム」と「工作」の時間を設定
小学校 1、2 年生の教育課程に「ゲーム」と「工作」の時間
を設定し、創造的知能の開発と育成を充実させる。
- 5 月 修学旅行（6 年生、九州・萩方面）5 泊 6 日

小学校 6 年生の修学旅行は 3 回目となり、今後はこの日程と内容で毎年実施していくことにする。

6 月 理科研究部において、知能因子と科学的な思考方法や学習課題との関連についての研究成果をまとめる。

7 月 小林教諭、ソ連・ヨーロッパの教育視察へ派遣（23 日間）

7 月 蔵王において林間学校を実施（3 泊 4 日）

8 月 第 6 回研修合宿実施（葉山・相洋閣）2 泊 3 日

9 月 地理科研究部において、地理の学習課題と知能因子との関連についてまとめる。

11 月 聖徳学園創立 50 周年記念式典開催（11 月 2 日）

11 月 第 9 回英才教育公開研究発表会開催（11 月 5 日）

主題＝英才教育の追究－知能開発を目指した学習指導－
[主な内容]

公開授業＝知能訓練・特別研究・国語・数学・理科・歴史

基調報告＝「本校の教育について」 園田達彦主事

講演＝「英才教育について」

東京教育大学名誉教授 杉靖三郎先生

昭和 53 年 2 月 第 2 回スキー学校実施（霧ヶ峰）4 年生以上 3 泊 4 日

3 月 数学研究部において、テキスト「数学Ⅲ -2」を編集発行

4 月 第 7 回研修合宿実施（葉山・相洋閣）2 泊 3 日

英才教育 10 周年を迎えるに当たりこれまでの実践を踏まえ、学校の教育目標や方針を各教科の教育課程や学習指導へ、どのようにして具体化していくか、ということを中心にして研修を深める。

また、英才教育 10 周年記念として、

① 研究紀要（英才教育の道）の発行

② 公開研究発表会の実施

③ 児童文集（ぴっばら）の発行

以上3点を確認する。

- 5 月 平岡忠七理事長逝去（9日）、学園葬（24日）
- 5 月 和田知雄理事長就任
- 7 月 「通知書」（評価書）を改訂。主な改善点は、各教科の評価の観点項目を設定し、低学年（1～3年生）は席次の記入を廃止。
- 7 月 『進学ガイド』の月刊誌に「少数精鋭の英才教育」として、本校の教育内容が紹介される。
- 7 月 白樺湖において林間学校を実施（3泊4日）
- 8 月 第8回研修合宿実施（鎌倉・若宮荘）2泊3日
今回から幼稚園の教員も参加し、幼稚園・小学校・中学校の合同研修会となる。
- 9 月 週刊朝日9月8日号で「福田サン発言・英才教育の鈍才的解剖」のテーマで、本校の教育内容を紹介。
- 10 月 読売新聞の「教育を直視する・私の発言」で英才教育の聖徳学園小学校『和田知雄校長』として取り上げ、「年齢の発想、でなく、知能、個性別のクラス」のテーマで紹介される。
- 10 月 日本テレビの「竹村健一の世相講談」に園田主事がゲスト出演し、竹村健一氏と英才教育について対談。
- 10 月 英才教育10周年記念公開研究発表会開催（10月22日）

主題＝英才教育の追究

— 知能開発を目指した学習指導(2)—

今回から幼稚園も加えて、幼稚園・小学校・中学校の合同発表会とする。

[主な内容]

① 公開保育と公開授業

② 記念講演＝「学校教育の現状と課題」

筑波大学教授 村松 剛先生

③ 分科会研究発表

幼稚園教育「自主性を育てる遊び」 和田知雄園長

知能教育「子どもの知能を伸ばすには」 園田達彦主事

教科教育「知能開発（活用）を目指した学習指導」

小林五郎校務主任

特別研究「一人ひとりの能力と個性に応じた指導」

郡司英幸教務主任

- 11 月 東京都児童・生徒発明くふう展において、学校賞受賞また、4年生の田中庸介君の作品「自動ピアノ用譜めくり器」が、東京都知事賞に入賞した。その他、特別賞1名・努力賞1名佳作1名入賞した。

このようにして、この頃から本校の個性・創造的知能の開発と育成が徐々に評価されるようになってきた。

12 月 文部大臣賞受賞

第28回全国小・中学校つづり方コンクール（読売新聞社主催・文部省後援）において、4年生の池田友子さんの作品『眼』が高学年の部で特選第一位に入賞し「文部大臣賞」を受賞した。

昭和54年 1 月 第1回書き初め大会実施

2 月 車山高原においてスキー学校実施 4年生以上3泊4日

3 月 第1回聖徳学園中学校卒業式 卒業生5名

4 月 第9回研修合宿実施（湯河原・敷島館）2泊3日

4 月 英語教育再開

いろいろな事情で中断していた英語の授業を5、6年生に対して、週2時間設定。

4 月 新入生 2 クラス編成となる

今年度初めて、応募者が定員 50 名を越え、入学者が 47 名となり、1 年生は 2 クラス編成とする。以降、この年度の入学生から全て 1 学年 2 クラス編成となる。

6 月 第 1 回オセロ大会実施

知能教育の一環として、ゲーム大会を実施する。今年度はオセロ・五目並べ・将棋・百人一首・チェス・ロダンの大会を実施することにする。

7 月 那須高原において林間学校を実施（4 年生以上、3 泊 4 日）

8 月 第 10 回研修合宿実施（湯河原・敷島館）2 泊 3 日

主に、知能開発を目指した学習指導について研修を深める。

10 月 第 11 回英才教育公開研究発表会開催（10 月 20 日）

主題＝英才教育の追究

— 知能開発を目指した学習指導(3)—

[主な内容]

① 公開授業・公開保育

② 分科研究会

③ 記念講演＝「生涯教育と学校」

元文部大臣 永井道雄先生

昭和 55 年 2 月 車山高原においてスキー学校実施 4 年生以上 3 泊 4 日

4 月 第 11 回研修合宿実施（湯河原・敷島館）2 泊 3 日

この研修会において、これまでの実践を踏まえ、今年度から

① 特別研究に「家庭科」を設定する

② 国語と数学の時間は、5 年生から中学 2 年までは、無学年制のクラス編成を実施する

ことを最終確認する。

7 月 志賀高原において林間学校を実施（4 年生以上、3 泊 4 日）

8 月 第 12 回研修合宿実施（網代センター）2 泊 3 日

講師として、文部省初等中等教育局教科調査官の渡辺富美雄先生をお招きして、「新しい教育課程と私学の役割」についてご指導を戴いた。

9 月 卒業生の追跡調査実施

英才教育 10 年経過を契機に卒業生の実態調査を行う。卒業生といっても、まだ中学・高校に在籍中であり、調査方法は卒業生本人と在学校の担任に調査用紙を送付して記入してもらった。

10 月 第 12 回英才教育公開研究発表会開催（10 月 18 日）

主題＝英才教育の追究

— 知能開発を目指した学習指導(4)—

[主な内容]

① 公開授業・公開保育

② 研究発表＝「卒業生の状況」 園田達彦主事

— 追跡調査結果の分析 —

③ 記念講演＝「これからの教育はどうあるべきか」

文部省教科調査官 渡辺富美雄先生

11 月 東京都児童生徒徒発明工夫展において、学校賞受賞（2 度目）

個別では、特別賞 2 名・佳作 3 名入賞した。

昭和 56 年 2 月 車山高原においてスキー学校実施 4 年生以上 3 泊 4 日

4 月 第 13 回研修合宿実施（網代センター）2 泊 3 日

この研修会において、「一人ひとりの個性と能力に応じた指導」を更に充実させるために、今年度から、

① 1、2 年生は、2 人担任制

② 5、6 年生の英語は、1 クラスを 3 分割して授業を行うことを最終確認。

6 月 第 13 回英才教育公開研究発表会開催（6 月 20 日）

今年度から、従来の 2 学期実施から 6 月へ移行する。それは、入学希望の参観者への配慮からである。

主題 = 英才教育の追究

— 知能開発を目指した学習指導(5)—

[主な内容]

- ① 公開授業・公開保育
- ② 分科研究会
- ③ 記念講演 = 「未来をみつめての教育」

武蔵野音楽大学教授 大竹武三先生

7 月 松原湖において林間学校を実施（4 年生以上、3 泊 4 日）

8 月 第 14 回研修合宿実施（網代センター）2 泊 3 日

昭和 57 年 2 月 車山高原においてスキー学校実施（4 年生以上 3 泊 4 日）

4 月 第 15 回研修合宿実施（網代センター）2 泊 3 日

7 月 湯西川温泉にて林間学校を実施（4 年生以上、3 泊 4 日）

8 月 第 16 回研修合宿実施（網代センター）2 泊 3 日

和田校長・園長より知能教育を基本にした幼稚園と小学校の一貫教育実施についての提案があり、今後具体化に向けて取り組んでいくことにする。

また、聖徳の特色を更に充実させるために、

- ① 創造的知能の開発と育成
- ② 一人ひとりの個性と能力に応じた指導
- ③ 自主編成の教材作成

の 3 点の研究を深めていくことにする。

12 月 岡村正孝君（2 年生）文部大臣奨励賞受賞

第 23 回学生顕微鏡観察コンクール（毎日新聞社主催、文部省後援）において、夏休みの自由研究として取り組んだ「カ

エルにタバコを吸わせたらどうなるかの実験研究」が、小学校部門で最高賞の文部大臣奨励賞を受賞した。

昭和 58 年 2 月 車山高原においてスキー学校実施（4 年生以上 3 泊 4 日）

4 月 第 17 回研修合宿実施（網代センター）2 泊 3 日

今年度から課外活動として、5、6 年生を対象にしてクラブ活動（運動部を中心に）を実施していくことになる。

6 月 第 14 回英才教育公開研究発表会開催（6 月 18 日）

— 英才教育 15 周年並びに新校舎落成記念 —

主題 = 英才教育の追究

低学年 = 知能開発を目指した学習指導(6)

高学年 = 一人ひとりの個性と能力に応じた指導(1)

[主な内容]

① 公開授業・公開保育 ② 分科研究会

7 月 清里高原において林間学校を実施（4 年生以上、3 泊 4 日）

8 月 第 18 回研修合宿実施（勝仙閣にて）2 泊 3 日

今回は特に、学力不振児に対する基礎学力の充実を中心に具体策を検討した。

昭和 59 年 2 月 車山高原においてスキー学校実施（4 年生以上 3 泊 4 日）

4 月 第 19 回研修合宿実施（勝仙閣にて）2 泊 3 日

今年度から 6 年生の 3 学期の期末テストと評価面接は廃止する方向で検討した。

6 月 第 15 回英才教育公開研究発表会開催（6 月 16 日）

— 英才教育 15 周年並びに新校舎落成記念 —

主題 = 英才教育の追究

低学年 = 知能開発を目指した学習指導(7)

高学年 = 一人ひとりの個性と能力に応じた指導(2)

[主な内容]

- ① 公開授業・公開保育
- ② 分科研究会
- ③ 研究発表「子どものものの見方・考え方」

校務主任 小林五郎

7 月 美ヶ原高原にて林間学校を実施（4年生以上、3泊4日）

8 月 第20回研修合宿実施（勝仙閣にて）2泊3日

11 月 土方健二郎君の作品、東京都代表に選ばれる

第34回全国小・中学校作文コンクール（読売新聞社主催・文部省後援）において、土方健二郎君（3年生）の作品「お母さんのチビウサギ」が、小学校低学年の部第一位に入賞し東京都代表として、中央審査へ出品された。

昭和60年 2 月 車山高原においてスキー学校実施（4年生以上3泊4日）

4 月 第21回研修合宿実施（勝仙閣にて）2泊3日

今回は特に、宿泊行事の対象学年についての見直しを行い、「自然の中での体験学習と基本的な生活能力の育成」を充実させるために、今年度から林間学校とスキー学校の実施学年を1年繰り下げて、3年以上の学年とした。

6 月 第16回英才教育公開研究発表会開催（6月15日）

主題＝英才教育の追究

幼稚園＝考える力を育てる保育

低学年＝知能開発をめざした学習指導(8)

高学年＝一人ひとりの能力や個性に応じた指導(3)

[主な内容]

- ① 公開授業・公開保育
- ② 分科研究会
- ③ 研究発表『個性に応じた歴史学習（イメージから論理的思考へ）』 歴史科主任 大竹良造

- 6 月 昭和 60 年度第一回文部省認定英語検定実施
二級合格（高校修了程度） 小 5 杉山晴俊
- 7 月 林間学校実施（栃木県湯西川・3泊4日）
- 11 月 第 29 回東京都児童生徒発明工夫展 首席学校賞受賞
- 昭和 61 年 2 月 スキー学校実施（尾瀬戸倉・3泊4日）
- 3 月 「ほくとパン、私とパン図画コンクール」
最優秀賞受賞 小 3 近藤智子
- 4 月 飼育水槽設置 プレイルームのベランダに淡水魚や水生昆虫
用に、大型水槽を含む 25 ケースの水槽を設置する。その中
で 600 匹に及ぶ様々な種類の魚や昆虫を飼育する。
- 4 月 第 31 回漢字能力検定試験実施
- 6 月 第 17 回英才教育公開研究発表会開催（6 月 12 日）
主題＝英才教育の追究
幼稚園＝考える力を育てる保育(2)
低学年＝知能開発をめざした学習指導(9)
高学年＝一人ひとりの能力や個性に応じた指導(4)
- [主な内容]
- ① 公開授業・公開保育
- ② 分科研究会
- ③ 研究発表「知能開発をめざした学習指導」
教務主任 郡司英幸
- 6 月 「わんぱく相撲武蔵野場所」
低学年の部 優勝 岩永 亮（3 年）
高学年の部 三位 園田克征（6 年）
- 7 月 林間学校実施（福島県甲子高原・3泊4日）
- 8 月 第 43 回全国学校秀作美術展
会長賞受賞 石丸 淳（5 年）

10 月 第 1 回聖徳祭開催。

この聖徳祭のねらいは、2 点あって、一つは子ども達が自発的に文化を習得し、創造していく喜びを満たす為に、その成果を発表する機会を与える事。もう一つは、一人ひとりの子どもの個性や特性、能力を生かす機会を与えるとともにお互いに高め合うという事である。

11 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 武富剛士（2 年）

高学年の部 優勝 片場寛明（6 年）

11 月 昭和 61 年度第二回文部省認定実用英語技能検定試験

四級合格 小 6 齊藤茂之

12 月 第 36 回全国小・中学校作文コンクール

「詩の部」特選 矢田麻衣子（小 1）

昭和 62 年 2 月 第 6 回多摩川サケ壮行会参加

2 月 スキー学校実施（尾瀬戸倉・3 泊 4 日）

4 月 幼稚園に知能遊びを導入し、知能教育を基本にした幼・小一貫教育の研究を始める。知能遊びの導入は、幼稚園の特色造りの一つであった。

6 月 5 号館の校内売店等を改装し、2 教室を造る。

これによって、高校教室に間借りしていたような中学校教室が、狭い所ではあったが、全て小学校と隣り合うものとなった。現在、英才教室・応接室となっている。

6 月 「第 5 回わんぱく相撲武蔵野場所」本校からの参加児童は、46 名。今回から団体戦と女子の部も新しく種目に加えられた。準優勝以上の入賞者は以下の通り。

男子団体 優 勝

2 年の部 優 勝 不破大輔

4 年の部 優 勝 和田昌弘

6 年の部 優 勝 新後閑弘章

6 年の部 準優勝 御園哲平

女子の部 準優勝 對馬有佳子

6 月 第 18 回英才教育公開研究発表会開催（6 月 13 日）

主題 = 英才教育の追究

幼稚園 = 考える力を育てる保育(3)

低学年 = 知能開発をめざした学習指導(10)

高学年 = 一人ひとりの能力や個性に応じた指導(5)

[主な内容]

① 公開授業・公開保育

② 園児・児童発表（歌と合奏・歌唱・児童劇）

7 月 林間学校実施（群馬県武尊高原・3 泊 4 日）

8 月 夏休み中に 8 号館屋上の防水・補強工事が行われ、花壇と温室を設置した。花壇が十基、温室は 4.8 坪と比較的広く、30 名のクラス全員が十分活動できるスペースになっている。温室によって、越年草や多年草の冬越しが可能になり、バラエティに富んだ栽培が可能になった。

8 月 第 1 回『知能教育夏期教育セミナー』開催

本学園に於ける英才教育及び知能教育の啓蒙を図り、幼児の知能教育と知能診断を行なって家庭教育の指針を与えるという目的で実施する。

10 月 第 2 回聖徳、祭開催。

11 月 第 29 回東京都児童生徒発明工夫展 首席学校賞受賞
(5 回目)

特別賞受賞者は、以下の通り

毎日小学生新聞社賞 2 年 片岡美衣

東京文具工業連盟会長賞 5年 石神太人

11月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 武富剛士（3年）

高学年の部 優勝 初田香成（4年）

昭和63年 2月 第7回多摩川サケ杜行会参加

2月 スキー学校実施（尾瀬戸倉・3泊4日）

3月 第27回幼小合同研修合宿（青梅市）

主な内容

「能力の限界に挑戦させ学力を保障する学習指導」

「学習生活を高め、活力ある学校生活を送らせる指導」

5月 第35回漢字能力検定試験

三級合格 6年 大塚亮

6月 「第6回わんぱく相撲武蔵野場所」

本校からの参加児童は、55名。準優勝以上の入賞者は、以下の通り。

6年の部 優 勝 大塚 亮

高学年

女子の部 準優勝 猪又玲子

6月 英才教育20周年記念

第19回英才教育公開研究発表会開催（6月18日）

主題＝英才教育の追究

幼稚園＝のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

低学年＝知能開発をめざした学習指導(1)

高学年＝一人ひとりの能力や個性に応じた指導(6)

[主な内容]

① 公開授業・公開保育

② 児童発表（歌唱）

③ 研究発表「聖徳学園における英才教育」

主 事	園田達彦
教務主任	郡司英幸
校務主任	小林五郎
歴史科主任	大竹良造

7 月 林間学校実施（福島県甲子高原・3泊4日）

8 月 幼稚園庭改修工事

夏休み中に、大型のアスレチックの設置と、水捌けを良くする工事を行う。子ども達の遊びを更に多様化させるため。

9 月 第3回聖徳祭開催

今回に合わせて、幕・バトン・照明・講堂天井と諸設備も整え、例年以上に立派な演技・発表ができた。

11 月 第32回東京都児童生徒発明工夫展学校賞受賞（六回目）

11 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 桜庭 泰（3年）

高学年の部 優勝 武富剛士（4年）

平成元年 2 月 第8回多摩川サケ壮行会参加

2 月 スキー学校実施（尾瀬戸倉・3泊4日）

4 月 幼稚園アスレチック新増設

春休み中に園庭に以前の約二倍もの規模に増設し、それに伴い、砂場も大きく拡張した。

4 月 幼稚園1学年3人担任制開始

この制度により、子どもの個性に応じたきめの細かい指導が促進された。

4 月 科学技術庁長官から、「創意工夫育成功労学校」として表彰される。

これによって、“新しい宇宙時代のリーダー”を育成し、“新

発見の創造力を養って'いることが、対外的にも評価された。直接的には、“英才教育”導入以来実施している『夏休み自由研究展』が大きな力となった。

5 月 第 37 回漢字能力検定試験

二級合格 5 年 後藤 啓太

三級合格 5 年 栗田瑠理子

6 月 第 20 回英才教育公開研究発表会開催（6 月 24 日）

主題 = 英才教育の追究

幼稚園 = のびのびとした子どもの活動を助長する保育

低学年 = 知能開発をめざした学習指導⁽¹²⁾

高学年 = 一人ひとりの能力や個性に応じた指導⁽⁷⁾

[主な内容]

① 公開授業・公開保育

② 児童発表（歌唱・児童劇）

③ 研究発表「聖徳学園における英才教育」

数学科主任 小松賢司

6 月 「第 7 回わんぱく相撲武蔵野場所」

本校からの参加児童は、57 名。準優勝以上の入賞者は、以下の通り。

1 年女子の部 優 勝 伊藤百合子

2 年男子の部 準優勝 橋場俊介

2 年女子の部 準優勝 越智久さこ

6 年女子の部 優 勝 對馬有佳子

団体の部 準優勝

7 月 林間学校実施（長野県鹿島槍・3 泊 4 日）

8 月 全国学校秀作美術展主な受賞者は次の通り。

文部大臣奨励賞 4 年 渋谷嘉久

読売新聞社賞 1年 鈴木英昭 他4名

9月 第4回聖徳祭開催。

今回から、内容の充実を図る為、学年毎に、クラス別の発表とし、原則として1クラスが劇発表、もう1クラスが音楽発表をする事になった。

10月 第39回全国小・中学校作文コンクール

読売新聞社賞 3年 野瀬 朗満

11月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 岩田 和宏(3年)

高学年の部 優勝 初回 香成(6年)

11月 第38回漢字能力検定試験

一級合格 5年 後藤 啓太(特別賞受賞)

平成2年2月 第8回多摩川サケ壮行会参加

2月 スキー学校実施(尾瀬戸倉・3泊4日)

5月 「第8回わんぱく相撲武蔵野場所」

本校からの参加児童は、72名。

6年男子の部 優勝 新後閑正敏

1年女子の部 優勝 斎藤祐理

2年女子の部 優勝 高橋志穂

4年女子の部 優勝 土谷真貴子

6月 第21回英才教育公開研究発表会開催(6月24日)

主題 = 英才教育の追究

幼稚園 = のびのびとした子どもの活動を助長する保育(2)

低学年 = 知能開発をめざした学習指導(13)

高学年 = 一人ひとりの能力や個性に応じた指導(8)

[主な内容]

① 公開授業・公開保育

② 児童発表（歌唱・児童劇）

③ 研究発表「知能開発をめざした学習指導」

国語科 教諭 葛西琢也

「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

歴史科 主任 大竹良造

7 月 林間学校実施（山形県蔵王・3泊4日）

8 月 全国学校秀作美術展

主な受賞者は次の通り。

会長賞 5年 横川 超

読売新聞社賞 4年 吉岡里衣 他5名

10 月 平成2年度第二回文部省認定英語検定実施

三級合格（中学卒業程度） 5年 横川 超

11 月 全国小・中学校作文コンクール（都予選）

読売新聞社賞（低学年の部） 1年 裏谷文野

読売新聞社賞（高学年の部） 4年 石塚悦信

11 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 小池暁大（3年）

高学年の部 優勝 桜庭 泰（5年）

平成3年2月 第10回多摩川サケ壮行会参加

2 月 スキー学校実施（尾瀬戸倉・3泊4日）

4 月 幼稚園延長保育開始

専門職員（3名）の指導による、延長保育を開始。年中・年長の希望者対象で、降園時間後16時半まで。

6 月 第22回英才教育公開研究発表会開催（6月22日）

主題＝英才教育の追究

幼稚園＝のびのびとした子どもの活動を助長する保育(3)

小学校＝個性を生かす、その視点と方法を求めて

[主な内容]

① 公開授業・公開保育

② 講演「聖徳学園の教育の目指すもの」

園長・校長 和田知雄

③ 児童発表（歌唱）

7 月 林間学校実施（長野県志賀高原・3泊4日）

9 月 第48回全国学校秀作美術展

主な受賞者は次の通り。

東京都教育委員会賞 上杉泰成（3年）

読売新聞社賞 真野 渚（2年）

9 月 第41回漢字能力検定試験

優秀賞 山田奈央（6年）

11 月 第41回全国小・中学校作文コンクール（都予選）

入 選（低学年の部） 2年 裏谷 文野

11 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 桜庭 駿（3年）

高学年男子の部 優勝 森 悠（6年）

高学年女子の部 優勝 内田梨沙（6年）

今年度から、高学年は男女別の表彰とした。

平成4年1月 平成3年度第二回文部省認定英語検定実施

二級合格（高校修了程度） 小6 横川 超

2 月 スキー学校実施（尾瀬戸倉・3泊4日）

2 月 第9回全国小中学生作品コンクール

社会科部門 優秀賞 小5 野瀬朗満

3 月 第42回漢字能力検定試験

優秀賞 矢田麻衣子（6年）

4 月 園田達彦主事が園長・校長に就任。郡司教務主任が教頭に就任。

4 月 幼稚園・小学校の教育内容を一本化を図り、幼・小一貫教育体制を整える。

4 月 新たに中学・高等学校 6 ヶ年の一貫教育体制となって、聖徳学園の教育内容が一本化した。

6 月 第 23 回英才教育公開研究発表会開催（6 月 20 日）

主題 = 英才教育の追究

幼稚園 = のびのびとした子どもの活動を助長する保育(4)

小学校 = 個性を生かす、その視点と方法を求めて(2)

[主な内容]

① 公開授業・公開保育

② 講演「聖徳学園幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長・小学校長 園田達彦

③ 研究発表「授業実践を通して『英才児』の個性を探る」

歴史科主任 内藤 茂

④ 児童発表（歌唱）

7 月 林間学校実施（新潟県六日町・3 泊 4 日）

11 月 幼稚園での園テストに「知能テスト」を導入。

11 月 草野教務主任、東京都私立学校教育振興会主催・ヨーロッパ教育事情視察。

平成 5 年 2 月 スキー学校実施（尾瀬戸倉・3 泊 4 日）

4 月 第 36 回研修合宿実施（鳩の巣・一心亭）2 泊 3 日

英才教育 25 周年に当たることから英才教育の基本理念の確
認と、幼稚園と小学校の一貫教育の実施にともない、その基
本要項と指導計画の検討を行う。

講演「教員としての心構え」私学教育研究所 関下俊英

6 月 第 24 回公開研究発表（19 日）

主題 = 英才教育の追究

幼稚園＝子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて

小学校＝個性を生かす、その視点と方法を求めてⅢ

[主な内容]

① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長・小学校長 園田達彦

② 公開授業・公開保育

③ 研究発表「英才児の作文からその個性を考える」

研究主任 葛西琢也

教務主任 草野修三

8 月 第 37 回研修合宿実施（鳩の巣・一心亭）2泊3日

春の合宿に引き続き、幼稚園と小学校の一貫教育が中心課題となる。討議と実践研究発表。

講演「幼小の教育と今後の課題」

幼稚園長・小学校長 園田達彦

講演「聖徳学園英才教育の原点について」

理事長 和田知雄

平成 6 年 4 月 第 38 回研修合宿実施（鳩の巣・一心亭）2泊3日

「幼稚園と小学校の教育 ― その指導方法と一貫性の充実」

「学校週休五日制について」

「英才児のクラス経営はどうあるべきか」

「評価書改定」

などの問題を検討した。

6 月 科学技術庁長官から、「創意工夫育成功労学校」として表彰される。

6 月 第 57 回東京陸上競技選手権大会

男子 400 メートルリレー 第二位

6 年 鈴木洋平 他 3 名

6 月 東京チビリンピック大会

3 年生 400 メートルリレー 第一位

石田高広 他 3 名

5 年生 400 メートルリレー 第一位

原田将充 他 3 名

3 年生ミニマラソン 第三位 吉岡卓人

6 月 第 25 回公開研究発表会 (6 月 18 日)

主題 = 英才教育の追究

幼稚園 = 子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて

小学校 = 個性を生かす、その視点と方法を求めて IV

[主な内容]

① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長・小学校長 園田達彦

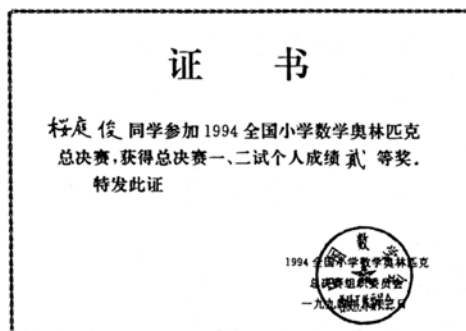
② 公開授業・公開保育

③ 研究発表「英才児は地図をどう描くか」

— 子供の空間認識と視点の転換 —

地理科主任 松崎昭彦

7 月 第三回算数オリンピック総決勝 (世界) 大会



個人総合第 2 位の賞状

中華人民共和国北京市にて開催

6年 桜庭 俊 個人総合 二位

チーム（3人）の部一位

7月 林間学校（22日から3泊4日）

新潟県・国立妙高高原少年自然の家

7月 知能教育夏期セミナー（7月28日～8月2日）

約60名の幼児とその保護者の方々が参加

8月 第39回研修合宿（鳩ノ巣・一心亭）2泊3日

講演「聖徳学園における一貫教育」 校長 園田達彦

「ひとりひとりに応じた教育」— 個別化教育とその実践 —

東京理科大学講師 武田一美 先生

実践研究発表

「幼児期の造形遊び」 幼稚園 永坂 圭子

「知能訓練とゲーム」 英才教室 山本 裕子

「統計的検定による本校の様子」 養護 仲道 明子

「運動を適した時期に行うために」 小学校 粕加屋直幸

9月 第51回秀作美術展覧会

文部大臣奨励賞 5年 飯田貴俊

読売新聞社賞 3年 河内悠磨

豊泉樹一郎

5年 真野 渚

瀧澤昌代

久しぶりに伏見賞の受賞者が出た。また、創意、工夫に富んだ作品にはアイデア賞を出すことになった。

10月 第9回聖徳祭開催

第14回すくすく王将杯関東地区大会

優勝 聖徳学園小Aチーム

明円 匠・森本泰介・仲澤雄貴

全七対局全勝の完全優勝

三位 聖徳学園小 B チーム

村野太河・石井直樹・仲澤直弘

校内マラソン大会 (28 日)

低学年の部 3 キロメートル

3 年 石田高広 12 分 56 秒

高学年男子の部 5 キロメートル

4 年 小島 哲 22 分 30 秒

高学年女子の部 5 キロメートル

5 年 常石麻央 24 分 30 秒

11 月 第 14 回すすく王将杯全国大会・神田一橋毎日新聞社にて
準優勝 明円 匠・森本泰介・仲澤雄貴

12 月 児童用パソコン

ブレイルルームと学習室に 20 台設置。アップルコンピュー
ター社のパワーマッキントッシュ 6100AV 等 20 台。

平成 7 年 2 月 スキー学校 (尾瀬・戸倉) 3 泊 4 日

3 月 第 50 回全日本学生児童発明くふう展
内閣総理大臣賞「段差乗りこえ車イス『エス軽号』
3 年生 清水達郎

4 月 第 40 回研修合宿実施 (鳩ノ巣・一心亭) 2 泊 3 日
学校週休 5 日制への対応、内部進学問題
幼・小の課題と今後の方向等

4 月 第 10 回武蔵野スプリント陸上競技会
小学校男女 400 メートルリレー
優勝 聖徳小 A 55 秒 49

(羽田隼也・鈴木洋平・原田将充・村松史隆)

5 月 修学旅行（5泊6日）

阪神大震災の影響で実施が危ぶまれたが、新幹線も開通し、例年と変わらない日程で実施。10日に発ち、長崎・熊本・阿蘇・吉野ヶ里・秋芳洞・秋吉台・萩を回って15日に帰京した。

5 月 和田知雄理事長 藍綬褒章を受賞

15日、皇居にて伝達式が行われたあと、天皇陛下からお言葉を賜りました。

昭和44年、小学校に英才教育を導入、本学園の教育改革に取り組み、幼稚園から高等学校までの一貫教育を推進し、以来着実に成果を上げたことが高く評価された。

6 月 第26回公開研究発表会（6月17日）

主題＝英才教育の追究

幼稚園＝子どもの知能の発達を助長する遊びを求めてⅡ

小学校＝個性を生かす、その視点と方法を求めてⅤ

[主な内容]

① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長・小学校長 園田達彦

② 公開授業・公開保育

③ 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践

— 自由研究・特別研究を中心に —

特別研究科主任 大河内浩樹

7 月 林間学校実施（長野県・志賀高原、3泊4日）

8 月 第41回研修合宿（鳩ノ巣・一心亭）2泊3日

講演 「学校週5日制実施に当たって」

園長・校長 園田達彦

「創造性の教育 — 創造的知能の育成 —」

東洋大学名誉教授 恩田 彰 先生

実践研究発表

「年長組におけるリトミック遊びの実践から」

幼稚園 高垣栄里子

「創造性豊かな子を育てる『知能遊び』の方法と視点」

英才教室 菊池理香子

「聖徳学園小学校における創造力育成の実践」

小学校 大河内浩樹

「ディベート活動の実践 ― 子どもの論理的思考力を刺激する ―」

小学校 渡辺泰介

「コンピューターの利用法を探る」

小学校 和田知之

9 月 第 52 回全国学校秀作美術展

読売新聞社賞 4 年 豊泉樹一郎

第 19 国学芸書道全国展

会長賞 3 年 大澤悠子

優秀団体賞も合わせて受賞した。

第 15 回すくすく王将杯関東地区大会 3 連覇

優勝 明円 匠・森本泰介・仲澤雄貴

11 月 由里敏夫教諭 欧州教育事情視察（14 日間）

東京都私学教育振興会主催の視察団の一員としてイタリア・
スイス・フランス・イギリスの 4 か国を訪問。

11 月 校内マラソン大会

優勝者 低学年の部 3 年 岸井将吾

高学年男子 5 年 渡辺孝典

高学年女子 6 年 常石麻央

11 月 第 39 回東京都児童生徒発明くふう展

毎日小学生新聞賞 1 年 島本弘樹

東京文具工業連盟会長賞 2 年 及川正輝

日刊工業新聞社賞 3年 徳増 卓宏
発明協会東京支部賞（小森発明記念）

2年 清水 絢子

4年 清水 達郎

優秀賞 3年 黒川 右基

2年 土田悠平

優秀校として、2年連続筆頭学校賞を受賞。

11月 第45回小・中学校作文コンクール東京都コンクール

高学年の部 特選 東京都教育委員会賞

6年 吉野かえで

入選 5年 小島 哲

低学年の部 入選 1年 馬場祐子

平成8年1月 第45回小・中学校作文コンクール 全国コンクール

高学年の部 入選・読売新聞社賞 6年 吉野かえで

詩・小学生の部 佳作 3年 久富由賀

1月 第15回すくすく王将杯全国決勝大会 毎日新聞社主催

優勝 明円 匠・森本泰介・仲澤雄貴

1月 校内書き初め大会

特別賞 3年 大澤 悠子

1月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 3年 橋本・内藤・福島

高学年の部 優勝 4年 森本・小山・尾嶋

2月 スキー学校実施（尾瀬戸倉）3泊4日

3月 文部省認定漢字能力検定試験

6級合格 4年 大澤悠子

4月 第42回研修合宿実施（青梅簡易保険保養センター）2泊3日

講演 「学校週5日制実施と今後の課題」

園長・校長 園田達彦

「平成 8 年度各教科年間指導計画」

学校週 5 日制実施に伴う教育課程の改訂

「平成 8 年度学級経営案及び年間計画検討」

— 個と集団から子どもたちの実態を考える —

4 月 学校週 5 日制実施

月に 2 回程度の土曜日を休業とする、週 5 日制が始まる。

6 月 第 27 回公開研究発表会（15 日）

主題 = 英才教育の追究

幼稚園 = 子どもの知能の発達を助長する遊びを求めてⅢ

小学校 = 英才児の創造性の開発と育成

[主な内容]

① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長・小学校長 園田達彦

② 公開授業・公開保育

③ 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践」

工作科主任 加賀光悦

7 月 林間学校実施（長野県・志賀高原、3 泊 4 日）

8 月 第 43 回研修合宿実施（青梅・国民年金保養センター）

講演「個性と創造性豊かな人間性を育てる教育を目指して」

園長・校長 園田達彦

講演「聖徳学園の教育と今後の展望」

理事長 和田知雄

週 5 日制に伴う学校行事の精選

子どもたちの実態を考える — 成長の課題を捜す —

学級経営の中開発表 — 成長の課題を検討整理する —

9 月 音楽教室発表会実施

9 月 夏休み自由研究展

- | | | | |
|-------|-----------------|-----|---------|
| 伏見賞 | 「フンバルゾー」 | 3 年 | 清水絢子 |
| 優秀賞 | 「ひよこのびび」 | 1 年 | 河嶋彩花 |
| | | | 他 31 作品 |
| 努力賞 | 「マゼラン世界一周」 | 1 年 | 今泉智裕 |
| | | | 他 52 作品 |
| アイデア賞 | 「ほこり外にでーるでるホース」 | 2 年 | 高橋弘堯 |
| | | | 他 21 作品 |

10 月 第 53 回全国学校秀作美術展

例年のごとく多数の入選者を出す。

10 月 加賀光悦教諭 米加教育事情視察（14 日間）

東京都私立学校教育振興会主催の視察団の一員として米国・カナダの教育事情を視察。

11 月 第 20 回学芸書道全国展

- 会長賞 4 年 大澤悠子
優秀団体賞も合わせて受賞。

11 月 第 40 回東京都児童生徒発明くふう展

- | | | |
|--------------|-----|-------|
| 都知事賞「フンバルゾー」 | 3 年 | 清水絢子 |
| 小森発明記念賞 | 1 年 | 袖山美紀子 |
| 毎日小学生新聞賞 | 1 年 | 別府邦彦 |
| 吉田発明記念賞 | 4 年 | 乙幡勇介 |
| 東京商工会議所会頭賞 | 4 年 | 徳増卓宏 |

11 月 第 46 回全国小・中学校作文コンクール東京都コンクール

- | | | | | |
|-------|----|--------|-----|------|
| 低学年の部 | 入選 | 読売新聞社賞 | 2 年 | 加納史織 |
| 高学年の部 | 入選 | 読売新聞社賞 | 5 年 | 片山理央 |

11 月 校内マラソン大会

低学年の部 3 年 松山 剛

高学年男子の部 6 年 渡辺孝典

高学年女子の部 6 年 松山紗矢子

平成 9 年 1 月 校内書き初め大会

金賞 5 年 武井ゆりあ

5 年 村野太河

金賞 6 年 榛澤 望

6 年 渡辺孝典

1 月 百人一首大会

低学年の部

優勝 竹川奈央子・生駒三津子・清水志織

高学年の部

優勝 大澤悠子・堀越友香・矢部あずさ

2 月 スキー学校実施（長野・北志賀高原）3 泊 4 日

2 月 第 50 回全国児童生徒発明工夫展

特別賞 弁護士会会頭賞 3 年 清水絢子

奨励賞 5 年 清水達郎

入選 1 年 別府邦彦

1 年 袖山美紀子

2 年 大田竜太郎

4 月 第 44 回研修合宿実施（青梅・簡易保険保養センター）

講演「平成 9 年度の方針—学校週 5 日制実践を踏まえて」

園長・校長 園田達彦

幼小の課題と今後の方向—学校評価集計を元に—
各教科年間指導計画

— 学校週 5 日制に伴う教育内容の精選と独自性—

学級経営案及び年間指導計画

4 月 科学技術庁長官から「創意工夫育成功労学校」として表彰される。

6 月 第 29 回公開研究発表会（15 日）

主題 = 英才教育の追究

幼稚園 = 子どもの知能の発達を助長する遊びを求めてⅣ

小学校 = 英才児の創造性の開発と育成Ⅲ

[主な内容]

① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長・小学校長 園田達彦

② 公開授業・公開保育

③ 研究発表「創造性と学習 — 数学の実践から —」

数学科主任 松浦博和

7 月 林間学校実施（長野・志賀高原）3 泊 4 日

8 月 松崎昭彦教諭 オーストラリア・ニュージーランド教育事情
視察。東京都私立学校教育振興会主催の視察団の一員として
教育事情視察

8 月 第 45 回研修合宿実施（八王子・私学教育総合センター）

講演「英才児の創造的知能の開発と育成」

園長・校長 園田達彦

（実践研究発表）

英才児のその後 — 卒業生の実態調査 — 草野修三

オーストラリア・ニュージーランドの教育事情

松崎昭彦

生き物を通して保育を考える — ハムスターの飼育から

園山恵理子

知能遊び「もしこうなったら」から

創造性の育成について考える

松尾由香

その他、6編

9 月 夏休み自由研究展

特別賞 「彦坂ゆねによる・恐竜系統図」

3 年 彦坂ゆね

優秀賞 「ほくのともだち」

1 年 奥村 翼 他 32 作品

努力賞 「海の生き物・自然の生き物」

1 年 鬼頭宏彰 他 50 作品

アイデア賞 「猫のえさやりくん」

3 年 島本弘樹 他 25 作品

9 月 学園創立 70 周年記念式典（26 日） 高等学校講堂

5 年生、6 年生出席

4 年生ミュージックベル演奏

9 月 第 50 回全国秀作美術展

文部大臣賞 3 年 中村 太一

9 月 第 1 回ジュニア算数オリンピック

第一位 5 年 松本 雄也

算数オリンピック委員会、読売新聞社主催の 5 年生以下を対象としたもの。今年から新設された大会の初代チャンピオンになった。

9 月 創立 70 周年記念聖徳祭（中学・高校の太子祭と同時開催）

中学生によるマオリダンス（ニュージーランド）が披露された。

9 月 聖徳学園音楽発表会（23 日）武蔵野市民文化会館

本学園小学生・中学生・高校生の合同弦楽アンサンブルによ

る演奏。ヴィヴァルディの『四季』から「秋」を演奏。

- 10 月 創立 70 周年記念講演会（4 日）中高講堂
講師 丸子 孝法（三輪山平等寺住職）
演題「ただひたすらに道を求めて」
- 10 月 創立 70 周年記念パーティー（4 日）京王プラザホテル
約 600 人の列席のもと、盛大に行われた。
- 10 月 創立 70 周年記念 幼稚園・小学校合同運動会
中学生高校生女子のダンス、同じく男子による組体操の演技
が披露された。
- 10 月 第 17 回すくすく王将杯関東地区大会
第 3 位 6 年 仲澤雄貴
5 年 松本雄也
4 年 仲澤直弘
- 11 月 第 41 回東京都児童生徒発明くふう展
東京都知事賞 5 年 黒川右基
発明協会会長賞 2 年 河嶋彩花
毎日新聞社賞 4 年 石川貴之
日刊工業新聞社賞 6 年 清水達郎
東京商工会議所会頭賞 3 年 中川 渉
入選 4 年 清水 絢子 他 9 名
- 11 月 第 47 回全国小・中学校作文コンクール 東京都コンクール
低学年の部
入選 読売新聞社賞 2 年 進藤耀子
佳作 3 年 初川未来
高学年の部
佳作 4 年 柴田悠佑
- 11 月 第 7 回夏休み昆虫研究大賞

優秀賞 2 年 谷山太郎

4 年 高和真名

11 月 第 7 回地球にやさしい作文・活動コンテスト

奨励賞 4 年 田中 佑

11 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 3 年 神崎太陽

高学年男子の部 優勝 6 年 尾嶋龍太郎

高学年女子の部 優勝 5 年 神崎綾乃

平成 10 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 3 年

中川 渉・池部 敦・太田海渡 チーム

高学年の部 5 年

橋本栄利香・大澤悠子・堀越友香 チーム

1 月 「小さな親切」実行賞受賞

4 年 松山 剛・桑子真帆・小山悠美子

今回の表彰理由は、目の不自由な方やお年寄りに対する親切
に対してのもの。

1 月 校内書き初め大会

金賞 5 年 矢部あずさ

5 年 大澤悠子

金賞 6 年 武井ゆりあ

6 年 由島道郎

2 月 スキー学校実施（長野・北志賀高原）3 泊 4 日

2 月 第 43 回全日本学生美術展において、「全日本学生美術会賞」
を受賞

3 月 第 56 回全国学生児童生徒発明くふう展

特別賞 毎日新聞社賞 5 年 黒川右基

- | | | |
|-----|-----|------|
| 奨励賞 | 4 年 | 石川貴之 |
| 入 選 | 6 年 | 清水達郎 |
| | 2 年 | 河嶋彩花 |
| 参加賞 | 3 年 | 中川 渉 |
- 4 月 第 46 回研修合宿実施（青梅・おくたま路）
- 英才児の創造的知能の開発と育成をテーマに、英才教育
30 年の経過と課題を踏まえて、
- (1)聖徳の教育理念（教育目標・お誓い 3 ヶ条）
- (2)個性と能力に応じた指導
- を再認識し、
- 平成 10 年度の各学科年間指導計画
- 平成 10 年度学級経営案及び年間指導計画
- 等を検討し新年度の方針を確認した。
- 6 月 英才教育 30 周年記念の公開研究発表会実施
- 7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3 泊 4 日
- 8 月 第 47 回夏期合同研修合宿実施（サンビア多摩：多摩センター）
- 11 月 全国小・中学校作文コンクール高学年の部
- 文部大臣奨励賞 4 年 中川 渉
- 校内マラソン大会
- | | | |
|---------|----|-----------|
| 低学年の部 | 優勝 | 大原裕史 |
| 高学年男子の部 | 優勝 | 本間仁人 岸井将吾 |
| 高学年女子の部 | | 田中 愛 |
- 12 月 第 42 回東京都児童生徒発明くふう展 12 度目の学校賞受賞
- | | | |
|--------------------|-----|-------|
| 発明協会会長奨励賞 | 4 年 | 太田竜太郎 |
| 毎日小学生新聞賞 | 5 年 | 清水絢子 |
| 東京文具工業連盟会長賞 | 2 年 | 前田優那 |
| 発明協会東京支部賞（吉田発明記念賞） | 4 年 | 前田怜那 |

優秀賞（6点） 入選（6点）

- 平成 11 年 2 月 スキー学校実施（尾瀬戸倉）3泊4日
- 3 月 第回全国学生児童生徒発明くふう展 特別賞 入選
- 4 月 第 48 回春期合同研修合宿実施（サンピア多摩：多摩センター）
長尾 央学園長就任
- 6 月 公開研究発表会
- 7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3泊4日
- 8 月 第 49 回夏期合同研修合宿実施（安田生命アカデミア：調布）
- 11 月 全国小・中学校作文コンクール
高学年の部 読売新聞社賞 5 年 初川未来
- 11 月 発想コンテスト 文部大臣奨励賞
校内マラソン大会
低学年の部 優勝 大蔵康一
高学年男子の部 優勝 清川智博
高学年女子の部 田中 愛
- 12 月 第 43 回東京都児童生徒発明くふう展 13 度目の学校賞受賞
東京都知事賞 4 年 茂木麻美
発明協会会長奨励賞 5 年 高橋篤哉
発明協会東京支部賞（蟻川発明記念賞） 6 年 内田 堯
優秀賞（4点） 入選（8点）

- 平成 12 年 1 月 校内百人一首大会
低学年の部
高学年の部
- 2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日
- 4 月 第 50 回春期合同研修合宿実施（安田生命教育センター：府中）
学校週 5 日制（月 3 回）実施
- 7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3泊4日

8 月 第 51 回夏期合同研修合宿実施（私学教育研究所：八王子）

11 月 「聖徳式知能構造検査法」完成

校内マラソン大会

低学年の部 優勝 矢澤俊明

高学年男子の部 優勝 清川智博

高学年女子の部 田中 愛

12 月 第 44 回東京都児童生徒発明くふう展 14 度目の学校賞受賞

東京都知事賞 4 年 前田優那

発明協会東京支部長賞 5 年 茂木麻美

発明協会東京支部賞（渡邊発明記念賞） 2 年 柿本建治郎

発明協会東京支部賞（蟻川発明記念賞） 1 年 河嶋紫帆

優秀賞（5 点） 入選（3 点）

平成 13 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部

高学年の部

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3 泊 4 日

4 月 第 52 回春期合同研修合宿実施（サンビア多摩：多摩センター）

文部科学大臣から「創意工夫育成功労学校賞」受賞

7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3 泊 4 日

8 月 第 53 回夏期合同研修合宿実施（私学教育総合センター：八王子）

11 月 全国小・中学校作文コンクール

低学年の部 入選 3 年 江見桐子

12 月 第 45 回東京都児童生徒発明くふう展 15 度目の学校賞受賞

東京都知事賞 2 年 榎本康熙

発明協会東京支部賞 2 年 濱 祥乃

毎日小学生新聞賞 2 年 高橋俊允

入選（7点）

平成 14 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 近藤彩佳・瀬谷彩乃・駒木根 愛

高学年の部 須崎奈々・新井真梨子・茂木麻美

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日

4 月 第 54 回春期合同研修合宿実施（私学教育総合センター：八王子）

「完全学校 5 日制」実施

7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3泊4日

8 月 第 55 回夏期合同研修合宿実施（私学教育総合センター：八王子）

全国陸上大会に東京都代表として 400M リレー出場

校内マラソン大会

低学年の部 優勝 中村 海

高学年男子の部 優勝 大河内雅喜

高学年女子の部 甲斐絵里香

12 月 第 46 回東京都児童生徒発明くふう展 16 度目の学校賞受賞
東京商工会議所会頭賞 2 年 土屋奈央

優秀賞（3点） 入選（5点）

平成 15 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 梅澤麻理花・池谷桃子・田村安紗美

高学年の部 矢野肖哲・加藤 優・宮本知宙

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日

4 月 第 56 回春期合同研修合宿実施（私学教育総合センター：八王子）

7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3泊4日

8 月 算数オリンピックにおいて「金メダル」「銀メダル」受賞

全国学校秀作美術展において「文部科学大臣賞」受賞
第 57 回夏期合同研修合宿実施（私学教育総合センター：八王子）

11 月 全国小・中学校作文コンクール
低学年の部 入選 3 年 鈴木桜子

11 月 校内マラソン大会
低学年の部 優勝 堀口 爽
高学年男子の部 優勝 鈴木一朗
高学年女子の部 優勝 横尾怜奈

12 月 第 47 回東京都児童生徒発明くふう展 17 度目の学校賞受賞
東京都教育委員会賞 3 年 土屋奈央
発明協会会長奨励賞 5 年 坂田龍玄
発明協会東京支部賞（蟻川発明記念賞） 5 年 新井麻貴
発明協会東京支部賞（梶原発明記念賞） 2 年 斉藤利知
優秀賞（3 点） 入選（7 点）

平成 16 年 1 月 校内百人一首大会
低学年の部 優勝 榎本玲香・宮原七奈子・小川真穂
高学年男子の部 優勝 柴崎由梨・渡邊美奈・井上楠奈子

3 月 フルブライトメモリアル基金（FMF）マスターティー
チャープログラム（MTP）2004 に参加し、加賀教頭・大河
内教諭・三輪教諭の 3 名がアメリカミズーリ州の共同研究校
ノール小学校を 10 日間に渡って訪問。

4 月 第 58 回春期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3 泊 4 日

8 月 第 59 回夏期合同研修合宿実施（私学教育総合センター：八王子）

11 月 全国小・中学校作文コンクール低学年の部

読売新聞社賞 2年 守谷友里恵

11月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 松野 理

高学年男子の部 優勝 堀口 爽

高学年女子の部 優勝 横尾怜奈

12月 第48回東京都児童生徒発明くふう展 17度目の学校賞受賞

毎日小学生新聞賞 2年 重村淳輔

優秀賞(5点) 入選(4点)

平成17年1月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 榎本玲香・岸岡悠太・小川真穂

高学年の部 優勝 柴崎由梨・渡邊美奈・井上楠奈子

2月 スキー学校実施(北志賀高原竜王スキー場) 3泊4日

3月 フルブライトメモリアル基金(FMF) マスターティー
チャープログラム(MTP) 2005に参加し、大河内教諭・藤
石教諭の2名がアメリカテキサス州の共同研究校マーティ
ンルーサーキングアカデミー小学校を10日間に渡って訪問。

4月 第60回春期合同研修合宿実施(おくたま路:石神前)

文部科学大臣から「創意工夫育成功労学校賞」受賞

5月 日本オセロ名人戦大会 小学生の部 優勝

7月 林間学校実施(裏磐梯高原) 3泊4日

8月 企業等派遣研修として、細沼教諭が電力中央研究所、大下教
諭が伊勢丹、橋本教諭がニチレイにて研修。

第61回夏期合同研修合宿実施(私学教育総合センター:八
王子)

11月 全国小・中学校作文コンクール

低学年の部 読売新聞社賞 2年 藤澤勇樹

11月 校内マラソン大会

高学年女子の部 優勝 横尾怜奈

11月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 安藤貴亮

高学年男子の部 優勝 松野 理

高学年女子の部 優勝 榎本玲香

12 月 第 50 回東京都児童生徒発明くふう展 19 度目の学校賞受賞

発明協会会長奨励賞 6 年 荒巻勇介

毎日新聞社賞 2 年 野田 諒真

毎日小学生新聞賞 6 年 土屋奈央

優秀賞（6 点） 入選（6 点）

平成 19 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 藤井大雅・種田裕紀・木崎健太

高学年の部 優勝 土屋奈央・匂坂美彩・森川朋美

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3 泊 4 日

3 月 第 68 回全国学生児童生徒発明くふう展

内閣総理大臣賞受賞

4 月 第 64 回春期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3 泊 4 日

8 月 第 65 回夏期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

11 月 全国小・中学校作文コンクール

高学年の部 文部科学大臣賞 4 年 小泉佑太

校内マラソン大会

低学年の部 優勝 菅野亮帆

高学年男子の部 優勝 松野 理

高学年女子の部 優勝 高橋容子

12 月 第 51 回東京都児童生徒発明くふう展 20 度目の学校賞受賞

発明協会会長奨励賞 2 年 荒巻美南海

毎日新聞社賞 5 年 土屋茉央

日刊工業新聞社賞 1 年 須田光重

優秀賞（5点） 入選（7点）

平成 20 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 星合 将・石賀健寛・匂坂将人

高学年の部 優勝 榎本玲香・伊関友理恵・林絵莉子

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日

4 月 郡司英幸校長就任

お誓い三か条碑の除幕式を行う

第 66 回春期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3泊4日

8 月 幼稚園・小学校校舎耐震補強工事完了

第 67 回夏期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

11 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 山本峰丸

高学年男子の部 優勝 松野 理

高学年女子の部 優勝 高橋容子

12 月 第 52 回東京都児童生徒発明くふう展 21 度目の学校賞受賞

発明協会東京支部長賞 5 年 宮田忠昌

毎日小学生新聞賞 1 年 長谷川博一

発明協会東京支部長賞（梶原発明記念賞）

2 年 千吉良洋介

優秀賞（4点） 入選（2点）

平成 21 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 寺村優輝・白田彩華・熊倉康太郎

高学年の部 優勝 松田賢尚・飯村聡太・難波繁広

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日

4 月 文部科学大臣から「創意工夫育成功労学校賞」受賞

第 68 回春期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

- 7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3泊4日
- 8 月 第69回夏期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）
- 11 月 全国小・中学校作文コンクール
低学年の部 入選 2年 堀切愛海
- 12 月 第53回東京都児童生徒発明くふう展 21度目の学校賞受賞
発明協会会長奨励賞 1年 小林俊貴
発明協会東京支部長賞 3年 寺本憲弘
毎日新聞社賞 3年 小林祐貴
毎日小学生新聞賞 2年 岸田温夢
発明協会東京支部長賞（蟻川発明記念賞） 6年 宮田忠昌
優秀賞（3点） 入選（5点）

平成22年 1 月 校内百人一首大会
低学年の部 優勝 小原翔維・熊倉康太郎・千吉良洋介
高学年の部 優勝 木崎健太・種田裕紀・星合 将

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日

4 月 加賀光悦校長就任
第70回春期合同研修会実施（校内）

7 月 林間学校実施（裏磐梯高原）3泊4日

8 月 第71回夏期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

10 月 校内マラソン大会
低学年の部 優勝 大塚太郎
高学年男子の部 優勝 山本峰丸
高学年女子の部 優勝 福喜多美佑

12 月 第54回東京都児童生徒発明くふう展 22度目の学校賞受賞
東京都知事賞 6年 佐々木陽菜
発明協会東京支部長賞 3年 寺本憲弘
毎日新聞社賞 3年 小林祐貴

優秀賞（2点） 入選（5点）

平成 23 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 落合菜乃花・田邊萌夏・長瀬毬亜

高学年の部 優勝 木崎健太・種田裕紀・星合 将

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日

4 月 第 72 回春期合同研修会実施（校内）

7 月 林間学校実施（北志賀高原）3泊4日

8 月 第 73 回夏期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

11 月 全国小・中学校作文コンクール

低学年の部 文部科学大臣奨励賞 2 年 土屋有生

高学年の部 読売新聞社賞 5 年 平野力也

第 55 回東京都児童生徒発明くふう展 23 度目の学校賞受賞

発明協会会長奨励賞 5 年 川崎貴博

優秀賞（5点） 入選（8点）

平成 24 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 井上美怜・北村修悟・片山佑士

高学年の部 優勝 小原翔維・熊倉康太郎・寺村優輝

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日

4 月 第 74 回春期合同研修会実施（校内）

7 月 林間学校実施（北志賀高原）3泊4日

8 月 第 75 回夏期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

10 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 中山駿吾

高学年男子の部 優勝 早坂霞谷

高学年女子の部 優勝 大田杏優

12 月 第 56 回東京都児童生徒発明くふう展 25 度目の学校賞受賞

発明協会奨励賞（蟻川発明記念賞）6 年 千吉良洋介

優秀賞（7点） 入選（2点）

平成 25 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 井上美怜・鈴木万里佳・木村圭希

高学年の部 優勝 小林祐貴・杉田美晴・千吉良洋介

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日

4 月 文部科学大臣から「創意工夫育成功労学校賞」受賞

第 76 回春期合同研修会実施（校内）

8 月 第 77 回夏期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

10 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 大田悠生

高学年男子の部 優勝 中山駿吾

高学年女子の部 優勝 小滝千遥

11 月 全国小・中学校作文コンクール

低学年の部 入選 2 年 泉崎友梨子

11 月 第 57 回東京都児童生徒発明くふう展 26 度目の学校賞受賞

優秀賞（3点） 入選（9点）

平成 26 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 藤田英太郎・後藤遼馬・中野由丸

高学年の部 井上美怜・片山佑士・中林篤哉

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日

4 月 第 78 回春期合同研修会実施（校内）

7 月 林間学校実施（北志賀高原）3泊4日

8 月 第 79 回夏期合同研修合宿実施（おくたま路：石神前）

10 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 大田悠生

高学年男子の部 優勝 中山駿吾

高学年女子の部 優勝 小滝千遥

11 月 第 58 回東京都児童生徒発明くふう展 27 度目の学校賞受賞

発明協会会長奨励賞 4 年 小林由季

東京商工会議所会頭賞 4 年 上田起新

優秀賞 (3 点) 入選 (2 点)

平成 27 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 大田悠生・石渡大登・坪川亮太

高学年の部 井上美怜・片山佑士・藤森香帆

2 月 スキー学校実施 (北志賀高原竜王スキー場) 3 泊 4 日

3 月 第 75 回全国学生児童生徒発明くふう展

奨励賞 入選 1 点

4 月 和田知之校長就任

第 80 回春期合同研修会実施 (校内)

7 月 林間学校実施 (北志賀高原) 3 泊 4 日

8 月 第 81 回夏期合同研修合宿実施 (おくたま路: 石神前)

10 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 品田純征

高学年男子の部 優勝 中山駿吾

高学年女子の部 優勝 北園愛果

11 月 全国小・中学校作文コンクール

低学年の部 入選 3 年 辻本 新

11 月 聖徳祭を外部会場 (武蔵野市民文化会館) での開催を始める

12 月 第 59 回東京都児童生徒発明くふう展 28 度目の学校賞受賞

東京都知事賞 2 年 道脇 愛羽

毎日新聞社賞 6 年 土屋 有生

優秀賞 (2 点) 入選 (6 点)

平成 28 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 武智巧樹・財満佑・並木ひめか

- 高学年の部 優勝 中林篤哉・加藤陽太・並木俊輔
- 2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日
- 3 月 第74回全国学生児童生徒発明くふう展
恩賜記念賞 2年 道脇愛羽 「無針弧ンパス」
豊田佐吉賞 入選6点
- 4 月 TKC アフタースクール・課外教室（レゴスクール・ECC 英語教室）を開校
第82回春期合同研修会実施（校内）
- 7 月 林間学校実施（北志賀高原）3泊4日
- 8 月 第83回夏期合同研修会実施（校内）
- 9 月 7つの習慣に基づく「リーダー・イン・ミー」の授業開始
- 10 月 校内マラソン大会
低学年の部 優勝 有馬武廣
高学年男子の部 優勝 大田悠生
高学年女子の部 優勝 町谷心優
- 12 月 第60回東京都児童生徒発明くふう展 29度目の学校賞受賞
優秀賞（7点） 入選（7点）
- 平成29年 1 月 校内百人一首大会
低学年の部 優勝 安生太一・後藤万緒・渡部聖椰
高学年男子の部 優勝 藤田英太郎・石渡大登・土屋真心
- 2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日
- 3 月 「天才頭脳ドリル（年長～小学2年生版）」発行
- 4 月 第84回春期合同研修会実施（校内）
- 7 月 林間学校実施（北志賀高原）3泊4日
- 8 月 第85回夏期合同研修会実施（校内）
- 10 月 校内マラソン大会
低学年の部 優勝 嶋田有佐

中学年男子の部 優勝 今井大煌

中学年女子の部 優勝 安久玲子

高学年男子の部 優勝 大田悠生

高学年女子の部 優勝 町谷心優

11 月 全国小・中学校作文コンクール

低学年の部 読売新聞社賞 3 年 村田優河

12 月 第 61 回東京都児童生徒発明くふう展 30 度目の学校賞受賞

発明協会奨励賞（蟻川発明記念賞） 2 年 船戸琉生

優秀賞（4 点） 入選（10 点）

平成 30 年 1 月 校内百人一首大会

低学年の部 優勝 吉田琥太郎・上野一成・新田見康輝

高学年男子の部 優勝 石渡大登・土屋真心・藤田英太郎

2 月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3 泊 4 日

3 月 「天才頭脳ドリル基礎編（小学 1 年生～3 年生版）」発行

4 月 文部科学大臣から「創意工夫育成功労学校賞」受賞

絵画教室・工作教室を開校

第 86 回春期合同研修会実施（校内）

5 月 武蔵野給食センターによる弁当の提供を始める

7 月 林間学校実施（北志賀高原）3 泊 4 日

8 月 第 87 回夏期合同研修会実施（校内）

10 月 校内マラソン大会

低学年の部 優勝 林 金時

中学年男子の部 優勝 今井大煌

中学年女子の部 優勝 安久玲子

高学年男子の部 優勝 有馬武廣

高学年女子の部 優勝 大内皆実

11 月 全国小・中学校作文コンクール

- 低学年の部 読売新聞社賞 1年 杉田羅々花
佳作入選 1年 佐藤祐里奈
- 高学年の部 読売新聞社賞 4年 大浦儀人
- 12月 第62回東京都児童生徒発明くふう展 31度目の学校賞受賞
東京都知事賞 5年 道脇愛羽
発明協会会長奨励賞 3年 宇於崎理央
毎日小学生新聞賞 2年 山本理世
発明協会奨励賞（蟻川発明記念賞） 3年 木下新太
優秀賞（4点） 入選（10点）
- 平成31年 1月 校内百人一首大会
（令和元年） 低学年の部 優勝 土屋 光・嶋田有佐・ヤマダ淳之介
高学年男子の部 優勝 本橋憲真・福島聖也・三ッ汐海希
- 2月 スキー学校実施（北志賀高原竜王スキー場）3泊4日
- 3月 第77回全国学生児童生徒発明くふう展
恩賜記念賞 5年 道脇愛羽 避難用縄ハシゴ「斜楽」
豊田佐吉賞
「幼児の天才頭脳ドリル ちえパズル」発行
「幼児の天才頭脳ドリル ちえあそび」発行
- 4月 第88回春期合同研修会実施（校内）

児童・園児数の変遷

教務主任 三 輪 広 明

1. 児童数

全て、当該年度の5月1日現在のものである

年 度	児童数	年 度	児童数	年 度	児童数
昭和 26 年	4	昭和 50 年	145	平成 10 年	356
昭和 27 年	8	昭和 51 年	146	平成 11 年	363
昭和 28 年	15	昭和 52 年	148	平成 12 年	359
昭和 29 年	31	昭和 53 年	160	平成 13 年	371
昭和 30 年	64	昭和 54 年	203	平成 14 年	382
昭和 31 年	90	昭和 55 年	221	平成 15 年	383
昭和 32 年	118	昭和 56 年	241	平成 16 年	380
昭和 33 年	123	昭和 57 年	240	平成 17 年	384
昭和 34 年	131	昭和 58 年	254	平成 18 年	387
昭和 35 年	136	昭和 59 年	279	平成 19 年	386
昭和 36 年	133	昭和 60 年	291	平成 20 年	379
昭和 37 年	133	昭和 61 年	305	平成 21 年	387
昭和 38 年	150	昭和 62 年	318	平成 22 年	387
昭和 39 年	139	昭和 63 年	338	平成 23 年	386
昭和 40 年	149	平成 元年	364	平成 24 年	392
昭和 41 年	142	平成 2 年	369	平成 25 年	386
昭和 42 年	116	平成 3 年	369	平成 26 年	394
昭和 43 年	94	平成 4 年	365	平成 27 年	388
昭和 44 年	94	平成 5 年	366	平成 28 年	385
昭和 45 年	90	平成 6 年	359	平成 29 年	384
昭和 46 年	94	平成 7 年	354	平成 30 年	387
昭和 47 年	104	平成 8 年	350	令和 元年	383
昭和 48 年	119	平成 9 年	351		
昭和 49 年	131	平成 10 年	356		

2. 園児数

全て、当該年度の5月1日現在のものである

年 度	園児数	年 度	園児数	年 度	園児数
昭和 25 年	41	昭和 49 年	158	平成 10 年	153
昭和 26 年	35	昭和 50 年	170	平成 11 年	158
昭和 27 年	48	昭和 51 年	227	平成 12 年	161
昭和 28 年	84	昭和 52 年	251	平成 13 年	166
昭和 29 年	136	昭和 53 年	254	平成 14 年	173
昭和 30 年	106	昭和 54 年	236	平成 15 年	170
昭和 31 年	60	昭和 55 年	219	平成 16 年	175
昭和 32 年	107	昭和 56 年	193	平成 17 年	176
昭和 33 年	128	昭和 57 年	168	平成 18 年	177
昭和 34 年	97	昭和 58 年	156	平成 19 年	177
昭和 35 年	91	昭和 59 年	153	平成 20 年	172
昭和 36 年	107	昭和 60 年	139	平成 21 年	158
昭和 37 年	124	昭和 61 年	153	平成 22 年	174
昭和 38 年	152	昭和 62 年	161	平成 23 年	166
昭和 39 年	158	昭和 63 年	161	平成 24 年	165
昭和 40 年	144	平成 元年	159	平成 25 年	166
昭和 41 年	140	平成 2 年	162	平成 26 年	155
昭和 42 年	133	平成 3 年	149	平成 27 年	136
昭和 43 年	171	平成 4 年	139	平成 28 年	137
昭和 44 年	194	平成 5 年	134	平成 29 年	148
昭和 45 年	195	平成 6 年	135	平成 30 年	163
昭和 46 年	172	平成 7 年	139	令和 元年	170
昭和 47 年	141	平成 8 年	147		
昭和 48 年	142	平成 9 年	149		

卒業時担任一覧

昭和 50 年	はやぶさ	成田幸夫	草野修三	
昭和 51 年	つばさ	小林五郎	由里敏夫	
昭和 52 年	とき	草野修三		
昭和 53 年	はつかり	小林五郎		
昭和 54 年	あかつき	金澤純三		
昭和 55 年	みずほ	成田幸夫		
昭和 56 年	くろしお	小松賢司		
昭和 57 年	はやぶさ	小林五郎		
昭和 58 年	あずさ	大竹良造		
昭和 59 年	あまぎ・ほくと	小林五郎	内藤 茂	
昭和 60 年	あさかぜ・やくも	大竹良造	小松賢司	
昭和 61 年	いずも・つばさ	小林五郎	内藤 茂	
昭和 62 年	あけぼの・とき	葛西琢也	草野修三	
昭和 63 年	はつかり・ゆうづる	内藤 茂	葛西琢也	
平成 元年	あかつき・つるぎ	草野修三	由里敏夫	
平成 2 年	あさひ・やまびこ	葛西琢也	木村拓郎	
平成 3 年	くろしお・みずほ	加賀光悦	由里敏夫	
平成 4 年	あおば・こだま	葛西琢也	内藤 茂	
平成 5 年	あずさ・はやぶさ	大河内浩樹	木村拓郎	
平成 6 年	あさま・ほくと	葛西琢也	松崎昭彦	藤石勝巳
平成 7 年	あさかぜ・やくも	松浦博和	大河内浩樹	粕加屋直幸
平成 8 年	いずも・つばさ	内藤 茂	松崎昭彦	三輪広明
平成 9 年	あけぼの・とき	木村拓郎	松浦博和	粕加屋直幸
平成 10 年	はつかり・ゆうづる	細沼克吉	大河内浩樹	古賀有史
平成 11 年	あかつき・つるぎ	由里敏夫	武井正行	木村拓郎
平成 12 年	あさひ・やまびこ	古賀有史	細沼克吉	大河内浩樹
平成 13 年	あおば・こだま	板橋裕之	由里敏夫	佐藤憲夫
平成 14 年	あずさ・やくも	大河内浩樹	齊藤 勇	佐藤憲夫
平成 15 年	あさかぜ・はやぶさ	内藤 茂	板橋裕之	佐藤憲夫
平成 16 年	いずも・つばさ	渡辺泰介	齊藤 勇	草野修三
平成 17 年	あけぼの・はつかり	板橋裕之	米持 勇	内藤 茂
平成 18 年	あさま・ほくと	由里敏夫	渡辺泰介	粕加屋直幸
平成 19 年	あかつき・つるぎ	米持 勇	松崎昭彦	板橋裕之
平成 20 年	とき・ふじ	千葉安弥子	細沼克吉	粕加屋直幸
平成 21 年	あさひ・やまびこ	久下谷明	松崎昭彦	渡辺泰介
平成 22 年	あずさ・やくも	由里敏夫	川口涼子	渡辺泰介
平成 23 年	くろしお・はやぶさ	松崎昭彦	細沼克吉	川口涼子
平成 24 年	のぞみ・はやて	久下谷 明	板橋裕之	松崎昭彦
平成 25 年	あけぼの・はくたか	齊藤 勇	米持 勇	中野恵子
平成 26 年	あさま・ほくと	三輪広明	松崎昭彦	古賀有史
平成 27 年	あさぎり・しらさぎ	松崎昭彦	川口涼子	藤石勝巳
平成 28 年	つばさ・みずほ	古賀有史	大河内浩樹	藤石勝巳
平成 29 年	あずさ・やくも	松崎昭彦	川口涼子	佐藤憲夫
平成 30 年	はまかぜ・わかしお	渡邊孝典	齊藤 勇	谷口 優

平成30年度 個人実践研究テーマ一覧

[小学校]

	氏 名	テーマ	備考
1	内藤 茂	国語科教材のねらいと知能因子との関り	研究紀要 収 録
2	細沼 克吉	3年生の図形の作図と図形の理解について	
3	柏加屋直幸	聖徳の体育授業や遊びから運動能力を養うことについて	
4	三輪 広明	問題解決のための主体的な実験計画の立案を取り入れた学習指導の在り方について	
5	藤石 勝巳	イングリッシュキャンプ学年実施について	
6	古賀 有史	「7つの習慣」をどう伝えていくか	公開研究発表会 全体会発表
7	佐藤 憲夫	校外陸上競技大会における実践	
8	渡辺 泰介	2年生と「しあわせ」について考えた授業	
9	江橋 真弓	心と知能を育てる本との付き合い方	
10	米持 勇	理科の学習における ICT 教育について	夏期研修会 発 表
11	齊藤 勇	数学卒業研究	
12	川口 涼子	家庭科の授業における座学の充実を目指して	
13	吉村 厚子	聖徳の子どもたちの健康状態 【肥満度について】	
14	渡邊 孝典	『なぜ聖徳では、算数と言わず数学と言うのか。』 ～テキスト・基本課題から読み解く聖徳数学科指導の考察Ⅱ～	
15	明石 この実	聖徳らしさを追求したひらがな・カタカナ学習	
16	三品 亜美	「共通教材」の授業づくりと実践（高学年）	

	氏 名	テーマ	備考
17	谷口 優	聖徳のプログラミング教育を考える	
18	田中 飛鳥	歴史的概念の育成に関する研究 ～平家物語・人物伝の実践を通じて～	夏期研修会 発 表 研究紀要 収 録
19	長谷川和暉	客観的思考を促す歴史学習についての一考察 — 京都大原・会津若松を舞台にして —	
20	杉村 健人	地理の授業で旅の経験をどう活かすか	
21	作左部 暉	「表とグラフ」単元における授業実践研究	
22	西谷 彩	英語の授業におけるアクティビティについて	
23	浅利 絵海	2、3歳児を惹きつける教材① ～1学期の授業を通して～	
24	大嶋 比查子	知能遊び（年中・年長）の教材精選と予備教材の行方	
25	阿部 愛実	子どもの成長と言葉かけ ～英才教室・幼稚園での実践における考察～	
26	地挽 裕子	子どもの自尊感情について	
27	砂廣 芳子	わかりやすい知能教育を目指して5 ～「評価」の課題から見えてくるもの～	
28	高橋まり子	1年生の教材について ～今年度の1年みずほ組の実践から～	
29	富永理香子	知能因子解説3 ～その作成のために…トランプゲームの活用について～	
30	豊田奈都代	概念の拡散思考（人生プラン）に見る子どもの成長	
31	内藤 晴美	子どもへのまなざし・保護者へのまなざし	
32	松浦 雅美	子どもの能力を引き出すために ～家庭と連携しながら～	

	氏 名	テーマ	備考
33	松尾 由香	拡散思考力を高める授業	研究紀要 収 録
34	山田 桂子	子どもの言葉の成長の重要性と「本」とのかかわり ～免許更新講習を通して～	
35	歌田 翔真	知能因子を刺激する教科教育 ～二年生理科の実践を通して～	

[幼稚園]

36	飯濱久美子	知能を伸ばす造形あそび 1 学期の実践からの考察	
37	園山恵理子	子どもの聞く力・想像力を育む素話の実践	研 究 紀 要 収 録
38	磯沼 美紀	子どものあそびの環境を考える ～あそび上手な子を育てる環境設定～	
39	高井 正恵	乳幼児からのリトミックあそびのすすめ	
40	永坂 圭子	幼児のしつけと遊びについて	
41	荒井 明子	領域「健康」と多様な動き	
42	神山 祐希	自由あそびから学ぶこと ～年中実践より～	
43	久保 千春	感情コントロールの育ちの弱さ ～ H30 年度免許状更新講習より～	
44	北村満利恵	子ども脳 ～今をどうかかわっていくか～	
45	伊奈 恵理	聖徳幼稚園における早朝保育 ～2 年間の実践報告～	
46	岩瀬 勝彦	有効打実を理解し、一本に直結する打ち込み稽古	

英才教育の道 (5)

— 研究紀要 第31号 —

発 行 令和元年6月15日

編集委員 齊藤 勇・園山恵理子・松尾由香
長谷川和暉

発行人 和田 知之

発行所 聖徳学園
東京都武蔵野市境南町2-11-8
TEL (0422) 31-3839

印刷所 株式会社 文 伸

©2019 (1000)

